
tratos 00 ~ Blue blade Another Innovation ~

釋廉慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Infinite Stratators 00\Blue blade
e Another Innovation\

【Nコード】

N8498P

【作者名】

釋廉慎

【あらすじ】

(旧タイトル『IS』蒼い剣の革新者) 『タイトル変更御免!!』

ELSとの対話から一年。

外宇宙を旅していた刹那は正体不明のエネルギー反応の調査に向かい、次元の歪みに飲み込まれ別世界へ。刹那の行き着いた先は……？

ガンダム00とIS インフィニット・ストラトス とのクロス

です。

筆者はド素人であり、この小説は処女作です。また、この小説には筆者の独自解釈及び設定が含まれています。それでも大丈夫な方はお楽しみ頂けると幸いです。感想や誤字脱字、その他の指摘等願います。

PV3070000アクセス&1660お気に入り登録感謝！

プロローグ(前書き)

頑張ります！

プロローグ

プロローグ

西暦2365年。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターである刹那・F・セイエイが地球外生命体ELSとの対話を終え人類との共存が始まって一年。

刹那は外宇宙航行艦スメラギに乗艦して外宇宙を旅していた。

そんな中レーダーに正体不明のエネルギー反応が観測されたことを新しく肉体を作ったティエリアから知らされ、刹那は専用のガンダム『ELSクアンタ』を駆ってその反応が観測されたポイントに向っていた。

「例の反応が観測されたポイントはこの辺のはずだが……」

だがそこには何も無くただ宇宙空間が広がっているだけである。

「レーダーの誤作動か……？」

そう思っ て艦に戻ろうと操縦桿を動かそうとした瞬間、刹那に空間が歪む様な感覚と強い光が襲い掛かった。

「くっ、何だこの感覚は！量子ワープとは違う！光が……？うあああああああああああああ……！！」

光がおさまったその空間に刹那とE L Sクアンタの姿は無かった
...

プロローグ（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？次は設定を載せたいと思います。

設定（ネタバレ注意）（前書き）

設定です。これでも可能な限り抑えたのですが…。

設定（ネタバレ注意）

主人公 刹那・F・セイエイ

『ガンダム00』シリーズの主人公であり、『インフィニット・ストラトス（以後IS）』の主人公織斑一夏と同じくこの小説の主人公でもある。

ISの世界に転位してしまった際、肉体が74歳（西暦2365年当時）から16歳へと若返ってしまうものの、身体能力は全盛期の頃のものでありイノベーターとしての能力も失われていない。だがそのせいか精神年齢も若干若返っている。

刹那本人が異世界人であることと専用IS『エクシア』（後述）の能力・性能から中東出身の日本国籍としてIS学園に保護される。

8

専用IS 『エクシア』

刹那が乗っていたダブルオークアンタがISに変化したもの。

（『リリカルなのは』のインテリジェンスデバイスよろしく）ほぼ完全な自我を持っており音声や空中投影パネル、プライベートチャネル、オーブンチャネルによる会話が可能。
声質は女性のもの。

かつてソレスタルビーイングで使われてきた兵器データを元にISでいう強化換装装備『パッケージ』を開発したりとても優秀。

何故エクシアかという転位時のショックでプログラムとシステムの一部が破損してしまった為。また同時にヴェーダとのターミナルユニットも破損してしまい、現在プログラムとシステムとともに修復中であるが復旧の目処はたっていない。一応復旧すればダブルオーらに戻る。(ティエリアはスメラギに残っているので通信不可能。)

ダブルオークアンタの装甲を構成していたELSは現在休眠の様な状態にあり、特に問題は無いらしい。そのため装甲はGN粒子コーティング済のEカーボン装甲である(エクシア談)。

ツインドライブは健在でありISのコアとして存在しているが、自身がエクシアであり、GNドライブが半永久機関であることとその異常な出力から片方を封印しもう一方は粒子貯蔵タンク、通称『バッテリーモード』としてリミッターをかけられている。

またトランザムシステムは使用可能でこの能力から第三世代機ISとしてカテゴライズされている。

外見はガンダムエクシアリペア2を元にしており、背部にボックス型多方向推進機を装備。

全身装甲ではなくエクシアの手足アーマーを着せた感じで一般的なISと変わらない。

基本装備として両足に各1、リアスカートアーマーに2本GNビームサーベルを、サイドスカートアーマーにGNブレイドを、両腕にGNバルカンを装備(脚部のGNビームサーベルは内部に格納されている)。

世界で(ほぼ)唯一ビーム兵器を実用化している。

後付武装としてGNソード改やGNシールドをはじめとする第三世代型ガンダム以前の装備の一部が使用可能だがバッテリーモードでエネルギーに制限があるのと刹那の戦闘スタイルから使われることはほとんどない。ビーム兵器が多いことから「ビーム兵器のデパート」と一夏から呼ばれたりする。

前述の通り機体固有能力としてトランザムシステムを使える。この能力はエネルギーの消費が激しいものの使用後の性能ダウンがある程度緩和され、また任意に応じてオン・オフが可能。

捕捉説明

『バッテリーモード』

あらかじめ太陽炉で生成しておいたGN粒子を各部のGNコンデンサーに貯蔵しそれを使用するモード。粒子貯蔵タンクと構造的には変わらないが太陽炉がコアとして機能していることが主な相違点。リミッターの一部を解放すれば太陽炉本来の使用が出来るが使うことは緊急時以外ない。ある意味誤魔化すためのその場のぎに過ぎない。

『オーバーブーストモード』

エクシアのみに許された機能。太陽炉の固定器具を一部解除し、太陽炉の回転率を上げること出力を上げる。ただし使用には太陽炉のリミッターを解除しなければならないのでトランザムシステムよりも安易に使用出来ない。

後付装備

エクシアがソレスタルビーイングのデータをもとに開発。一応一通りの武器はあるが刹那の戦闘スタイルによりかなり限定される。

現在それに合わせたエクシア用追加装備を開発中。

現在判明済武器

・GNソード改

ガンダムエクシアリペア2の武器。

刀身にGN粒子を纏うことで切断力を上げている。

・GNブレイド(S/L)

原作第一期のガンダムエクシアの武器。

ショートとロングの一对の双剣。

・GNビームサーベル/ダガー

後腰と脚部に格納されている。

四本ともサーベルとダガーを使い分けることが可能。

これらと上記の武器を合わせて『セブンスード』と呼称される。

・GNバルカン

両腕の固定武器。牽制用。

・GNシールド

Eカーボン装甲製。

GNソード改と同じく表面にGN粒子を纏うことで防御力を上げて

いる。

先端が突出しているので打撃にも使用可。

・GNキャノン

元はガンダムヴァーチェの武器。

稼働実験（本編三話）で使用。あくまで機体出力を調べるために使ったので今後使われることは無いと言いきれない…。

・GNシールドtypeK/Ec

読者アンケートで得られた意見を元に生まれた。エクシアが対IS用に造り出した新武器。

正式名称は『GNシールド・タイプキュリオス/エクシアカスタム』。

キュリオスのGNシールドのデータをエクシア用に改造。そのために『typeK』となっている。

外見はエクシアのGNシールドを少し縦長にした感じ。

対IS用なので相手操縦者の安全のために内部のシールドニードルは廃されてるが、クローがそのままクラッシャーとなるので敵機の捕獲や武器破壊も可能。シールドエネルギーも大きく削れる。

使用時にはシールドが腕部接続部から前方にスライドする。

某テスラな百舌鳥を彷彿とさせるが気にしてはならない。

・オートクチュール『アヴァランチ・AC』

エクシア専用強襲用高機動型オートクチュール。正式名称は『アヴァランチ・アームズカスタム』

元々エクシアの装備バリエーションである『アヴァランチダッシュユニット』に『GNアームズ』のデータを反映して火力を強化、アヴァランチの加速力とGNアームズの火力を両立した。

脚部格納GNビームサーベルを除く初期装備を全て拡張領域に収納し、背部の武装懸架アームを廃して代わりにGNキャノン二門とGNミサイルポッドを装備。

下腕部のGNコンデンサーは肩部追加装甲内に移され、左腕にはキウリオスのを模したGNビームマシンガンが取り付けられた。

追加装甲内部にGNコンデンサー（表向きはバッテリー）を内蔵することで本体のエネルギー負担を軽減している。装甲はパーシ可能。

全身のバーニアを展開し、加速形態となる。その際は全身にGN粒子の薄いフィールドが展開され、気流を僅かながら操作出来る。10分間のみ加速が可能。加速後はGN粒子切れでただの追加装甲となる。

本来アヴァランチは短時間での長距離移動を主眼に置いた装備だが本作では作戦に合わせてバーニア出力を調整することで加速状態でのドッグファイトを可能にしている。

元はアヴァランチダッシュなので脚部にダッシュユニットを追加、ビームサーベル内蔵GNクローを装備している。

オリジナル機体

『レグナント自立稼働試作型』

MA『レグナント』のデータをベースに造られた無人IS。
自立稼働プログラムが未完成であり、ファンクなど一部の機能が使えず性能もオリジナルを下回っている。

外見はカラーがメカニクグレーであること以外変わり無く、頭部装甲を外せばガンダムフェイスが現れる（実話）。

動力はISのコアと擬似太陽炉のハイブリッドで、コアを機体制御、擬似太陽炉をエネルギー源にして起動させている。
そのため、本来よりも少ないエネルギーで高い出力が出せ、燃費がいい。

シールドバリアーや光学兵器は生成されたGN粒子で賄われている。
GN粒子は赤みがかったオレンジ色で無毒化されている。機体含め開発元は一切不明。

武装はファンクであったマニピレーターに内蔵された五連装ビーム砲と胸部に隠された大型ビームカノン。

VTシステムtype『スサノオ』

シュバルツエア・レーゲンに秘密裏に搭載されていたシステム。

VTシステムそのものについては小説本文及び原作を参照。

システム発動と同時にシュバルツエア・レーゲンがミスター・ブシドーことグラハム・エーカーの乗機『スサノオ』を模したものに變形した。

VTシステムのモデルは白式に対しては現役時代の織斑千冬、エ

クシアに対してはグラハムのものと相手によって切り替えが見られた。機体形状及び武装は『スサノオ』に準じている。

その後のIS管理委員会の調査報告によれば、ドイツ軍はVTシステムの搭載への関与が認められるものの、機体形状や『グラハムのデータ』等について一切知らず、『本来』とは別の姿であり第三者の関与が考えられるとのこと。

形状だけでなく変形後の性能も変化しており、なんでも全体的に向上しているとのこと。

武装は織斑千冬が現役時代使っていたIS『暮桜』の日本刀型近接ブレード『雪片』を模した物と野太刀型近接ブレード（名称不明）。『スサノオ』に搭載されていたトライパニツシャーは搭載されていたかどうか不明。

動力はシュバルツエア・レーゲンのISコアのままであり粒子放出は無い。

設定（ネタバレ注意）（後書き）

次回は刹那が一夏たちの前に転位してくる話です。

時系列的には原作一巻のセシリア戦後と鈴登場前です。この辺が一番やりやすいので（イベント的に）。
いつ本編に入れることやら…。

異世界からの来訪者（前書き）

物語が進まん…。

異世界からの来訪者

『IS』。正式名称『インフィニット・ストラトス』。

今から十年前に発表された宇宙空間での活動を想定して造られたマルチフォーム・スーツ。

現行の兵器をありとあらゆる面で凌駕する性能から国家の命運を左右する存在として本来の開発目的から外れ、名目上パスワードスーツスポーツとして扱われている。

俺の名は織斑一夏。世界中から生徒を集めIS操縦者としての教育を施す独立教育機関『IS学園』の生徒である何処にでもいる高校生だ。

そう、世界で唯一『ISを扱える男子』としてこの学園のたった一人の男子生徒であること以外は……。

とある事情からISが扱える事が判ってから、黒服のオッサンたちに『君を保護する』との事で強制的にIS学園に入学させられてしまった。

そして特異なケースとして実験的に世界に467機しかないISの内の1機『白式』を与えられ、同じクラスでかつての幼なじみの篠ノ之箒と再会したりまた同じクラスであったイギリスの代表候補生であるセシリア・オルコットとイザコザがあつて決闘したり仲良くなったりして今に至る……。って誰に話してるんだ俺は？

そんな今現在俺は

「そこお！」

「甘いぞ一夏！！」

学園のIS稼働用スペース『ISアリーナ』で箒と訓練がてら模擬戦をしていた。

普段ここは授業のひとつであるISの訓練で使われるのだが放課後と土曜日の午後は全面解放されるので多くの生徒が利用するのである。

ISの訓練ということはつまり今の様に銃を撃つたり近接ブレードを振るったりするわけでアリーナ全体はISの機能のひとつ『シールドエネルギー』と同じエネルギー性質の遮断シールドで覆われているのでちょっとやそつとのことでは周囲が破壊されることはないのだ。

近接ブレードをぶつけあい互いに距離をとった瞬間、ISのハイパーセンサーが上空にエネルギー反応を捉え上を向く。

「一夏！何をよそ見して……！？」

箒も気付いたのか同じく上を向く。そこには鳴門海峡の渦潮の様

に空が渦巻いていた。そして渦の中心に黒い穴が開きそこから1つの緑色の光がアリーナの地面の中央にむかって墜ちていく。

ドゴオオオオオン！！

光が地面に墜落した瞬間、爆音が鳴り響き土煙が巻き起こる。そして土煙がおさまったそこには、

「……………」

白と蒼を基調とした装甲のISを身に纏った褐色の肌の俺と同年ぐらいの男子がたたずんでいた。

「何じゃありゃ……………」

今の俺の言葉はその場にいた全員の気持ちに代弁したものだろう。なんせ空が捻れて穴から俺以外存在の確認されていないISを扱っている男子が墜ちてきたのだから。

パアアアアア……………！！

突然その男子がまばゆい光に包まれたかと思うとまた光がおさま

ったそこにはおそらくさっきの男子と同一人物であろう人が、ロケットアニメに出てくるような蒼いパイロットスーツを着て同色のヘルメットを被ってうつ伏せに倒れていた。

「「「「」」」」」

あまりにもいきなりで予想外な出来事の連続に俺達はどうすることも出来なかった……。

そして、その人物の近くに落ちている指輪が一瞬だけ緑色に輝いたことに気付く者はいなかった。

異世界からの来訪者（後書き）

目覚めた刹那に待ち受ける運命はー！？

接触（修正）

刹那 Side

「う……。ここは……………」

目を覚ました刹那の視界に飛び込んで来たのは真っ白な天井だった。

その後に来た鼻をつくような消毒薬の匂いとベッドに寝かされているような感覚からおそらく医務室なのだろう。

刹那は体を起こして自身の今の状況を確認する。

周囲の設備からここがどこかの医務室であることは間違いない。というのも刹那が乗っていたスメラギの医務室とは違うからだ。

服装はパイロットスーツは脱がされ替わりに患者の着るような服を着せられている。

特に目立った外傷はなく筋肉や骨の痛みもない。体に問題はないなと思いつながらふと窓を見るとその光景に目を疑った。

「なっ……………?!」

目の前の光景が地球と同じ光景だからだ。

少なくとも自分は宇宙にいた。惑星なんか近くに無かった。

宇宙にも人が住めるようコロニーが開発されてきたが地球の環境を再現出来るほどじゃなかった。

そして最も驚愕だったのは窓に反射して映った自分の姿だった。

本来自分の外見は金属化を除けばELSとの対話が始まった23歳からほとんど変化しておらず敢えて挙げるとすれば髪が白くなったことぐらいだ。

なのに今の自分の姿はソレスタルビーイングが武力介入をした15、6歳際ごろの姿だった。

刹那が目の前で起こるわけのわからない出来事の連続に焦っていると扉が開く音が聞こえた。

「気が付いたか」

そう言っに入ってきたのは20代半ばのスーツの女性だった。そのたたずみや気配から只者ではないことはわかる。

「いろいろと聞きたい事があるが意識は覚醒しているな？」

日本語だ。言動からして自分を助けてくれた人物かまたその関係者だろう。

こちらとしても情報が欲しいので取り敢えず尋問を受けることにした。

「問題ない。俺としても知りたいことがあるしな」

「そうか。ではお前の名前を聞かせてもらおう」

「刹那・F・セイエイだ」

「それは偽名か？」

「!？」

驚いた。いきなりコードネームということ看破された。

これでは嘘ばかりを並べても意味はないだろう。仕方ないのである程度事実を交えながら話すことにした。

「そうだ。だが本来の名前は捨ててしまった。だからそれが今の名前となる」

「なるほど。ならお前は何処の出身だ」

「とある中東の国だ。だがその国は紛争ですでに消滅している」

「なら日本語を話せるということは日本に住んでいるのか？」

「一時期日本にいたが本来ならばさっきまで俺は宇宙にいた」

「どういうことだ……」

女性は淡々と質問をしてきたのが一転し、疑うような目で尋ねてくる。

「俺は宇宙を旅していた。そして気付いたらここにいた」

「お前は本気で言っているのか……？」

「この状況で嘘を言ってもどうにもならんだろう」

「……質問を変えよう。お前が操縦していたあのISは何だ」

「アイエス……？MSモビルスーツじゃなくてか？」

ISなど聞いたことがない。だが女性の口から出てきたのは俺の予想を大きく上回っていた。

「MSとは何だ。お前が墜ちてきたときお前が操縦していたのは明らかにISだった」

MSを知らない……！？そして今彼女は何と言った……？俺が墜ちてきた？

周囲の環境からおそらく空からだろう。

だが俺が憶えているのは宇宙で空間が歪むような感覚と強い光に襲われたところまでだ。

量子ワープとは違うが俺は別の世界にたどり着いたのか……？

「聞いているのか？」

「すまない。俺はISというものは知らない。後これは俺の予測だが俺はどうやら別世界に来てしまったようだ」

「どうしてそう考えた？」

「俺がいた世界ではMSが世界中で使用されていた。MSというのは18メートル程の人型機動兵器だ。ここに来る直前まで俺もそれを駆っていた。ISがどういったものかは知らないが少なくともこの世界の住人ではない」

「その証拠となるものは？」

「俺は蒼いパイロットスーツを着ていたはずだ。あれは宇宙服としての機能があるから調べれば解るはずだ。この世界の技術レベルがどの程度か知らないが俺のいた世界ではそれなりに宇宙産業が発達していた。」

「……わかった。確かにそのようなものがあつたからな。ではこれに心当たりはあるか？」

そういつて渡されたのは剣の意匠があしなわれた指輪だった。

刀身の部分が緑色の宝石のようなもので出来ており、GNソードを彷彿とさせるが心当たりはない。

「これは？」

「お前の近くに落ちていた。調べたが解析が出来なかった」

そう言われるとこちらもどうしようもないのだが何故か懐かしい感じだけはする。

無意識のうちに左手の人差し指に差し込んだ瞬間、目の前にパネルが投影されていた。

パネルにはソレスタルビーイングのエンブレムが映され、日本語で

『目覚めましたかマイスター刹那』

と目の前とは違う女性の声が聞こえた。

「誰だ？この指輪か？」

『そうです。私の名はエクシア。ELSクアンタだったものです』

ELSクアンタだったものだ？そしてエクシア？何故かつて俺が駆っていた機体になっているのだ？

女性も目を点にしてこちらを見ながら質問を投げ掛ける。

「お前はISなのか？」

『そうです。私はマイスター刹那が駆っていたELSクアンタがISに変化したものです』

ELSクアンタがISに変化した……？

次々と沸き起こる疑問に対処しきれないので本人(?)に聞くことにしよう。

「悪いが説明してくれ」

『わかりました。まず先程言ったとおりこの世界への転移時に原因は解りませんが私はISとなり自我を持ちました。』

しかし転移のショックでプログラムとシステムが破損してしまい私はELSクアンタではなくエクシアとなりました。ダブルオーライザーのデータも破損してしまいました。エクシアのデータだけは無事でしたから』

「修復は出来るのか？」

『現在修復中です。ただいつ頃になるのかはわかりません。機体としてはダブルオーライザーの方が早く済みます。』

また言ってくれば私のなかのデータを元に希望の装備を開発しますが』

「待て。私を置いて話を進めるな。エクシアとやら。さっきお前を解析しても何もわからなかった。E L S クアンタやらダブルオーライザーというのはMSのことか？」

『それに関してはあなたの解釈に任せます。ですがこの先のことについてはマイスター刹那の許可がないことには教えることは出来ません。解析の件についても機密を守る為にこちらからプロテクトを掛けさせていただきました』

エクシアがそう言うのと女性はこちらを向いてくる。

このままでは事態が進まないので許可を出すことにした。

「かまわない。必要な分の情報を開示しろ。あと俺達がいた世界について説明してくれ」

『わかりました。私達が元々いた世界は……………』

「……………西暦2365年というにMSでの戦争。おまえの世界も物騒だな。おまえはここに来る直前までMSを駆って旅をしていたと言ったな。兵器を持つての旅。ただの旅ではないだろう。何が目的だ」
「昔から戦ってきた。その先にあるものを信じて戦ってきた。そしてそれによって生まれてしまった“歪み”を破壊するために、自らの行いにけじめをつけるために戦った。
そして対話によってわかりあえることを知った。だからより多くとわかりあうために旅に出た。俺が乗っていたMSも対話の為に造られた機体だった。武装も自衛の為のものぐらいしかない」

俺たちがしてきたことはテロリストと同じだ。だけどそれを言うことは出来ないの俺たちが何の為に戦ってきたかを話した。

「そうか……。ならこの世界について話そう。」

女性はどこか悲しそうな顔をした後、この世界について簡単に話してくれた。ISとは何か。どういった組織が管理しているか。そしてここは何処か。

聞けばここはIS学園といつていかなる国家にも属さないIS専用教育機関らしい。完全に外部からの圧力を避けることは出来ないらしいがほとんど独立した機関とのことだ。後本来ならばISは自我は持っているがこうやって会話したり出来ないことも知った。

「さて、話はここまでだ。お前の処遇については聞いたことを話して上の判断を仰がなくてはならない。」

その為エクシアはこちらで一時間預かりお前の体に異常がないのならお前を拘束することになる。それでもいいな？」

エクシアを奪われるのは正直危険過ぎる。

この組織が実際にどういった組織であるかわからない以上下手に渡したら返ってくる保障はないし太陽炉のデータがばれたりMSのデータから新たな争いの火種を生みだしてしまうかもしれないのだ。

「データについては俺の立ち会いのもと開示する。エクシアの機能についてはロック及びリミッターをつける。そして俺からエクシアを取り上げない。この条件で譲歩してくれないか」

「……わかった。それら全ての条件が受け容れられるかわからないが上に聞いてみよう」

そう言って女性は携帯で連絡を取り始めた。無論こちらの監視を忘れずに。

だがこれが俺のギリギリの抵抗なのだ。

相手の本拠地で自分一人。エクシアだからツインドライブは使えなくても太陽炉が使えるが俺自身ISを動かしたことがないし動かし方も知らない。何より下手にばらすような真似はしたくない。それに戦うよりも話し合いで解決するのが一番なのだ。ELSとも対話でわかりあえたのだから。

『マイスター刹那。ELSのことについてなのですが』

噂をすればなんとやらなのか頭にエクシアの声が響いてくる。

ツインドライブでのトランザムを使用してもないのにどういうことだろうか？

『これはプライベートチャネルという特定の相手とのテレパシーのようなIS特有の通信機能です。一般回線で行うものはオーブンチャネルと呼ばれますが共に頭の右後ろ半分で会話するイメージで行えます。切り替えはこちらに言ってくれば問題ありません。

話を戻しましょう。ELSはターミナルユニットの破損で対話が出来ませんが今彼らは休眠状態にあります。というのも私がISに変化した時ターミナルユニットが破損する前に私がELSに安全の為に休眠状態に入るように説得し彼らが了承してくれたのですが、その時にはすでにマイスター刹那は気を失っていましたから。なので装甲は粒子コーティング済みのEカーボン装甲です。

またツインドライブは健在ですが今の私、エクシアでは使用できません。その為片方を封印しもう片方は粒子貯蔵タンクと同様の『バッテリーモード』としてリミッターを掛けます。

保険としてトランザムシステムは使えるようにしますが……。これまでのことはプロテクトを掛けブラックボックス化させます』

エクシアからの説明が入る。

確かにELSにはそうしてもらったほうがいいだろう。この世界に

ではまだ地球外生命体は都市伝説の類だろうし受け容れられる可能性は低いだろうから。

太陽炉らに關しても必要な処置だと思う。

「上からの連絡だ。その条件ならこの後データを見せてもらった後実際に動かしてみて判断することになるが……。言わずもがな厳戒体制だがな」

「問題ない。むしろ礼を言いたいくらいだ」

「よし。なら今からその場所に案内する。移動の間は私がエクシアを預かる」

「わかった。あとせめて名前を読んでくれないか。お前というのは少し……」

「ならセイエイと呼ばせてもらう。私のことは織斑先生と呼べ。お前は生徒ではないが呼び捨てにられる筋合いはない。わかったらそこにある服に着替えてついてこい」

俺は言われたとおりに着替えて彼女にエクシアを預けあとについていった。

だが、呼び捨てについてはわからなくもないが何故先生なのだろうか？

接触（修正）（後書き）

如何でしょうか？

自分なりに頑張ったのですがまだまだ修行が必要です。

あと2話以内に本編に入れるようにします。

真実と嘘と。(修正)

俺は今日の前の女性(確か織斑といったか)のあとをついていくように歩きながらエクシアからプライベートチャネルでISやエクシアの性能について説明を受けていた。展開せずにこういったことが出来るのはありがたい。

「セイエイ。お前今私のことを呼び捨てにしていたらどう？」

何故ばれた!?

まさか俺がエクシアと話していることもばれているのか!?

「凶星か。一回目だから許してやるが次呼び捨てにしたら覚悟しておけ」

したらどうなるのだろうか。エクシアとのがばれていないならいいが取り敢えず呼び捨てはやめよう。
本能が危険を告げている。

元はといえばこのIS学園の上層部にエクシアのデータを見せ、実際に動かしてその性能を調べるために移動していた。

前に述べた条件は認めてもらえた。
だからこっちも相手に不信任を与えないように接する必要がある。
そう考えているうちになにやら広い部屋に着いた。

部屋の中には織斑先生を含め多くの女性がいる。
説明でISは女性にしか操縦出来ないと行っていたから関係者に女性が多いのはわかる。

だが男性が一人もないのはどうなのだろうか？
俺も男なのだから精神的にくるものがあるのだが……。

「ではセイエイ。まずはこの場でエクシアのデータを見せてもらおう。」
「わかった。刹那・F・セイエイだ。そちらの要求通りデータを開示する。エクシア」
「わかりましたマイスター刹那。ではまずは私たちの世界を。次に私のスペックデータを……」

エクシアが太陽炉やソレスタルビーイング関係など重要なデータを隠したり改竄しながら自身のスペックデータやら元の世界での映像記録を投影パネルで見せていく。

「画面が変わるたび『おおっ』という歓声があがる。確かに画面に映っているのはこの世界にはあり得ないことばかりだから仕方ないだろう。」

武装のデータについては転位時に構築されていたということにした。
GN粒子は動力で生み出されたエネルギーが消費してできたものとした。

事前にエクシアからこの世界でGN粒子は通信妨害能力を持たないと説明されたのでそれを利用してもらった。

何かここまで都合が良すぎると良かったを通り越して不審に思えるが受け入れることにしよう。

一通り見せた後、織斑からデータを写させて貰うといわれたので密かにブラックボックス化したデータを抜いた上でデータを写させた。

もしブラックボックスが解析されることがないように。

「次はアリーナでISを起動してもらおう。但し私たちがISで武装したうえでお前が変な動きを見せたら容赦なく撃墜させてもらうからな」

当然の対応だ。

俺たちはまだ彼女等に信用されたわけではない。

そして俺はまたエクシアを預けてアリーナに誘導された。

ISアリーナ。

競技場の名のとおり円形のその空間はただ広いという言葉に尽きた。そして俺はその中央にいた。

俺を囲むように教員がISを展開している。

ただ気になるのはその格好だった。

彼女達はISとの神経伝達の補助の為にISスーツというものを着ている。

だがそのスーツというのがアーマーの付いたレオタードにハイソツ

クスのようなものだ。

太股と腕は露出しており、シールドエネルギーがあるとはいえ破られた時を考えると防御に問題があるのではないか。
そして目のやり場に困る。

もしかしたら俺も同じものを着せられるのではないかと冷や汗をかきエクシアから大丈夫だと言われたのはここだけの話だ。

「よし、セイエイ。ISを展開しろ。意識を集中させISが展開されるのをイメージすればいい」

俺は意識を集中させるために目を閉じる。

そして先程のデータに出てきたIS状態のエクシアが自身と一体化するのをイメージする。

するといきなり光の粒子に包まれたかと思えば体が軽くなりありとあらゆる感覚がクリアに、鋭くなるのを感じた。

閉じた目を開けると俺の身体はウエットスーツのようなISスーツの上にガンダムエクシアを模した外装 スキンアーマーを纏っていた。

言うなれば俺自身が頭部や胴体の一部を除きエクシアとなった感じだ。

視界は以前よりも鮮明になっている。ハイパーセンサーが意識と繋がった証拠だ。

体は地表1メートルの位置に浮いている。

「展開したな。なら飛んでみる。やり方はお前を囲んでいる教員に聞けばいいだろう」

いきなり投げやりのような気がするが取り敢えず目の前にいた教員にオープンチャネルで聞くことにする。

『今の私はマイスター刹那の思うように動きます。補助はこちらでします。』

エクシアがプライベートチャネルで補足する。

「了解した。エクシア、刹那・F・セイエイ、飛行試験を開始する」

背中のコーン状のパーツと多方向推進機そして全身のGNブースターからGN粒子が放出される。

上方に角錐を展開するイメージで高度をあげ上空200メートルで停止。

前方へと方向を変えスライドやローリングをした後クイックターンをして方向転換。

急加速。その勢いのまま下方方向に向きを変え急停止。

ISの操縦者保護機能のおかげでこれだけの機動でGを感じないのは凄いことなのだが正直調子が狂うというか慣れない。

MSに乗っていたせいで『高速機動』強いGが身体にかかる。』と身体が覚えているからだ。

これはもう慣れるしかないが。

「その辺でいい。次は武装だ。アリーナ中央にバールンを出す。それを破壊しろ」

通信が入る。

その後通信通りバルーンが4つ展開された。

「エクシア、武装を」

『了解。GNソード改を展開します』

右手に粒子が集まり武装を構築する。

「エクシア、刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する」

完全に展開されたのを確認してからバルーンに向かって飛翔し、ライフルモードでビームを放つ。

放たれたビームによってバルーンが1つ破壊されるのを見るとその隣のバルーンの方へ軌道を変え白い刀身に緑の透明な刃のついたソードを展開。

すれ違いざまに叩き切る。

クイックターンで反転し後腰のGNビームサーベルをダガーモードで投擲。3つ目のバルーンが破壊される。

「エクシア。他の武装を」

『了解。GNキャノン展開』

GNソード改が粒子に還元され両手にGNキャノンが展開される。元々ガンダムヴァーチェの両肩についていたこれはヴァーチェが装甲を外しガンダムナドレとなった時に手持ち武装として使えるのだ。

グリップが起こされそれを握る。

残り1つのバルーンにハイパーセンサーにリンクさせロックオンカ

ーソルを合わせ、威力を調べるためにも出力を下げ、同時に引き金を引く。

左右二門、計四門の砲口から普段よりは出力が弱いもののそれでも太いビームの束が吐き出されバルーンを飲み込んだ。

ビームが過ぎ去ったそこにはバルーンの欠片も何も残っていないかった。

通常出力ではエネルギー（GN粒子）の消費は大きいだろうが威力は申し分ない。

全てのバルーンを破壊したについて通信を入れる。

「目標破壊。ミッションコンプリート」

「わかった。降下してISを解除しろ」

「了解。指示に従い帰投する」

刹那は指示通り地表へと降下し、エクシアを解除した。

さっきまで刹那がいた空はただ青く。

太陽はいつもと同じように輝いており、異世界の存在である刹那を、ただただ、おだやかに見下ろしていた。

真実と嘘と。(修正)(後書き)

次の次ぐらいで本編に入ります。

前回の予告と変わってしまい申し訳ありません。

これから(前書き)

筆者の都合が一段落したのでとりあえず投下。

とはいえっても完全に済んだわけではないのでノロノロビーム並みの更新です。

これから

???? Side

初めまして。山田真耶です。

このIS学園で教師として働かせてもらっています。

えっ、何故自己紹介しているのかって？

なんか（天の声から）言わなきゃいけないような気がして…。

今日はいろんなことができました。

アリーナの方からいきなり『空から見知らぬ男の子とISが墜ちてきた。』と連絡が入り、『そんなばかな』と思いながら行ってみると本当に落ちていたわけで。

ヘルメットのせいで最初は顔がわからなかったけど脱がしてみたら美形の男の子でした。

幼さを残しつつも端正な顔立ち。

少しだけカールのかかった黒髪。

褐色の肌。

『アラブの王子様』という言葉がこの子のためにあると思ったぐらいでした。

取り敢えず医務室に運び、目を覚ましたら話を聞くとのことでしたが、実際に話を聞いてきた織斑先生の口から出てきたのは想像を

絶することでした。

織斑先生が嘘をつくとは思えませんから信じるほかありませんが…。

まさか異世界からやってきたなんて……………。

男の子からの希望もあって彼から直接話を聞くことになったんですけど、彼のISから説明されるとは誰も思わなかったです…。

ISが完全な意志を持っていること自体が驚きなのに最も驚いたのはその話の内容でした。

IS（エクシアでしたっけ？）からまず聞かされたのは彼らが元居た世界。

西暦2365年という私たちの世界よりも300年後の世界。

ISの代わりにMSという機動兵器が存在し、地球を囲んでしまうほどのリング型太陽発電システムがあった。世界が三勢力に分かれ互いに競っていた。

そして紆余曲折としながらも世界が一つにまとまり連合政府ができ恒久の平和が約束された。

漫画のようなMSの存在はともかく世界が一つとなって皆が手を取り合っていることには羨ましく思いました。

私たちの世界では戦争はそう起きてませんが紛争や大国同士の対立など必ずしも平和とは言えませんから…。

でもその時私は彼がどうやって、また世界がどのようにして一つになったのかを知らなかったし、考えてもいませんでした。

その後見せてもらったISのデータもまた興味深いものでした。特に武器関連のデータがすごかったですね。

MSの武器を参考にしているとのことですけど、殆どがビーム兵器でした。ライフルどころかピストルからバズーカ、果ては剣まで。

ISでもスナイパーライフルや荷電粒子砲など光学兵器はありますけどさすがに剣のように形状固定の類いは少ないですから。

あっ、でも近くでいえば織斑君の白式の『零落白夜』フンオフ・アヒルティがありますね。あれは唯一仕様でまだ原理もよく解ってませんが。

一通りデータを見せてもらいバックアップを録った後、実際に動かしてみるようになりました。

ISに自我がある以上彼以外動かさせないだろうから彼にやらせてこちらは武装して警戒することになりますが…。

彼にそう言ったら表情を変えずに受け入れました。

当然と言わんばかりに。

それだけ場数をこなしてきたというのでしょうか。

高校生と変わらない歳だというのに…。

アリーナに移動し私は教師専用観戦スペースでその様子を見ていました。

織斑先生が通信で指示を出します。

彼が展開したISを改めて見るとやはり変わっています。

スキンアーマーは肌に張りつくというよりもMSの装甲を着せた感じですね。頭部が露出し胴体も小型のアーマーが付いているのは一般的なISと変わらないうです。

あと一般的なISに比べスラスターが小さい。

あれでは推進力は大丈夫なのかと心配しましたがそれは杞憂でした。いきなり高度を上げたと思ったら次の瞬間には戦闘レベルのスピードで複雑な機動をしていました。

スラスターの小ささなど関係ないといわんばかりの速度。

本当に初めて操縦するのかと疑ってしまうほどの技術。

「機体の補助もあるだろうがやはり本人の勘だろうな」

私の心を読んだかのように織斑先生が口ずさみました。

ISの操縦は基本イメージによるものですがそれには高い集中力が必要。

彼のISが彼のイメージ通りに動くとしてもあれだけ動かすのは並大抵ではない。

そうこう考えているうちに装備のテストに入りました。

彼が展開したのは盾と銃が一体化し近接ブレードの刀身が折り畳まれたもの。

さっきのデータにも登場した武器。

白い刀身に素材の解らない透明な緑の刃。

おそらく彼が最も信頼するのであろう剣。

『エクシア、刹那・F・セイエイ、目標を破壊する』

彼がそう言いました。

自身が武器であるかのように。

翔びながら銃からビームを撃ちバルーンを墜とす。

勢いを殺さず折り畳まれた近接ブレードを展開し、隣のバルーンを切りつけてその横を抜ける。

抜けてすぐにクイックターンをしてビームの剣を別のバルーンに投げつけて破壊する。

その一連の動きはさながら舞のようでした。

だが突然彼はその舞を止めてしまいました。

どうしたのかと思った次の瞬間、その答えは出ました。

彼の手に握られていたのは近接ブレードではなく二連装の大砲。

両手に展開されたソレは弾倉や給弾機構が見受けられないことからビーム兵器だと解る。

そりてソレから太いビームの束が吐き出された。

ビームはバルーンを飲み込み跡形もなく消滅させた。

「…なんて威力」

私はまた思いました。

あれだけの武器を扱う彼は何者なんだろうと。

そして今彼は私のすぐ近くにいます。

あの後今後の対応について協議する為に彼は罰則を受けた生徒を入れる懲罰部屋に入られています。

私は部屋の外からその監視をしているのですけれど、彼はイスに座った動きません。

ISは条件に反せずかつこちらの安全の為に鍵の付けられた頑丈なケースに入れられ、部屋の中、彼から離れたところに置かれています。

中にも教師が二名居るので、下手な動きをすれば取り押さえられるようになっています。

「動きは？」

「ありません。」

やってきた織斑先生に聞かれ、私は答えました。

「鍵を開けてくれ。処遇が決まった」

「どづなつたのですか？」
「(……………)することになった」

刹那 Side

俺は今部屋の中に拘束されている。
エクシアは目の前のケースに入れられ、鍵がかけられている。
奪われたわけではないので直接条件には反していないが…。
部屋の中に監視役が二人、外に一人。
まあ仕方ないことだろう。
俺が持ってきたのはこの世界で最強の存在。
しかも未知の技術が使われているのかもしれないモノ。
ことが穏便に済むとは思いつらい。

「失礼」

織斑先生が入ってきた。

「セイエイ、お前の処遇が決まった」
意外と早い気がするが…？

「お前が異世界からやってきたことやISのことを考慮した結果、
お前にはこの生徒として暮らしてもらう」

予想の範囲内だ。

俺が予想していたのはここでの保護。

国際IS委員会とやらへの通達。

最悪の場合は実験材料^{モルモット}。

男でISを操縦出来るのは俺だけだろうから。

もしそうならこちらも全力で抵抗するが。

とにかくこの詳細を聞くことにする。

「国際IS委員会には？」

「中東出身で、難民生活をしていたところ両親が死亡。その場に居合わせた日本人によって日本の孤児院に送られ日本国籍を所得、偶然ISが操縦出来ることがわかり今に至ると。幸い前例があるしな。ISについては学園の訓練機のコアを基に造ったことにする。政府への根回しもしておく」

カバーストーリーまで捏ち上げるとは…。

つまりは委員会には本当のことを話すつもりはないということか。

「組織としては大丈夫なのか？そして前例とは何だ？」

気になるところを聞く。これらに関しては知っておいた方がいい。

「それをどうにかするのが我々の役割だ。それに子供を実験台にするのは教師どころか人のすることじゃない。前例とはウチに一人男子生徒がいるからだ。道に迷った拳げ句受験会場を間違え、そこにあったISに触れてISが操縦出来ることがわかった、手のかかる大馬鹿者がな」

彼女は身内の話をするかのように呆れたような顔で言った。

取り敢えずこちらには不利なことはない。
寧ろ希望通りの処遇だろう。

確信が有るわけではないのに彼女らのことは信用出来る気がする。
昔なら絶対に信用しなかった。それだけ俺も変わったのだろうか…。
とにかくその件については了承することにした。

だがここで一つの問題が浮上した。

俺は幼い頃からゲリラの少年兵として戦い、ガンダムと出会いそれを求めてからはずっとソレスタルビーイングに所属していたのだから学校で受けるような教育は受けていない。

読み書きは英語とアラビア語なら完璧に出来るが日本語はミッシェンのお陰で会話は出来ても読み書きは微妙だ。

他の科目など言うまでもない。

ここで保護されるのを予想していたのならすぐ思いつくはずなのだが、何故気付かなかった……。

「何だと？」

学校に行ったことがないことを話したらその場に居た全員に驚か
れてしまった。

元難民でゲリラとして生き、その後ゲリラを抜け世界を旅していた
と誤魔化した。

すると彼女らは思い悩んだ後、

「わかった。今日から明明後日までに基礎をたたき込む。応用などは放課後などに補習ということにするから覚悟しておけ」

生活に必要な物はこちらで用意しておくからと言って今日からこの部屋（懲罰部屋）で今までの戦いよりもある意味キツイ猛勉強が始まった。

地道に勉強することの大切さをこの三日と少しの間ほど感じた日は無かった……………。

これから（後書き）

ヒロインどうしよう…。

一夏にフラグ立つ人たちはあまりやりたくはないけど。

教えてくれ皆さん。筆者の頭は何も答えてくれない…。

編入（前書き）

ヤケクソな勢いに任せて投稿してしまった…。

エクシアの武器が多過ぎると言われたのであと一つ二つに絞ろうか…。後書きでアンケートしましょう。

編入

一夏Side

あの騒動から数日が経った。

騒動に関しては騒動が起きてすぐに箝口令かんこうれいが敷かれ、更には後からその場に居合わせた全員に先生から直々に釘を刺された。

「一体何だというんだ…？」

思わずそう呟いてしまう。

いきなり空から男子とISが墜ちてきて、それで黙ってるだなんて…。

我々の『知る権利』は死んだ！何故だ！？

否！それは「何馬鹿なことを考えている」…馬鹿とはないだろ篤。

俺は人権の一つである『知る権利』について「一夏さん、取り敢えず落ち着いてくださいな」…セシリアまで…。

「何だよ二人とも」

「お前が変なことを考えていそうだったから突っ込んだまでだ馬鹿者」

今日も腕を組んで仁王立ちで話し掛けてくる幼なじみの篠ノ之篤。

幼なじみって互いをすぐ馬鹿呼ばわりする間柄だったっけ？

もしそうなら日本語は罵詈雑言に汚れたものになってしまう。悲しいことだ。

「今また変なことを考えていただろ」

ギクリ。なんでばれるんだ？
どうでもいいけどギクリとか言う奴って本当にいるのかね？俺は知らんけど。

「なんでこつも話が脱線してしまうのかしら…」

そつ言つのはクラスメイトでイギリス代表候補生のセシリア・オルコット。

今日も金髪のロールが見事だ。

「誉め言葉として受け取っておきますわ。(あの件についてはお気持ちはわかりますけど私たちにはどうしようもありませんわ)」

セシリアが周囲に聞こえないようにそつと耳元で言う。
この位置だと耳に息がかかって少しくすぐったい。

(わかってるけどさ…)

(学園側が事態の收拾をするまでに混乱が起きてしまつのを防ぐためでしょう)

さすがは代表候補生。

頭が冴えるな。

(あつ、当たり前ですわ！私セシリア・オルコットにかかれば容易いことですよ！)

おお、なんか格好いいなそれ。
ん？誰か忘れてるような…？

「一夏……。私を差し置いて内緒話とはいい度胸だな？」

「まつ待て！何故そこで刀を抜こうとする！？」

「問答無用！」

「箒さん！少しはじゅー『スパパパーン！』く！？」

「さっさと席に着け馬鹿共」

いきなりセシリアと箒と俺の頭に衝撃がきたと思っただらそこにいたのは我がクラスの担任で俺の実姉の織斑先生だった。やはりさっきの衝撃は織斑先生の出席簿アタックか。この先生に逆らうと大変な目に遭うので大人しく従おう。

「皆さんSHRを始めますよ」

我がクラスの副担任山田先生が教室に入ってくる。

「なんと今日は編入生が来ますよ！」

教室中が一気に騒がしくなる。

4月の終わりのこの時期に編入生？

病気かなんかで入学が遅れたか？

「ではどうぞ！」

テンション高めの山田先生の声がかかりドアが開く。そこから入ってきた人物に俺は目を疑った。

刹那 Side

織斑先生と山田先生の先導のもと俺は自分が入るクラスへと移動していた。

織斑先生はそうではないが山田先生はさっきから階段で転んだり壁にぶつかったりとしているのでいろいろと本当に大丈夫なのかと心配してしまう。

「じゃあここで待っていてください」

山田先生に言われ教室の手前で待つ。

織斑先生が教室に入った途端、『スパパパーン！』と何かを連続にはたくような音が聞こえた。

何があつたんだ！？

教室内で何があつたのかを考えているうちに山田先生から声がかかった。

ドアを開けて中に入った途端、さっきまで騒がしかった教室が静まり返る。

生徒たちは目を見開いてこちらを見ていた。
無理もない。

この学園では一人しか居ないはずの、また一部の人間には見たことがある男子が入ってきたのだから。

俺が墜ちてきたことについては箝口令を敷いたと聞いているし念のため保険も用意してあるから大丈夫だろう。

「中東出身の日本国籍、刹那・F・セイエイだ。よろしくたのむ」

俺が自己紹介しても彼女らは何の反応も示さない。

事態についていけないのかと思うと、

「一夏でいいぜ。」「ちらりそな」
「ああ」

軽く挨拶をかわした後俺たちは更衣室へ移動するために教室を出た。

編入（後書き）

いきなりですがアンケートです。

前書きの通りエクシアの武器が多過ぎるので今現在登場しているもの + 1 or 2 にしようと思います（パッケージは別ですよ）。

あくまで参考となってしまうますが以下の選択肢からお選び下さい。

? 実弾武器

? GNハンマーなどの格闘武器

? やっぱビーム射撃でしょ

? その他

一人三票までで（それぞれに一票ずつ投票可）出来れば番号でなく名前を書いてくれると有難いです。

またエクシアの設定（よくお読みください）にそぐわないものは無効とさせていただきます。

締切は投稿日から一週間後までです。

よろしく願います。

模擬戦（前書き）

アンケートご協力ありがとうございます。
詳しくは後書きで…。

うーん、今回も強引だ…。

模擬戦

一夏Side

「織斑先生はおまえの親戚か？」

更衣室に着いてすぐに刹那がそんなことを聞いてきた。

「俺の姉だよ」

「そうか。どつりで似ているわけか」

移動中は無言だったから口数の少ないやつだと思っていたがどうやらそうでもないらしい。

ISスーツに着替えつつ俺は刹那に最も聞きたかったことを聞くことにした。

「なあ、刹那。数日前のおまえのあれは何だったんだ？」

刹那Side

「なあ、刹那。数日前のおまえのあれは何だったんだ？」

やはり聞かれたか。

今この場には俺と一夏以外いない。

このような状況になるまで聞くのを待っていたのだろう。

箒口令を言いわたされている筈だがやはり守りきることは出来なかつたか。

「あれは事故だ。詳しい原因はわかっていない」

最後にこのことは黙っておいてほしいと付け加えて保険として用意していたカバーストーリーを話す。

我ながら保険としても内容としてもひどいとは思うがこうする以外誤魔化す方法がない。

「…大変だったな。そういえばおまえがISにのれることはニュースにはならなかったけどどうしてだ？」

「俺の場合はおまえの後に発覚してな。あの時はおまえに注目がついていたが俺もよくわからん」

「委員会知っているのか…？」

「さあな。国も大変だろう。自国から二人もISが操縦が出来る男子が出たんだからな」

痛いところを突かれたが何とか誤魔化す。

だが実際に国はこう動くだろう。

もしISを操縦出来る男子が現れば隠せばいい。

ISが操縦出来る男子のデータをある程度独占出来るからだ。

ISを操縦出来る男が現れた。

その仕組みを解明出来れば女尊男卑の世界で男性の立場は大きく回復するだろう。

女性優遇の政策が多くなるなか、政治家はいまだに男性が多い。ならば少しでも男性の立場を回復させようとするはずだ。

それにISの操縦が出来る人間が多いことに越したことはない。差別ではないが身体的に見て女性よりも男性の方が強い。

この辺はその国にとって大きなアドバンテージとなる。

日本は恐らく立場からして委員会に通達するだろう。
異世界云々は学園が隠してくれているが、一度この学園の代表とコ
ンタクトを取ったほうがいいかもしれん。

詳しく調べてないからよくはわからないがこの世界でも『歪み』
が見え隠れしているか…。

「俺は学園に入る前に稼働データを採っていてな。あの時もそうだ
った」

「それって大丈夫なのか…？暴走の理由が男だからというのはない
よな…」

「だったら起動すら出来ないだろう」

そんなことを話ながらグラウンドに移動する。
既に何人が揃っていたが授業に遅れてはない。

『ねえ、あれが例の…』

『そう、一組の編入生』

『何で一組なのよ！一人いるからそこは二組でしょ！？』

その場にいた二組と思われる女子たちがそんなことを話していた。
移動の時にもそうだったが何なんだ？

「一夏、彼女たちはどうしてあんなことを言ってるんだ？」

「そりゃ男子が珍しいからだろ。なんせここ（学園）には本当なら
いないはずだからな」

「だが女尊男卑の風潮で好奇的な目を向けられるとは思わないが」

ISが扱える。それだけで男女間の差が出てしまっている。

確かに国防の第一線にいるのは女性が殆どだろう。

ISは軍事利用を禁止されているが実際は国防力として使われている。

つまりは国を守っているのは女性だ。
だから女性優遇社会となったのだろう。

開発者がこれを予想していたのかはわからないがこのケースは俺の世界にもないほど特殊なので具体的解決策が浮かばない。

「自分たちと同格の存在がいるんだ。興味を持たないほうがおかしいだろ？あとはお年頃というやつだ。まあ俺としては女だらけのここにおまえが来てくれたことが有り難いけどよ」

言われてみればそうだ。

自分たちと同じようにISが操縦出来る本来ならばいないはずの異性がいる。十代とあらば思春期真っ盛りで興味を持ってもおかしくない。

俺は姿はこれでも実年齢は七十過ぎだからそうでもないが。
とはいっても女性のみの空間に男一人はきつい。

「俺も男が自分一人はきついからな。その気持ちはよくわかる」
「理解者がいてよかつたぜ…」

こいつとは（意味が違うかもしれないが）わかりあえたようだ。

『すごく仲良さそう…』

『やっぱり織斑くんって男に…』

『それもそれで…（ジュール）』

『セイエイくんが攻め？』 『織斑くんがでもいいけどね』

こんな会話が聞こえてきたが気にしない。
気にしたら負けのような気がする。

スパパパパパーン！！

「無駄話をする前にさっさと並べ」

織斑先生に流れるような動作で連続で頭をはたかれた。無論俺も。朝のあの音の正体はこれだったか。だが教育者として体罰はどうなのだろう。

「黙れ。尻の青いガキは逆らう前に自身を磨け」

読心術が使えるのかこの人は。言っていることはもっともだがもう少しオブラートに包んだ言い方が出来ないものか。

スパパーン！！

「私は手加減は一切しない」

またはたかれてしまった。

「さて、全員揃ったな。まずは専用機持ちに模擬戦をしてみよう」

俺が把握している限りではこの場にいる専用機持ちは俺を除いて一組の一夏とイギリス代表候補生であるセシリア・オルコット。四組にも一人いるとのことだが今は関係ないだろう。

「オルコットとセイエイに模擬戦をしてみよう」

いきなり代表候補生とか。俺はISの起動は一回しかしていないのだが。

「セイエイさんは専用機を持っているのですか？それにまだISの操縦に慣れていないのでは…」

「こいつの専用機のコアは学園が提供している。それと相手を甘くみていると負けるぞ？」

「なっ…!？」

オルコットが尋ねるも織斑先生は本人を挑発するように返す。なぜあのように言うのだろうか？そしてなぜ俺なのだろうか？

『恐らくマイスター刹那を實力を試しているのでしょう。上等ですよ。やってやりましょうマイスター刹那』

エクシアがプライベートチャネルで話し掛けてくる。おまえはそんな性格だったか？

『マイスター刹那はそうは思っていないのでしょうかがマイスター刹那のISの操縦はMSと殆ど変わりません。そして私は貴方の剣。』

主に恥をかかせるまねはしません』

エクシアが諭し、誓うように言う。

そうだ。俺はエクシアと共に戦ってきた。

相棒とも言えるエクシアを信じなくてどうする。

それにこいつは姿はかわれどガンダムだ。

その名を汚すわけにはいかない。

「わかった。受けて立とう」

「セイエイさん!？」

「刹那!？」

負けるわけにはいかない。

一夏Side

ふとセシリアを見ると表情には出でないが怒っているのがわかる。セシリアは性格からかプライドが高い。代表候補生であるのも関係しているだろう。恐らく千冬姉と刹那の態度が癪に障ったのだろう。俺はセシリアに落ち着いてもらおうと声をかけた。

「セシリア、落ち着いていこうぜ?落ち着いているほうがセシリアらしいしさ」

「あ、ありがとうございますわ一夏さん。そうですね、怒ったり焦ったりしていたら実力の半分も出せませんから」

どうやら落ち着いてくれたようだ。よかったよかった。

さっきとは違ってかわって何故かご機嫌なセシリアを見送る。

けれど俺の後ろでどうして箒がこちらを睨んでいるのかわからなかった。

セシリアSide

織斑先生に負けると言われた時、私は一夏さんとの決闘を思い出した。

ある切っ掛けから始まったそれは私の勝利で幕を閉じた。

判定勝ちという形で。

勝敗が決する直前懐まで飛び込まれた。あの時の一撃が入っていたらどうなっていたか。

それは決闘終了後にも思ったことだ。

そして一夏さんのことが好きになり、少しでもいいところを見せようと頑張ってきた。特にこれ（IS関連）については。

そして今甘くみていると負けると言われた。

好きな人のためとはいえ頑張ってきた今の私が負ける？

その言葉に怒りを覚えた。

だけど

『セシリア、落ち着いていこうぜ？落ち着いているほうがセシリア

らしいしき』

一夏さんにそう言われた時怒りが治まったどころか逆に嬉しく感じた。

(まったく、一夏さんたら女性の扱いが上手いのですから…)

誰だって想い人に心配されれば嬉しいものだ。だけど出来ればその気持ちを自分にだけ向けてほしい。無理だとわかっていてもどうしても思ってしまう十代乙女だった。

一夏 Side

蒼い空に浮かぶ二つの影。

一方はセシリアの『ブルー・ティアーズ』。

もう一方は刹那の機体だ。

以前見たのと同じ白と蒼を基調とした機体。

あの時と同じ機体なのかと疑問に思ってしまうが後で聞くことによつ。

刹那の機体ははつきり言って特徴的だ。

背中には他方向加速推進翼マルチ・スラスターが無く代わりにカス〇ム〇ボのような小さな箱型の他方向加速推進機と丸み帯びたト〇ガリ〇ーンのようなパーツがある。

後者はともかく前者はサイズ、形状的に見てもあまり性能のいいものには見えない。

だからといって全身にスラスタがあるかと言われれば小さいのが脚部と肩装甲に一つずつ、リアスカートアーマーに二つあるだけ。お世辞にも何も言えない。

機動力を犠牲にした代わりに何かあるのかというわけじゃない。それは機体の武器を見ればわかる。

両腰に携えられた二本の長さの違う近接ブレード。後腰と脚部に収まっている白い棒状のもの。左腕の盾。右手に持った盾と銃と近接ブレードが一体化した変わった武器。

データ所得。近接ブレード『GNブレイド(S/L)』、近接ビームサーベル『GNビームサーベル』、複合近接ブレード『GNソード改』、固定装備有。

ビームサーベルが存在するとは……。『零落白夜』と同じくエネルギー消費が激しそうだ。てかGNって何の略だ？

ともかく白式と同じで近接戦を基本にした装備だ。

だけど矛盾している。

機体は機動力を犠牲にした構造。武器は機動力を必要とする近接武器ばかり。

ならばそれをカバーする何かがあるのだろうか？

いろいろと考えながら俺はその答えが出るのを待っていた。

予想とは真逆の答えが返ってくるとは知らずに。

「はじめ…！」

千冬の合図と同時に『剣の天使』と『蒼穹の狙撃手』は互い向かってに飛び出した。

模擬戦（後書き）

取り敢えずまずは報告を。

アンケートによって得られた意見を元に筆者なりの妄想を含ませたものを二つ追加します。

セブンスードがいいという意見もたくさん戴きましたが既に設定で書いており登場予定ですが、こちらの説明不足でした。

また後付武装は二つ追加するとの話でしたが今後の展開でどうしても使いたいものがあつたので勝手ながらも一つ追加させていただきました。

アンケート武器については一つだけ未登場ながらも設定の方に追加させていただきます。

刹那の実力（前書き）

戦闘パートで基本三人称です。刹那無双です。

予め謝っておきますがセシリアファンの皆様申し訳ありませんでした（土下座）

刹那の実力

「エクシア、刹那・F・セイエイ、模擬戦を開始する」

模擬戦開始の合図とともに刹那は緑色の粒子を噴きながらエクシアをセシリアに向けて飛ばす。

それに対してセシリアは『ブルー・ティアーズ』の特殊装備『ブルー・ティアーズ』 通称BT兵器のビットを四機射出、ビットにレーザーを撃たせ自身も右手の六十七口径特殊レーザーライフル『スターライトmk?』で刹那を狙う。

だが刹那はその猛攻をすべて避け、また時には左腕のGNシールドで防いでみせた。

「何ですって!?!」

セシリアはその光景に驚かずにはいらなかった。

BT兵器はビットの遠隔操作によるオールレンジ攻撃を最も得意とする装備だ。

つまりは相手の意表を突くことが出来るということ。それは初心者が初見で見切るのはまず無理だ。

しかし刹那は違う。

刹那は元の世界でBT兵器に似たもの スローネやアルケー、レグナント、ガッデス、リボーンズガンダムなどのファングを知っているし、実際に経験している。

それらはセシリアのに対して数も多かったし速く的確だった。刹那はそれを18メートルの巨体のMSで避けてきた。

刹那が駆ったMS、ガンダムとISでは機動力では機体にもよるがそう大差はない。

ガンダムの太陽炉から生成されるGN粒子は質量軽減だけでなく推進剤やビーム兵器の荷電粒子、防御フィールドなどに使われる。推進剤として使えば質量軽減もあり通常のジェットノズルよりも小型のGNブースターで同等またはそれ以上の加速力が出せる。

GNブースターの方向を変えれば変則機動も可能だ。

余談だがエクシアら第三世代型ガンダムの太陽炉のコーンも推進機の役割を果たしている。

ISも反重力力翼や流動波干渉で機体質量を軽減し自在の機動が可能だ。

だがセンサー系は違う。

操縦者の脳にダイレクトに伝えるハイパーセンサーはあらゆる面でMSのセンサーを大きく上回る。

索敵範囲や視覚レベル、危機感知レベル、伝達速度など挙げればキリがない。

操縦にしても同様だ。

それでも刹那はやつてのけたのだ。それだけの経験と技術を持つ刹那が出来ないはずがない。

ましてや空間認識能力に長けたイノベーターであるからには。

事実、刹那は今も避けつつGNソード改ライフルモードでセシリアに反撃していた。

セシリアは正直焦っていた。目の前の男がここまでやるとは思わなかったからだ。

セシリアが刹那に対して油断をしていたか。それは嘘とは言いきれない。

あの決闘以来セシリアは努力をしてきた。まあその半分以上が一夏にいいところを見せたいという理由だがそこは恋する乙女の特権である。

そうして努力してきたから次は同じミスをしないと心のどこかで自信が過信となり、油断となっていたのだ。

このままでは先にエネルギーが尽きる。接近戦で仕掛けようにもセシリアは接近戦が苦手であり、しかも相手が接近戦を想定した装備ばかりなので下手に仕掛けることも出来ない。これもセシリアが焦る理由の一つだろう。

この膠着状態を先に破ったのは刹那だった。

GNソード改の刀身を起こしてレーザーを躲しつつセシリアに突撃する。

セシリアはビットを自分の前に集中させ弾幕を張り、その間に距離をとりつつショートブレード『インター・セプター』を展開しようとするが、刹那はビットを越えてセシリアの眼前にまで接近しGNソード改を振るう。

「くうっ！」

辛うじてショートブレードで受け止めるもその一撃が重く後退してしまふ。

その隙を逃さんとはかりに刹那が追撃を仕掛けようとするが、セシリアにはあの戦法があった。

セシリアが刹那の間合いに入る瞬間、

「掛かりましたわ！」

『ブルー・ティアーズ』のスカートが動き、二機のミサイルピットが刹那に向かって射出された。

これは一夏との決闘にも使われた戦法だが、台詞まで同じなのは気にしてはならない。

これは避けれない。

誰もがそう思ったが目の前の光景は違った。

刹那はGNソード改で弾頭と推進部を切り払って直撃から回避した。

「なっ…!？」

セシリアが声を荒げる。

だがこれは全員が驚いたことだ。あの距離でミサイルを処理する。普通なら避けるのが定石なのだが目の前の男は切り払うことで無力化した。当事者であるセシリアの気持ちもわからなくもない。

その隙に刹那はセシリアを斬りつけていた。

シールドエネルギーが大きく削られる。

確かにGNソード改は一般的な近接ブレードよりも大型だが、GN粒子を纏うことで威力を上げているのが大きな要因だろう。

距離をとらない事にはセシリアに勝ち目はない。

だが刹那がそれを許すはずがない。

GNソード改を収納、両手に腰のGNブレードを抜かせて再びセシリアに連続で斬り掛かる。

セシリアは危険本能からか咄嗟にショートブレードで防ごうとするも手数が多く防ぎきれずに何撃か食らってしまう。

「ティアーズ!!」

ビットを呼び寄せて引き剥がそうとするが、そのうちの一機がGNブレードによって切り落とされ、また一機が腕のGNバルカンによって撃ち落とされ残りの二機も最初の二機と同じようにして落とされた。

「……………!?!」

もう何回目かわからないセシリアの驚愕。

其れ程までに刹那の実力が予想よりも高過ぎるのだ。

セシリアにとってあんまりなことの嵐に、セシリアの頭は真っ白になってしまう。

気付いたときにはトドメの一撃がはいるうとしていた。

千冬Side

セイエイの実力を測るために仕組んだ今回の模擬戦。
オルコットのことを含めほぼ予想通りだが予想外でもあった。

あいつと初めて話した時からこいつは只者ではないと思った。

事実ISを動かさせてみればほんの僅かでモノにした。

MSなるものを操縦していたと言っていたからその感覚を引きずり慣れるには時間がかかるだろうと踏んでいたがうまいことはずれた。

そして今回の模擬戦。

やはりあいつは戦士だ。それも強い信念と能力と経験を併せ持つと思わせるほどの。

あいつと同世代で兵士として生まれた私の元教え子よりも長く、そして濃密な経験を持っていることは無いはずだが、才能であると説明するには度が過ぎる。

とくに防御を除けば被弾率がゼロであることには。

あいつが自身について何か隠しているのは解る。

あいつが話した自身の生い立ちでは説明がつかないことが多過ぎるからだ。

歳不相応の身体能力と大人びた雰囲気、明らかに場慣れしている様子。

そしてあの歳ではそうそう持つことのない揺るぎない信念を宿す目。

だがその何かがどれほどのモノかはわからない。

(セイエイ、おまえは何者なんだ…？今までどうやって生きてきた…？)

千冬は思う。刹那がどんな人生を歩んできたのかを。そして同時に思う。

(山田先生、感嘆するのはいいが、一々声にあげないでくれ…)

やっぱりどこか子供な自分の部下に。

模擬戦は刹那の勝利で幕を閉じた。

各々の心に驚きと疑問を持たせながら…。

刹那の過去を知る時、彼らは世界の『歪み』と人々の可能性を知ることになる。

刹那の実力（後書き）

刹那とエクシアならここまでやらないといけないような気がして
…。

戦闘描写って難しい…。

次回刹那が刹那らしく無くなるかもしれない（恐）

交流、その日の終わり（前書き）

自分史上最長となってしまうました。

出来るかぎり上手く書いたつもりだけど怖い…。

後書きでちょっとした座談会をやります。

交流、その日の終わり

一夏Side

IS操縦訓練を終え、昼休みの今俺たちは食堂で昼食を摂っていた。

俺の右側には篤が、左側にはセシリアが陣取っており、向かいには今日編入した二人目の男子刹那が座っている。

いつもなら談笑をしつつ楽しく昼食を食べているはずなのだが、

「……………」

「……………」

「なあ……………」

一向に会話が弾んでない。というのも

「……………」

セシリアが落ち込んでしまっているのだ。さっきから声をかけては大丈夫だと返されるがあからさまに落ち込んでいる。周りの女子もこの空気に耐えられそうにないのか近寄ってこない。

刹那を食事に誘ったのは他ならぬ俺なのだが食事中はほとんど話さない。

篤はこの空気にどうすればいいのか気まずい顔をしている。

俺もどうすればいいのか迷っていると不意に刹那が口を開いた。

「セシリア・オルコット、過ぎてしまったことをいつまでも引きずるうとするな」

刹那にとってはただの注意のようなものかもしれないがこの発言はセシリアにとっては火に油だった。

「お黙りなさい！貴方に私の何がわかるというのですの！！」

「おまえが何を抱えているかはよくは知らない。だからといってここで立ち止まってはいけない」

「何を……」

「…失ってからでは遅いからだ」

「……」

セシリアが怒鳴るが刹那は諭すように返す。

妙に実感のこもった刹那の言葉にセシリアは詰まった。

「俺は気付いた時には様々なものを失っていた。両親や仲間、国までも失った」

「……！？」

「だが立ち止まっては何も変わらない。だから俺は前に進み続けた」

刹那の言葉に、こちらを見つめる揺るぎを見せない目に俺たちは動きを止めてしまう。

刹那の言葉が刹那自身にとって残酷な事実ばかりを含んでいるからだ。

俺にも両親はいない。昔千冬姉と一緒に捨てられた。だけど刹那は両親がいなくてもいい。

『中東出身の日本国籍』の意味がわかった気がする。
辛い過去というのはそれぞれ程度というか差があるというわけじゃないが刹那のはあまりにも酷い。

だけど刹那は挫折しなかった。それだけの事があっても前に進み続けたと言った。

それが刹那の強さなんだろう。刹那のことは出会ったばかりだから何も知らない。

でもこれだけはわかる。刹那は肉体的とか以前に心が強いのだと。

刹那のことは少しずつ知ってゆこう。時間はたくさんあるのだから。

俺たちは刹那に対して一種の尊敬の念のようなものを抱いていた。

「刹那さん、有り難うございますわ。私はあの時自分のどこかで油断してたのかもしれない。ですがもう大丈夫ですわ。刹那さんが気付かせてくれたお陰でもうこのような過ちはいたしませんわ」

セシリアが吹っ切れたように刹那に礼を言う。俺と同じようなことを考えたのだろう。篝も俺とセシリアと同じ顔をしている。

「いや、構わないオルコット」

「セシリアで構いませんわ」

「いやしかし…」

「刹那、こういうのは有り難く貰っておくものだけ」

「そういうことだ。私のことも篝で構わん」

刹那はもう少し相手の好意を素直に貰うということを覚えた方が

いいんじゃないのか？特に異性については。

刹那は少しだけ考える様子を見せると少しだけ笑みを浮かべて

「ありがとう」

と言ってくれた。そこらのアイドルやホストに引けをとらない笑顔だ。

くう、眩しい！褐色の顔に浮かぶその笑顔が輝きを放っている！！証拠に周囲の女子が顔を赤らめている。セシリアと箒はそうでもないみたいだが刹那は気付いてないみたいだ。くっ、これが天然ジゴロか！？この鈍感野郎が恥を知れ！！

『あなたが言いますか？』

そんなエクシアのツッコミは誰の耳にも入ることは無かった。

刹那 Side

少し話しすぎてしまったか。だがここで言うておかなければ彼女はそこで終わってしまう。

イノベーターとしての勘か彼女が何かを抱えているのは感じた。だがそれを無理に知ろうとはしない。

それはただ彼女を傷付ける行為だからだ。彼女に話す気が出てくる

まで待とう。

だがいきなり礼として名前を呼べというのにはどうしたらいいのか迷った。

元の世界ではC Bの仲間以外名前ではほとんど呼んだことが無い。

一夏は織斑先生との識別のため（じゃないとどうなるかわからん）に呼んでいるが異性に対してはマリナ以外フルネームか姓で呼んでいた。

一夏が有り難く貰っておけと言うのが確かに相手の好意は無下にしていけないだろう。

礼を言ったら周囲の女子が固まったのはどうしてだろうか。

一夏Side

ここで話は一旦区切り、話題は刹那のISについてとなった。

どういったコンセプトなのかとか戦闘中に放出していた緑色の粒子は何なのかとか。

話を聞いてみるとやっぱり特徴的だ。被弾性を考慮し可能な限り小型化した高出力スラスタとか緑色の粒子はエネルギーの残滓とか武器は光学兵器が多くあるとか。

武器の数には羨ましくなった。後付武装の数か半端ないのだ。しかもほとんどがビーム兵器。その種類はより取り見取りでまさしく昔いた関取よろしく『ビーム兵器のデパート』だ。

…箒、セシリア、何なんだその『またか』的な顔は。

ともかく刹那いわくデータは予め採ってあるし自分のスタイルには合わないから使わないと言っていたから分けてくれと本気で言ってしまった。驚かれたが欲しいよハンマーの一つぐらい。

こう、投げたくるじゃん？海から揚がってきた鉤爪のバケモノとかに。

それは置いといて俺の白式は銃どころか盾さえ受け付けないわがままボディだ。武器は近接ブレード『雪片式型』一本でしかも自身のシールドエネルギーを消費するという呪われた仕様。ある意味時代錯誤だぜこりゃ。

後はスナイパーライフルと聞いてセシリアが熱心に聞いていたのが印象的だった。狙撃手としての血が騒いだのだろう。

それと、刹那に頼みたいことがあった。模擬戦の後からずっと思っていたことだ。

「刹那、放課後に俺にISの操縦について教えてくれよ」

刹那 Side

一夏からISの操縦について訓練をつけてくれと頼まれてしまった。

俺はISの操縦については素人なのだ。エクシアが俺のイメージを的確に拾い俺の理想通りに動いてくれる。俺があそこまで動けるのもエクシアのお陰なのだ。こいつには本当に感謝しなくてはならない。

だから、俺がISの操縦について教えようにもどう教えたらいいのかわからない。そもそも教えるということ自体やったことが無い。それに俺にはしばらく放課後に補習がある。勉強がみんなに追い付くように。

毎日というわけではないが休むわけにはいかない。

後一夏の両隣から何やら敵意のようなものがこちらに放たれている。

だからといって断るのも忍びない。だから俺は俺に出来ることをしよう。

「すまないがしばらくの間放課後には予定がある。それに俺は教えることが苦手だ。だが暇がある時なら模擬戦ぐらいならつけてやれる。それで我慢してくれないか」

「すまねえな。こつちこそ無理言つて」
「気にするな」

何とか了承してくれたか。補習など俺の過去に関わることをこれ以上話さずに済んだ。

今はまだ時期ではない。彼らが成長し、信用に値すると思えた時に話すとしよう。

午後は座学で、ISの武器や防御についての内容だった。一度エクスシアから説明を受けてはいるお陰で今のところは特に問題はない。

ただISはMSと違い下手に攻撃すれば相手操縦者に怪我をさせかねない。となると近接戦闘型の俺は相手の攻撃を封じるまたは相手自体を捕獲する装備を用意した方がいいかもしれん。武器を失えば内蔵兵装でもない限り攻撃手段が無い。また動きを止めれば後は的確に攻撃を当てるだけだ。

その辺は後でエクスシアに頼むとして今日一日の授業が終わり、各々が部活や寮、アリーナへと向かう。

部活については特にやりたいと思うものも無かったし自分以外が女子のみだと考えると精神的に堪えるのでパスさせてもらった。

とにかく今は補習のために指定された空き教室へ移動する。教室に入った先には山田先生がいた。

「待つてました。じゃあ早速始めましょう!」

なぜかテンションが高いが。

「今日の模擬戦はすごかったですね。あ、ここは生徒が普段あまり通ることはないですから気にしなくてもいいですよ」

補習が終わりを迎えた時、山田先生が少し興奮したかのように言っただ。

「あれはエクシアのお陰だ。俺が普通のISを動かせばああは動かない」

「そんなことないですよ。どれだけ機体がよくても動かすのは操縦者自身ですから」

真耶としては本心である。

いくら機体がよくても操縦者にそれ相応の技能がなければ機体の性能を持て余すどころか機体に遊ばれてしまうからだ。

だが刹那も本心であった。ガンダムマイスターなのだからMSの操縦能力は高いと自負しているがISについては動かしてまだ二回なのだ。しかもエクシアの補助付きで。

そんな褒められるようなことではないと思っている。

「セイエイくん、褒められたのだから素直に喜んでもいいんですよ。自信を持ってください」

刹那にはその言葉に優しさを感じた。母性のようなものなのかまたは人としてのものなのかはわからないが刹那にとってはどこか心地よいものだった。

この人間は俺にとって優しすぎる。刹那はそう思った。逆にありがたいとも思った。C Bの仲間以外で見ず知らずの自分にここまで優しくしてくれたのはアザディスタンの姫君マリナ・イスマイールぐらいだった。

だからこそわかり合いたい。彼女たちにも教えたい。

なまじ知性があるから人々は些細なことを誤解し…区別し…わかり合えなくなる。けれど繋がることで、一つになることで、同じになることで生きようとしている。みんな同じなんだと。だからわかり合う必要がある。

俺が元の世界で示したように　世界はこんなにも簡単なんだと。

「ありがとう…」

「ふえ！？そ、そんなにいきなりそれは反則…／／／」

「？」

「な、なんでもないです！あ、いや、今日からセイエイくんの部屋は学生寮の1026号室です！これ合鍵です！それでは！！」

そういうと山田先生は顔を赤らめながらダツシュで教室を出てい

った。何なんだ…？

『マイスター刹那…。罪な男です…』

エクシアが言っていることもわからなかった。

真耶 Side

「うう…。いきなりあの笑顔は反則ですよ…。ただでさえきれいな顔をしているのに…」

「何をぼやいている山田先生」

「お、織斑先生！？いや、これはその、セイエイくんの笑顔が…何でもないです…！」

教室から少し離れた階段の踊り場で真耶が必死で落ち着こうとしていると千冬に見つかってしまった。

何とか誤魔化そうとしているが語るに落ちてしまっていることに本人は気付いていない。

「何だ、セイエイに惚れたか？」

「ほ、惚れ…！」

「まあ確かにあれは将来いい男になるな。今のうちに睡でもつけておくか？」

千冬がニンマリと意地悪そうな笑みを浮かべる。仕事場での彼女しか知らない人には信じられない顔だろう。

「な、何言ってるんですか!!」

「冗談だよ。流石に教師と生徒が問題を起こす訳にはいかないからな」

言い返そうとするも上手くあしらわれてしまう。

ちなみに真耶の顔は真っ赤である。

「そういう織斑先生はどうなんですか？」

真耶が悔しそうな顔になって聞く。誰もが第一印象に『背伸びをした子供』と思う彼女がやっても可愛いだけだが。

「私は…そういう感情は抱いてはないがそれに関わらずあいつのことを知ってみたいと思う」

「どういうことですか？」

「ただあいつが本当に何を経験して今のあいつに至っているのか…。それが気になるだけだ」

千冬にしては普段出さない様子だと真耶は思う。

けれど真耶はそれが千冬なりの優しさだと知っていた。

「む、何だその顔は」

「何でもないですよ」

「ふん…、それよりもあいつに部屋の合鍵は渡したのか？」

「ええ、確かに」

「携帯は？」

「あっ…」

しまったという表情になる。あの時一刻も早く教室から離れたくて焦って連絡用の携帯を渡すのを忘れてしまったのだ。社会の大人としてはまずいが一人の女性としては仕方ないことだろう。

「はあ……。早く渡しに行つてやれ」

「女性が男性の部屋に……。いや、携帯を渡しに行くだけだから何も問題ないはず……」

「山田先生……」

「あ、行つてきます〜！」

なにやら暴走しながら寮に向かって走っていく真耶を見つめる。

「まあセイエイはそういうのに疎いだろうから問題ないが……。今後の授業に影響が出なければな」

今日も千冬は苦労人だった。

刹那 Side

学生寮に着き自身に割り当てられた部屋へ向かう。時間は六時に近い。

道中女子からの視線が四方八方から集中砲火だがいつか慣れるだろう。いや慣れなくては。

「ここか」

ドアの横の表札を確かめる。『1026号室 刹那・F・セイエイ』。鍵の番号とも一致している。荷物は既に運び込まれているとのことだから整理しなくては。

「んお？刹那か」

声のした方に顔を向けてみればそこには一夏と箒がいた。

「刹那の部屋はそこなのか？」

「ああ」

「そんじゃお隣さんだな」

隣の部屋の表札を見ると確かに『篠之乃箒 織斑一夏』と書かれている。

このやり取りは沙慈・クロスロードとの出会いを思い出させる。

「これも何かの縁だ。後で一緒に飯食いに行こうぜ」「わかった。一時間後に部屋の前で」

「いいぜ。箒もいいよな？」

「まあたまにはおまえも男友達と食べたい時があるだろうからな。別に構わん」

『あそこがセイエイくんの部屋ね』

『二人部屋に一人か…。』

『後で突撃ね。晩ご飯的に』

『でも織斑くんと食事の約束してたわ』
『まだ判断するには早いわよ。もう少し様子を見ましよう』

「…一夏」
「…気にするな」

二人と別れ部屋に入る。二人部屋らしくベッドが二つあり、武力介入の時のアジトよりも広い。

部屋の角に積まれた段ボールから用意された着替えをクローゼットに仕舞い汗を洗い流すためにシャワールームに向かった。

シャワーから出て着替えた時にドアがノックされた。
ドアを開けた先には山田先生がいた。

「あ、シャワーに入っていました？」
「何か？」

「中々色っぽ…じゃなくてこれ先程渡し忘れてしまいましたけど連絡用の携帯です。必要な分の機能しか備えてませんが…」

「構わない。連絡以外携帯は使わないしな」

「そうですか。服のサイズは合ってますか？」

「問題ない」

今俺が着ているのは制服だが私服と室内着として黒いズボンに白い長袖のシャツに赤いターバンとスポーツジャージを用意してもらった。

私服は元の世界でも着ていたものだがまさか用意出来るとは思ってなかった。

「じゃあこれで失礼しますね。食堂は時間が決まっていますから気を付けてください」

「何から何まですまない」

「気にしないでください。これが教師としての役割ですから。では」

山田先生の背中を見送る。やはり優し過ぎる……。けれど悪い気はしない。

いつまでとなるかはわからんが休ませて貰うとしよう。戦いと対話で疲れたこの体を。

食事を終え部屋に戻る。とりあえず食堂は規模が大きく腕は確かだったと言っておこう。

ちなみに食事中や行き帰りは学年問わずの女子からの自己紹介の嵐だったのは言うまでもない。

荷物の整理をしながら盗聴の可能性を考えエクシアにプライベートチャンネルで話しかける。

『エクシア、対ES用の装備は作れるか』

『午後の授業のやつですね。今のデータであれば問題ありません。安全性を重視でいきますか？』

『そうしてくれ。詳しいことはおまえに任せる。ついでにだがフラッグのリニアライフルとプラズマソードのデータは作れるか？』

『CBの兵器よりも構造は簡単ですから可能ですが……。どうしてまた』

『念のために交渉のカードとしてな』

『わかりました。システムとデータの復旧と並行して行います。フ

ラッグについては三日もあれば十分かと』

『えらく早いな』

『ガンダムの装備に比べれば何世代も劣っていますから』

武力介入当初ガンダムの性能は世界中のMSを凌駕していたから納得出来る。

今日の復習と明日の予習を済ませ（あの三日間でたたき込まれた）ベッドに入る。

編入一日目はこれで終わりを告げる。

刹那の学園生活は始まりを告げただけでありである。

だが刹那の戦いもまた始まりを告げようとしていたのを知る者はいなかった。

交流、その日の終わり（後書き）

釋 廉慎（以後釋）「後書きに起こしいただき有り難うございます。
筆者の釋廉慎です」

エ クシア（以後エ）「小説でマイスター刹那の愛機であり管制人格
のエクシアです」

釋「今日は今までに戴いたリクエストや質問についてを議題にしよ
うと思います」

エ「筆者が優柔不断のヘタレのせいではなかなか方針が決まりません
からね」

釋「ぐふうっ！俺の母親並みの鋭さでライフを削ってくれるな……」

エ「だって事実ですもん」

Q・刹那のフラグはどうするんですか？

エ「いきなりこれですか。まあマイスター刹那は女性に対して優し
い方ですよ。一部の人を除いて」

釋「そりゃいきなり唇奪われたりすればね。本当は彼女らの行動が
原因だけだよ。」

刹那のフラグについての意見は主に一夏のフラグメンバー反対派と
賛成派に別れています。

他にも特定の人物希望の方とか来ていますが」

？「それって私のこと〜？」

釋「こら、まだ本編で登場してないのに出て来ないで！？」

〜しばらくお待ちください〜

釋「はあ…。何とかお帰り願いました…。

刹那のフラグは今のところ一夏メンバーを除こうと思いますがもしかしたら一人ぐらい建ってしまうかも…」

エ「ヘタレが…」

釋「言うな（泣）！！原作通りの展開で行くと難しいんだよ！下手に建てれば他のキャラとの関係も変わってくるし…。特にあの人は」

？「人のせいにするとは最低だな」

釋「またか！？まだ出て来ないで！！」

エ「さっさと決めないからこうなるんですよ」

釋「だって怖いんだもん！」

エ「作家には一番向いてない人間ですね」

釋「げふう！…と、とにかく未定ですが彼女らの登場までには間に合わせます」

エ「そもそも受験生なのにこんなことしてるから」

釋「やったもん勝ち！もう次！」

Q・他の00キャラは？マイスターは出るの？

釋「個人的には出したいけど設定がまだ安定してないから何とも言えないです。機体の設定とかは出来るけどどう登場させるかとかはまだ…。

IS側のシナリオもまだ進んでないし…。
敵キャラによつては登場の方向で。あ、敵キャラについてはオリジナル要素を含みます。やつぱ知性のある人じゃないと機体とか機体とかシステムとか…」

エ「随分先の話では登場機体についてとか展開はあらかた決まっているのに目の前の話が未定とかふざけてます」

釋「だってこれはある意味筆者の妄想とも言ってしまうし…。自分や読者の皆さんが納得出来る内容にならないと」

エ「じゃあやりなさいよ」

釋「俺は…無力だ…」

エ「落ち込んでいる筆者は置いといて現在こんな状況ですが皆様に納得出来るようやらせますのでこれからもどうかこの小説をよろしくお願いします」

釋「想いだけでも…ノリだけでも…」

エ「弱い男は万死に値する！」

釋「え、ちよ、それティ e ギヤアアアアアアア!？」

） f i n ）

日常（前書き）

日常パートです。三人称なのでセリフが少なかったりしますが…。

どうでもいい(?)ことがたくさんあったり。

日常

刹那がこの世界に転位して8日目、IS学園に編入して4日目が始まろうとしていた。

フラッグの武装データは完成し、追加装備も基本設計が済んで後は製作、改修のみとなった。ちなみに元あるものを素材にしているので開発室で造る必要はない。

刹那の朝は早い。ベッドから身を起こすと動きやすい服装に着替え向こうの世界でも日課であった筋トレを始める。

日本の出資で運営しているここIS学園は設備などあらゆる面で世界中の学校を凌駕しており、部活動の備品もこれでもかと兼ね備えているので運動部からトレーニングマシンを借りられないかと刹那は考えていたりする。

まあ駄目もとなので支給された生活費でダンベルぐらいは買おうとも思っているが。下手に要求すれば強制入部も考えられるのでそれだけは勘弁願いたい。

一通り筋トレをすませシャワーで体に張りつく汗を流す。そして制服に着替えつつ身だしなみを整え授業の準備をし、部屋を出て食堂に向かう。

「おはよ刹那」

「おはよう」

「ああ、おはよう」

隣部屋の一夏と箒と合流、共に朝食を摂る。

流石に4日も経てば女子からの視線や自己紹介も沈静化した。2日前、即ち編入2日目がピークであり食堂や自室の前でその対応に追われた。

というのも1日目は補習の上に食後やることをやったらすぐに寝てしまったからなのだが。

「おはよーセイエイくん」

「おはよう」

教室に移動し机に教科書をしまいつつクラスメイトと挨拶をする。これも慣れたことだ。

「刹那の趣味って何なんだ？」

「筋トレだ」

「あーだからがたいがいいのか」

「一夏さんも結構引き締まっていますわよ」

「ありがとなセシリア」

「い、いえ別に礼を言われるほどでは／＼」

「一夏…? (ゴゴゴゴ)」

「どわあ!??どうして箒が黒くなってんだ!??」

その後一夏と箒、セシリアを交え雑談。千冬が来る前に席に戻る。さもなければ千冬の出席簿アタックが飛んでくるからだ。

S H R開始。おとといは真耶の顔が赤かったが今はそうでもない。刹那は風邪でもひいていたのだろうかと考えていたが千冬は呆れたような顔をしていた。

一限目は体育だった。ISを扱う者として身体を鍛えるのは当然である。

グラウンドに集合し、準備体操に入る。ちなみに刹那の身体が細マツチヨだとか柔軟運動で一夏や刹那とペアを組もうとして女子が騒ぎ千冬に出席簿アタックをくらっていたのは余談である。

「ぜえつ、ぜえつ、も、もう無理……」

「な、何でセイエイくんだけ平気なの」

「あいつは鉄人か……？」

メタ発言があつたが走り込みでグラウンド二週目辺りで全員が倒れこみ、刹那だけが黙々と走り続けたことで刹那に『アンリミテッド・セイバー（止まらない剣士）』という二つ名が女子の間で密かにつけられたことを刹那は知らない。

『アンリミテッド』はその体力と戦闘で一度攻めに転じれば終わることのない舞のように襲い掛かる様から、『セイバー』は接近戦を主眼に置き様々な近接ブレードを扱う刹那の戦闘スタイルに由来する。

実はもう一つ『蒼騎士』という通り名が付いていたりするが。

ちなみに千冬はよく制裁にグラウンド十周というペナルティを課すがIS学園のグラウンドは一周5?であり十周となれば50?と

なる。

フルマラソンが一本42.195?であるから時折千冬の基準というものがわからなくなる刹那だった。

昼放課となり昼食を摂るべく食堂へ移動。

今日の昼食はシュワルマ。今日の昼食はシュワルマ。オープンで焼いた羊肉を青菜とトマトのサラダといっしょにタヒーナという白胡椒のタレをかけアイシというパンで挟んだものだ。

おかずにはターメイヤという空豆のコロッケを、スープにはモロヘイヤスープを注文した。

元の世界ではレーションや宇宙食、簡単なもので済ましていたからこういったまともな食事に取りつけるのはありがたいことである。

生徒が多国籍であることを考慮してか世界各国の料理を揃えているのは凄いことだ。しかも美味しい。

「ね、ねえ隣いいかな…?」

ふいに隣から声をかけられたのでその方向に顔を向けると頬を少し赤くした女子がいた。制服のリボンが赤色であることから三年生だと判断出来る。

編入1日目の昼食は落ち込んだセシリアから漂う空気に近寄る者はいなかったが夕食以降は必ずと言っていいほど隣に誰かがいるようになっていて。しかも半分以上が年上。

断る理由もないので刹那は快く承諾するがその真意を理解してないのはいづつまでもない。

午後の授業開始。今日この時間は国や文化圏ごとに別れてそれぞれに合った授業を行うものだったが、特に宗教を信仰しているわけでもないのに刹那は日本人と同じ授業を受けている。というのも日本で暮らす以上日本の文化を早く知っておく必要があるからだ。

ちなみに刹那の苦手教科は古典であり、古文特有の読み方や現代とは意味が違う単語に四苦八苦している。

それに対して女子たちが教えてあげようと互いに火花を散らしているのもどうでもいいことである。

「うおおおおおー!!」

「ふっ!」

「ぐあっ!!!」

一夏が雪片式型を構えて突撃してくるが刹那はそれを左手のGNブレイドLで受け止め右手のGNソード改でカウンターを入れた。

今日は補習がないので放課後に一夏の特訓として模擬戦をしていた。

編入4日目なのでまだそれほど模擬戦をやっていないのだがセシリアを破ったことから『学年最強』ではないかと噂されていたりする。歴戦の戦士である刹那と戦場に立ったことのない者たちを比べること自体可笑しいのだが。

こうしている間に一夏はGNソード改を突き立てられ撃墜されていた。

「やっぱり強いな…」

「おまえは動きが単純すぎるんだ」

「私があればよかったのにな」

「てつきり理解の上でかと…」

あの擬音語と数学的説明の嵐は果たしてその意味をちゃんと伝えられるものだったか。コミュニケーションは大切だと思った一夏と刹那であった。

特訓が終わると同時に観客席などで観戦していたギャラリーが退散し始める。IS学園の女子の大半は一夏派と刹那派に分かれていくことも彼らは知らない。

割合的には半々で一夏派は同級生、刹那派は上級生が大半を占めており、それを狙い二人の隠し撮り写真や特ダネを売り付けようとした女子数名が千冬と真耶を筆頭とする教師陣に制裁されたのは少し先のどうでもいいことである。くだいようだがホントにどうでもいいことである。

夕食になり、一夏の両隣に箒とセシリアが向かいに刹那が座る。

「や〜や〜隣いいかね〜」

会社の上司のような口振りで刹那に近づくのは同クラスののほほんさんこと布仏本音である。

「お〜のほほんさんか」

「や〜おりむ〜」

「それ決定なのか？」

「決定事項なのだよ。なあせつちー」

「せ、せつちー？それって私のことですか？」

のほほんさんには人にあだ名を付けて呼ぶという癖があるのだがそのセンスはなかなか奇抜だったりする。

「いやせつしーはせつしーだよ。せつちーは刹那くんさ」

「せ、刹那のか？」

「何でまた…」

「いや、せつちゃんはありきたりだから、一捻り欲しかったんだよね」

本人の顔から察するに会心の出来のようだが刹那は何とも言えない顔をしている。

刹那にとって布仏本音は未知の部類に入る。特に考えが読めない辺りが。CBの仲間が一番近いのがイアンの妻であるリンダなのだがあれはのんびりとしているだけなので遥かに離れていると言える。

「どうしたの、余りの感動に言葉失った？」

「いや、そうではないが、出来れば名前と呼んでくれ」

「あだ名で呼ぶってのは信頼の証なんだけどな」

そう言われてしまっっては反論出来ない。結果好きにしろと言ってしまい許可も出さずに隣に座られてしまった。

部屋に戻りその日の授業の内容をまとめ、日記をつける。これはCB時代の癖のようなもので内容と文調は報告書そのものであり、

こちらでの行動記録として残している。

シャワーを浴びて寝間着に着替える。黒のタンクトップに短めのズボンという格好だ。着付けが簡単な服装を好む刹那らしさが出ている。

ベッドに入り灯りを消して睡魔に身を任せる。これで刹那はこの日を終える。このまま何もなければ。

そう思いながら刹那の意識は暗闇に堕ちていく。

けれどいつか事件はやってくる。龍を纏う猫と共に。

日常（後書き）

次回あの娘がやってきます。

猫のはっちゃんけぶりに刹那はついていけるのか…？

鳳鈴音、到来（前書き）

思いのほか早く書けたので投稿します。後書きにて少し連絡を。

エンジンさん、無断ですがネタを拝借させていただきました。すみません…。

鳳鈴音、到来

一夏Side

四月も終わりに近づき、桜の花弁が全て散った頃。

俺は本日も我らが鬼教官千冬姉の有り難い授業を真面目に受けていた。

「ではこれよりISの基本的動作を実践してもらおう。織斑、オルコット、セイエイ。まずは展開しろ」

そう言われて俺は右腕のガントレット 待機状態の白式に左手を重ね意識を集中させ、ISが展開するのをイメージする。

集中力が頂点達した瞬間、俺の体は光の粒子に包まれ純白の装甲を形成、白式が展開された。

約0.7秒の展開時間。それでも随分と速くなったほうだ。最初は展開するにもかなり時間がかかったもんだ。

ふと隣を見るとセシリアと刹那は既に展開している…いや、待っていた状態だった。

これでも頑張ったんだぞ？

「よし、飛べ」

そんな俺の気持ちにも関わらず千冬姉の容赦無い指示が飛ぶ。別に泣かないぜ…？

言われてからのセシリアと刹那の行動は早かった。間髪置かずに急上昇し遙か頭上で停止する。

俺もそれを追い掛ける形で上昇するが二人ほどのスピードは出せない。

「何をもちたしている。スペック上では白式はブルー・ティアーズの出力を上回っているはずだぞ」

早速通信回線からお叱りを受けるが急上昇と急降下は昨日習ったばかりで感覚が上手く掴めない。

「一夏さんイメージは所詮イメージでしょ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですわ」

「そうなんだけどさ、空を飛ぶ感覚自体あやふやなんだよなあ。何で浮いてんだこれ」

「反重力力翼と流動波干渉の話になりますけど…」

「わかった。説明しなくていい。俺の頭ではさっぱりだ」

刹那は何か思案するような顔を浮かべているがどうしたのだろうか？

「織斑、オルコット、セイエイ、急降下と完全停止をやってみろ。

目標は地表から10センチだ」

「了解です。ではお先に」

千冬姉の指示の後すぐセシリアの姿がぐんぐんと小さくなっていく。

「上手いもんだなあ」

「彼女は代表候補生だ。あれ位造作もない」

「でも刹那だつて上手いじゃないか」

「…おまえより少し経験があるだけだ」

いつも通りのポーカーフェイスだがその声はどこか申し訳なさを含んでいる感じがした。

下を見るとセシリアもこちらを見ている。完全停止はクリアしたらしい。

「じゃあ次は俺が行くとするか」

「気を付ける」

「わかってるって」

背中 of 翼状の突起からロケットが噴射するイメージで急降下する。段々と地面が近くなつて…つてこれどうやって停まらうわぁ!?

ドゴオオオオオオン!!!

地上には着いた。墜落という形で。余りの恥ずかしさに俺のライフは既に0だ…。

顔を上げると刹那が緑色の粒子を放出しながら地表10センチの所で急停止する。その様子はさながら天使が舞い降りるかの様だつた…。

「さつさと起きろ。邪魔だ」

千冬姉からの厳しい言葉。この世界に神様はいないのか…?

刹那 Side

IS。改めて考えてみると俺たちの世界のMSとは違う発展を遂げた存在だ。

MSは人が乗り込む巨人であるのに対してISは人が装着するハイスペックなパワードスーツ。技術についてならMS以上だ。太陽炉搭載型を除けば火力や機動、防御などあらゆる面で凌駕する。擬似太陽炉非搭載型なら相手にならないだろう。

最も驚くべきはそれを開発したのはたった一人の女性ということだ。

『篠之乃束』。同じクラスの篠之乃篁の実姉であり今から十年前にISを開発した。

聞いた話では織斑先生と同級生とのことだから少なくとも十代前半であれだけのものを造り上げたのだ。

遙か未来を予見しその二百年後の世界でさえ追い付くことが出来ない技術　太陽炉やヴェーダ、ガンダムを開発したイオリア・シユヘンベルクとはまた別の意味で天才だろう。

だがこの二人の違いは…未来を予測する力か。

イオリアは来るべき対話を予測し人類を意志統一するために動いた。篠之乃束はこうなることを予測していたのかわからないがISを開発し姿を眩ませた。

その真意が全くわからない。

「織斑、オルコット、セイエイ、急降下と完全停止をやってみる。」

目標は地表から10センチだ」

織斑先生から指示が入る。考え事をし過ぎたか。

意気揚々とする織斑を見送るが…案の定墜落したか。俺も少しずつつエクシアの補助無しで動けるようにしてはいるが中々難しい。

織斑に続く形で俺も急降下姿勢に入った。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在に出来るようになったらだろ」

「は、はい」

一夏が左手を右腕に重ね意識を集中させて武装を展開する。

右手に現れたのは一本の近接ブレード 雪片式型。

白式の唯一の武装で自身のシールドエネルギーを代償にした一撃は相手を墜とせるほどの威力を誇る。そのエネルギー無効化能力はGNフィールドすら断ち切るだろう。現在最も警戒すべき武装だ。

だが何故武装がこれだけなのか。火器どころか盾すら無いのは製作者の意図か。白式は日本の研究機関が提供しているのだからデータ採取として様々な武装を積ませるはずだが…。

「流石だな、代表候補生。だが正面に出せるようにしろ。どこを狙うつもりだ」

「ですが、これは私がイメージするのに…」

「直せ。いいな」

「…はい」

「ではセイエイ。次はおまえだ。遠距離武装を両手に展開しろ」

また考え込んでしまったようだ。しかし両手となると…GNバズーカは両手持ちだがおそらく意味が違うので却下だ。となるとGNキャノンか。

「ふむ、こちら流石というべきか。武装選択、展開時間ともに申し分ない。ならオルコット。近接用武装を展開しろ」

「えっ、あ、はいっ」

心の中で文句を言っていたのか反応が遅かった。

セシリアはレーザーライフルを収納してショートブレードを展開しようとするが上手く形にならない。

「まだか？」

「すぐです…。ああもう！インターセプター！」

ヤケクソ気味に叫んで武装を形成する。彼女はかなり悔しそうな顔をしていた。

「…どれだけかかっている。実戦で相手に待ってもらうつもりか？」

「じ、実戦では接近させませんから大丈夫ですわ！！」

「ほう、初心者である織斑やセイエイに懐に飛び込まれあまつさえセイエイに敗れたのはどうしてだ？」

「あ、あれは、その…」

歯切れの悪い言葉の後こちらを睨んだ。そしてそれぞれにプライベート・チャンネルが送られてくる。

『あなた方のせいですわよ!』

理不尽だと思っただが…。

「時間だ。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

おそらく一夏が空けた穴を埋めておけということか。ふと一夏を見ると手伝ってほしいような目でこちらを見ている。まるで雨の中捨てられた子犬のように。セシリアと篝は既にいなかった。

「わかった。手伝おう…」

「すまん刹那…」

あれを断ったら罪悪感に見舞われそうだった…。

????? Side

「ふづん、こじがそうなんだ…」

その日の夜、学園の正面ゲート前に一人の少女がいた。

長い黒髪を高い位置でツイントールで纏めた少女はゲートを通り敷地内をずんずんと進んでいく。

「えーと、受付は…本校舎一階総合事務受付…どこよそれ」

上着から出したメモをポケットに突っ込み案内出来そうな人を探す。

一瞬ISを展開して探そうかと考えたが日本が誇る某K辞苑や大仏のような目をした某Tアナが持ち歩くタレント名鑑を上回る厚さの学園内重要規約書を思い出してやめた。

転入が済んでいないのに外国でISを展開したら外交問題に発展する恐れがある。それだけはやめてくれと情けない顔をして少女に懇願していた政府高官が少しも不憫だと思わないのがこの少女だった。

(…元気かな、あいつ)

力や年齢で偉そうにする男や大人が嫌いな彼女でも気になる男子はいる。今回日本に来た最大の理由でもあった。

「だから…でだな」

ふと聞こえてきた声に、『案内役発見!』と言わんばかりに反応し声のした方へ向かっていく。

「だからそのイメージがわからないんだよ。何だそのクイツて感じは」

「…クイツて感じだ」

「だあもうそれがわからないんだって。刹那は説明してくんねえし……って待ってって篤！」

向かった先にいたのは 再開を待ち望んだあいつ。

その姿を視界に捕えた時少女の鼓動はギアを上げたようにペースを速めたが、彼の隣にいる女の子、そして彼がその女の子の名前を呼び親しそうにしているのを知って彼女の感情は氷点下まで下がった。

それからすぐ受付は見つかった。

彼を目撃した場所のすぐ近くが本校舎だったからだ。

「では、これで転入手続きは終わりです。IS学園へようこそ、凰鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉が届かないほど鈴音は不機嫌だった。

「織斑一夏って何組ですか？」

「織斑くんは一組ね。凰さんは二組だからお隣よ。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。織斑先生の弟さんなだけあるわね。あと一組と言えばもう一人男子が入ったのよ」

最後普通なら聞き捨てならない言葉があったが鈴音はお構いなしに質問を続ける。

「二組のクラス代表ってもう決まっていますか？」

「決まっているわよ」

「誰ですか？」

「え、ええと…聞いてどうするの？」

事務員は鈴音の様子に疑問を感じて戸惑うように聞いた。

「クラス代表を譲ってもらおうかと思って」

そのにつこりとした笑顔のこめかみには血管がばっちり浮いていた。

刹那 Side

俺は今現状を把握出来ていない。わかっているのはここが寮の食堂であり目の前にはクラスの女子全員と他クラスの女子が数十名おり、何やら盛り上がっている。

それとは対称的に一夏が暗い顔をしていた。俺が女子にここに呼び出された時には既にこうなっていた。

「一夏、これは何だ…？」 「あれだ、俺のクラス代表就任パーティーだ…」

クラス代表就任パーティーだと？それは別に嫌なことでは無いはずだが…。

「長くなるけどクラス代表を決めるときにいざこざからセシリアと決闘する羽目になったんだけど、俺が敗けたのに何故かセシリアが

俺に譲ると言いだしてさ…。決闘にはなっただけど俺は元々なる気は無くして女子が推薦したのが事の始まりだったんだよ…」

よくはわからないがどうやら巻き込まれた感じなんだろう。…正直どうすればいいのかわからん。

「教えてくれ…。俺はどうすればいい…」

「…頑張れ」

「はいはい、新聞部です！話題の新生、織斑一夏さんと刹那・F・セイエイさんに特別インタビューに来ました〜！」

一夏を励ましていると眼鏡をかけた女子がやってきた。リボンから察するに二年生か。

「私は二年のまゆみかおのこ黛薫子。新聞部部长よ、よろしくね。はいこれ名刺」

渡された名刺を見るが…先に名前を言われてなければ読めない。少なくとも俺には。

「では早速織斑くん！クラス代表になった感想は!？」

「え〜と、まあ、何というか、頑張ります」

「うーん、もつといいコメント欲しかったな〜。颯爽登場、IS美少年!、とか」

そのセリフは痛いと思うが。あと何故か他人事ではないような気もする。

「じゃあ、適当に捏造しておくとして。セイエイくん、同じ男子クラスメイトとして一言!」

それでいいのか。本人の言葉云々より捏造そのものがいけないが、
だが何と答えたらいいものか。尋問（の訓練）は受けたことがある
がインタビューは初めてだ。
あいつに対して言っつてやれるのはさっきと同じ…。

「…頑張れとしか言えない」

「む。じゃあ、俺は草葉の蔭から応援してるぜ！、にしておこう」

俺はまだ死んでないぞ！？

言葉の捏造どころか生死が捏造されるとは！

「あははは！冗談だつて。そんなに驚かなくてもいいじゃない。そ
んじゃ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「あまりこういったのは得意ではないのですが仕方ないですわね。」

コホン、では何故今回私がクラス代表を辞退したかとm「長
くなりそうだからいいや。こちらで捏造しておくから」さ、最後まで
聞きなさい！」

ここの新聞部は情報工作員の養成組織か…？聞いておいて何一つ
真実を伝えようとしていないが学園は何をしているんだ…。

「じゃあ最後に専用機持ちで写真撮っちゃおう。セシリアちゃんと
織斑くんとセイエイくんそこに並んで」

黨に言われて三人で並ぶ。

（あ、あの後で一夏さんのツーショットいただけませんか？）

（ふむ…。今度織斑くんの情報くれるなら）

（交渉成立ですわ！！）

(毎度あり)

…セシリアが黛と何やら話していたが無視することによつ。邪推な気がする。

「じゃあ撮るよ。35×51÷24は？」

「え？えつと…2？」

「ブー、74・375でしたー」

「一夏、35×51は48にならんぞ…」

「いやだつてこの状況で言われたら普通…」

パシヤツ

「…何故全員入っている」

シヤッターが閉じる直前に女子全員が俺たちの周囲に集結していた。無論箒も。

「いいじゃんいいじゃん」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出としてさ」

そうは言つても写真ならいくらでも撮れるだろう。一応これは新聞部の取材用写真のはずだ。

…パーティーは十時過ぎまで続いた。非常に疲れたとだけ言っておこう。女子の体力はあそこまであるのか…？

ちなみにセシリアが一夏とツーショットを撮ろうとして他の女子と騒ぎになったのは言つまでもない。

一夏Side

翌日、何とかパーティーの疲労から回復し、席に着くなりクラスメイトに話し掛けられた。

「織斑くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期に？」

「そう、中国の代表候補生だつて」

このIS学園の転入はかなり厳しく、試験だけでなく国からの推薦も必要のはずだ。その情報源がどこかは気になるが中国か…。あいつ、どうしてるかな…。

「あら、私の存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

出ました我がクラスの代表候補生ことイギリスのセシリア・オルコット。

今日も腰に手を当て髪をもう片方の手で流す。
イギリス人の基本な^{ヘアシッキング}んだらうか。

「このクラスに来るわけではあるまい。騒ぐ必要は無い」

いつの間にか篝も近くにいた。俺の席から篝の席まで4mはあるはずだがどうやって来た？

「それよりも、来月はクラス対抗戦だろう」

「そうですね、一夏さん！是非一夏さんには勝ってもらわないと。ですからより実践的な訓練をするために、この私、セシリア・オルコットが相手を努めさせていただきますわ」

普通の生徒が訓練機を借りるのには申請、許可、整備に一日費やしてしまうから専用機を持っているセシリアや刹那にやってもらった方がいいだろう。

けど刹那は用事があるとか言ってたまにしか相手をしてくれないが何なんだろうな。まだ来てないようだけど…。

「男たるものなら勝ってみせろ一夏」

「一夏くんが勝つとクラス皆が幸せだよ！」

「フリーパスのためにも！」

そついや優勝クラスには学食デザート半年フリーパスが配られるらしい。

そつちが本心じゃないのか…？

「専用機持っているのはあと四組ぐらいだから楽勝だよ！」

「おっ」

「その情報、古いよ」
「」「……!？」」

どこか懐かしい声が聞こえたような気がするが…。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」

声の主…、教室の入り口で腕を組み片膝を立ててドアにもたれて
いる女子を見る。

「鈴……?おまえ、鈴か？」

そこにいたのは中学の時別れたっきりのあいつ…。

「そう、二組代表の中国代表候補生凰鈴音。今日は宣戦布告に来た
ってわけ」

小さな笑みを浮かべ、トレードマークのツインテールを揺らす俺
のセカンド幼なじみこと凰鈴音がそこにいた。

鳳鈴音、到来（後書き）

基本それぞれの原作の設定に沿って書いてますが、擬似太陽炉だけはWikipediaを参照にしても有毒のままなのかある程度改善されたのか分からないので多少オリジナル設定を含む可能性があります。ご了承ください。

もし何かあれば感想までお願いします。フリーなので。

再会。そして決別（前書き）

ほとんど原作と内容が一緒になってしまった…。
刹那が空気だ…。

再会。そして決別

—夏Side

「中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

そう言つてトレードマークのツインテールを軽く揺らした少女は一年ぶりに再会する鳳鈴音こと鈴だった。そしてこの状況で俺の口から出たのは…。

「何格好付けてるんだ？ すごい似合わないぞ」

「んなつ……！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

やっと普通に喋った。

さっきの気取った喋り方には軽く引いたぞ？

「おい」

「何よ！」

「どいてくれないか」

「っ、…悪いわね……つて男お！？」

おお、ノリツッコミか？ いや違うか。あれ？ 刹那のこと知らないのか？

「この学園の生徒なら俺のことを知っている筈だが」

「そついや言つてたわね…。もう一人ISが操縦出来る男が現れたつて。すっかり忘れていたわ……」

「刹那、こいつ今日転校してきたんだよ」

「そうか。一応世界中に通達されているのだがな」

忘れられるもんなのか？もう一人俺と同じ奴が現れたのだから忘れようにも忘れられないと思うが。

「おい」

「今度は何！」

バシンッ！

「SHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん…」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません…」

ビビリ100%でドアからどく鈴。何でかしらんが昔から千冬姉が苦手だよな。

「また後で来るからね！逃げないでよ一夏！！」

「さっさと行け」

「は、はい！！」

何で逃げなきゃいけないんだよ。でもまあ昔のまんまだな。

「ってかあいつ、代表候補生だったのか…。初耳だぞ」

「…一夏、今のは誰だ？えらく親しそうだったな？」

「い、一夏さん！？あの子とはどういう関係で！？」

「織斑くん知り合いなの！？」

バシバシバシンッ！

「席に着け、馬鹿ども」

質問が集中砲火したところで千冬姉の出席簿が火を噴いた。外野
だった刹那まで巻き込まれていた。
…俺のせいなんだろうな。

「おまえのせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みに入るなり開口一番文句を言われた。

というのも二人は授業中に山田先生と千冬姉に散在（教育的）指導
をくらっていたからだ。何で俺が言われなきゃいけないんだよ…。
千冬姉の授業を真面目に受けないのはまな板に麵棒、普段着装備で
ラスボスのダンジョンに挑むようなもんだ。ファ○通のやり込み企
画でもやらんぞそんな。ダンジョンの入り口にも辿り着けるか。

「取り敢えず話は飯食いながらも聞くから。刹那も行くこつぜ」
「ああ」

いつもの四人とクラスメイト数名を引き連れ食堂へ移動。券売機
で日替わりランチを購入した。箸はきつねうどんでセシリアは洋食
ランチ、刹那はカレーである。

「待ってたわよ一夏！」

ドーン！と戦隊ヒーローの登場の如くエフェクトを付け…ずに俺たちの前に立ちはだかるは鈴だった。

俺たちは悪の軍団ではないぞ、念の為。

手にはラーメンが鎮座しているトレーを持っている。

「伸びるぞ？」

「う、うるさいわね。あんたを待ってたんでしようが！もっと早く来なさいよ！」

レポートでもしろってのか。レポートと言えば昔あるモンスターの育成ゲームで捕まえようにもすぐレポートで逃げられた苦い思い出があるな。流石にあのボールは使うわけにはいかなかったしな…。

「何変な事考えてんのよ」

また心の中読まれた。刹那も言っていたが女つてのは読心術でも備えてんのか？女の嗜みとして。男からすればすげえ嫌だな…。

「一夏、事態が進展しないのだが」

つと、いかんいかん。まさか刹那にも読まれるとは。顔に出てるのか？

「にしても久しぶりだな。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。あんたこそどうなのよ」

「俺はずっと元気だぜ？皆勤賞ものだ」

「あー、ゴホンゴホン！」

「ンンッ！一夏さん、注文の品が出来ましてよ？」

おお、気付いてなかった。鈴との会話に夢中になっていたか。

食堂のおばちゃんから料理を受け取り、空いていた席に座る。

「いつ帰ってきたんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばかりしないでよ。あんたこそ、何IS使ってるのよ。びっくりしたじゃない」

無意識のうちにいくつも質問を投げ掛けていた。でも一年ぶりの再会なのでその空白期間が気になるのだ。

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」
「そうですね！まさか付き合ってるっしょるの！？」

二人がトゲのある声で聞いてくる。他のクラスメイトも興味津々とばかりに頷いていた。…刹那はやっぱりポーカーフェイスだが。

「べ、別に付き合ってる訳じゃ……」
「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」
「幼なじみ……？」

鈴が何故かこちらを睨んでいるが、篝の質問に答える。

「篝が引越したのが小四の終わりだろ？鈴はその後に転校してきたんだ。で、中二の終わりに国に戻ったんだよ。鈴、こっちが篝。前に話した小学校からの幼なじみで、俺が織斑先生と通っていた道場の娘だ」

「ふうん…、初めまして。これからよろしく」
「ああ。」ちら「そ」

そう言っただけ挨拶を交わす二人の間に火花が散ったように見えた。疲れからついには幻覚を見るようになってしまったのか？だとしたら今日は早く寝よう。日本人は働き過ぎとよく言われる。

「ンンツ！私のことを忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん？」

「…誰？」

「なつ！？私はイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！？まさか、ご存じないの!？」

「あたし、他の国には興味無いもん」

「なつ、なつ、なつ…！？わ、私はあなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたし勝つよ。悪いけど強いもん」

昔っからこうなんだよなこいつ。妙に確信じていてしかも嫌味のない言い方をする。素でこうなのだ。

箸は箸を止め、セシリアは拳をわなわなと震わせている。これ以上空気が悪くなる前に俺は話題を変えることにした。

「ま、まあ二人とも落ち着け。鈴、こいつが刹那。俺と同じISを扱える男子だ。」

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む」

「まあ、よろしく」

あんまり興味ないのか素っ気ない挨拶をする鈴。

「ねえ、一夏、あんたクラス代表なんだって？」

「成り行きでな……」

「ふーん……。ね、ねえ。あたしがISの操縦訓練付き合っただけよ
うか？」

「そりゃたすか『ダンッ！』」

「一夏に教えるのは私の役目だ。一夏に頼まれたからな」

「これは一組の問題ですわ。二組が出る幕はありませんわよ」

「あたしは一夏に聞いているの。あんたたちは黙ってて」

全員が全員俺の名前を強調するがどうしてだ？

「それもだけどき、一夏、今日は放課後予定空いてる？久しぶりに
どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとか」

「あそこ去年潰れたぞ。ていうか今日は刹那と模擬戦があるんだっ
た」

「そうだぞ。私との特訓もあるからな」

待て、それは初耳だぞ。勝手に人の予定を決めるな。

「そうですね。クラス対抗戦に向けて特訓が必要ですもの。専用機
持ちの私も参加させていただきますわ」

いや助かるけどさ、形だけでも俺に確認取ってくれよ。

「じゃあそれが終わったら行くから、空けといてね。じゃあね、一
夏！」

食べ終わった食器を片付けて食堂を出ていってしまふ。断ることも
できねえじゃねえか……。

「一夏、特訓が最優先だからな」

「私たちの有意義な時間も使っていることもお忘れなく」

こっちも断れねえ…。

刹那Side

模擬戦を終え夕食を済ました後、部屋でベッドに横になって疲れをとっていたが、隣の部屋が少々うるさい。

聞こえてくる声では箒と鳳が口論になっているようだが…。

鳳の第一印象ははっきり言って唯我独尊だ。箒も頑固なところがあるのでそれでぶつかっているのだろう。

とにかくこの部屋に聞こえてくる以上反対側の部屋にも聞こえているはずだから注意して問題を解決する必要がある。俺は自室を出て一夏の部屋に行こうとした。

一夏Side

パンツ！

いきなり頬をひっぱたかれた。何が何だかさっぱりわからない。ただわかるのはこいつ（鈴）が怒っていること。だけどどうして怒っているのかはわからない。

「最ッ低！女の子との約束を忘れるなんて、男の風上にも置けないヤツツ！犬に噛まれて死ね！！」

持ってきたポストンバックを手にとってすぐさま部屋を出ていってしまった。

さすがに男の風上にも置けないってのはカチンときたが…。

「風がすごい勢いで出てきたが…。何があつた？」

鈴が出ていった後に続く形で刹那が入ってきた。

取り敢えず俺は事の経緯を、鈴が箒に部屋を変われと言ってきたこと、鈴に昔交わした約束を憶えているかと聞かれて憶えている限りのことを話したのにいきなりひっぱたかれて罵声を投げ掛けられそして出ていったことを包み隠さず話した。

「約束の内容が本当は何かは知らんが、彼女にとってかなり大切なものではないのか？確かに彼女には多少自分勝手なところはあるが、いくらなんでも普通の約束事でそこまでは怒らないはずだ」

「じゃあその内容って何なんだよ」

「それは自分で確かめろ。この事はこのままにはいけない。俺が言えるのはここまでだ」

そう言って部屋を出ようとする刹那。ドアを閉じようとした時、思い出したかのように言った。

「言い忘れていたが、あまり騒がしくするな。隣人に迷惑だ」

バタンッ

…ごめん。箒も申し訳ないような顔してる。

にしても鈴が怒るほどの内容って何だ？

明日鈴に聞いてみるか。いや、無理か…。

刹那Side

この件の原因はおそらく一夏の誤解だろうが鳳もやり過ぎだと思う。だがこのままでは二人の関係は悪化したままだ。

しかし二人の問題に部外者の俺が関わる訳にはいかない。何とかいい方向に向いてくれるといいが…。

一夏Side

あれからしばらく経ち、5月となったが事態はあまりよろしくない。
何度か鈴と顔を合わせることがあったが露骨に顔を背けられ、日増しに不機嫌になってきている。聞こうにも地雷原の如く近寄れないのだ。

来週からクラス対抗戦が始まるのでアリーナの整備の都合上今日の特訓が最後だった。

そのクラス対抗戦の初戦の相手が鈴だった…。
何の因果かよりによって鈴とは…。今の状況を考えてリンチ確定だ。

今現在、ほぼいつものメンツ、箒、セシリア、刹那、俺で第三アリーナへ向かっていた。

「待っていたわよ、一夏！」

アリーナのピットに入った先にはなんと鈴がいた。
腕を組みふふんと不敵な笑みを浮かべているが、昨日まで怒り心頭だったがどういふ心境の変化だろうか。

「貴様、どうやってここに」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「あたしは一夏の関係者だから問題ないわ。むしろ部外者なのはあんたたちよ」

鈴の強気な姿勢に二人がキレかかっている。こ、怖え…。

「で、一夏、反省した？」

「反省も何も、おまえが今まで避けてたんだし自分が納得出来ずに謝れるか」

「なっ！？あんたまだわかってないの!？」

「説明してくれなきゃわかんねえだろうが!」

「せ、説明って…、したくないからこうして来てんでしょっが!」

なんじゃそりゃ。意味わかんねえよ。無理をしても流石にこの道理は引つ込まねえぞ。

「じゃあこうしましょう！クラス対抗戦、勝った方が敗けた方に何でも言うことを一つ聞かせられるってことでいいわね!？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらっからな!」

「せ、説明は…、その…」

「何だ、やめるのか?」

「だ、誰がやめるのよ!この馬鹿!朴念仁!」

「うるさい貧乳」

あっ、しまっ、やば。

ドゴオオオオンツ!!

鈴がISの部分展開で壁を殴り部屋が僅かに揺れた。うわぁ…、特殊合金の壁がへこんでる…。

「い、今は悪かった。すまん」

「今のは!？いつだってあんたが悪いのよ!!もういい、全力でぶちめしてあげる。首洗ってまっつてなさい」

パシユン…

鈴が部屋を出ていくと同時に静寂が部屋を支配する。やべえ、あいつの逆鱗に触れてしまった…。

「一夏、今のはおまえが悪い」

刹那にも説教される。いや、確かに最後のは俺が悪いけどさ…。参ったな…。勝敗に問わず俺が謝るのは確定だ…。

再会。そして決別（後書き）

次回、戦闘です。戦闘はほぼオリジナル展開で。
ようやくガンダムっぽくなる…。

断章 襲撃の予兆、動き出す闇（前書き）

すみません、前回の後書きで戦闘パートと言いましたが割り込ませていただきました。

断章 襲撃の予兆、動き出す闇

国内某所。薄暗い空間に一人の女性がいた。

カップを右手に持ちその中のコーヒーを楽しむ姿は太陽の光がほとんど注していない分幻想的な雰囲気醸し出していた。

「君のシナリオ通り、『人形』を向かわせたよ」

突如その閉鎖的な空間に一人の青年が入ってきた。女はそれを気にする事なく会話をする。

「そう、早かったわね。で、その『人形』はどうなの？」

「自立稼働プログラムが未完成でね、『オリジナル』よりも性能が劣化しているし特殊装備も使えない。でも単純な火力なら並みのI Sでは相手にならないね」

「あまりやり過ぎないで。まだ死人を出すわけにはいかないわ。今回の劇は」

「わかってているよ。出力は制限してある。あの『機関』も何とか改良出来たしね」

「そう、ならあの娘と協力して。『機関』が使えるようになったのなら今後の計画も大きく変わってくるわ」

「わかったよ。仰せのままに…」

青年が空間を出ていき、再び静寂が訪れる。

「利用価値はある…。使えるだけ使わせて貰いましょう」

女の独白は誰にも聞こえることなく空間の中に静かに消えていった…。

断章 襲撃の予兆、動き出す闇（後書き）

機体ばれるかな…。

剣の目覚め(前書き)

なんじゃこりゃー!!

各キャラSideの書き方を少々変更しました。

剣の目覚め

一夏Side

クラス対抗戦当日、第二アリーナ第一回戦。俺対鈴。
アリーナ中央で俺と鈴は向かい合うようにISを展開して試合開始の合図を待つ。

鈴の機体は中国製第三世代機『甲龍^{シエンロン}』。両肩のスパイク付き非固定浮遊装甲が特徴的で、手には大型の青龍刀『双天牙月』が二本柄を繋ぎ合体された状態で握られている。

「一夏、今謝れば少しは手加減してあげてもいいけど？」

「そんななんいらん。全力で来い」

「一応言っておくけど、シールドエネルギーを突破出来る攻撃力があれば絶対防御に関係なく本体にダメージを与えられる。意味わかってるわよね」

わかっている。それは事実で操縦者のみにダメージを与える装備は競技規約違反で禁止されているが、規約を守っている装備で『殺さない程度にいたぶる』ことは可能なのだ。

鈴の口振りから恐らく鈴はそれが可能なんだろう。

だがそれがどうした。だからと言って手加減してもらおう気はない。勝負はいつだって全力で挑むべきだ。

『試合を開始します』

ビッ！

合図とともに俺と鈴が動き、雪片式型と双天牙月がぶつかり合う。

「やるじゃない、初撃を防ぐなんて。でも…！」

鈴が双天牙月をバトンのように、角度を変えながら振り回してくる。

刃をさばくのはキツイ。なほ少し距離を取って…。

「甘い！」

甲龍の肩装甲が開き内部から現れた球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に『殴り』とばされた。

(な、んだ…!?)

「今のはジャブだからね」

牽制の後は本命と決まっている。やばい…!

ドンッ!

「ぐあっ…!」

再び見えない衝撃に殴られる。シールドバリアーを貫通して痛みが身体を襲う。エネルギーも結構消費した。これは、かなりまずい…!

刹那 Side

「何だあれは…？」

ピットでモニター見る筈が呟く。確かに俺もあれが何なのかかわからない。

いきなり現れた球体が光を発した瞬間、一夏が吹き飛ばされた。光学兵器ではない。だが実弾兵器としても発射後の硝煙やレールガン特有の放電もない。いや、構造的にありえない。

それに答えたのは隣にいたセシリアだった。

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力をかけ、砲身を形成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

空間圧を利用した兵器…。やはりこの世界の兵器は異常だ。いくら俺の世界とは別の発展を遂げたとはいえ、進歩の速度が違うし発展度合いが桁違いだ。ここまで発展して大きな戦争の一つも無かったのはある意味奇跡に近い。

(篠ノ乃東…。何が目的だ…)

セシリアの説明を聞きながら、刹那は頭の片隅で考えていた。

衝撃砲『龍砲』か…。鈴が戦闘中に言っていた名前を思い返しているがこいつはやばい。

砲弾どころか砲身まで見えないのはかなりきつい。しかもこいつは射角制限がほとんど無く、真上真下、果ては真後ろまで撃つてくる。直線射撃ではあるが鈴の能力が高い。

ハイパーセンサーに空間の歪みと大気の流れを探らせているが、これじゃ撃たれてからでなければわからない。

(どうにかして先手を…)

頭の中に浮かんでくるのは千冬姉から説明された白式の唯一の武装雪片式型の特性と刹那との模擬戦の後に刹那に聞いた射撃武器への対処方法だった。

『バリアー無効化攻撃』。その名も『零落白夜』。これが雪片式型の特長能力だ。

自身のシールドエネルギーを代償に相手のシールドバリアーを切り裂き、強制的に絶対防御を発動させ相手のシールドエネルギーを大幅に削るものだ。シールドバリアーのみならずエネルギー性質のものは何でも無効化するらしい。

使いどころを間違えたり外したりしたら自分が危なくなるという諸刃の剣。

勝つにはこれを使うしかない。だが近づこうにも衝撃砲で撃ち落

される。ここで刹那への質問が生きてくる。

『なあ、刹那ってどうやって射撃とか躲してんだ？』

『基本は銃身と砲口の角度で判断している。後は視線だ』

『視線？』

『人間は無意識のうちに目標とする部分を見る性質がある。つまり相手の視線を見れば何処を狙っているかがわかる』

『ふーん…』

あの時は目で追うのが精一杯だったから今の自分では無理だなと思っていたが違う。

昔筈とやっていた剣道でも相手の動きと視線を読むことが大切だと教えられていた。

一度やったことがあるからには出来ないことはない。

ハイパーセンサーは全方位を操縦者に見せる。だが正面の相手については自身の目で追ってしまうはずだ。つまりは視線で追ってしまふということ。人間が生まれながらもっている癖は簡単には直らない。

これは一種の賭けだ。だがここで攻めあぐねて下手にシールドエネルギーを消費するよりも突っ込んで攻めた方がいい。

作戦としては瞬間加速のチャージをしつつ砲撃を回避、完了したら砲撃を躲した瞬間に瞬間加速で一気に間合いを詰めて『零落白夜』で攻める。

鈴の目を見ながら機体を動かす。

やっぱりだ。

人間として（……………）の視界に入るうちは目で追っている。

そしてさっきまで視線があったところに砲撃が飛んでくるのをハイパーセンサーで感知する。

チャージ開始。完了まで…5、4、3、2、1、0。砲撃…
！今！！

ドンッ！

瞬時加速によって急激なGに襲われるも、ISの操縦者保護機能が意識がブラックアウトするのを防ぐ。

（あと少し…！）

鈴の顔が驚愕に染まる。

（貫った！）

『零落白夜』のエネルギー刃が鈴に届きそうになる。

ドゴオオオオンッ！！

「！？」
「」

…が、突如アリーナに衝撃が走ったことに驚き攻撃を中断されてしまった…。

刹那Side

突然衝撃が走つと思えば『何か』がアリーナのステージ中央に落下してきて地面に墜落し煙が上がる。

アリーナは天井が無いから照明が落ちたということはない。それにアリーナ全体は遮断シールドで覆われている。つまり落ちてきた『何か』はそれを突破してきたことになる。

未だ治まらない煙の中からオレンジ色の軌跡　　ビームが一夏たちに向かって放たれた。

二人はなんとか躲すが、俺はあの色のビームを知っている。まさか…？

再びビームが数発放たれ煙が晴れる。そこに現れた機体に俺は言葉を失った…。

胴体と頭部が一体化したようなボディ。

足の先端まで届く腕

胸部装甲の隙間から覗く大型ビームカノン

手というよりは爪ともいえるマニピレーター

背部より放出されている赤みがかったオレンジ色の粒子

カラーリングがバイオレットからメカニックグレーに、大きさが展開時のISサイズに変化しているものの、機体はかつてルイス・ハレヴィが駆った機体『レグナント』に酷似していた。

(何故あの機体がここにいる…!?)

俺と同じようにこの世界に跳ばされた存在がいる…!?

いや、今はそれどころではない。もしあの機体が俺の世界の同等の性能を持っていたら、…あの二人では確実に勝てない。

それにあのGN粒子、擬似太陽炉のものだ。オレンジ色ということは二度目の武力介入時使われていた無毒化されたもの。

…だが必ずしもそうとは限らない。もしどこからか流出したデータを基にこの世界の技術で再現したというのなら、有毒という可能性がある。

このままでは二人が危ない。刹那は急いでプライベート・チャネルを開いた。

『一夏、鳳、聞こえるか!?!』

『刹那!?!どうした!?!』

『今すぐ逃げろ!そいつはおまえたちがかなう相手ではない!』

『逃げろって…、こいつは遮断シールドを突破してきたのよ!?!ここで逃げたら観客席の人が!?!』

『なら、決してそっちから攻撃を仕掛けるな!回避に専念しろ!絶

対に当たるな！！』

有無を言わずチャネルを切る。観客席の人間は避難を開始している。

早くしなければ…！

刹那はピットを飛び出て織斑先生らがいるモニタールームへ向かった。

千冬Side

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？鳳さんも、聞いてますー！？」

真耶が大声でプライベート・チャネルで呼び掛ける。チャネルは声を発する必要が無いのだがそれほど真耶は焦っていた。

「山田先生、本人がやると言っているのだからやらせればいいだろう」

「織斑先生！何を呑気なことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲んで糖分を補給しろ」

「…あの、それ塩ですけど…」

手を止め自分がコーヒーに入れようとしたものを見る。そこには確かに『塩』と書かれていた。

「…何故塩があるんだ」

「さ、さあ…。あつ！織斑くんのが心配なんですわ！？やっぱり弟さんですか…ら…？？」

真耶は感じ取った。

あ、これまずいかも…。

千冬は黙ったままである。だがイヤな沈黙が流れていた。この部屋には千冬と真耶の二人しかいない。他の先生は避難誘導等に向かっていた。

「山田先生。これを飲むといい」

背後に般若の幻影を出しながらにっこりとした笑顔で真耶にコーヒーを押しつける。

「えっ、でも、それ確か塩が…」

「どうぞ」

「いや、その…」

「…どうぞ」

「い、いただきます…」

ついには押しつけられたコーヒー（微塩）。真耶は自分を責めつつ必死でこれをどう処理するか悩んだ。

「一気に飲むといい」

千冬のこの言葉は真耶にとって死刑宣告と同義だった。

「織斑先生！私にIS使用許可を！！」

部屋にセシリアが入ってきて出て出撃を求める。

「無理だな。これを見る」

そう言っただけ表示したのはアリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……。全てのハッチが封鎖……。あのISの所為ですよ!？」

「そうだ。今三年生の精鋭部隊がシステムクラックをしている。完了次第部隊を突入させる。だがおまえは部隊に入れないから安心しろ」

「なっ、どうして!？」

「おまえの機体は一对多向きだ。それに連携訓練は？ポジションは？味方の構成は？敵のレベルはどの位に想定してある？連続稼働時間」

「わ、わかりました!もう結構ですわ!！」

降参のポーズでセシリアが溜め息を吐きながらベンチに座る。後から続いた筈も戦力になれないことからベンチに座った。

「織斑先生!！」

今度は刹那が来た。千冬はセシリアたちと同じようにあしらおうとしたが止めた。

刹那の目が戦士の目であったからだ。それと同時に刹那があのISについて何か知っていることを見抜いた。

「オルコット、篠ノ乃、今すぐ退室しろ」

「どうして」

「今から話すのは国家機密に関わることだ。部外者は立ち去れ」

国家機密と言われて渋々退散する二人。二人は刹那が異世界から来たことを知らない。故に千冬はこのような処置を執った。

「さて、話して貰うぞ」

刹那 Side

刹那は部屋の奥で真耶がコーヒを嘔き出しているのを気にしつつ話します。

「あの二人を今すぐ退避させてくれ。あれは俺が駆逐する」

「理由は？」

「あの機体は…、あの機体が放出している粒子は毒性がある恐れがある」

千冬と真耶の二人の顔が驚きの顔に変化し、同時にモニターを見る。

確かにあのISは赤みがかったオレンジ色の粒子を放出していた。

「毒性とは何だ。」

「吸う分には問題ないが傷口や体内組織に直に侵入した場合細胞障害を引き起こす恐れがある」

「だったらセイエイくんも危ないんじゃない？」

「俺はあれに対して耐性を持っている。何ら問題はない」

かつて一度謀略で毒性に苦しむことがあったがイノベーターとして覚醒した結果克服した。

「あの二人には？」

「退避するように言ったが無理だった。だから回避に専念するように言った」

モニターで確認してみても確かに二人から攻撃を仕掛ける様子はない。どのみちシールドもハッチも封鎖されているので仕方ないことだった。

「ふむ…、確実にやれるのだな？」

「ああ」

「わかった。少し待ってる」

千冬は内線でどこかと話し始める。数分後、再びこちらを向いた。

「セイエイ、システム班によれば一番カタパルトのハッチのロックが最も速く解除出来るそうだ。そこから発進して二人を退避させ迎撃にあたれ」

「織斑先生！？ですが！！」

「こうする他あるまい。最も確実なのはこいつに任せることだ。セイエイ、事が済み次第詳しく聞かせてもらう。山田先生は管制を」
「礼を言う」

簡単に礼を述べ刹那は第一カタパルトへ走っていった。

千冬Side

千冬はその場で立ち尽くしている真耶に言う。

「山田先生、心配するのはわかるがあいつを信用してやれ。あの目は嘘を語ってはいなかった。ならあいつに任せるしかないんだ」

先ほどまでとは状況が違うのだ。本来ならハッチの解放さえ出来れば突入部隊を出し一夏と鈴の安全を確保出来る。ISを展開しているのだから大きな怪我をすることは無い。

だが今あの二人は現在進行形で毒に曝されているかもしれないのだ。一刻も早く二人を退避させたいがハッチは封じられており、また突入部隊を出すわけにはいかない。唯一対処出来るのは粒子の毒に対して耐性を持っているという刹那だけなのだ。

「…わかりました！」

無理矢理納得したように真耶が管制室に向かう。

一人モニタールームに残された千冬は歯を食い縛った。弟たち教える子の危機に何も出来ない自分に…。

刹那Side

カタパルト。公式試合や大会などで使われるIS専用の発進シス

テムである。

授業や個人訓練では通常出入口から入ってから展開することがほとんどなのであまり使われることはない。

仕組みはプロレマイオスに搭載されていたものと酷似しており、刹那はエクシアを展開してカタパルトに接続していた。

「ハッチはあと少しで解放されます。織斑さんと鳳さんには今連絡を入れました。二人が退避次第迎撃行動に入ってください」

管制室から山田先生が通信を入れる。その声は普段見せないほどしっかりしていた。

「セイエイくん…、必ず…帰ってきて下さい」

突如それが消え入りそうな、懇願するようなものになる。

彼女は心配してくれているのだ。俺を…。

「…了解した」

俺は『歪み』を駆逐する。俺のような存在を生まないためにも、分かり合うためにも…。

ソレスタルビーイングのガンダムマイスターとして、未来を切り開く…！

「ハッチ解放。カタパルト射出権限を刹那・F・セイエイに譲渡します」

「了解。ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ、^で出撃る！」

『剣の天使』が今、再び戦場に飛び立つ。

一夏Side

いきなり現れた正体不明のISが俺たちに襲い掛かってくる。全身装甲という見たことのないタイプだ。

こいつの撃ってくるビームはハイパーセンサーの簡易解析によればセシリアのスターライトmk?よりも出力が高い。直撃なら一発で装甲が破壊される。

だったら早く倒すべきなんだが刹那から仕掛けるなど言われた。あまり感情を表に出さない刹那があそこまで声を荒げて言うのは初めてだ。

それほどヤバイのだろうか。ということは刹那はこいつを知っている...?

見てみればこいつ、背中からエクシアのように粒子を出しているような...。エクシアのは緑色だがこいつのは赤みがあったオレンジ色。

同型ではないようだが無関係ではないよな...。

「あーもうっ、うざったいわね！」

鈴がビームを躲しながら愚痴をこぼす。

爪のような手から一気に5発も撃ってくるのだから仕方ない。

しかし、変な形をしているよ…。本当に人が入っているのだろうか。

(んっ？人…？)

改めて姿を確認する。

頭部は胴体に埋まっているというか首が動かしくそんな感じだ。ハイパーセンサーがあるとはいえ人間工学的に無理がある。肩の位置が高過ぎるし足の生え方も不自然だ。

「…なあ鈴、こいつ何か変じゃないか？」

「変ってどこが？」

「形的に人が入っているとは思えないんだよ。あと動きが妙に機械っぽいつていうか…」

「ISは機械よ。…でも確かに形がおかしいわね。けど人が操縦しなかったら動かないはず」

教科書にもそう書いてあるが、技術は進歩するものだ。もし公表されてないだけだったら…。

「そういえばあたしたちがこうやって会話している時は攻撃してこないわね。してくるのは武器を構えた時だけ…」

「特定の動作のみ反応する…。やっぱり無人機か…？」

そうこうしているうちに山田先生から通信が入った。

『織斑くん、鳳さん、今から第一カタパルトのハッチを解放します！迎撃部隊射出後すぐ戻って下さい！』

山田先生の言葉の後に第一カタパルトのハッチが解放され、一機

のISが飛び出して来る。操縦者は…。

「せ、刹那!？」

「一夏、鳳、退避しろ。こいつは俺がやる」

「げ、迎撃部隊つてあんた一人!? 先生は!？」

「こいつは俺にしかやれない。だから早く戻れ」

「何言つてんだよ! おまえ一人置いていけるか! 俺も戦つ!」

「死にたいのか？」

「!？」

刹那から放たれた凄味のある言葉に圧倒される。

目の前にいるのは俺たちが知っている学生としての刹那ではなく戦士としての刹那だった。

「…わかったよ。刹那、こいつ無人機かもしれない」

「なんだと？」

「いろいろと不自然なんだよ。形とか動きとか」

「…わかった。早く行け」「必ず帰ってこいよ!」

刹那の安全を祈りつつ、俺と鈴は退避した。

刹那Side

目の前の機体に注意を払いながら二人を送りつつ、鳳だけにプライベート・チャンネルを開いた。

『鳳、理解して欲しいのなら話し合え。まずはそこからだ』

『いきなり何を…』

『一夏とすれ違ったままでいいのか？』

『…！』

『あいつにも責があるがだからといって拒絶するな。失ったものは二度と返ってこない』

『…わかったわよ』

これで多少は改善すると思うが…今はこいつだ。

『マイスター刹那、ミスタ織斑の言う通り無人機のようにです。内部に生体反応がありません』

『そうか…』

『こちらで解析します。そのためあまりやり過ぎないよう』

「了解した。ガンダムエクシア、刹那・F・セイエイ、目標を駆逐する！」

GNソード改を構え突撃する。飛んできたビームを躲しながら斬り付けるが、シールドバリアーがかなり硬い。

すぐさまマニュアルに内蔵された五連装ビーム砲で反撃してきた。

『フアングではないのか…！？』

『無人故に自立稼働に限界があるのでは』

刹那の疑問にエクシアが答える。元の世界でも完全自立稼働式の機械など存在しなかった。

いくら性能のいいコンピューターを内蔵してもフアングのコントロールに必要な高度な並列思考と空間認識処理は無理だろう。

かつて戦ったイノベイドも特攻用の機体『ガガ』の制御に同じ数の生態端末を利用したぐらいだ。

フアングが使えないのなら気を付けるべきは胸の大型ビームカノンのみ。

「ならば！」

刹那はGNソード改を構えなおして再び突撃し、斬り付け、撃つていく。敵の攻撃を躲していく。

だが状況はあまり変化していかなかった。

というのもシールドバリアーが硬過ぎるのだ。擬似太陽炉からエネルギーが供給されるそれは一般的なシールドバリアーの出力を凌駕していた。

ならば威力の高い武器で攻めようにもその分エネルギーを消費する。

相手は擬似太陽炉だがこちらはリミッターがかかっているのだ。

擬似太陽炉とはいえ一般的な動力機関よりも高出力で長時間の使用が可能だ。粒子貯蔵タンクと同じようにリミッターの掛かった太陽炉を上回っているのは間違いない。

それに相手は機械。疲れることを知らない。刹那も今まで激戦を生き抜いてきたのだからこの程度で疲れはしないのだが長引けば不利になるのは間違いない。

ならば確実に攻撃を当て本体にダメージを与えるにはどうするか。刹那は決断する。

『エクシア、トランザムを使うぞ』

エネルギーの消費は激しいがトランザムの出力ならシールドバリアーを突破出来るかもしれない。

それに敵のシールドバリアーも元はGN粒子だ。GN粒子のフィールドは光学兵器と普通の実体武器に対して高い防御力を誇るが、粒子コーティングした実体武器には効果が薄いのだ。

エクシアが実体剣を多く持つのもそこに由来する。何らかの理由でGN粒子を使う敵と戦うことになった時の対策として。

『マイスター刹那、それはもしもの時の…』

『ヤツを落すにはこれしかない。彼らの未来を護るためにも、ここで死ぬ訳にはいかない』

『…わかりました。コアだけは破壊しないよう気を付けて下さい』
『了解した』

「トランザム!」

刹那が発動キーを叫ぶと同時に胸部装甲の球面状のパーツに『TRANS-AM』の文字が浮かび上がり機体が紅く輝きだす!

攻撃を躲し一気に懐に飛び込む。スペックが三倍に跳ね上がったその姿を追うことは至難の技だ。

その様子はさながら紅き閃光。

「うおおおおおつ!!」

シールドバリアーを突き破りGNブレイド二本を両腕に、GNビームサーベルを両足、腹に次々と突き刺していく。

大型ビームカノンが至近距離で放たれるが、紙一重で躲かれ虚しい抵抗に終わる。

「はあああああつ!!」

トドメにGNソード改が顔面に突き立てられる!

ドオオオオオンツ!!

機体は爆発を起こし残骸が落ちていく。

空に残るは刹那とエクシアの姿だけだった。

一夏Side

退避した後モニターで刹那の戦いを鈴と一緒に見ていた。

GNソード改の斬撃やビームを食らっても貫通出来ない敵のシールドバリアーには驚いた。

GNソード改の切断力の高さはシールドバリアーを簡単に切り裂くものだ。

それでもやれないのは刹那にとってもかなり苦しいものだろう。このままではジリ貧だ。あれを突破するにはどうしたら…。

そう思った矢先、エクシアが紅く輝きだし、瞬間加速に匹敵する速さで縦横無尽に動き出す。

「な、何よあれ!？」

鈴が驚くのも仕方ない。刹那の機動が明らかにおかしいのだ。

瞬間加速は音速を超えるほどの速度を出すか、無理に方向転換すればいくら操縦者保護機能があっても肋骨が骨折する恐れがある。だが刹那はそれとほぼ同等の速度で複雑な機動をしているのだ。身体中の骨が折れていてもおかしくない。

一気に距離を詰めてさっきまでろくに攻撃が通らなかったシールドバリアーをもともせず次々と剣を突き刺していく。

太いビームが眼前で放たれるもそれをも躲しGNソード改を突き立て、撃破した。

紅く光りだしてから三十秒にも満たない間にこれだけのことが起きた。

「……………」

思考が止まる。目の前の出来事にどうすることも出来なかった…。

鈴と二人で廊下を歩く。あの後事情聴取と身体検査が行われ、俺と鈴、刹那が呼び出された。

今回の事件については学園の許可なく他人に話すことを禁じられた。何でも情報が整理される前に混乱するのを避けるためらしい。

エクシアのあの現象と謎のISについても機密に触れるとか調査中として教えてくれなかった。身体検査も念のためとのこと。世の中ってのはいろいろと難しいのだ。

「…そっぴや試合、無効だつてな」

「そりゃあんな事が起きればね…」

あの試合は無効となった。仕方ないか。

「勝負の決着どうする？再試合は決まってるよ」

「別にどうでもいいわよ」「へ？何で？」

「いいつたらいいのよ！」

何でまた…？女の考えることはさっぱり読めん。

でもこっちはケジメをつけるべきことがある。

「鈴、何だ…、その、いろいろと悪かった。すまん」「ま、まああたしもムキになってたし…。いいわよ、もう」

「どうやら許してくれたようだ。もう誰かと別れたつきりになるのは御免だ。」

「そ、その、一夏。約束のことなんだけど…」

「あ。思い出した。確か…、『料理が上達したら毎日あたしの酢豚

食べてくれる?』だっけ。それで、上達したか?」

「そうだ。正確にはこんな内容だった。奢ってくれるって勘違いしていたんだ。」

「え、あ、その……」

鈴が顔を赤く染めしどろもどろになる。

「もしかして別の意味だったか? てつきりタダメシを食わせてくれるとばかり思っていたが」

「ち、違わないわよ!? ほら、料理って誰かに食べてもらったら上達するって言うじゃない!? だから、うん、そう!」

「そ、そうか。もしかしたら『毎日味噌汁を』とか『一緒の墓に入ってくれ』とかそんな話かもしれないと思ったけど深読みし過ぎたな」

「……………」

「鈴?」

「は、いや、そうじゃない!? あはははっ!」

ちょっと引いたが何か誤魔化そうとしている。けど本人が話したくないことを無理矢理聞くのはいけないからな。話題を変えよう。よう。

「そういえば鈴、こっちに戻ってきたということはまたお店やるのか?」

鈴の実家は中華料理店だった。昔はよく通ったもんだ。

「…その、お店はもうやらないんだ」

「へ？どうして」

「両親が離婚しちゃったから…。あたしが国に帰ったのも、そのせいなんだよね…」

…そうだったのか。知らなかったとはいえ、鈴のつらい記憶に触れてしまった。

けれど、どうして…。あんなに仲が良さそうだったのに。駄目だ、こんなことを聞いてはならない。一番つらいのは鈴自身なのだから。

「なあ、鈴」

「なに？」

「今度遊びに行こうぜ」

「そ、それってもしかしてデー」

「五反田も呼ぼうぜ。久しぶりに三人で集まるうぜ」

「……………」

明るくなったと思えば一気に不機嫌になった。ヒマラヤから日本海溝並みの急降下だ。…なんですか。

「行かない。…けど、あんたと二人つきりだったら行ってあげても

『一夏！』『一夏さん！』『…』

前から箒とセシリアが走ってきた。なんか焦ってる感じだけど。

「一夏！大丈夫なのか！？」

「お身体の方は！？」

「おう、大丈夫だ」

「そうか、それならいいが…」

どうやら心配させてしまったようだ。心配されるのは嬉しいがこ

「うちも心配させないようにしないとな…」

「なあ、篤とセシリアも今度遊びに行こうぜ。鈴といっしょにさ」「……結構だ（です）（よ）」「……」

むっ、どうしてだ？五反田と行かないというから女友達を誘ったというのに。篤とセシリアも何で呆れたような顔してんだ。

「まったくこいつは…」

「何も言えませんか…」

「相変わらずね…」

むっ、女心は複雑怪奇だ。秋の天候よりも読みづらいじゃないか。

三人とのやり取りは寮の部屋に着くまで続いた。その間に特訓のコーチを誰がやるかと揉めたのは言うまでもない…。

180

刹那Side

（何とかなつたか…）

二人のやり取りを刹那は後ろの物陰から聞いていた。あまり趣味がいいとは言えないが二人のことを心配していたのだから仕方ないだろう。

あの二人はただの意地のぶつかり合いだったのだ。一夏に話し合っつきっかけを与えたのだが自身の意地から事態は悪化した。

凰も凰で自身の意地から無意識のうちに拒絶していた。

一見すればただの喧嘩なのだが世界は似たような理由で戦いを起こしているのだ。

戦いが起こるきっかけというのは複雑であり単純でもある。民族、宗教、理念、資源……。一緒であろうとするのに些細な違いから拒絶しようとする。ある意味矛盾していると言えるよう。

極論すれば男と女もそう大した違いなどないのだ。

生物的にも人としても一緒にしようとするのだ。

だからこそ、分かり合える。

「ここにいたか」

刹那が振り向いた先には千冬がいた。

「弟が迷惑をかけるな」

「気にするな。あいつらには俺のようになってほしくないからな」

刹那は悲しげな顔して言った。

(やはりこいつは…)

千冬は感じ取った。刹那が長く戦いの人生を歩んできたことを。様々なものを失ってきたことを…。

「織斑先生、あの機体のことだが…」

「それについては今から案内する所で聞く。ついてこい」

「ここでは場所が悪いでなと付け加えてから千冬は歩いていく。刹那もそれに続いていった。」

学園地下50M。エレベーターで降りたそこには一般に知らされていない空間が広がっていた。

「今回は特例の関係者として連れてきたが、この存在とここで見聞きしたことは決して口外するな」

『LEVEL4』と書かれたセキュリティゲートをくぐりながら千冬が釘を刺す。

刹那がそんなことをするはずがないとは知っているが形だけでも言うておく必要があったからだ。

一本道を更に進んだ先には、ブック型端末を持った真耶がおり、例の機体の残骸が置かれた台があった。

「解析の結果、無人機でした」

「やはりな……」

真耶の報告に刹那が反応する。

「この世界に自立稼働システムは？俺の世界には存在しなかったが」「存在しない。研究が勧められているとの噂があったが机上の空論に等しい」

「機能中枢は焼き切れていましたが、未登録のコアとそれに正体不

明のパーツが回収されました」

残骸が乗った台とは別の台に球状と円筒状の物体が乗っていた。

球状の物体はISのコアである。全てがブラックボックスと化しており、ISの開発者である篠ノ乃東以外製造が不可能であるはずのそれは確かにISのコアだった。

もう一方の円筒状の物体。これは千冬たちには未知の物であるが刹那にとってはよく知る物だった。

擬似太陽炉。刹那の世界で使われてきた動力機関。

「円筒状のパーツはコアに繋がれる形で付いていたのですが…。セイエイくん、心当たりは」

説明しようにも太陽炉のことをバラさなくてはならない。それだけは避けたいのでどうすべきか刹那が考えているところにエクシアが割って入った。

『それはGNドライブ^{タウ}です』

『（エクシア…？）』

『（マイスター刹那、ここは私が）』

『何だソレは？』

『我々の世界で使われてきた動力機関です。一般的な動力機関よりも膨大なエネルギーを生み出す…』

嘘は言っていない。全て擬似太陽炉として本当のことだ。

『粒子を調べましたが毒性はありませんでした。粒子の色を含め恐

らく後期生産型だと思われます』

「初期型には毒性があったということか？」

『はい。後期型の粒子の色はオレンジですが初期型は紅です』

「でもエクシアのは緑色でしたよね？」

やはり聞かれた。ここはどう説明する…？

『私のはこれらのオリジナルです。ですが生産コストが非常に高く木星の超重力いう特殊な環境下しか製造出来ないことから、安価で地球でも製造可能なものが造られました』

「つまりこれがそうだと」

『そうです。私はソレそのものがコアとなっているのでこうして活動していますが…。何故これがここにあるのかは解りません。恐らくコアに機体制御を、GNドライブをエネルギー源として使用していたのだと思われます』

何とか誤魔化せたか…。だが誰がこれを造り上げた？

「あの機体については？」

「あの機体は、俺の世界のものだ。だがこれもどうしてここにあるは解らない」

「セイエイくんと同じ世界から来た人がいるということですか？」

「あの機体はかなり特殊な機体だった。今回ののはかなり劣化したものらしいが簡単に造れるものではない」

「経緯を含め全てが謎か…。警戒が必要だな」

「GNドライブについては破棄してくれ。解析して製造しようとするな。争いの火種となりかねない…」

「だが、対抗策を講じるには必要だ」

「…解析だけだ。データは学園内で信用出来る人物のみ保管してくれ。学園外に持ち出すな」

まずはここで話を打ち切る。これ以上長引かせるといういると怪しまれかねない。

「わかった。次はおまえがあの時使った現象、あれについて説明して欲しいのだが」

トランザムのことか。あれについてはあの時使う他無かった。

「あれはトランザムシステムだ」

「トランザムシステム…？」

「機体の性能を一時的に引き上げるシステムだ。その分エネルギー消費も激しいし時間制限もある。それに操縦者への反動も大きく使用後は機体の性能が一時的に下がる」

この世界の人間では使いこなせる者はそうそういないはずだ。

「諸刃の剣か…。おまえは大丈夫なのか？」

「身体がもう慣れてる。MSに乗っていればGへの耐性は自然と身に付く」

本当はガンダムマイスターとしての訓練を受けトランザムを何回も使ってきたからなのだが。

「そうか…。この機能は今後非常時以外使うな。委員会への説明が面倒だからな。話はここまでだ。もう寮に帰っていいぞ。ああ、今後のための処置としておまえを生徒会に所属させることになった。補習も大分済んだからな。明日、放課後に挨拶に行け」

恐らく監視の意味合いを兼ねているだろうが…。学園上層部の関

係者に会う機会だな。

そう考えながら刹那は誰にも見られないよう寮に帰った。

だがその生徒会の長の恐ろしさを、刹那は知らなかった…。

剣の目覚め（後書き）

次回、生徒会登場！刹那の運命は！？フラグはどうするか！？

設定に無人機の設定を追加しました。

生徒会（前書き）

受験が一段落し何とか投稿できたけど短い…。

楯無さんが真面目に近いキャラになってしまったよつな…（恐）

生徒会

刹那 Side

翌日、前日に襲撃があったが関係者全員が口を閉ざしているし学園側からも現在調査中との知らせがあり、様々な憶測が飛びかっちはいるがそれほど騒ぎにはなっていない。

そして今日から俺は特別処置として生徒会に所属することになった。前にも言ったが『俺の世界』関連についての対処と俺自身の監視が主な目的だろう。

今日の放課後、その生徒会と顔合わせをすることになった。いくら俺が所属する先とはいえ警戒するに越したことはない。そのためハッキングは出来ないが聴き込みによる調査だけはさせてもらった。

…結果は芳しくない。同級生の誰もが生徒会の人間を知らないのだ。上級生に聞くこうにも何故か近寄ってはいけないような気がする。本能的に。男として。

では教師に聞くしかないのだが答えは皆苦笑いで『頑張れ』の一言だった。…それでいいのか教師。
一応悪い人間ではなくかなりのやり手であるらしい。

情報はそれだけ。これらの情報を鵜呑みには出来ないがそれでも頼らなくてはならない。

そして今現在、校内案内板で道順を確認し生徒会室に向かったが、問題が発生した。

(つけられているな…)

教室を出て暫く歩いたところから背後に誰かの気配を感じる。恐らく同一人物…。

何度か気付かれないよう後ろを見たが不審な人影はない。

何が目的かはわからないがこのまま捨て置くわけにはいかない。

廊下を曲がって階段を上がり本来の道順のフロアよりも上の階へ上がる階段の壁に気配を殺して隠れる。

そして追跡者が階段を上がり切ったところに跳躍して背後を取り、一気に取り押さえようと距離を詰めようとするが…。

ヒュッ…

(なっ…!?)

追跡者がいきなりこちらに振り向き、先ほどまで俺の頭があつた位置をその手に握られたナニカが通り過ぎた。

間一髪回避したが反応速度が速過ぎる。プロか…!

「も、いきなり女の子を取り押さえようとするのは男の子のすることじゃないよ」

追跡者の正体は水色の髪が特徴的なりボンから二年生とおぼしき女生徒。

だが油断は出来ん…！

「そんなに警戒しないでよ。ちょっとしたお茶目なおねーさん傷付いちゃうわ」

そう話す女子生徒の手には『ドッキリ』と書かれた扇子。あれがさっきの得物か？

「何が目的だ…」

「何が目的だと聞かれたら、答えてあげるのが世の情け。まあただの実力試しよ。刹那・F・セイエイくん」

実力試しだと？何者だ？

「私はこの学園の生徒会長、更識楯無。君をお迎えがてらちょっとちよっかいを出してみたり？」

何故に半疑問系なのだろうか。それにしても生徒会長か。もしこれが真実ならば『やり手』というのは…。

「『裏』の人間か…」

「そういうこと。詳しくは生徒会室で話すわ」

ついてきてと言って前を進んでいく更識楯無とやら。信用したわけではないがついていくほかあるまい。俺は少し間を空けて言われるがままについていった。

「ここが生徒会室よ」

ついていった先には重厚な一枚のドア。プレートにはしっかりと『生徒会室』と刻まれており、道順も校内案内板で確認したものと同じものだった。

流石にここまで来たのなら信憑性は高い。もし仮にこの人物が生徒会の人間でなかったとしてもわざわざ連れていく理由がないし自身の首を締める行為に等しい。

ドアをくぐると部屋の中央に設置された大型のテーブルにどこかで見たことのある女子生徒が突っ伏して居眠りしていた。

「だ…」

「だ？」

「弾幕濃いよお、何やってんの」

寝言だろうが本当に何してるんだ。

「あの娘は知ってるだろうけど、布仏本音。君のクラスメイトね」

やはりか。こんなことを言うのは彼女以外ありえない。

「彼女は生徒会のメンバーなのか？」

「そうよ。この娘の姉と一緒にこの生徒会に所属しているの」

姉がいたのか。だが彼女の姉となるとどんな人物か…。

考えているうちにドアが開き眼鏡を掛けた三年生とおぼしき女子生徒が入ってきた。

「遅くなりましたお嬢様。あら？そちらの方が今日からここに所属する…」

「そう。だから挨拶しなさい虚ちゃん」

「失礼しました。私は布仏虚。妹の本音共々お嬢様にお仕えしている者です」

「お嬢様はやめてよ」

「失礼しました。つい癖で」

妹とは大違いでかなりしっかりしているようだ。

しかし『お嬢様』とはやはりこの二人も『裏』の関係者か…。

「本音、起きなさい」

「うっ…、お父さん…それ以上新しいお義父さんをぶつのはやめて…」

どんな夢を見ている！？実話か？実話なのか！？

「我が家は安泰ですから気にしないでね？本音、いい加減にしなさい『ゴチイツ！』」

姉はにっこりと笑いながらも手加減なしの拳骨を妹の頭に落とす。

「みぎやっ！？…あっ、せっちーだ〜」

妹…布仏本音は突然の打撃にも関わらずこちらに反応した。…本当に『裏』の関係者だろうか。

「本音ちゃんは自己紹介いらなからつと…。私たち三人が生徒会の全メンバーね」

「意外と少ないな」

「私たちは『裏』、…つまり『暗部』の人間だからね。私は更識家当主第十七代楯無。更識家は『対暗部のための暗部』の家系で布仏家は代々更識家に仕えてきた家系よ。だからそれほど数がいるわけじゃないわ」

対暗部のための家系…。そのような家系が存在し年端もたたない彼女たちが当主や付き人などという位置にいるとは…。

「そんなに暗い顔をしないで。おねーさんいじめたくなってくるから」

「……………」

「冗談よ」

何というか、やり手というより食えない人だな…。

「とにかく、君にはこの生徒会に所属してもらうからね。とは言っても非常時以外は特に書類仕事してもらうわけではないし、今まで通り一夏くんを鍛えてくれればいいわ」

「世界各国または独自の暗部から彼を守るためか」

「そういうこと。一応彼らには生徒会のことを含め秘密にしておいてね。その方が動きやすいし何より後々面白くなりそうだから」

どこまでが本気でどこまでが冗談かわからん…。ある意味一番むいている人間かもしれん。

だが俺の監視はどうなる？

「上層部はそれで納得するのか？」

「心配ご無用！これは上層部からの指示でもあるわ」

上層部からの指示か…。どうやらこの学園もいろいろと『複雑』

であるようだな。

ここはこの世界で最強の存在であるISを扱う学園だ。ならば暗部が存在してもおかしくないのか…。

「じゃあ一通り挨拶も済んだことだし一度お茶にしましょうか。虚ちゃんお茶入れてちょうだい。本音ちゃんはお菓子を」

「かしこまりました」

「りょくかい。今の私はすぐ出来る子」

俺の前でテキパキと用意されていく紅茶。菓子は…布仏本音の動き通りものすごく用意が遅い。

「ではいただきましょう。刹那くん、いつまでそこに立ってるの？大丈夫よ、別に自白剤とか入ってないから」

さらりと怖いことを言うな。でも言われても仕方ないことか。

椅子に腰掛け前に出された紅茶を一口口に運ぶ。

紅茶とかは詳しくはないがいい茶葉であり淹れ方も上手いのは間違いないかった。

「時に刹那くん、君には好きな娘はいるの？」

突然の質問の内容に紅茶を嘔きそうになったが何とか耐えた。

「…何故いきなりそんな話になる」

「おねーさんたちはこういう話には興味津津なのさ。知らないの？君と一夏くんにはファンクラブが出来ていることを」

…初耳だ。俺たちが珍しいというのは重々理解しているがどうし

てファンクラブなんかができるのか。

だが好きな人と言われるとマリナは同じ未来を目指す者であり、フェルトはCBの大切な仲間であって異性として意識していた訳ではない。

ロックオン（弟）によく鈍感だと言われたがそんなつもりはないのだがな。

「特にいないしそのような話には無縁だった」

「…刹那くんって案外鈍いのね。天然な分厄介だわ…」

むっ、またも言われたか。どうしてだろうか。

「どうしてつてもねえ…」

「無自覚ほど怖いものはありませんね…」

「それがせつちークオリティ」

散々な言われようだ。インベイターとして人の感情の動きには機敏のほずなんだが。

「この話はここでお終い。あつ、勿論一夏くんには秘密にしておいてね」

やはり食えんなこの人は。そう思いつつ紅茶を再び口に運ぶ。

俺がこの部屋から出たのは夕食の時間間際だった。

生徒会（後書き）

次回時系列的に原作二巻に入りますがシャルとラウラ出せたらいいなあ…。

弾の登場とか鈴との模擬戦とかやりたいし…。

第一幕の役者は揃う（前書き）

原作二巻に入りました！
でも冒頭までですが…。

今話は少しゲストが。
まあ例え的な役割ですが。

受験の結果次第で次の更新が遅れるかもしれません…。

第一幕の役者は揃う

三人称 Side

「刹那、あんたちよつとあたしと勝負しなさい」

六月の最初の土曜、食堂で昼食を摂っていた刹那に鈴がいきなり模擬戦を申し込んだ。

ちなみにクラス対抗戦以来刹那は鈴に名前で呼ぶことを許されていない。

そして今の事の発端は一夏が鈴と話していて『そっぴや鈴って刹那と戦ったことないよな』と言い、鈴が『じゃあやるかな』と答えただけなのだが。

「ホントにやるのかよ鈴」

「言い出しっぺはあんたでしょ一夏。それにあたしも一遍やってみたかったのよね」

「でも刹那の実力は知ってるだろ？それにこの前のアレ使われたら……」
「だっ、だったら使われる前に倒せばいいじゃない！」

刹那本人を無視して会話が繰り広げられていく。

確かに刹那は今まで鈴と戦ったことは無い。箒とセシリアは刹那が一夏の模擬戦の相手をするようになって以来ごくたまにしているが全て刹那が勝っている。

取り敢えず刹那は模擬戦の返事とアレことトランザムシステムについての事情を話すことにした。

「模擬戦については構わない。それにアレは使わないから安心しろ」
「使わないって…、どうして」

「アレは人体と機体に負担がかかるからな。よほどの事がない限り使うことはない」

刹那としても事情を知る学園側としてもトランザムシステムのこととは黙っておきたかった。

この世界ではオーバーテクノロジーであるし機体や人体への負担が大きい。ましてや過ぎたる力は禍を呼びかねんだ。

「…大丈夫なのか？」

「少なくとも俺自身は問題ない」

「ふーん…。じゃあご飯終わって15時からね」

鈴は自分が食べ終えて話をつけるとすたころと食堂を出ていってしまう。

その辺のところは転入当初から変わりなかった。

（鈴音との模擬戦、やはり厄介なのは衝撃砲か。早めに対処する必要があるな…。エクシアの新装備も試してみるか）

刹那はカレーを食べながら考える。別にカレーが好物という訳ではないが食堂のカレーはお気に入りだった。

昼食の後食休みを済ませてピットに入り、空中投影パネルで新武装のデータを確認しつつ実際に展開する。

『いかがですかマイスター刹那』
『問題ない。IS相手に対してはこれがベストだろう』

一通りチェックをすまして刹那はアリーナへと入った。

「じゃあ、今から鈴対刹那の模擬戦を開始するな。始め！」

飛び上がった刹那はいつもより細長いGNシールドを斜めに構えつつライフルを撃ち横へスライドしていく。

GNシールドを斜めに構えたのは衝撃砲を防いだ時に吹き飛ばされるのを避けるためだ。

「ちょこまかと…！」

それに対し鈴は衝撃砲で牽制して双天牙月で斬り掛かり、GNソード改で防がれるもののクラス対抗戦でもやったように高速で振り回して連続攻撃を仕掛けた。

（離れれば衝撃砲、近付けば双天牙月による連続攻撃。このままでは埒があかない…。なら！）

右手のGNソード改と左手のGNブレイドLで斬撃をいなして隙を見て斬り付け、距離をとる。

GNブレイドLを腰にしまうと左腕のGNシールドが前方へスライドする。

そして衝撃砲を躲して最大戦速で一気に鈴に突撃した。

衝撃砲は一度撃つと次弾発射までにタイムラグが発生する。それ

を補うために鈴は左右交互に撃つのだが刹那はそれを持ち前の経験による勘で避けている。

刹那の突撃に鈴は双天牙月を振りかぶってカウンターを放とうとするが、それよりも速く刹那は双天牙月を持つ鈴の右腕に自身の左腕を突き出した。

「クラッシャー!!!」

刹那が叫ぶと同時にGNシールドの先端が二つに割れクワガタの鋏のように鈴の右腕を掴む。

「なっ!?!」

このGNシールドは正式名称を『GNシールドtypeC/Ec』

エクシアがキュリオスのGNシールドを基に開発したものだ。

内部のニードルやシザースとしての機能を無くし敵機の捕獲、クラッシャーによる武器破壊などに特化したクローとなる対IS用装備である。

外見はエクシアのGNシールドに近いのでエクシア本来のGNシールドを知る者にとっては暗器のようなものだ。

クローはそのまま右腕の装甲を締め揚げシールドエネルギーを削っていく。

そして間髪入れず右手で腰のGNビームサーベルを抜き、最大とまではいかないが高出力でビームを展開して刹那を引き剥がそうとしていた左肩の衝撃砲に突き立てた。

シールドバリアーを貫かれ深々と突き刺された衝撃砲は爆発を起こして破壊される。

「離れなさいっての！」

残った右肩の衝撃砲の直撃を受けて刹那は下がる。直撃を受けたにも関わらず被弾箇所が大して変形していないのは粒子コーティング済みのEカーボン装甲のお陰だろう。

「ちよつと、何てことしてくれるのよ！？担当者に怒られるのはあたましなんだからね!？」

鈴が顔を真っ赤にして怒ってくるのに、少しだけ申し訳ない気持ちになりそうになるが戦いでは相手の攻撃手段を奪うのは常識だった。

戦場で手加減する者などいない。油断すれば死ぬ。

例え競技という名目でもISは兵器なのだ。絶対死なないなんてことはあり得ない。

力を振るう者としての自覚を持たせるために、刹那は相手が誰であろうと一切手を抜かないのだ。

怒り心頭の鈴に構わず刹那はGNソード改で一気に攻め立てる。三分後、鈴のシールドエネルギーが0となり刹那の勝利となった。

模擬戦の後、ピットから出て来た鈴は俯いていた。
刹那も流石にやり過ぎたかと思うほどだ。

「…すまない、やり過ぎた…」

「別にいいわよ？」

「は？」

構わないだと？彼女は落ち込んでいるのではなかったのか？刹那はそう思わずにいらなかった。

「あそこまでやられれば清々しいわ。逆に手加減される方があたしにとっては気に食わないわね」

そう言っただけで上げられた彼女の顔は満ち足りたものだった。

代表候補生とだけあって打たれ強いようだ。ある程度は覚悟はあるようだ。刹那は感心する。

「でも…」

「ん？」

「あれ弁償してもらおうからね？」

すごくいい笑顔で鈴が言う。それとこれとは話が違つたようだ。

その日から一週間刹那は鈴に食後にデザートを奢ることになったとわ。

模擬戦の翌日の日曜、刹那は街中にいた。目的は夏の私服を買うためだ。

別世界の人間である刹那の外出には学園の許可が必要だったがすんなりといけたのは多少なりとも信用されていることの表れか。

元々刹那は西アジアの出身なので暑いことには慣れていないが日本特有のジメジメとした夏には慣れていなかった。

砂漠や乾燥地帯は空気中や地中の水分が少ないのでカラッとしていゝる。なのでその地域に住む人々は強い日差しによる体温の上昇を防ぐために今ある刹那の私服やガラベイヤなどの長袖の服を着るのだ。日本でそんな服を着れば自殺行為もいいところである。

一週間鈴にデザートを奢ることになった刹那だが学園から支給された生活費は特に買うものなどなく殆ど手を付けていなかった。ので財政的に問題なかった。

駅と一体化しているショッピングモール『レゾナンス』の男性服売場で、柄無しの紺やブラックといったシックなカラーの半袖のシャツやパーカー、夏用のジーンズなど簡素な服を購入。

普通なら柄や色合いなどを考えて買うので自然と長くなってしまゝうが刹那はあまりそういうのを考えずシンプルなものを好む。

家具も必要最低限しか用意しない無駄なものは省く性格の刹那らしさが出ているが言い換えればただの無頓着だ。

事実元の世界では刹那の私服の一部はそれを見兼ねたスメラギ・李・ノリエガがコーディネートしていた。

売場を出る頃には正午を回り昼時だった。元々学園を出る時間が遅かったので当たり前なのだが。

売店でホットドッグとコーヒーを買ってベンチに座って食べる。

(やはり表向きは平和なんだな…)

目の前に広がるのは家族やカップルといった人々が買い物をして楽しむ光景。だがその中でも女尊男卑の風潮があるのだ。

一夏から聞いた話では見ず知らずの女性から命令されることがあるという。

下手に拒絶すれば暴力を振るったとして警察を呼ばれることもあるそうだ。

『雄二、次行こう』

『男とは…、無力だ…』

…あれは気にしないでおこう。あれは少女が青年を好いているがちょっと強引なだけだと無理矢理自分を納得させるように心の中で言い聞かせた。

『誰が貧乳ですってええええつ!?!』

『みつ、美波! 肋骨が当たってる…ってその間接はそつちに曲がらなあああああつ!! 僕の体が次世代型人間にいいいいつ!?!』

あれは青年が悪い。刹那だけでなく周囲の人間もそう思ったが少女もやり過ぎているのにただならぬ殺気を放っているので誰も関わろうとしなかった。

気を取り直して思考を再開する。女尊男卑の風潮の原因は間違はなくISとその開発者篠ノ乃束。

だがその目的がわからない。関わりがあったという一夏や織斑先生、篝に人物像を尋ねたが何を考えているか分からないとの答えだ。

特定の人物としか関わろうとせず興味の無い人間はあからさまに拒絶するという人として問題のある性格らしいが。

篝にいたっては話したくないとのこと。

姉妹の間で何があったのかは一夏も知らないらしい。

もしこのような風潮を望んだのなら姿を暗ます必要はない。

科学者として一番考えられるのは自己満足か…。

姿を暗ましたのは開発者として拘束されるのを避けるためだとすれば辻褄が合う。

何にしる真実は本人にしか分からないのだが世界中の国家が総力を挙げて搜索している行方不明者に会えるものなのか…。

「あれ？刹那じゃん」

思考を止めて振り向くと赤みがかった茶髪をバンダナで纏めた青年を連れた一夏がいた。

「何してんだ？」

「買い物に出ている今昼食を済ませたところだ」

「一夏、こいつ知り合いなのか？」

「ああ、俺と同じISを操縦出来る男子でクラスメイトの刹那だ」

「刹那・F・セイエイだ」

「俺はこいつ（一夏）の中学時代のダチの五反田弾だ。しかしお前もあのヘヴンの住人か…」

弾が何を言っているのか分からず首を傾げる刹那だったが、一夏の説明でようやく納得した。

「だがあれは中々堪えるが…」

「そうなんだよな…」

「チクシヨウ！！勝ち組の自慢かそれは！？」

自慢でも何でもなくただ本心から言ったのに過ぎないのだが二人は思う。

「いいか弾、際どいところが見えてしまい相手もそれに気付いた時の気まずさはとてつもなくつらいぞ？」

実感籠もった声で一夏が弾を諭す。

「それにISの訓練は死ねるからな？」

「…すまん」

弾も一夏と刹那の精神及び肉体的疲労を感じ取ったのか謝った。別に刹那は肉体的疲労は殆ど無いが。

「刹那はこれからどうするんだ？」

「特にすることも無いからな。このまま帰るつもりだ」

「なら俺達と一緒にゲーセン行かないか」

「ゲーセン？」

「…お前、まさかゲーセン知らねえのか？」

弾があり得ないという顔で聞いてくる。

ゲームをする娯楽施設であり、正しくは『ゲームセンター』という名称であることぐらいしか知らないが行ったこともないしガンダム

マイスターとしてのが最優先だった。

「そういふのとは無縁だったからな」

「っ、すまん…」

「？」

一夏は前に聞いた刹那の過去の一部を思い出し申し訳なさそうに謝ったが事情を知らない弾は不思議そうに見ていた。

「気にするな。知ってはいたが行ったことがないだけだ」

「そっか、なら行こうぜ」「ああ」

断る理由もないし相手の好意を無駄にするわけにはいかないので、誘いに乗ることにしたのだった。

その日、近くのゲーセンで刹那がガンシューティングやレーシングゲームでハイスコアを更新しまくり生ける伝説と化したらしい。

学園に戻って荷物を片付けたら刹那は一夏と一緒に食堂へと向かった。

筈は事件後部屋を移された。年頃の男女が同じ部屋というのは本人達にも世間的にもいろいろと問題があるのだが少なくとも一夏が間違いを起こす勇気があるはずが無くそれ以前に女心に気付くことは一切無いが。

「ねえ、あの噂聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、なにになに？」

「織斑君とセイエイ君の話。今月末の学年別トーナメントで……」

「ええっ！？マジ！？」

「本気と書いてマジ！」

食堂に入った二人の目に入ったのは女子が固まって何やら話している様子だった。

だが二人にそれを盗み聞きしたり会話に参加する気はさらさら無いので特に気にもかけず注文をとって席に着く。

「来たわね刹那、今回はティラミスを奢りなさい」

「わかった……」

「……災難だな刹那」

席に着くなり近くにいた鈴に賠償請求される。

刹那本人も仕方ないと腹くくっているので気にしていない。

「あつ！織斑君とセイエイ君だ！」

「本当だ！」

「ねえっ、あの噂ってモゴオツ！？」

そこへいきなり固まっていた女子の一部が刹那達の元へ走ってきたが一人が喋りだした途端口を塞がれて拘束された。

「こらっ！秘密だつて言ったでしょ！？」

「いやだつて本人達だし……」

小声でボソボソと話しているが二人にはさっきの『噂』とやらが気になっていた。

「噂って？」

「う、うん！？何のことかな！？」

「えっと、ほら！人の噂も三六五日って言うでしょ！？？」

「な、何言ってるの！四十九日だってば！！」

「七十五日だ……」

誤魔化す以前にあまりにも常識の間違えように刹那は静かに突っ込んでいた。

ちなみに四十九日とは人の死後四十九日目に執り行われる法要のことである。

「ほ、本当に何でもないから！じゃーねー！！」

「何だったんだ……？」

「さあな……」

人の噂も七十五日。そんなに待つ気はないがいつか無くなるだろうと食事を再開した二人だった。

そのまた翌日の月曜、この日の朝はいつもよりも騒がしかった。

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？ハツキのってデザインだけって感じじゃない。私は性能的に見てミューレイのスムーズモデルがいいと思うけど」

「でも高いでしょあれ」

個人でISスーツを用意するためにカタログを片手にあれやこれやと意見交換していた。

授業では学園指定の物を使っていたのだがISというのは人それぞれ仕様に変わるので早いうちから個別のスタイルを確立するためである。

ISスーツは皮下神経の電位差を感知することでISに操縦者の動きをダイレクトに伝える役割を果たすので、有り無しでは有った方がよりスムーズな操縦が可能となる。

また衝撃までは吸収出来ないが小口径拳銃の弾丸までなら完全に受け止められる。ちなみに刹那のはエクシア謹製で耐刃処理とGN粒子による防御力の向上がしてある。

とはいえ何処かの企業が製造した訳ではないので女子からの質問に刹那は適当に誤魔化していた。

「諸君、おはよう」

「おはようございます」

「お、おはようございます！」

千冬と真耶が教室に入ると同時に全員が席に戻り軍隊顔負けの気を付けの姿勢になる。

やはり千冬の日頃の有り難い指導のお陰だろう。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機のISを使用しての授業となるが各人気を引き締めるように。後ISスーツは個人が届くまでは学園指定のものを使うように。忘れたら学園指定の水着、それすら無い者は下着で構わんだろう」

本来ここには女子しかいないはずだし千冬なりの発破の仕方なんだろうが男子の前で言うことではないだろう。

そして学園指定の水着とはこの時代ワシントン条約保護指定並みの絶滅危惧種となったスクール水着である。紺色で名札付き。

恐らく学園創立の際大変理解のある男性が関わっていたのだろう。周囲からの反対もあっただろうがそれに負けず決定までこじつけたのは男のロマンという名の変態性の賜物である。

「では山田先生、ホームルームを」

「はい。ええとですね。今日は転校生を紹介します！しかも二人です！..!」

「..「えええつ！?」「..」

クラス中の女子が一気に騒つく。女子特有情報網を掻い潜ってのいきなりの転校生なのだから驚きもするだろう。

「ではどうぞ！」

「失礼します」

「.....」

教室に入ってきたのは男子の制服に身を包んだ金髪の間人軍服の様に改造された制服に身を包んだ銀髪の左目の眼帯が特徴的な間だった。

第一幕の役者は揃う（後書き）

今後の展開設定の一環で機体を考えていたら某二個付きが最強になつてしまった…！

MSをIS化する際オリジナル補正するかもしれないのでご了承下さい…。

沸き起る謎（前書き）

～警告～

今話はどこからか飛来した悪性電波によりキャラ崩壊が大変なことになっております。

こんなの〇〇〇じゃないと思う方は今すぐ引き返すことをお勧めします。この小説って比較的真面目路線のはずだったよね…？

原作だとシリアスだよなあ…？シリアスなんだよなあ…！？

沸き起る謎

刹那 Side

教室に二人の転校生が入った瞬間、教室のざわめきが止まった。原因は転校生の一人の制服が男物だからであろう。その一人が自己紹介を始めた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

「お、男…?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を…」

その佇まいや話し方からして育ちはいいようだが、もう一人 I S を操縦出来る男子がいることは報道されていなかった。

俺の場合は事情が事情なので報道が遅れる形となったが、こいつの場合は混乱を回避するためだろうか…。

「き、」

「はい?」

「「「きやあああああつ!」「」「」

女子の歓喜の叫び声が窓ガラスを揺らす。何か既視感を感じる。

「男子!三人目!!」

「しかもうちのクラス!」

「美形!ワールド系織斑君と守ってほしい系セイエイ君に続いて守ってあげたくなる系!!」

「日本に生まれて良かった〜！」

反政府デモ顔負けの騒ぎようだ。織斑先生が鬱陶しそうにそれを鎮める。

だがもう一人の転校生。こいつは『一般人』ではない。

軍服のような改造制服に左目の眼帯、温度を感じさせない冷酷な紅い右目。そして全身から放たれる凍てつくような鋭い気配。明らかに軍人だ。

余談だがこのIS学園では多文化であることを考慮して制服の改造は許されている。

「……………」

当の本人は未だ口を開かない。目の前にいる人間を見下すような目でこちらを一瞥した後その視線を織斑先生にのみ向ける。

「……………挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここでのお前は一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

かかとを揃え背筋を伸ばした姿勢と二人のやりとりから過去に織斑先生が外国の軍で教官をやっていたことがわかる。

彼女は日本代表として活躍した後にIS学園の教師になったと思っていたが…。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」
「あ、あの、以上…ですか？」
「以上だ」

山田先生のフォロー虚しく最低限な自己紹介で終わる。

そして一夏と目が合ったと思ったなら彼に近付いていき、

バシインツ！

頬をはたいた。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

突然のことに止まってしまった。初めて会う人間に平手打ちをするとは普通考ええない。

彼女は一夏のことを『あの人の弟』と言った。『あの人』とは織斑先生のことだろうがそれでは彼をはたく理由にはならない。ということは昔何かあったのだろうか。

「いきなり何しやがる！！」「ふん…」

一夏が怒鳴るがそれを無視して空いている席に着き、腕を組んで目を閉じて黙り込む。

周りの女子は未だ状況が飲み込めていないのか呆然としていた。

「あー…ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。」

解散！織斑、セイエイ。デュノアの面倒を見てやれ」

織斑先生の号令にクラス全員が覚醒し動き始める。まだ腑に落ちないことがあるが女子がここで着替え始める前に一夏ら二人に続き教室を出た。

一夏 Side

三人で第二アリーナの更衣室まで移動しているがまだ頬が痛む。あれは本気でやりやがった。

「一夏、彼女とは昔何かあったのか」

「あいつとは初対面だ。だけど千冬姉絡みなのは間違いないな。千冬姉昔ドイツに居たし」

「えっと…君は」

「刹那・F・セイエイだ。好きに呼んでもらって構わん」

「えっとじゃあ刹那で…」

歩きながら刹那の質問に答える。こうしないと転校生の情報を聞き付けた他クラスの人間が情報収集のため尖兵として派遣されて囲まれるからだ。構っていたら遅刻して出席簿アタックの餌食だ。それだけは避けたい。

「いた！転校生！」

「金髪美形！王子様！！」

「我が人生に一片の悔い無し！」

ぐあ、見つかった。てかおい、最後のは死亡フラグだって。

「な、なに？何で皆騒いでるの？」

「そりゃ俺達が男だからだろ」

「……………」

何故そこで意味が分からないような顔するんだ？

「男でISが操縦出来るのは俺達しかいないだろ？」

「あ、ああ！そうだね……」

「それにこの学園の女子は極端に男子との接触が少ないからな。ウーパールーパーとかエリマキトカゲ状態なんだよ」

「何それ……？」

「二十世紀の珍獣で昔日本で流行ったんだと」

「ふうん」

分かりやすく言えば昔日本にパンダが贈られてきた様子である。ちなみに2011年に中国から来たパンダはレンタルであり年に数千万円代金を払うらしい。死んだら賠償として四千万円だと。ウーパールーパーはあだ名でありアホロートルとも呼ばれるが正しい名前はメキシコサラマンダーで、両生類で黒色である。写真で見ると白い個体は突然変異種である。以上、作者の無駄知識。

「うん？何か電波が……」

「どうしたの？」

「いや、何でもない。それにしても良かったぜ」

「何が？」

「男がもう一人増えたからな。刹那が来て大分楽になったけどそれでも男が少ないのはキツいな」

「そうなの？」

「そうなのって…こいつは違うのか？外国には共学でIS関係の学園は無いしそもそも世界でIS関係の教育機関はここだけのはずなんだが。」

「それに刹那は何でさっきから黙ってるんだ？何か警戒してる感じだし。まさかラウラか？そりゃいきなり友人がビンタされれば警戒するよな。」

「とにかく今は更衣室に直行してさっさと着替えないと不味い。」

「よし、到着！」

更衣室に入ると同時に一気に上半身裸になる。

「うわあっ!？」

「？荷物でも忘れたか？つてか早く着替えないと遅れるぞ」

「う、うんっ？着替えるよ？でも、その、あっち向いてて……ね？」

「別に見る気はないが……」

「変な奴だな。同性の裸なぞ見ても嬉しくないだろうに。いや間違っても女の裸を見たい訳ではないぞホントに。」

「刹那も早く着替え…つて中に着込んでたのか」

「人前で肌をさらすのはあまり好きではないからな」

「ISスーツは吸汗機能もあるからベタつきとかなないけど苦しくないかそれ。」

「文化の違いってやつだろうか。うん、よくわからん。」

ふと後ろをみるとシャルルは既にジツパーを上げて着替え終わっていた。ちなみに構図としては俺と刹那が同じ方向を向いていて背後でシャルルが着替える感じだ。刹那？今は機体チエックしてるよ。

「シャルル着替え早いな。コツとかあんのか？」

「いや、別に…って一夏まだ着てないの？」

俺は今スーツを腰まで通したところである。これ下着も脱がないといけないんだよな。

「引っ掛かって着づらいんだよなこれ」

「ひ、引っ掛かって…」

何故にシャルルは顔を赤くしているんだ？

「そういえばシャルルのISスーツはどこなんだ？」

「あ、うん。デュノア社のオリジナルのフルオーダー品だよ」

「デュノア？それって…」

「うん。僕の家だよ。IS関連企業で父が社長しているんだ」

「それでか。納得した」

「何が？」

「つまりシャルルは社長の息子なんだろう？気品のいいっていうか、いいところの育ち！って感じがするじゃん」

「いいところね…」

褒めたはずなのに視線を逸らして複雑な表情を浮かべている。何か触れてほしくことでもあったのだろうか。

「でも一夏の方がすごいでしょ？あの織斑千冬さんの弟だなんて」

「ハハハ、こやつめ！」

「へ？」

「いや、何でもない。あれだ、お互いに地雷踏んで1ミスというところで」

「？」

いかん、変な目で見られる。ここは気の効いたジョークの一つでも…思いつかねえ…。

「落ち着け、COOLだ。COOLでいこうぜ…」

「……………」

うわあああつ！？結局変な目で見られてしまったあ！！

刹那もそんな目で見ないでくれえ！！

変な目で見られないように自粛したというのに何たる失態！万死に値する！！

（僕のセリフを盗るな！！）

うおっ！？また電波が！？刹那も受信したのか驚いた顔でそこらを見回しているぞ！？

てか刹那の驚く顔初めて見るような気がする。そんなに変化してないけど。

「ふう……………」

溜め息つかれたー！？不味い、手札からカードが切れた！どうするよ俺！？

「一夏、そこまでしておかないと遅刻するぞ」

いつの間にやら冷静になっていた刹那に釘を刺された…。うう…。

「一夏、面白かったよ」

シャルル、そんな慈愛に満ちた目で慰めないでくれ…。

刹那Side

やはり織斑先生絡みか。言動からして予想はしていたが一夏自身は彼女とは初対面であるらしい。ならば直接的ではなく間接的にわだかまりがあったということ。少し洗ってみるか…。

それともう一人シャルル・デュノア。こいつからは違和感を感じる。歩き方やその他の行動が不自然だ。無理矢理矯正したというかどこか女らしい。

それに時々見せる反応もおかしい。自分が男であると自覚しているならば普通気付くことに気付けなかったり男として何気ないことから恥ずかしそうな反応を見せる。

フランスのIS関連企業の社長の息子らしいがその話になった途端何か抱えているのを感じた。まさかとは思うが…。

頭の中に浮かんだことを抑えこみ更衣室を出る。ティエリアの声が聞こえたのは嘘だと思いたい。異世界に通信するなど不可能だ。

実戦訓練が始まり全員に気合いが入る。男が増えたことでやる気が増しているのは言うまでもない。俺の時もそうだった。ちなみに鈴音とセシリアは先程無駄口を叩いて織斑先生にはたかれていた。

「今日は戦闘を実演してもらおう。嵐！オルコット！」

戦闘の実演役に鈴音とセシリアが指名される。恐らく先程の罰だろう。

「何で私が…」

「全部一夏のせいなのに…」

いくら話題が一夏がはたかれたこととはいえ一夏に非はないぞ…。

「お前らやる気を出せ。…あいつにいいところを見せられるぞ？」

「やはりここはイギリス代表候補生、私セシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、専用機持ちの実力の違いを見せるいい機会よね！」

…小声で言ったようだがなんとなく心理的誘導だ。幕が若干黒いオーラを放っているが一夏は何も気付いてない。

俺も人付き合いが多い訳ではないがここまで鈍い人間は初めてだ…。

「それで、相手は鈴さんですか？それでも構いませんが」

「ふふん。それはこっちのセリフよ。返り討ちね」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は……」

キィィィン……。

「あわわわぁ！ど、どいてくださいっ！」

上空からの高速で飛行する物体が空気を切る独特の音と叫び声のする先には……山田先生だと！？

しかもこっちに向かって飛んでくる。回避は難しいしそもそも回避したら周りの連中が危ない。

「エクシア！」

ならエクシアを緊急展開して受け止めるしかない！

「せ、セイエイ君！？」

ドオオオオンッ！

山田先生を受け止めつつ地面を転がる。山田先生が飛んでくる方向的にスラスタ―による減速は行えないので転がって勢いを殺した。周りの連中は何とか避けてくれたか……。

体勢としては俺が山田先生に押し倒されている状態だが覆い被さられている所為か呼吸が苦しい。

なんというか鼻や口が柔らかいナニカに塞がれている感じだ。

とにかく退いてもらわねば……。

「あ、セイエイ君……。ちよつ、息が……」

早く退いてくれ山田先生……。こちらは腕を押さえられているから動けない。息が何時まで保つか分からん……！

「や、山田先生！早く退いてあげてください！刹那さんの息が止められていますわ！？」

「や、でも……力が……上手く入らなくて……あつ……」

「む……むが……（は、早く……）」

「本当に不味いですって！いくら操縦者保護機能でも直接窒息ばかりは死にます……！」

「織斑、私の授業で何を聞いていた？」

「え？間違えたっけ？てかそれどころじゃねえだろ千冬姉！」

「織斑先生だ」

「……………（チーン）」

「いやだからって刹那あああつ……！」

決死の説得（？）も虚しく俺の意識は闇に落ちていった……。

（……おい、刹那）

（う……………）

（お前、こんなところでなーにしてんだ？）

(ロックオン…?)

(俺はやだね)

(……………)

(言ったはずだぜ。俺とかわれとな)

(……………は?)

(…今すぐ俺とそのラッキースケベポジションを替われええええっ
!!)

「ロックオオオオン!?!」

「うわあっ!?!」

「うおっ!?!」

はっ、ここは!?!俺は…ガンダ…じゃなくて刹那・F・セイエイ
だ!

「せ、刹那。大丈夫か?」

「ISの操縦者保護機能によって強制的に気絶させられてたんだけ
ど…。大丈夫?」

視界に入るのは一夏とシャルルだ。恐らく付いてくれたのだ
ろう。見る限りここはグラウンドの片隅のようだ。

「あ、ああ。死んだ仲間に会った夢を見たようだか…」

「それ大丈夫じゃないよな(ね)!?!」

いや、あいつはロックオンではないはずだ…。きっと変態という
名の紳士で六番目の金髪狙撃手…って誰だ…。とにかく別人だ。そ
うであってくれ…!

どうやら俺は窒息死する前に操縦者保護機能によって気絶させら
れていたらしい。

瀕死状態にある操縦者を守るためのシステムなんだがまさかこんなにも早く使われるとはな…。

「山田先生は？」

「あ…、山田先生は…」

「…あそこに」

二人が振り向いた先には同じくグラウンドの片隅で壁に向かって体操座りをしている山田先生がいた。

自分を責めているのだろう…。

「山田先生」

「せ、セイエイ君！？ごごご御免なさい御免なさい御免なさい！！」

「いや、気にするな。あれは事故だ。山田先生に責任はない」

「でも……」

「俺は何も問題無いし気にしてもいない。失敗したのなら次は気を付ければいい」

「……………」

「どうした？」

「…いえ、感謝はしているんですけどそれは女性として自信を無くすというか…。…気にしないでください」

「？」

「…刹那気付いてないのか？」

「…山田先生の名誉の為にも黙っておこう」

「…ああ」

「…山田先生の胸で死にかけたなんて」

そんなこんなで午前の授業は終わったのであった。

沸き起こる謎（後書き）

今週はこれで最後となります。

いや、問題が簡単だったからなんだ！だから…だから…！

金の姫君（前書き）

お待たせしました。ようやく更新です。短いですが…。

金の姫君

一夏Side

シャルルが転校してきて五日目の土曜日。午後のアリーナ全解放を利用してシャルルに軽めの手合わせとIS戦闘のレクチャーを受けていた。

「えつとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだね。知識として知っているだけじゃ、近接格闘オンリーの一夏のISでは勝てないよ。さっきも間合いを殆ど詰められなかったでしょ？」

「うつ……、確かに瞬時加速も読まれてたしな……」

「一夏の瞬時加速は直線的だから対処されやすいんだよ。あ、でも無理に軌道を変えようとすると最悪骨折しちゃうからね」

シャルル先生の説明は本当に分かりやすい。今までの自称コーチの方々の説明はこんな感じだ。

『ごう、ドン！としてガッ！ときてドガンッガキン！って感じた』

『なんとなくわかるでしょ？感覚よ感覚。はあ？何で分からないのよバカ』

『そこで急停止して身体を左に十度傾けてから右方向へ旋回軌道ですわ』

自信満々でこう言うのである。教えてくれるのは有難いが分からなければ意味が無いのだ。流石にこれらを理解するのはアインシュタインでも無理だろう。

刹那は自分で説明下手だと自覚しているのであまり口を出してこな

いのだがこれもこれで辛いのだ。

…後ろで刹那を除く自称コーチ三人がブツブツ不満を言っているがコミュニケーションって大切だよな…。

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ。調べてもらったけど拡張領域が空いてないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「多分唯一仕様に容量を使っているからだろうね」

「なんだっけ…」

「文字通りたつた一つの特特殊能力だよ。ISと操縦者の相性が最高の時に発動される能力のこと。でもそれが発現するのは第二形態からでそれでも発現しない機体が多いからそれ以外の特殊能力を使えるようにしたのが第三世代型ISなんだよ」

こういう事がすらすらと出て来る辺りシャルルがどれだけ優秀か分かる。それに同じ男子として精神的な疲労も無く話せるのは本当に嬉しい事だ。

「『零落白夜』がそれに当たるのか…」

「第一形態から発現しているのは前例がないからね。しかも織斑先生と同じ能力なんでしょ？」

千冬姉と同じ武器で同じ能力なのは姉弟だからでは説明つかないらしいがそれでもなんと因縁めいている。

「唯一仕様の文字通りコピーできるものではないからね」

「そっか。でもまあ今は考えても仕方ないし置いておこうぜ」

「そうだね。じゃあ射撃練習を試みようか。はいこれ」

手渡されたのは五五口径アサルトライフル『ヴェント』。シャルルのISの武装の一つだ。

「あれ？他の機体の武装って使用出来ないんじゃない？」
「所有者が使用許可を出したら使えるよ。今一夏と白式に許可発行したから撃ってみて」

シャルルに指導されるように射撃姿勢を取りながらメニューを開いて射撃武器とのリンクを行わせようとするのだがいくら探しても見つからない。

千冬姉が欠陥機と言っていたが格闘オンリーなのは無いだろ…。

「うーん、なら目測でやるしかないね」

シャルルに事情を説明してから一度深呼吸をして引き金を引く。その物凄い火薬の炸裂音に驚いてしまった。何というか速い。それが正直な感想だ。

「弾丸はISよりも小さく空気抵抗が少ないからその分速いんだね。だから一夏は動きを読まれてカウンターを食らうんだよ。あ、ほら脇を閉じないと反動に負けるよ。1マガジン分撃っていいから」

これほど有意義な特訓は初めてではないだろうか。いや刹那との模擬戦も同じ近接格闘型として心強いものだが。

「あれ程私が言ったのにな」

「あれで分からないあんたがバカなだけじゃないの」

「私の理路整然とした指導の何処がいけないのでしょうか」

「……………」

刹那、居た堪れないお互いによ…。理解してくれているだけでも有り難いぜ…。

「それにしてもシャルルのISってラファールとは違うように見えるけど同じ機体なのか？」

『ラファール』とは正式名称『ラファール・リヴァイブ』で『疾風の再誕』の意味を持つデュノア社製フランス第二世代型ISだ。山田先生が使っていた機体もそれなんだが第三世代機にも劣らない高い性能と汎用性が売りで世界シェア第三位であり、操縦の簡易性によって装備次第では役割や戦場を選ばないのが特徴だ。

本来のラファール・リヴァイブはネイビーカラーに四機の多方向推進翼が特徴的なんだがシャルルのはオレンジで多方向推進翼が背中に対、中央から二つに分かれるようになっておりアーマーも大分シェイプアップされている。

そして四枚付いているはずの物理シールドは全て取り外され左腕に一枚の大型物理シールドが取り付けられている。逆に右腕はスキンアーマーのみだ。

…その姿を見た時刹那が『シンメトリー（左右対称）ではないのか…』とこぼして既視感を感じたのはどうしてだろうか。

「ああ、僕のは専用機だからかなりいいじってあるよ。正式にはこの子の名前は『ラファール・リヴァイブ・カスタム？』。基本装備をいくつか外して拡張領域が倍にしてある」

「倍に！？…ちょっと分けて欲しいくらいだ」

「あはは。あげられたらいいんだけどね。今量子変換してあるだけでも二十くらいあるよ」

「まるで火薬庫だな。エクシアと似てる」

「えっ、そうなの？」

シャルルが驚いた顔で刹那に振り向く。普段刹那は決まった少数の装備しか使わないから知らないのも当たり前だ。以前データを見せて貰った事があつたが覚えきれるものではない。

「俺は近接格闘主体だ。射撃も出来るがいつものが一番慣れている」「ビーム兵器が殆どだしな。エネルギーを考えればそうなるか」「何だか不思議な機体だね。構造といい武装といい僕達のは違うよつな……」

そう言われるとそう思えてくる。装甲の形状や多方向加速推進翼が無く小型の多方向加速推進機がついており粒子を放出したり武装の殆どが俺達のISとは規格が違つたりと探せば次々と出て来る。でもまあ技術なんて進歩するものだし今では特に気にしてないが。

そのまま丁度マガジン一つ分撃ち続けた時、アリーナに変化が訪れた。

「ねえ、あれ……」

「うそ……。ドイツの第三世代型」

「まだ本国でトライアル段階だと聞いているけど……」

周囲の注目の的になっていいる存在に視線を移す。

「……………」

そこにはもう一人の転校生であるドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒが漆黒のISを展開してこっちに向つていた。

転校初日以来誰ともつるもうとしないどころか会話さえしない孤高

の女子。

「おい」

「…なんだよ」

ISの開放回線で声が飛んでくる。間違いなく初対面の時聞いたラウラ本人の声だ。

「貴様も専用機持ちだそうな。ならば話が早い。私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

だろうな。ドイツでの千冬姉と言ったら第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』の決勝戦の事だ。

決勝戦の日、俺は『謎の組織』に誘拐された。ネーミングセンスはともかく目的も正体も不明だった。

真っ暗な空間で拘束されていた俺はその事を聞きつけ決勝戦会場から飛んできた千冬姉によって助けだされたのだ。

千冬姉は決勝戦を放棄して不戦敗となり、『二回目の優勝』を逃した。

そしてその事件は闇に消えていったのだが、独自の情報網で俺の監禁場所の情報を提供したドイツ軍に『借り』ができ、千冬姉は一年間ドイツで教官をしていたのだった。つまり事件の全容を知っているのはドイツ軍だけだ。

「貴様がいなければ教官の大会二連覇という偉業が成し遂げられたのは容易に想像出来る。故に私は貴様の存在を許さない」

千冬姉の経歴に傷を付けたのが許せないのだからそれがこっちも同じで無力だった自分が許せなかった。

だがそれはそれで俺とラウラと戦う理由にはならない。

「また今度な」

「ふん。ならば戦わざるを得ないようにしてやる!」

刹那、ラウラのISの肩の大型砲が火を噴いた。

「!」

ゴガギンツ!

ジャキンツ!

「こんな密集空間でいきなり戦闘を始めようだなんて、ドイツの人は随分沸点が低いんだね。ビールだけでなく頭もホツトなのかな?」

「.....」

「貴様ら.....」

横合いから割り込んできたシャルルがシールドで砲弾を弾き右腕に六一口径アサルトカノン『ガルド』を展開してラウラに向ける。その顔は涼しくラウラを睨んでいた。

それと同時に刹那がシャルルと同じ様にGNソード改を展開してラウラに突き付けていた。

『その生徒、何をやっている!学年とクラス、出席番号を言え!』

アリーナのスピーカーから監督の先生の怒号が飛ぶ。

「…ふん、今日は引こう」

興が削がれたのかラウラはあっさりとゲートへ去っていった。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。助かった」

「そう、なら良かった。今日はもうあがるっか。そろそろアリーナの閉館時間だしね」

「おう、銃ありがとな。参考になった」

「いいよ。…じゃあ、先に着替えて戻ってて」

シャルルはいつも俺達と一緒に着替えようとはしないのだ。今のところ誘っても断られている。

「たまには一緒に着替えようぜ」

「い、イヤ」

「つれないことを言うなよ」

「一夏、本人が嫌がることを強制するな」

「うおっ!?!」

刹那に腕を掴まれ引つ張られていく。

「一夏つてもしかしてそつちに興味が…」

「不潔ですわ…!」

「刹那、私が落とすまで一夏を上手く抑えてくれ…!。」

三人がギヤーギヤー言っているがとてつもなく誤解されているのは気のせいか。

刹那 Side

「はー、風呂に入りてえ……」

更衣室で着替え終わるなり一夏がこぼす。

学園では寮の部屋それぞれにシャワーがあるだけでなく大浴場があるのだが男が入ることに女子から反発があった。
聞くことには、

『男子が後に入るなんてどういう風に使ったらいいのかわかりません！』

とか、

『男子が入った後なんてどういう風に使ったらいいんですか！』

とのことだ。

気持ちは分からなくてもないが一夏は日本人である以上風呂は恋しいだろう。

俺は人前で肌を晒す習慣が無かったしいつ襲われるかわからないから日本のアジトでも使うことは無かった。というか慣れない。

一応山田先生が男子三人ということでタイムテーブルを組んでくれているらしい。

「あのー、セイエイ君、織斑君、デュノア君いますかー？」

「はい？えーと、織斑とセイエイだけいます」

「入っても大丈夫ですかー？着替え中だったりしますー？」

「大丈夫です。着替えは済んでいます」

「そうですかー。失礼しますねー」

噂をすれば山田先生がやってきた。

「どうしたんですか？」

「ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになります。時間帯別になると問題が起こりそうなので、男子は週二回使用日を設けることになりました」

「本当ですか！やったぜ刹那！嬉しいです。助かります。有難うございます、山田先生！！」

「い、いえ、仕事ですから…」

一夏が山田先生の手を握ってこれでもかと礼を言っている。対して山田先生はいきなり異性に手を握られたのが驚いたのか顔が若干赤いが、何気にこちらを見ているのは気のせいだろうか？

「…一夏、何してるの？先に戻っててって言ったよね？」

シャルルが更衣室に入ってきた。表情はそのままだがその言葉に刺を感じる。

「喜ベシャルル。今月下旬から大浴場が使えるらしいぞ！」

「そう」

朗報（一夏にとって）に対してもそっけない返事だ。イノベイターとして感じたのはストレス…、それも自身に対してのもの…。

もし俺が探った情報通りなら…。

「あつと、織斑君とセイエイ君は職員室まで来てもらえますか？白式とエクシアの登録に関する書類を書いてもらうので」

「わかった」

「わかりました。じゃあシャルル、ちょっと長くなりそうだから先にシャワーを浴びててくれよ」

「うん。わかった」

「じゃ山田先生、行きましようか」

書類を書き終わり、寮への道を一夏と歩く。

エクシアの登録なのだが事務的意味合いしかないのと情報操作が大変だったという愚痴を職員室にいた織斑先生から一夏に聞かれないよう小声で言われた。

情報操作に関してはこちらも確認しているし感謝もしている。

「はー、終わった終わった。部屋で茶でも飲むか。刹那も一杯どうだ？」

「そうさせてもらおう」

一夏の部屋に着き椅子に座って待っていてくれと言われその通りに待つ。

シャワー室から水音がするのでシャルルはシャワーに入っているようだ。

「あー、そっいやシャルルがボディソープが切れてたって言うて

たな。新しいのを出してやらないとな」

一夏はクローゼットから新品のボディークリームを出してシャワー室と隣接する洗面所に入っていく。

『おい、シャルル…ル…?』

『い、い…ちか…?』

『……………!?!?』

『きゃあっ!?!?』

バタンッ!

『…えーと、ボディークリーム…ここに置いてくから…』

『う、うん…』

洗面所から一夏が状況を掴めていない混乱した顔で出て来た。今の会話…もしかしたら…。

「どっした」

「…シャルルに胸があった」

俺が予測していた事が当たった瞬間だった…。

金の姫君（後書き）

次回、シャルルの自白と一夏の誓い（？）。ようはフラグです。刹那フラグに一夏メンバーは入れないことにしていますがあの一夏にフラグるのもなあ…。

誰が為に生きる(前書き)

フラグ回です。短いです。リア充爆ぜろ。

誰が為に生きる

刹那 Side

『シャルル・デュノア』に疑問を感じた俺はその日から少し探りを入れはじめた。
生徒の個人情報や学園によって管理されているのでネットでの調査である。

フランスメディアのサイトではデュノア社の社長の息子、『ISを操縦出来る三人目の男』の話題で持ちきりだがその内容に違和感を感じた。

掻い摘んでみると『ISを操縦出来る男』が現れたというより、『デュノア社の社長の息子』そのもの（・・・）が急に現れたように受け取れるのだ。
デュノア社の社長に息子がいたという情報はその時になって初めて明らかになっている。

更に探りを入れてみた事には、ゴシップサイトであくまで噂との扱いだ。デュノア社の社長に愛人がいたとのことだ。また社長と愛人との間には娘があるらしく、社長とその正妻の間に子供がいたという記録はそれまで存在してなかった。

またヨーロッパ情勢や経済、軍事関連では欧州連合、EUのある『計画』によってデュノア社は経営危機に陥っているとのことだ。

これらの情報から俺は一つの結論に辿り着いた。

だがその結論はあくまで仮定であり確固たる証拠は無いし、『シャルル・デュノア』本人から自分の意志ではないことを感じた。

自分を押し殺して他人ひとから強制され、やらされている人間に対して剣を向ける真似は出来なかった。

そして今、その『仮定』は『確定』へと変わった。

一夏Side

俺とシャルルはそれぞれのベッドに、刹那は椅子に腰掛けていた。俺の目の前にいるシャルルは普段と変わらないスポーツジャージなのだがコルセットをしていないのか胸があることが明らかだった。

正直、状況を把握しきれていない。様々な思いが頭の中をよぎるが、まず真っ先に知りたいことをシャルルに聞くことにした。

「えっと……、どうして男のふりをしていたんだ？」

「その……、実家、デュノア社の方からそうしろと言われたんだ。社長……、父からの命令でね」

「命令って……親だろうか？どうしてそんな」

「僕はね、一夏。愛人の子なんだよ」

絶句。その事実にごう反応することも出来なかった。それがどういふものかが解らない訳じゃない。はつきりと解っている上でだ。

「二年前、母さんが亡くなった時に父の部下がやってきて引き取られたんだ。色々と検査する過程でIS適性が高いことが解って、非公式だけどデュノア社のテストパイロットをやることになったんだ」

その声はただ健気で、どこか乾いていた。自分の心の傷を切り開くかのように、つらいはずなのに、それでも淡々と話してくれた。

「父に会ったのは二回ぐらいで会話は数回ぐらい。本妻の人には一度だけ会ったけど、『泥棒猫の娘が！』って殴られたんだ。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにな」

怒りだ。自分の中に沸々と沸き起こる感情。理由など分からない。ただ、本心から俺は怒れている。

だがそれをこらえる為に、自分の拳をきつく握り締めた。

「それから少し経って、デュノア社は経営危機に陥ったんだ」

「え？デュノア社は量産機ISの世界シェア第三位だろ？」

「…『イグニツション・プラン』か」

不意に刹那が口を開く。そこから出て来た単語に俺はセシリアから前に聞いたヨーロッパの第三世代機の開発事情を思い出した。

『現在、欧州連合では第三次統合防衛計画『イグニツション・プラン』では次期主力機の選定中なのですわ。今のところライアルに参加しているのは我がイギリスのティアーズ型^{モデル}、ドイツのレーゲン型、イタリアのテンペスタ？型ですわ。実用化ではイギリスが一步リードしていますがまだ難しい状況なのです。ですから実稼働データを採る為に私がIS学園におくられましたの』

とのことらしい。ラウラの転校もそれが関わっているのだろう。

「フランスは統合防衛計画『イグニツション・プラン』から除名されていてね、第三代機の開発は急務だったの。デュノア社でも第三代機の開発をしていたんだけどラファールは第二代機最後発でデータも時間も圧倒的に不足していて中々形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして、次のトライアルで選ばれなかったら援助を全面カット、IS開発許可も剥奪されることになったんだ」

「流れは何となく分かったがそれがどうして男装に繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びる為の広告塔。それと」

「男ならば特異ケースとされる一夏や俺と接触し、本人及びその使用機体のデータを盗み出すことが出来る」

「刹那…？」

「その通りだよ、刹那。一夏と白式、刹那とエクシアのデータを盗んでこいと言われているんだよ。あの人にね…」

その父親はたまたまIS適性の高かったシャルルを一方的に利用しているだけなのだろう。

そしてそれは俺なんかよりシャルルが一番理解しているのだろう。

「まあ、こんなところかな。でも二人にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるかな。デュノア社は潰れるか他社の傘下に入るか、僕にとってはどうでもいいことかな。はあ、話したら何か楽になったよ。聞いてくれて有難う。そして、今まで嘘ついていてゴメン」

「いいのか、それで」

「え………？」

無意識のうちにシャルルの肩を掴んで顔を上げさせていた。自分の中に溜まった感情を抑えることが出来ない。

「いいはずがないだろ。いくら親でも子供の自由を奪う権利があるわけないだろ！親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだろうよ。でも、だからって、親が子供を何したっていいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！生き方を選ぶ権利は誰にだって、そいつ自身にあるもんだろ！親なんか邪魔される筋合いなんかない！！」

ああ、俺は、シャルルの事じゃなくて自分の事を言っているんだ。そして、両親に捨てられ、そのことで苦しんだ千冬姉のことを思わずにはられない。

「ど、どうしたの一夏」

「すまん、熱くなり過ぎた。…俺は、俺と千冬姉は両親に捨てられた。でも俺の家族は千冬姉だけだし別に今更両親に会いたいとも思わない」

「……そう、なんだ…。ゴメンね…」
「気にするな」

俯きそうになるシャルルの頭に手をのせてやる。
それにシャルルは少しだけ安心したような顔になった。

「シャルル・デュノア」

「な、なに？」

「一夏の言う通りお前の人生はお前のものだ。自分の生き方を選ぶ権利はお前にある」

今度は刹那が話し始めた。俺とは違い、落ち着きを払った声で語り掛けるように。

だが、その目は窓の向こうを見ており悲しい雰囲気を感じさせた。

「俺は、幼い頃から歪んだ宗教によって生き方を強制させられた。取り返しのつかないことをたくさんしてきた。罪を背負ってきた」

俺にとっては二回目となる刹那の過去。俺とシャルルには、その『罪』が何なのか聞くことが出来なかつた。

生半可な気持ちでは聞いてはいけないような気がした。今聞いてしまったら刹那と離れてしまいそうで。

「だがお前は違う。自分で自分の生き方を決めることが出来る。俺のように、穢れることはない」

その声はどこか懇願するようなもので、一瞬だけ、ほんの僅かにだけ子供の頃の刹那が見えたような気がした。

廃墟と化して崩れた建物が並ぶ中に立つその姿が。泥に塗れ僅かに血がこびり付いたその姿が。

「時間はまだある。すぐには言わない。自分でどうしたいのか、考える」

そう言って刹那は部屋から出て行った。その背中が大きく見えたような気がした。

「…刹那って、何者なんだろ」

「…わからない。あいつの過去は少しだけ聞いたことがあるけど、俺らなんかより辛い過去を歩いて来たのは分かる。」

けれど、どれ程かは分からない。ただ、辛いことしか分からなかつた。

「シャルルはこれからどうするんだ？」

「どうもこうもないよ。フランス政府も事の真相を知ったら黙つてないだろうから代表候補生をおろされてよくて牢屋行きかな」

「いいのかそれで」

「僕に選択する権利なんてないから、仕方ないよ」

愛想笑いを浮かべるシャルルに何もしてやれない自分に対して憤りを感じた。刹那は時間はあると言っていたけど……。あつ。

「ある……」

「え？」

「これなら、シャルルはここにいられる」

「い、一夏？話が見えないんだけど」

「特記事項第二一、本学園に於ける生徒はその在学中に於いてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする」

そうだ、刹那の言っていた事はこれだったんだ。これは使える。

火事場の馬鹿力というか、追い詰められた所為か暗記していたテキストの内容が一言一句違わず出て来た。

「つまり、この学園にいる三年間は大丈夫だ。それだけ時間があればなんとかなる方法だって見つけられる」

「……一夏、よく覚えられたね。特記事項つて五十五個もあるのに」
「……勤勉なんだよ俺は。というより刹那のお陰で思い出せたんだけどな。とにかく、三年間は大丈夫だ。喻え何かあっても、俺が護つてやる。頼りないかもしれないけど強くなつてみせる！」

もう誰かに護られてばかりいるのは嫌だ。千冬姉に護られてばかりで、何も返せない自分が嫌だった。だから、今度は俺が護る。

「僕を…護ってくれる？」

「当たり前だろ。シャルルは俺の仲間なんだからよ」

「有難う…」

シャルルの顔には、心からの、年相応の少女の笑顔が浮かんでいた。

刹那 Side

シャルルには俺のようにはなって欲しくなかった。戦いを強要され、血に穢れた俺のようには。

あのまま部屋を出て行ってしまったが大丈夫だろう。一夏がいる。

あいつは自分の意志でここにいる。最初は嫌々だっただろう。だがそこから自分の意志を持てたのはあいつ自身に『強さ』があったからに違いない。

ならばシャルルは一夏に任せるとしよう。咎人である俺がすべきではない。

だがシャルルが自分の意志を、生き方を選んだとしてもデュノア社を黙らせる必要がある。

(フラッグのデータ、ここで使うか…)

以前作ったりニアライフルとソニックブレイドのデータを餌に工作をする。IS学園と織斑千冬の名を使えば出来ないことはない。時期が来たら頼んでやってもらうでしょう。俺が目立つ訳にはいかない。

(後はラウラ・ボーデヴィツヒか…)

軍人である彼女について調べるのは今の俺と状況では難しい。関係者である織斑先生に聞くことが出来るかわからないがやるだけやってみよう。織斑先生には本当に世話になっているがやるしかないのだ。

彼女が戻れなくなる前に。

「あゝ、せつちーだゝ」

…厄介なのが来た。

「…布仏本音」

「せつちータご飯たべよゝ。答えは聞かないけどゝ」

…それはもう誘いではなく命令ではないのか。

そんなことを考えながらも共に食堂への道に行く刹那であった。

誰が為に生きる（後書き）

次回、刹那とラウラが少しだけやり合う予定です。予定ですが、あ、トーナメントではないですよ。

惑う者達（前書き）

結構原作のままというか……。初めてES読む人を考えてというか妥協したくないのであまり端折らずに書いてしまっんですよね……。

惑う者達

一夏Side

シャルルが女だと発覚した翌日の朝、俺はシャルル（男装）と刹那と共に教室に向かっていた。

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、嘘はついてないでしょうね!？」

教室からセシリアと鈴の声が廊下まで届いてきた。近所迷惑だから。

「本当だつてば!月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君とデユノア君とセイエイ君と交際」

「俺達は何だつて？」

「「「きゃああつ!？」」「」

な、なんだなんだ?話し掛けただけで驚かれなきゃいけないんだ?

「で?何の話なんだ?俺達の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん?そうだったけ？」

「さ、さあ?どうだったかしら?」

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから!」

「そ、そうですね!私も自分の席に着きませんと」

その声を皮切りに集まっていた女子達が蜘蛛の子散らすようにその場を離れていく。

「一体何なんだ？」

「ちあ？」

「……………」

箒Side

(ど、どうしてこのようかと…)

窓側の席に座る箒は平静を装いつつも内心頭を抱えていた。

というのも実は寮の部屋の引越しの後、一夏の部屋に行き本人に学年別トーナメントで優勝したら付き合って貰うと宣言したからである。

あの場には二人以外居なかつたはずだがもしかしたら声が大きくて誰かに聞かれたかもしれない。

それが紆余曲折とあって先程の噂となつたのだろう。

『学年別トーナメントの優勝者はこの学園の男子三人のいずれかと交際出来る』

一夏だけでなくシャルルや刹那が巻き込まれている辺り間違いない。

噂は学園中の殆どの女子生徒が知っており、上級生がクラスの情報通に確認に来ていたくらいだ。

具体的内容としては、

『それは一年生のみか』

『他学年の優勝者も含まれる場合、交際したい相手がダブったらどうするか』

等といった内容である。

ただでさえセシリアや鈴という強力なライバルがいるのにこうなつては周りの『意識しているが行動に出れない』女子生徒達が意気込み、一夏争奪戦が大変なことになってしまう。

(いや、優勝だ。優勝すれば問題ない)

頭を左右に振って嫌な考えを追い出す。

(今度こそ、今度こそはあの時とは違う。大丈夫。大丈夫……なはずだ)

『あの時』。それは篤が小学四年生の時だった。

小学四年生の時、剣道の全国大会でも同じ約束を一夏にした事がある。

小学生の部という括りで上級生も多数いる中実家が道場でありキヤリアもある篤は優勝候補であった。

だがその大会当日、姉の束の所為で引越となり大会不参加で優秀を逃してしまったのだ。

東が発表したISは兵器への転用が危ぶまれ、政府の要人保護プログラムによって政府主導の転居を余儀なくされた。一夏からの手紙も情報漏洩防止という名目から政府の圧力で返事が出来なかった。

そして気付けば両親と別居となり元凶である東は行方を暗ますという顛末である。

繰り返される監視と聴取で心身共に参っていた篤が剣道を続けていたのも同じく剣道をやっていた一夏との繋がりを感ずる事だった。

だが実は違った。それは『只の憂さ晴らし』に過ぎなかった。

誰かを叩きのめしたい。

その頃の篤の太刀筋はそれを物語っていた。

太刀筋は己を映す鏡。それは古くから謂われてきた言葉であり、まさしくそうであった。

そしてその後の全国大会で優勝し、決勝戦で負かした相手が涙を流しているのを見て自己嫌悪と絶望に陥った。

私は何をしているのだろうか…。

それは只の暴力だった。思いも信念も無い、強いとは言えないモノだった。

こんなのは、本当の『強さ』ではない…。

『強さ』とは、こんなモノではない。それは自分がよく知ってい

るはずだった。

(今度こそ、私は……『強さ』を見誤らずに勝つ事が出来るだろうか……)

いや、勝たなくてはならない。己自身に。

(刹那は、強いな……)

一夏に対して恋愛的好意を抱いている筈だが、刹那に対しては尊敬の念を抱いていた。

刹那の剣の腕は恐ろしく高い。

それは刹那の編入した日の模擬戦を見た時から分かっていたことだが、その剣には信念があった。

刹那の技量だけでなく、信念を持って剣を振るえるその『強さ』を尊敬していた。

だが筈は知らない。

刹那の剣は『道』ではなく『術』である事を。

己を高めるのではなく生き残る為に、相手を殺す為に鍛えられたものである事を。

数多の命を奪い、そして未来を切り開いてきた刹那の剣の重さを。

刹那が背負うモノを。

刹那 Slide

…また厄介な事が増えた。デュノア社への工作手段としてフラッグのデータに細工をし、手回しの準備をしつつラウラ・ボーデヴィツヒの事もあるというのに、今度は根も葉も無い噂が広がっている。

噂の根本的な出処は幕の引越しの際、一夏に宣言していた内容だろう。

あれは少なくとも隣部屋の俺には丸聞こえだった。

だがいくら噂がその形を保ったまま伝わるものではないとしても幾ら何でも変わり過ぎだ。意図的に改変したと思えるぐらい。

その改変したと思われる人物…。頭の中に一人だけ浮かんでくるのはどうしてだろうか…。何というかこいつしかあり得ないと思えてしまうのが悲しい。

例によって証拠は無いが本人が噂に対して興味を殆ど示していないどころか女子生徒が噂で盛り上がっているのを温かく見守っているのが怪しいのだ。

近いうちに尋問しておこう…。

授業の合間の放課、俺はトイレへと走っていた。

別に俺は廊下を走るような真似は本当ならしないのだが何せ男子トイレが校内に三ヶ所しかないのでチャイムと同時に全力疾走し、用を達したらまた全力疾走で戻らないと授業に間に合わない。

しかし無情にも先日廊下を走るなどお叱りを受けてしまった。いや理解して下さいよ。

帰りの道のりの途中曲がり角にさしかかった時、その向こうから聞いたことのある声が聞こえてきた。

「何故このような所で教師など!」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!」

あのラウラがここまで声を荒げるのは初めてだろう。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここでは貴方の能力は半分も生かされません。大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません」

「何故だ?」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッションか何かと勘違いしている。そのような程度の低い者達に教官が時間を割かれるなど「そこまですておけよ、小娘」……!」

「少し見ない間に偉くなつたな。十五歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

凄みのある千冬姉の声に対してラウラの声は震えている。
圧倒的な力を前にしての恐怖とかけがえのない相手から嫌われるか
もしれないという恐怖。

その二つが今のラウラから感じ取れた。

「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」
「……………」

声色を戻しせかす。ラウラは無言で去っていった。

「その男子、異常性癖は感心しないぞ」
「な、何でそうなるんだよ千冬姉！」

バシンッ！

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……………」

「そら、走れ劣等生。勤勉さを忘れるな」

「わかってるって……………」

「そうか、ならいい。急いで戻れよ。ああ、それと織斑」

「はい？」

「廊下は走るな。…………とは言わん。バレないようにやれ」

「了解」

少しの間だけだったが姉としていてくれたのは嬉しかったりする。
教師としてではどうやら見逃してくれるらしいので、俺は帰りの道
のりをバレないようにダッシュした。

千冬Side

一人廊下に残された千冬は聞く相手がいるかの様にぼやく。

「…あいつらは私の事を完璧な人間だと見ているようだが私とて無いモノはある。それを『あいつ』は持っている。『あいつ』に無いモノを私が持っている様にな…」

千冬の独白は誰にも聞かれることなく消えていった…。

一夏Side

放課後、シャルルと刹那と篝の四人で特訓の為アリーナに移動していたのだが、どうもアリーナの様子が慌ただしかったので、ステージの様子を見ようと観客席に行く。

「何だろっね？」

「ああ、一体何があるのや…ら…っ！？」

ドゴオオンッ！！

「くっっ！！」

「ああっ！！」

「鈴！？セシリア！？」

アリーナのステージに爆発が起こり、その中からISを展開した鈴とセシリアが吹き飛ばされる様に出てくる。

機体は所々破損し、アーマーの一部は完全に破壊されていた。

ブアッ！

そして爆発の後そこから漆黒のISを纏ったラウラが飛び出してきた。二機に比べると損傷は圧倒的に軽微である。

「このおっ！」

「無駄だ」

鈴が衝撃砲を撃つもラウラは回避もせず右手を前に突き出すだけで、砲弾が届くことは無かった。

「くっ、こつも相性が悪いだなんて……！」

バリアーでも展開しているのかもしれないが衝撃砲が元から不可視なので分からない。

ラウラは衝撃砲を何らかの方法で無力化した後、肩からワイヤーで接続されたブレードを射出、複雑な軌道を描き鈴の右足に絡み付いてソレを捕えた。

「そうそう何度もやらせるのですかっ！」

「ふん……、理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第三世代型兵器とは笑わせる」

セシリアがスターライトmk?で狙撃しつつビットで視界外攻撃援護を行うもその両方を躲かさつきと同じように、今度は両手を交差させ突き出すと見えないナニカに捕まったようにビットが静止した。

動きが止まったラウラをセシリアが狙撃するも肩のレール砲で相殺され、狙撃態勢で止まってしまっているセシリアにラウラはワイヤーブレードで捕獲した鈴を振り子の原理でぶつけた。

その後ラウラは爆音と共に一瞬で二人との距離を詰める。

瞬時加速だ。俺の十八番であり近接格闘技能であるそれをラウラは使ったのだ。

そして両手首からプラズマ刃を展開、ワイヤーブレードを六つ射出して三次元的強襲で鈴に襲い掛かる。

鈴は双天牙月を分離させ二刀流で凌ぎながら衝撃砲の準備を行う。

「この状況でウェイトのある空間作用兵器を使うとはな」

衝撃砲は発射される前に実体砲で吹き飛ばされ、そのままプラズマ手刀で鈴の胴体を突こうとするが割って入ったセシリアがスターライトmk?を盾代わりにし近距離で弾頭型ビットを射出した。

ドカアアアッ!!

「無茶するわね、あんた…」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが……」

自殺行為ともとれる近距離でのミサイル攻撃。当然二人は爆発に巻き込まれ床に叩きつけられたが、煙が晴れたそこには殆どダメージを負った様子のないラウラが佇んでいた。

「終わりか？ならば 私の番だ」

そこからは一方的な暴虐。瞬時加速で地上へと移動、近距離で砲撃、ワイヤーブレードで二人を捕獲しひたすら殴り付ける。シールドエネルギーは残り少なく操縦者生命危険域に達する。

このままエネルギーが尽きればISは強制解除され二人の命に関わる。

ラウラの顔が無表情から愉悦に口元を歪めた瞬間、俺はキレた。

「おおおおおっ！！」

白式を展開すると同時に雪片式型に最大出力でビーム刀を発生、『零落白夜』を発動させる。

そのまま観客席とステージを隔てるバリアーを破壊し瞬時加速でラウラに突っ込む。

「その手を、離せえええっ！！」

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

雪片式型を振り下ろそうとする腕が見えないナニカに止められる。ラウラの眼帯をしていない右目が俺を捉えていた。

「やはり敵ではないな。この私と『シユバルツェア・レーゲン』の

前では、貴様も有象無象の一つに過ぎん。消える」

肩の大型カノンが俺へと砲口を向けた瞬間、ラウラに二発のビームが襲い掛かかってきた。

「何っ!?!」

「刹那!?!」

「一夏、二人を連れて退避しろ」

「貴様……!!」

俺とラウラの間割り込んできたのはISを展開した刹那だった。その右手にはGNソード改ライフルモードが握られている。

「次は貴様が相手をするというのか?」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前の力の使い方は間違っている」

「私の前に立ちはだかる時点でお前も敵だ! まあいい、あいつらより愉しませてみせる!!」

ラウラがワイヤーブレードを射出して刹那に向かっていく。

それを刹那は素早くGNソード改を収納、腰のGNブレイド二本を引き抜いて受け流し、脚部をも使ってワイヤーブレードの腹を蹴り弾く。

「早く行け、一夏!」

「あ、ああ! 鈴、セシリア、早く離れるぞ!!」

「なんてことないとは…言えないわね…」

「無様な姿をお見せしましたわ…」

刹那の捌き方に一瞬見とれつつも二人を抱え残り少ないエネルギー

ーを使って瞬時加速で離れる。

「一夏！三人とも大丈夫！？」

十分離れたところでシャルルが来てくれるが、刹那とラウラの戦いに割り込むことが出来ず、その行く末を見守ることしか出来なかった。

刹那&ラウラSide

ワイヤーブレードの猛攻を刹那は全身を使って上手く弾く。

だが刹那とてやられてばかりではない。ワイヤーブレードを弾きながら現在一番リーチのある右手のGNブレイドLで突きを繰り返す。

「その程度！」

それはラウラが左手を突き出すことで見えないナニカによって止められるが、GNブレイドLを持つエクシアの右腕に内蔵されたGNバルカンが火を噴いた。

「何っ！？」

予想外の攻撃の直撃を受け、ラウラは見えない拘束を解いてしま

その間に刹那は後ろに下がり距離を取った。

「逃がさん！」

シユバルツエア・レーゲンの右肩の大型レール砲から対ISアー
マー用特殊徹甲弾が放たれ音速を超え刹那に向かって直進、刹那の
姿が爆発に包まれる。

「……………刹那っ!?!」

一夏達四人だけでなく観客席に残っている筈も叫ぶ。だがそれも
杞憂に終わり煙の中から四条の太いビームが飛び出し、ラウラは躲
そつとするも躲しきれずシールドバリアーを突き破り大型レール砲
に当たり爆散する。

「くっつ!?!」

四条のビームによって晴れた煙の中から両手にGNキャノンを構
えた刹那が現れた。

刹那はラウラから距離を取った時砲撃をイノベーター能力で予測
しており、エクシアに指示を出してGNキャノンをあらかじめGN
粒子が充填された状態で準備し展開、ヴァーチェのGNキャノンに
内蔵されたGNフィールド発生装置を一瞬だけ起動させ徹甲弾を防
御、爆発による熱と閃光、衝撃波、煙を目眩ましにした上にあらか
じめGN粒子を充填しておいたことでチャージをせず、また悟られ
ること無く発射するという荒技をやったのだ。

今更ではあるが刹那はシユバルツエア・レーゲンの見えないナニ
力がある程度見抜いていた。

ブルー・ティアーズのビットと一夏の突撃が止められたのを見て刹那はそのナニカが停止能力を持ち、それが範囲空間内全域に作用するものではなく網のような表面的なものであると察した。

もし仮に範囲空間内全域に作用するとすれば、操縦者の血管の血流まで止められ死に至ってしまう。

このそういった操縦者に直接ダメージを与えるような装備は国際競技規則で禁止されているのでこのIS学園に送られてきた以上それはない。

だが刹那は全ての軍や国家がそれを守る訳ではないと知っている。でそれほど信用してないが、公の場で使おうとはしない事も知っている。

話を戻すが、甲龍の衝撃砲の件については原理までは見抜いてないので何も言えないがその能力が表面的な停止能力を持つことから内蔵されており砲口が元から開いているGNバルカンを使用したのだ。

ラウラが動きを止め、口を開く。

「何故だ……」

「……………」

「その強さ、お前も私と同じ兵士だろう！なのにつ！それ程の強さを持っておりながら何故、そんな奴等と馴れ合う！！」

ラウラが叫ぶ。それは自分と同じ戦うだけの存在である兵士である。う刹那が愚図の集団と知っている一夏達と共にいる事に対しての憤りだった。

「…お前は兵士を兵器と勘違いしているようだが、兵士も人間だ。護るべきものの為に戦う存在であり、破壊するだけの存在ではない。俺は、護るために戦う兵士を知っている」

刹那が思い返すのはブレイク・ピラー事件で軌道エレベーターの外壁が崩壊し地上へ降り注ぐのを、CBだけでなく地球連合軍や反政府勢力カタロンが所属等の垣根を超え、地表の人々を護る為に共に外壁の破壊活動を行った事である。

元少年兵であった刹那が人は分かり合えると改めて知った瞬間でもあった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。護るものも、信じるものも無しに力を奮うのは只の暴力だ。お前は相手の事も考えずに、自己満足の為に力を奮っているに過ぎない」

「黙れっ！私は完成された一兵力となる為に、尊敬するあの人の為に戦う！それを邪魔する障害は全て排除する！！」

「それが自己満足と言っただ！何故、分かり合おうとしない！！」

「それ以外必要ないからだ！やはりお前は兵士ではない！奴等と同じ愚図だ！！」

ラウラは話す必要がないと判断し突撃態勢をとる。

ガギンツ！

「…！？」

「模擬戦をするのはいいが、アリーナのバリアーが破壊された上にそのまま戦闘を続ける行為までは教師として黙認出来んのでな」

それを拒んだのは千冬だった。いつもと同じスーツ姿で生身にも関わらず素手で170？を超えるIS用近接ブレードを軽々と扱っ

ている。

「この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「し、しかし教官」

「…警告は一度までだ」

「っ、了解しました…」

「了解した」

「では、学年別トーナメントまで私闘を一切禁止する。解散！」

パアンツ！つと千冬が手を鳴らした音が、拳銃を発砲したかのよう
うにアリーナに響き渡った。

惑う者達（後書き）

最近姉に参考書（別名聖典）が見つかり弱味握られてしまった…（泣）

母娘そろってドSなんだよね…。

束の間の平穩（前書き）

一気に戦闘まで書いてしまおうかと思いましたが区切りのいい所まで。

束の間の平穩

一夏 Side

あれから場所は変わって保健室。

アリーナの一件から一時間が経過しており保健室のベッドでは保健医の先生（ゴメン、名前忘れた）によって打撲箇所には包帯を巻かれた鈴とセシリアが居た。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなあ……。まあ別に感謝されたくてやった訳でもないし俺自身がムカついて乱入しただけなんだけども、刹那には感謝しろよ。あの時刹那が来てくれなければやられてたぞ？」

「だ、だからあのまま続けてれば勝て」

「どうやって？」

「「うっ……」」

二人はああは言ってるが素人の俺から見てもあの状態では勝ち目無かったぞ？

「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」

うん？シャルルが飲み物を持ってきたけど何言ってるのかよく聞き取れなかった。

「ななな何を言っているのか、全っ然っ分かんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別に私はっ！そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

二人とも顔を赤くしてカミカミなセリフを言ってるがどうしたんだ？

刹那とシャルルも溜め息ついてるしよ。

「礼は必要ない。俺も少しばかり私情を挟んでいたからな」

刹那の言う私情って力とか兵士とかのあれか？

ラウラが刹那のことを兵士とかそうでないと言っていたが、刹那の過去に関係しているのだろうか。

いつも俺達の近くにいるのに、時々果てしなく遠くにいる様な感じをさせる。

俺達とは、何か絶対的な差がある様で。

俺達は刹那を嫌ってなどいない。むしろ慕っている。だけど刹那は時折俺達を眩しいモノを見るかの様な目をするのだ。

手に入らないモノを見る人の様『ドドドドドドッ……！』に……って何だ何だ！？

ドカアンツ！

扉が吹き飛んだ（比喻に非ず）。

おおっ、漫画の様な光景をここで見ることになるうとは。

吹き飛ばされた扉を躊躇い無く踏みながら入ってきた 訂正、雪崩れ込んできたのは保健室を埋め尽くす程の女子生徒だった。

「織斑君！」

「セイエイ君！」

「デユノア君！」

うおおっ！？名前を呼ぶ（いや叫ぶか！？）なり、手を伸ばしてくる女子生徒達。軽くホラーだぞこれ！

「な、な、何だ何だ！？」

「い、一体どうしたの？」

「…状況が理解出来ないのだが」

「『『『『これっ！！』』』』」

絶賛混乱中の俺達に突き出されたのは一枚の学内緊急告知文の紙。

「な、何々…？」

「…『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行う為、二人一組での参加を必須とする。尚、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』」
「ああっ、そこまででいいから！」

再び伸ばされる手、手、手、手。いやだから怖いわそれ！

「私と組んで織斑君！」

「私と組みましようデユノア君！」

「私を導いてセイエイ君！」

まずい、皆はシャルルを女だとは知らないのだ。

もし女子と組めば当然一緒に訓練したりもする。その時に女だとはれかねない。

「悪い！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」

しーん……。と女子は一気に静まり返るが一方シャルルは僅かに驚いた顔を、刹那はどこか安堵した顔になった。刹那については同じ事を考えていたようだ。

「まあ、そういう事なら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「織斑君とデユノア君の掛け算ごほんごほんッ、もとい男同士つても絵になるし……」

どうやら納得してくれたようだ。取り敢えずは安心……と考えた俺が甘かった。ハニーチュロスにホワイトチョコとメープルシロップと黒蜜とオリゴ糖をかけたぐらい甘かった。

男子は全てで三人。その内二人が組めば残された一人は必ず女子と組む事になる。その一人とは刹那だ。

刹那は特にこういう事を気にしたりはしないのだが女子の刹那を見る目が半端ない。

こっ、ギラギラとしながら欲望に真っ直ぐでピュアな（？）目をしながら刹那に迫っていく。

伸ばされていた手が全て刹那へと向かっている。向けられた本人は堪ったもんじゃない。

流石の刹那も一瞬だけ目を見開いて直ぐに警戒するように身構える。

そこからの刹那の行動は早かった。

鈴とセシリアのベッドを助走も無しに連続で飛び越え、開いていた

窓から外へ飛び込み前転しながら衝撃を殺して立ち上がり走り去っていく。

この間僅か三秒。

「あつ、逃げた！」

「者共出会え出会えい！」

「捕まえて私に渡してくれた者には褒美をとらずぞよ！」

「ドサクサに紛れて何言ってるのよ!? そういう時は静かに校舎裏に連れ込んでついでにしていそ」

「『『『『『アンタも大概にしろ!!!!??』』』』』」

女子達が刹那を追い掛ける為に全て出払い、保健室は静寂に包まれる。

仕方が無かったとはいえ、罪悪感が湧いてくる。

…刹那、生きて帰れよ…。

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

「あ、あたしと組みなさいよ! 幼なじみでしょうが！」

「いえ、クラスメイトとしてここは私と！」

鈴とセシリアがベッドから飛び出し掴み掛かろうとしてくる。さっきの女子生徒とは違って説得は難しい。序盤にギガン〇スを入力するぐらい。

「ダメですよ」

そこにやってきたのは山田先生だった。突然のニューカマーの来訪に皆驚いていた。

「お二人のISの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可出来ません」

「うっ、ぐっ……！わ、分かりました……」

「不本意ですが……非常に、非常にっ！不本意ですが！トーナメント参加は辞退します……」

はて、どういっつこっちゃ？

「一夏、IS基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三だよ。ISは戦闘経験を含む経験を蓄積することで、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージがレベルCを越えた状態で起動させると、その不完全な状態での特殊エネルギーバイパスを構築してしまう為、それらは逆に平常時での稼働に悪影響を及ぼすことがある」

おお、それだそれだ。中々記憶を手繰り寄せられなかったぜ。

「ところでセイエイ君がいませんね……。ここにいると思ったのですが」

「刹那なら……その、自分を守る為に出ていきました。いろんな意味で……」

シャルルが申し訳なさそうに言う。無論刹那に対して。

「そ、そうなのですか……。早く勝負に出た方が……。いやでも私は教師であつて……」

山田先生がぶつぶつと何か言っている。刹那に用事でもあったの

だろうか？

鈴とセシリア、シャルルはどこか納得した様な顔してるけど何でだ？

「それにしても何で二人はラウラとバトルすることになったんだ？」

「え、いや、それは……」

「ま、まあ、なんと言いますか……女のプライドを侮辱されたから、ですわね」

何だそりゃ？シャルルがまた溜め息をついているがシャルル、溜め息し過ぎると老けるぞ？

刹那Side

「ハア、ハア、ハア……」

……どうしてこうなった。あの時保健室で一夏がシャルルの秘密を隠す為にシャルルと組むと宣言した瞬間、女子生徒達の目が変わった。

あのままにしておいたら大切な何かを失いかけないと判断し外へ脱出したのだが、ここからが大変だった。

女子生徒達が追撃隊を組織して追い掛けてきたのだ。しかも軍隊並みの統率力で。

ただ走って逃げるだけならイノベーターである俺には何の苦にもならないのだが、途中からマウンテンバイクと馬が参戦してきた。

サイクリング部と馬術部だろうが学園の備品をこんな事に使っているのだろうかと考えた俺が甘かった。
戦場で敵に突撃しようとして自分で仕掛けた地雷を踏んでしまうくらい甘かった。

体育館やグラウンドの近くを通ろうとするとバレーボールやサッカーボールが大量に飛んできた。

武道場近くでは矢が飛んできて竹刀を構えた部員が襲い掛かってきた。

……大半が上級生だったのは気のせいだと思いたい。

それから人目につかないよう建物の間や裏を通ったりしてようやく学生寮の自室前に辿り着いたのだ。

幸い部活時間中とあって寮に人は殆どいなかった。

早く部屋に入ってベッドで休もうとドアノブに鍵を差し込んだ時、鍵が開いている事に気付いた。

（侵入者が…？）

エクシアに指示を出してCB仕様ハンドガンを展開（元からあったのは没収されてしまったのでデータを基に新たに製作した）、気付かれないようゆっくりとドアを開ける。

キイ……。

「お帰りなさい、ア・ナ・タ（はあと）」

パタン……。

…疲れているのだろうか俺は。ここまで走ったのは久しぶりだからな。

キイ……。

「ご飯にします？お風呂にします？それともわ・た・し？」

パタン……。

…仕方ない。現実を受け容れるとしよう。

「…もしもし。織斑先生、一年学生寮1026号室にて不審者を「ま、待つて！それだけは勘弁して！！」…」

部屋に侵入していた人物が俺から携帯を奪い取る。別に気にする程の人物ではないからいいが。

「不審者以外何と云えばいい、更識楯無」

「…こうまで冷静に対処されるとおねーさん自信無くすわ。顔を真っ赤にして慌てる君を期待していたのに…」

「そういう趣味は持ち合わせていない。早く服を着ろ」

侵入者こと更識楯無の服装は裸のように見えて実は水着を着た上にエプロンをするというなんとも過激な服装だった。

表向き無反応のようだが内心結構驚いている。しかしここで顔に出すと相手のペースに飲み込まれそうなのでこういう対処をさせて貰った。

部屋を一度出て彼女が着替えるのを待つ。

鍵については彼女は『暗部』の人間である為その技術の一つだろうと判断した。

『もういいわよ』

『…また何かやらかすのならば次こそ通報する』

『しないから大丈夫よ』

更識楯無が自分でドアを開ける。服装は制服であった。誰かに聞かれないよう周囲を確認してから部屋に入りドアを閉める。

「用件は学年別トーナメントについてか？」

「流石に鋭いわね。確かにそうなんだけど、一つ確認しておきたいの。もし仮に以前の『機体』がまた襲い掛かってきたとして、私達に落とせるか」

…どうやら真面目な事のようにだ。

「一概には言えないが、以前と全く『同じ』ならばリミッターを解除したISと教員クラスの腕ならば単独ではなく編成次第では落とせるかもしれない。だが『機体』が本来のスペックならば俺以外に落とす事は無理だ。後は機体の『種類』にもよるが…」

「確かにあの『機体』の出力は危険ね。今回の用件にはそれも関係してるわ」

「また襲撃された場合についての対処…」

学年別トーナメントの形式が急遽変更された理由はこれだろう。もし仮に襲撃された時突入部隊が来るまでの安全性確保の為に。

「そう。刹那君は気付いているだろうけど、刹那君はまだペアを組

んでいないわよね？」

「ああ」

「なら、本音と組んで。同じ学年で事情を知るのはあの娘だけ。いつでも動けるようにして欲しいの」

要は俺が対抗策そのものであると…。

「了解した」

「お願いね。それにしても、この部屋見事に物が無いわね」

以前部屋に（修羅場から）避難してきた一夏にも同じ事を言われたが必要な分の家具は揃えているのだが。

「一応君の経歴は知っているけど、それでも分からないミステリアスなところもおねーさん好きよ」

「…早く戻れ」

つれないわねと言いながら部屋を出ていこうとする更識楯無。彼女が完全に出ていく前に呼び止める。

「一つ聞きたい。何故放置する？」

「何の事かしら」

「…噂の事だ。『彼女』が流した噂を生徒会長であるお前が知らないはずがない」

「ああ、その事ね。モチベーション、つまりやる気を上げる為よ。やる気があれば訓練をするようになり、実力は上がる。そうすれば彼女達が傷付く確率は減るでしょ？後は面白そうだから」

「…そうか」

最後の言葉がなければなと思いながら彼女を見送る。

ISのコアは有限であり、他者から奪うのは簡単ではない。また襲い掛かってくることはそうそう無いかもしれないが、警戒した方がいいだろう。

（一夏を鍛えておかねばな…）

そう考えながら俺はベッドに身を任せた。

束の間の平穩（後書き）

さて、敵さんについても色々と仕込まなきゃ。

信念の刃（前書き）

強引なのはお許し下さい。

原作での表現を多少変えてあります。意味は根本的に変わりませんが。

後書きで原作七巻の内容に少しネタバレがあります。

それは勘弁という方は後書きはご遠慮下さい。

信念の刃

一夏Side

六月の最終週、遂に学年別トーナメントを迎えた。ただっ広い更衣室をシャルルと刹那で独占しながらモニターで観客席の様子を見る。

「しかし、すごいなこりゃ……」

観客席には世界各国政府関係者、研究所員、企業エンジニア等顔ぶれが揃っていた。中には新聞で見るとような人物も混ざっている。

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ来ているからね。一年には殆ど関係ないけどトーナメント上位入賞者はさっそくチェックが入ると思うよ」

「……………」

「ふーん、ご苦労なこった」

「刹那はともかく、一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦しか頭にないよっだね」

「まあ、な」

刹那は表情が変化してないので何か考えているのは分からないが俺はシャルルに言われた通りだ。

鈴とセシリアは結局トーナメント参加出来なかった。二人は代表候補生であり専用機持ちであり、結果どころかトーナメント参加出

来ないのは二人の立場を悪くしてしまう。

あの騒動を思い出し、何も出来なかった事に自然と左手に力が籠もっていた。

「一夏、あまり感情的にならないで。彼女は一年の中で刹那に並ぶ実力者だと思う」

「…ありがとな、シャルル。けど優勝は刹那じゃないのか？代表候補生相手でも負け無しだしラウラとも互角かそれ以上で戦っていたしよ」

「戦いは何があるか分からないものだ。喻え俺が強くても負ける確率は0ではない。ましてや今回はタッグ戦だ。戦い方次第ではいくらでも勝つ方法はある」

むう、刹那は本当に現実主義者だな。決して奢らずどんな事に対しても全力で取り組む姿は俺の目標でもある。

「けど刹那がのほほんさんと組むなんて意外だな。四組にいる専用機持ちと組むとか思ったけど」

いくら刹那でもものほほんさんは苦手らしい。向こうから話し掛けて対応に困っているのを見る事がある。

「…彼女が一番安全そうだったからな」

「あ〜…」

シャルルは納得したみたいだが何だろうか？確かにあの目と手は怖かったがペアを組む為だろうか？

刹那が逃げ出す程の怖さっていうのもすごいけどな…。

「一夏は知らない方がいいよ。…いや、知っている方が安全なのかな。どうなんだろ…」

シャルルなんか結構真面目な顔してるけど何考えてんだ？顔が少し赤い気がするが。

「そろそろ対戦表が決まるな」

本来なら昨日発表されるはずだったのだがシステム不調とか何かでトーナメント当日である今日発表となった。

「俺達はAブロック一回戦目か」

「対戦相手は……」

「え？」

刹那 Side

二人がアリーナで発進準備に入ったのを確認してから更衣室を出て二人と同じピットへ向かう。

俺の試合は随分先だが俺自身があのも『機体』関連への対抗策である為常時警戒態勢だ。いつでも動ける状態である必要がある。

ラウラとの一件から俺は布仏本音との連携訓練をしつつ一夏にワ

イヤブレード対策として超近接格闘訓練をしておいた。近距離でひたすらGNブレードと体術で高速で攻め続けるだけの簡単なものだったがなにもしないよりはマシだろう。

シュバルツエア・レーゲンの『AIC』対策は俺よりも知識のある鈴音とセシリアにまかせた。

：布仏本音の操縦技術については本人の為に黙っておこう。彼女は頭脳派なんだと自分の中で解釈しておいた。

とにかく二人にも組んだ理由を上手く誤魔化したので（本音も混ぜられているが）警戒がてら二人の試合をモニターで観る事にした。

一夏Side

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」
「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

一戦目の相手はそう、ラウラと箒の組だった。箒は前にペアを申し込んできたのだがその時には既にシャルルと組んでしまっていたので断った。
だからといってラウラに頼むのはあり得ないので抽選だろう。

『試合を開始します』

ビーッー

合図と共に瞬時加速を使い『零落白夜』のビーム刀でラウラに切り掛かる。

この一手目が入れば大きな一撃となる。

「おおおっ！」

「ふん……」

「くっ……！」

ラウラが右手をこちらに向けされ、『AIC』によって俺の身体は腕から順に停止させられた。

『アクティブ・イナーシャル・キャンセラー AIC』。別名『慣性停止結界』。ISの浮遊・加速・停止を制御する『パッシブ・イナーシャル・キャンセラー PIC』の応用型第三世代兵器。

衝撃砲と似たようにエネルギーによって制御されているそれはエネルギー波を投射することで目標の慣性を消滅出来る。

エネルギー波なので理屈上『零落白夜』で切り裂けるのだが、俺の動きが読みやすいが為に腕等をピンポイントで停止させられるのだと鈴とセシリアは言っていた。

…言われた瞬間悲しくなったのは秘密だ。

流石に対抗策までは教えてくれず自分で考える他なかったのだが結局分らず仕舞いだった。

ならば、読まれないよう意外性で攻める。

「開幕直後の先制攻撃か。分かりやすいな」

「…そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば私が次にどうするかも分かるだろう」

分かりたくもないが予想はつく。

ガキンッ！

『敵ISの大型レール砲の安全装置解除を確認、初弾装填　警告
！ロックオンを確認　警告！』

リボルバーの回転音に続き白式のハイパーセンサーが警告を発する。

慌てんなよ。何も一対一じゃないんだぜ？

「一夏！」

シャルルがアサルトカノンから放った爆破弾によってレール砲の射線がずらされ砲撃は空を切る。

そのままシャルルは自身の特殊技能『ラビッド・スウィッチ高速切替』によってアサルトライフルを展開しラウラに突撃するが打鉄を纏った箒がそれを阻む。

AICから解放された俺は瞬時加速でシャルルの背中に向かって突撃、シャルルが宙返りをして前後が入れ替わり俺が箒と対峙し、箒の一撃を受け止め膠着したところをシャルルが俺の脇から六二口径連装ショットガン『レイン・オブ・サタデイ』の二挺同時射撃を行う。

シャルルが引き金を引いた瞬間、箒の姿が消えた。何事かと思えばラウラがワイヤーブレードで箒の脚を牽引して遠心力で引き離し、地面に叩きつけたようだ。

箒が怒号を浴びせるが我関せずと言わんばかりにラウラが突撃してくる。

二刀のプラズマ手刀と複数のワイヤーブレードでシャルルを牽制しながら俺に襲い掛かってきた。

『シャルル、無事か？』

『うん。一夏、援護は』

『大丈夫だ。シャルルは箒を頼む』

『わかったよ。一夏こそ無理しないでね』

プライベート・チャネルで短くやりとりをした後、シャルルは箒と、俺はラウラと対峙する。

箒には悪いが先に退場してもらおう。ラウラのシュバルツエア・レーゲンは俺一人で倒せる相手ではない。

ならシャルルと二人で倒せるかと言われればそうとは限らないが、1+1が2とも限らないんだぜ？

「うおおおっ！」

プラズマ手刀とワイヤーブレードの猛攻を刹那のように全身を使って凌ぐ。

刹那程上手く出来ないが刹那が自分の時間を割いてまで特訓してくれたんだ。

ただでは落ちねえよ！

シャルルSide

一夏がボーデヴィツヒさんとぶつかるのを横目で確認しながら目の前にいる篠ノ乃さんに注意を向ける。そろそろ僕も自分のやるべき事をやらなくちゃね。

「相手が一夏じゃなくてゴメンね」

「なっ……！！馬鹿にするなっ！！」

挑発にのせられた篠ノ之さんの斬撃を右手に展開した近接ブレード『ブラッディ・スライサー』で受け止め左手のショットガンで反撃する。

「くっ…！」

僕はよく射撃型と思われるけど、最大の武器は『器用さ』と『高速切替』。

相手の武装と戦法に直ぐ様対処でき、また相手のリズムを崩す事が得意とする。

格闘戦に入れば近接射撃、間合いを離して射撃戦に入れば近接格闘。

『砂漠の逃げ水』ミラーシユ・デ・デザーと呼ばれるこの戦法。

求める程に遠く、諦めるには近く、その蒼色に呼ばれた足は

疲労を忘れ、緩やかなる褐色の死へと誘^{いざな}われる。

「篠ノ之さんに恨みは無いけど、君にはここで倒れてもらおうよ」

一夏Side

ラウラの猛攻に何度もやられそうになるが意地で食らい付く。

「…そろそろ終わらせるか。あの男の真似事など見飽きた」

ラウラがプラズマ手刀を解除し両腕を交差する。

瞬間俺の身体は停止し、ワイヤーブレードで捕獲され、床に叩きつけられた。

すぐに体勢を直そうにもワイヤーブレードによって四肢が絡み取られているので微動だに出来ずレール砲が再び向けられる。

対ISアーマー用特殊徹甲弾が砲口から撃ち出され、真っ直ぐに俺を指して突き進んでくる。

（やられる！）

そう思った瞬間、シャルルが割り込み左腕のシールドによって砲弾は弾かれた。

「お待たせ！」

ワイヤーを切断してから俺の腕を引いて離脱する。

「助かったぜ……。ありがとよ」

「どういたしまして」

「箒は？」

「お休み中」

視線を向けた先にはアリーナの隅でシールドエネルギー残量0、
損傷甚大の箒が悔しそうに膝をついていた。

「流石だな」

「その言葉は試合の後で。ここからが本番だね」

「ああ。見せてやるとしようぜ、俺達のコンビネーションをな」

千冬&真耶Side

「ふわー、すごいですねえ。二週間ちよっとの訓練であそこまで連携が取れるなんて。やっぱり織斑君才能があるんですね」

「ふん、あれはデュノアが合わせているからであってあいつ自身は何の役にも立っていない」

教師専用の観察室のモニターを観ながら呟く真耶の言葉に千冬は
辛口の評価を下す。

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。魅力の無い人間には誰も力を貸してくれないですよ」

「まあ……そうかもしれないな」

ぶすつとした感じで答える千冬だが真耶にはそれが照れ隠しだと知っているので何も言わない。

「しかし、セイエイとデュノアを組ませてみたら面白いかもしれないな」

ふと千冬が口にした言葉に真耶は疑問に思う。

「セイエイ君は近接格闘型ですから、遠距離射撃型のオルコットさんがいいのでは？」

「セイエイは正確には近接格闘主体の万能型だ。そしてオルコットは典型的な遠距離射撃型であり近距離自体あいつの鬼門だ。もしあいつが敵に接近を許したらその時点でセイエイの足を引っ張る」

千冬は淡々と正確な意見を述べる。ミスや欠点等その辺は包み隠さず話すのが千冬らしい。

「それに対してデュノアは射撃主体の万能型。人並み以上に接近戦をこなすような状況にも対応出来る。あいつらの機体の懐の深さによるものもあるだろうが、理想的な組み合わせだな」

千冬の言葉に成程と納得する真耶。確かに刹那は近接格闘を好むが射撃の腕も高い。

大抵の場合機体によって操縦者が選ばれてしまうので操縦者の思い

通りに扱えるエクシアはある意味理想の機体だろう。そう考えるのは彼女らがエクシア本来の運用目的と役割を知らないからだが。

「それにしても篠ノ乃さん、あっしり負けてしまいましたね」

「専用機無しではあんなものだろう。特に篠ノ乃はデュノアと相性が悪い」

「強いですねえ、ボーデヴィツヒさん」

「ふん…」

一対二でありながら互角に戦うラウラに真耶はしみじみと言つが対して千冬は心底つまらなさそうな声を漏らす。

「変わらないな。強さを攻撃力と同一だと思っている。だがそれでは」

一夏とセイエイには勝てないだろう。

最後の言葉は千冬は口にはしなかったが、二人の会話を聞いていると二人がどれだけ刹那に一目置いているかが分かる。

二人はIS学園の教師として刹那の事を人より多く知っているからなのだがそれでも全てを知っているわけではない。とりわけ刹那とエクシアの本領については。そんな事もいざ知らず、二人はモーターを観続けた。

ラウラのAICを急停止・転身・急加速を繰り返して逃げながらシャルルと位置を入れ替わり、シャルルが牽制、俺が『零落白夜』を発動して突きの姿勢で突撃する。

「無駄な事を！」

何度目か分からないが全身が停止する。

「学習能力の無い奴だな。お前の動きを止められれば腕にこだわる理由など無い」

「…ああ、そうだな。けど忘れていたのか？俺達は二人で一組のチームなんだぜ？」

「!？」

AICには致命的な弱点がある。それは目標物に意識を集中させないと効果が維持出来ない事だ。

ラウラが俺を停止させている隙にシャルルが零距离まで接近しショットガン六連射でレール砲を破壊する。

「くっ……!!」

「一夏！」

「おう！」

ラウラがシャルルに意識を向けた瞬間、AICは解除され、再び雪片式型を構えるが、エネルギー切れを起こしビーム刀は消えてしまっ。

「残念だったな。あと一撃入れば私の勝ちだ！」

「やらせない！」

「邪魔だ！」

シャルルがカバーに入ろうとするも、ワイヤーブレードの牽制を食らって吹き飛ばされる。

「うあっ！」

「シャルル！くっ……」

「次は貴様だ！墜ちろ！」

プラズマ手刀が俺の腹にきまり俺の身体は白式ごと床に落ちる。

「は……ははっ！私の勝ちだ！」

「まだ終わってないよ」

「!？」

ラウラが高らかに勝利宣言をするが、次の瞬間シャルルが瞬時加速でラウラの懐に潜り込んでいた。

シャルルが瞬時加速を使える事は知らなかったしそもそも聞いてもなかった。

つまりシャルルはたった今初めて瞬時加速を使った事になる。

「瞬時加速だと!?!?だが、私の停止結界の前では無力！」

ドンッ！

「!？」

AIC発動体勢に入るラウラを一発の銃弾が邪魔する。銃弾を放ったのは真下でアサルトライフルを構える俺だ。

このアサルトライフルはさつきシャルルが投棄したものであり訓練で俺に使用許可を出したものだ。残弾有りの状態で捨てられた時、俺はシャルルのこの二段構え作戦に気付いた。

先程ラウラにトドメを刺されたはずだが白式が堪えきってくれた。ホントによく出来た相棒だ。

「これならA I Cは使えまい！」

「こ、のっ……死に損ないがあっ！」

吠えるラウラだが冷静さは失っておらずさほど命中率の高くない俺の銃撃を無視してシャルルに集中する。

「でも、間合いに入る事は出来た」

「だがどうした！第二世代型の攻撃力では、このシュバルツエア・レーゲンを墜とす事など」

そこでラウラの言葉は止まる。気付いたのだろう、単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた装備がある事を。

それはずっとシャルルが装備していた、シャルルの『切り札（Joker）』。

パンツ！

仕込まれた炸薬によって左腕のシールドが弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が現れる。

六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』^{グレー・スケール}。通称『楯殺し（シールド・ピアーズ）』。

「この距離でバンカー、貫ったよ!!」

シャルルが左腕を突き出す。ラウラは停止させようとするが瞬時加速の勢いを利用したソレは狙いを外れ、ラウラの腹部に吸い込まれる。

ズガンッ！

シャルルの一瞬だけの、死を宣告する天使の様な、眩い程に罪深い笑みと同時に撃鉄が叩きこまれ、その一撃はラウラの身体を打ち貫く。

「ぐっぐっ……!!」

絶対防御によってシールドエネルギーがごっそりと奪われ、それでも相殺しきれなかった衝撃がラウラを襲う。

だがこれで終わりではない。リボルバー機構により連射が可能であるパイルバンカーは続け様に鋼鉄の杭を連続で打ち出す。

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

ラウラの機体に紫電が走り、IS強制解除の兆候を見せ始める。

だが次の瞬間、事態は急変した。

ラウラSide

(力が、欲しい)

遺伝子強化試験体C-0037として生まれ、『ラウラ・ボーデ
ヴィツヒ』という『記号』を与えられた私は、ただ戦いの為だけに
作られ、育てられ、鍛えられた。

常に優秀で有り続けた私は、ある処置によって一度『全て』を失
った。

『越界の瞳』ヴォーダン・オージェと呼ばれるそれは、擬似ハイパーセンサーとも言え
る眼球へのナノマシン移植処理。

理論上では危険性は無く不適合も起きないはずだったが、私の左
目は赤から金へと変色し、制御不能へと陥ってしまった。

この暴走とも取れる『事故』によって私は『出来損ない』の烙印
を押された。

より深い闇へと落ちていった私が、初めて目にした光。それが織
斑千冬との出会いだった。

教官との出会いで私は変わった。教官の教えを忠実に実行するだ
けで再び最強の座に君臨した。

教官を、どこまでも尊敬した。教官に、どこまでも憧れた。
喻え理由が無くても、ただ一緒に居ようとした。

それだけで十分だったから。自分の中から沸々と力が湧いてくるの

を感じるから。

だがあの人の笑顔を見た時、私は『違う』と思った。貴方は、そんな人ではない。そんな優しい笑顔を浮かべる人ではない。私が憧れる『貴方』ではない。強く、凛々しく、堂々としているのが、『貴方』のはずなのに。

だから、許せない。教官にそんな笑顔をさせる存在が。

理由なんかどうでもいい。その存在を破壊する。喻えそれがあの人の『弟』であるとしても。

(力が、欲しい)

ソレを破壊する為の、力が欲しい。

『願うか…？ 汝、自らの変革を望むか…？ より強い力を欲するか…？』

私の中に蠢くナニカが言う。悪魔の囁きの様に。

言うまでも無い。力が得られるのなら、空っぽの私など、全てくれてやる！

だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を私に寄越せ！！

『Damage Level D.
Mind Condition UpLift.
Certification Clear.
《Valkyrie Trace System》 boot.

』

刹那 Side

シャルルの攻撃がラウラ・ボーデヴィツヒにきまった瞬間、ラウラ・ボーデヴィツヒに異変が起きた。

身を裂かんといわんばかりの絶叫の後、彼女のISが『変形』したのだ。

ISには変形機能は無い。人間が装着するパワードスーツなのだから当たり前だろう。

だが、目の前の光景は違った。

硬質の装甲は溶かされた金属の様にドロドロになり、生きているかの様に脈動しながら彼女を包み込んでいく。

それは彼女を包み込んだ後、全身を成形し全身装甲のISとなった。問題はその『形状』だった。

俺の世界のMSの一つであるフラッグ系列の漆黒のフレーム。

頭部の仮面の様なバイザーにクワガタの様なまえだて前立。

伸ばした頭髪のように後頭部から伸びるケーブル。

形状は違えど一本は腰に、もう一本は白式の『雪片式型』に酷似しており右手に握られた二振りの刀。

「スサノオ……!?!」

かつて一度修羅と化した『あの男』が奮った機体。

以前の無人機のようにそっくりそのままではなく、有人の為か彼女の体型をそのまま象った上に『スサノオ』を模した装甲を纏っている。

(あれは、マズい　！)

あの中の彼女から、意志を感じられない。極めて危険な状態だ。

そして何より、意識が無い以上あれは機械同然。機械に手加減など出来ない。

一夏達が危ない。

最悪の事態を避ける為に、俺は走りだした。

一夏Side

「な、なんだよこれ…」

突然の事に対し俺の口から出たのはこの一言だけだった。

シユバルツェア・レーゲンがいきなり鎧武者のような姿に変形したのだ。

それだけではない。
そいつが右手に握る近接ブレード。それはかつて千冬姉が現役時代に奮った『雪片』に酷似して、いや複製とも言っていていい。

チャキ……。

無意識のうちに雪片式型を構える。それに反応してか、シュバルツエア・レーゲン『だったもの』が一瞬で懐に飛び込んで来て、居合い抜きの構えから横一閃。それを雪片式型で防ぐ。

だがそれに繋ぐように次は縦一閃。これは防げないと思い、白式に緊急回避命令を出して後退する。

それでも避け切れず、『雪片もどき』が左腕を擦り血が垂れる。あれは紛れもなく千冬姉の太刀捌き。昔千冬姉に隠れて千冬姉の試合の映像で見たものそのもの。

白式は今ので力尽きたのか光の粒子となって消える。

「……だから、どうしたあああっ!!」

拳を握り締めて殴りかかる。あれだけは、あいつだけは絶対許さねえ!

「おおおおっ!!」

「待てっ、一夏!!」

拳が黒いISに触れる直前に、俺の身体が筭の手によって後ろに引っ張られる。

どうやらあれは武器か攻撃に反応するらしい。ということは俺の拳

は攻撃と認識されなかったというのか。

「離せ箒！邪魔するのならお前も」

「っ！いい加減にしろ！」

バシッ！

箒が俺の頬をはたき、俺の怒りは根元から折れる。

「一体何だと言うのだ！分かるように説明しろ！」

「あいつ……あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉だけのものなんだよ。それだけじゃねえ、あんな、わけわかんねえ力に振り回されているラウラも気に入らねえ。ISとラウラ、どっちも一発打っ叩いてやらねえと気が済まねえ」

あんなのは『強さ』じゃない。あれはただの『暴力』だ。決して『強い』とは言わない。

『非常事態発令！トーナメントの全試合を中止！状況レベルをDと認定、鎮圧の為突入部隊を送り込む！来賓、生徒はすぐに避難すること！繰り返し！』

「理由は分かったがエネルギーも無しにどう戦うつもりだ。それに聞いての通りだ。状況は収拾されるだろう」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要は無い、か？」

「そうだ」

「一夏、箒の言っていることは正しい」

「刹那！？」

どうして刹那がここにいる！？まさかまた突入部隊って刹那のこ

とか!?

「アレは俺の専門だ。二人はシャルルを連れて退避しろ」

刹那の専門? 以前の無人機の時も刹那一人だったがそれと関係してるのか?

いや、そんなこと言ってる場合じゃねえ。

「嫌だね。俺が『やらなければいけない』んじゃないんで俺が『やりたいからやる』んだ。俺が『織斑一夏』である為に、こんな所で退けねえ」

「ええい馬鹿者が! 大体エネルギーも無しに」

「:シャルル、エネルギーが残っているのなら白式に譲渡しろ」

「刹那!?!」

シャルルが近寄ってくるやいなや俺に戦闘に参加しろと言う。

さっきまで筈の味方だった刹那がどうして…。

「エクシアの武装では威力があり過ぎるからな。ここは白式の『零落白夜』でシールドエネルギーを削った方が、安全に彼女を救出出来る」

確かにそうだろう。だが俺はその目を見て表向きとは違う刹那の真意を理解した。

「確かに、僕のリヴァイブならコア・バイパスで出来るかもしれない。一夏、白式を一極限定モードにして。そうすれば『零落白夜』を使えるようになるはずだから」

「頼む、シャルル!」

シャルルのリヴァイブからケーブルが伸びて待機状態の白式へと繋がれ、エネルギーが送られてくる。

リヴァイブに残っていたエネルギーが全て白式に送られると、リヴァイブは光の粒子となって消え、代わりに白式の右腕と雪片式型のみが構築された。

エネルギー量を考えてとチャンスは一回が限度だろう。

「一夏、絶対に負けないと約束して」

「もちろんだ。ここまでお膳立てしてもらったからな」

「い、一夏！絶対に死ぬな！」

「何心配してるんだよ。俺を信じるよ。必ず勝って帰ってくる」

俺は、力ではない『強さ』を知っている。

誰かを護る為に強く有り続けた人を誰よりも知っている。ならば、俺も誰かの為に強くありたいと願う。

「一夏、俺が動きを止める。その隙に、お前の信念をアイツにぶつける」

「ああ、分かった」

刹那がGNソード改を構えてアイツに向かっていく。

俺はここで己が信じるもの胸に秘め、静かにその時を待つ。

刹那 Side

あれから、俺は織斑先生にあの機体は『俺の世界』関係だと説明

し、単独行動を許可された。もしも場合は教師部隊が介入するという条件で。

そして三人を避難させようと思ったが、一夏はやめた。彼はその目に『信念』と『決意』を宿していたからだ。ならば彼にやらせよう。

その信念を、最後まで貫け。

GNソード改を片手に黒いISに接近する。

向こうはこちらの動きを感じ取ったのか動きを見せるが、その動きは先ほどまでとは違った。

盗み聞きしていたようで悪いがあれば織斑先生の動きだと。ということは姿は『スサノオ』でも動きは彼女の戦闘パターンを再現しているに過ぎないと思っていた。

だが俺が接近した途端、右手の近接ブレードだけでなく腰に差したもう一本の近接ブレードを左手で抜き取り、二刀流で構えたのだ。

そのまま高速機動でその二本の近接ブレードを振るう様はまさしく『あの男』の動きだった。

俺はGNソード改とGNブレイドSで応戦する。

右からの斬撃をGNソード改で受け止め、左からの斬撃をGNブレイドSで弾く。

俺の右側に回り込んでからの突きを必要最低限の動きで回避する。

動きや戦い方は『あの男』のものだが、それはデータでありあくまでコピーだ。『あの男』本人には遠く及ばない。

俺は戦いながら口で彼女に語り掛ける。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前は戦う事しか出来ないと、それでは生きていけないと言ったな」

彼女は俺に似ている。戦いを強要され、戦う事しか出来なかったところが。

「だが戦いとして、相手を傷付ける事だけが戦いではない。生きる事も、自分の信じる事をやり通す事も戦いだ」

そして俺が戦う理由。それは

「俺は、生きる為に戦う。喩え矛盾を孕んでも、足掻き、存在し続ける」

『あの男』との決闘で言った言葉を、今再び紡ごう。

「それが生きる事だ!!」

GNソード改を一閃。データで真似ただけの『あの男』の偽者は両手から得物を弾き飛ばされてしまう。

「一夏!」

「応!!」

一夏が雪片式型を正眼に構え彼女に突撃する。

いつもはエネルギーを放出するだけの『零落白夜』が、今回は一本の、闇の中の一筋の光の様な刀となっていた。

（それが、お前の信念の顕れか　　）

一夏が振りかぶり、それに黒いISが反応する。

動きは織斑先生のものとなるが、それもまた偽者だ。得物も無しにどうする事も出来ない。

そして一刀両断。

黒いISが真っ二つに割れ、中から眼帯が取れ金の瞳が顕わになったラウラ・ボーデヴィツヒが倒れてきたのを一夏が受け止める。その目はひどく弱々しかった。助けを求める様に。

「まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ」

それを悟ってか、一夏はそう呟いた。

ラウラSlide

教官に『強さ』について尋ねると教官は必ず笑顔を見せながら弟の事を語った。

ああ、私は羨ましかっただけなんだ。
教官にそんな顔をさせる存在が。

『強さ』とは何なのか。その答えは無数にあるだろう。けれど、その答えの一つに、強烈に出会ってしまった。

『強さってのは心の在処。己の拠り所。自分がどうありたいかを常に思う事じゃないかと、おれは思う』

……そう、なのか？

『そりゃそうだろ。自分がやりたい事がわからないなんて、歩き方を知らないもんだ。どこへ、どうして向かうか』

……どうして、向かうか…。

『自分がやりたいようにやらなきゃ、人生じゃねえよ』

……では、どうしてお前は強くあるうとする？どうして強い？

『強くなんかない。俺は、全く強くない。それでも、強いのは強くなりたからだろ』

……。

『それに、強くなったらやってみたい事がある。強くなったら、自分の全てを使って誰かの為に戦いたい。誰かを護りたい』

……それは、まるであの人の様だ。

『そうだな。だから、お前も護ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッ

』

……その言葉に、私の胸はひどく衝撃を受けた。
ときめいて、しまっているのだ。

こいつの前では、私もただの十五歳なのだ。

織斑一夏。これは、惚れてしまいそうだ。

信念の刃（後書き）

コア・ネットワークによる共鳴と脳量子波は遠くまた近いものだと
解釈しております。

後々重要な役割を担うことになりそうですが…。

原作七巻読みました。

あれ？束さんが対話から駆逐対象になりそうなの…？

新たな『私』（前書き）

私怨が八割ぐらい含まれています。でも原作と余り変わらない…。

新たな『私』

ラウラSide

「う、あ……………」

まぶたに光が当たっているのを感じて私の意識は覚醒し、目を開けた。消毒薬の匂いからどうやらここは保健室のようだ。

「気が付いたか」

その声は……………忘れもしない。どこで聞こうと一瞬で判別出来る、敬愛してやまない教官の声だ。

「私……………?」

「全身に無理な負荷が掛かったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろうから無理するな」

その言葉は、どこかはぐらかした感じがする。今の私にはデュノアから攻撃を受けた辺りからの記憶が無い。

「何が……………起きたのですか……………?」

上半身を起こそうとして全身に痛みが走る。だがここで聞き逃す訳にはいかない。

あの後、私に何があったのかを知る為に。

「ふう……………。一応、重要案件である上に機密事項なのだな」

その言葉の裏から、今から話す内容は他言無用である事を理解する。

「VTシステムは知っているな？」

「はい……。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のIS世界大会『モンド・グロツソ』の部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれば……」

「そう、IS条約で現在どの国家・組織・企業に於いても研究・開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積み重ねられていた」

「……………」

「巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体のダメージ、そして何より操縦者の意志……。いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい。」

「現在学園はドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

操縦者の意志……。私の願望……。それは……。

「私が……。望んだからですね」

……。貴方に、なることを。

その言葉を口にはしなかった。いや、出来なかった。私になるうとしていたのは教官の様な強い人間ではなく、『織斑千冬』そのものだったから。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

「は、はい！」

突然名前を呼ばれ、驚きながらも教官に顔を向ける。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……。私……は……」

……。私は、誰なんだろうか。私は『ラウラ・ボーデヴィツヒ』である、言うことは出来なかった。

私は『織斑千冬』になろうとしていたのだから。

「誰でもないのなら、丁度いい。お前はこれから、『ラウラ・ボーデヴィツヒ』になるがいい。

何、時間は山の様にあるぞ。何せ三年間はこの学園に在籍しなければいけないからな。その後も死ぬまでは時間はある。たっぷり悩めよ、小娘」

「あ………」

教官が励ましてくれた。あんなにも厳しかった教官が、こんな私を励ましてくれた。

思ってもいなかった事に私は何を言えばいいのか分からなかった。

「さて……。その男子、用があるなら盗み聞きしてないでさっさと入ってきたらどうだ」

「え……？」

「……気付いていたか」

「ふん、本気で気配を殺してもいないのによく言っ」

保健室のドアを開けて入ってくるのは、私と対等どころかそれ以上に戦ってみせたあの男、刹那・F・セイエイだった。

私が気付かなかったのに本気ではなかったとは、本当に何者なんだろうか。

「教官、この男は……」

「織斑先生だ。こいつなら問題ない。関係者である上に口も堅いし信頼出来る男だ。何ら問題ない。」

私は席を外すでしょう。ああ、お前は私にはなれないぞ。アイツの姉は、こう見えても心労が絶えないのさ」

そうやって教官は部屋を出ていく。残るは私と刹那・F・セイエイだけだ。

「無理はするな。楽な姿勢で聞いてくれればいい」

そう言ってこいつは壁に自分の体をもたれさせて話し始めた。

「VTシステム発動後の記憶は無いのだったな」

「……ああ」

「VTシステムを止めたのは俺と一夏だ。とは言っても俺は動きを止めただけだな」

「お前は私に恩を売り付けに来たのか？」

「いや、お前は昔の俺に似ていると思っただけ……」

私が昔のこいつに似ている？一体どこが似ていると言うのだ？

「俺は幼い頃にテロ組織によって洗脳され、信仰の為に戦って死ぬば『神』になれると信じ、少年兵として戦場を渡ってきた。」

それからは、俺は戦う事しか出来なかった」

『戦う事しか出来ない』。そしてこいつは『神』に、私は『織斑千冬』という絶対になる事が出来ない存在になろうとした。

それが昔のこいつと私の共通点。

「俺は、罪を背負い穢れていった。そして気付いた。この世界に『

神』などいないと」

その言葉に私はもしかしたらこいつは人を殺したことがあるのではと思った。

こいつの目は嘘を語ってはいない。もしそうであつたら私とこいつの間はとてつもなくかけ離れているのではないのだろうか。

私は戦う為に生み出されたが、一度も人を殺した事は無い。

「俺は組織を抜け、そして知った。人は、互いを傷付け合う事無く分かり合えると。」

ならば、俺は生きる為に、人類の明日を護る為に、未来を切り開く為に戦うと誓った」

護る為に戦う。それは教官とあいつと同じ……。

「戦う事しか出来ないとはいっても、相手を傷付ける事だけが戦いではない。それも俺が改めて知った事だ」

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中にある言葉が浮かんだ。いつ聞いたのか分からないが、私の心に深く刻み込まれた言葉が。

「……『生きる事も、自分が信じる事を貫き通す事も戦い』」
「……そうだ。記憶には無くても届いてはいたようだな。」

俺は変わった。組織とは違うが、かつての仲間にお前と同じように軍によって戦う為に身体を改造されたり、生み出された奴らがいたが、彼らもまた俺と同じように変わった。

だから、お前も変わる。『ラウラ・ボーデヴィツヒ』という一人の人間として、自分の意志で何をしたいのか考える」

私も変わる……。自分の意志で生きられる……。

「この話は誰にも言わないでおいてくれ。彼らにはまだ早い。それと一夏だが、あいつはまだ実力もないし甘い所もあるがそれでも自分なりの信念を以て強くなるうとしている。

だから待ってやってくれないか。もし間違った道に進もうというのなら俺達が正してやればいい」

そう言ってこいつ……刹那もまた部屋を出ていった。

その背中が、とても大きく、頼もしく見えた様な気がした。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』は、今ここから、始まるのだ。

千冬 Side

あの後千冬は、保健室のドアの向こうで刹那の話を立ち聞きしていた。

悟られないよう気配は消しているが恐らく刹那には気付かれている。だが承知の上だ。

(少年兵として、罪を背負い穢れてきた……か……)

テロ組織の少年兵。そしてその罪。間違いなくセイエイは人を殺している。

その数は一人二人どころではない。

そこから変わったというこいつは、人類の明日を護る為に戦うと言った。それはこいつなりの『贖罪』なのだろう。今まで奪ってきた命よりも多くを救う。

喩え敵対してでもまずは分かり合おうとする。一人でも救う為に。それはこいつがここに落ちてきた日に言っていた事だ。

何の代償も無しに人は『得る』事は出来ない。

本やテレビのヒーローの様に綺麗事では済まない。

『エクシア』という天使の名を冠す機体を扱うセイエイ。それはまさしく、どれだけ傷付きながらも決して翼が折れる事が無かった天使。

(セイエイなら、『あいつ』を救えるかもしれんな……)

それは賭けに近かったが、それでも刹那なら出来るかもしれないと思えた。

そう思わせるナニカが刹那から感じ取れたからだ。

(そろそろ仕事に戻るか……)

千冬は音を立てずその場を離れていく。刹那の言葉を胸に刻み付けながら。

あの後事情聴取が行われ、それが終わった後俺達は食堂で夕食を摂っていた。

俺についてはあの『スサノオもどき』について後日生徒会を含め話し合う事になっている。

ラウラに話している時織斑先生に聞かれていたが彼女なら問題無いだろう。

『トーナメントは事故により中止となりました。ただし、今後の個人データ指標と関係する為、全ての一回戦は行います。場所と日時の変更は各自個人端末で確認の上』

食堂のテレビで今後の予定が放送されると同時に、女子生徒達が酷く落胆していた。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわああああんっ！」

バタバタバタッ！

「どうしたんだろっね？」

「さあ……？」

「……」

……ああ、あの件か。トーナメント自体なくなった以上あの件は無効だろう。

あの件……もとい噂の元凶は布仏本音だった。

あの日筈の宣言を偶然聞いた彼女は悪戯心で内容を改竄して流したそうだ。連携訓練の時間い詰めたら自白した。

生徒会長公認……いや、黙認の為姉でありながら生徒会長こと更識楯無の従者である布仏虚は口出し出来なかったが教師陣によって反省文提出となったそうだ。

そして噂諸々の発端となった箒は放送を見て……白くなっていた。死体よりも無機質に白かった。

仕方ないだろう。彼女の宣言はトーナメントがあつてこそ意味があるのだから。

そんな箒を見て一夏が彼女に話し掛ける。

「箒」

「……………（ピクツ）」

反応有り。屍ではなかったようだ。

「先月の約束、付き合ってもいいぞ」

「……………な、なに？」

「だから、付き合ってもいいって……………おわっ!？」

箒が意識を取り戻し一夏に掴み掛かる。何故だろうか、嫌な予感しかししないのだが……………。

「ほ、本当、か？本当に、本当にそうなのだな!？」

「お、おう」

「な、何故だ？り、理由を聴こうではないか……………」

「そりゃ、幼なじみの頼みぐらい聞かさ。買い物ぐらい」

びぎっっ！

篝の顔が怒りに染まっっていく。以前写真で見た般若面の様だ。

「そんな事だろうと思ったわー!!」

バキッ！ドカッ！

「ぐふおっ!?!」

キレのいい正拳突きから鳩尾への鋭いミドルキック。彼女は剣道の他に古流武術とやらをやっていたと聞いていたから流石に筋が良かった。

「ふん！」

「ぐぐぐお……」

そのまま篝は怒り心頭で食堂を去っていき一夏は床に伏している。

「一夏ってたまにわざとかじゃないかと思う時があるよね」

「ど、どどういう意味だそりゃ」

「さあね」

それはシャルルに賛成だ。だが俺も時折一夏と変わらないと言われる。

ELSとの対話の前まではイノベーター故に他人の感情を敏感に察知してしまう事に悩んでいた。

その人の心の中まで勝手に入り込む様で、疎ましく思っていた時期もあった。

それなのに鈍いと言われると何か釈然としないのだが……（実は刹那は篤達が一夏に好意を抱いている事を彼女達の積極的（かつ恋愛要素を含む肉体的）なアプローチによって確信したに過ぎない）。

「そついやシャル、聞きたい事があるんだけどさ」

「うん、僕に答えられる事なら何でも聞いて」

「ISつてさ、プライベート・チャンネルとは違うなんか二人だけの空間での会話って出来るのか？」

「うん？うん……何か聞いた事はある気がする。IS同士の情報交換ネットワークの影響だって言われてるんだけど、操縦者同士の波長が合うと特殊な相互意識干渉が起こるっていう、あれかな。

でもISは未だ未解明な所が多いし制作者の篠ノ之博士も全て発表してないどころか失踪中だしね。

以前何かのインタビューでISは自己進化するように設定した部分があるから、本人も全て把握するのは無理だって言ってた気がする」
「うわ、東さんらしいな、それ……」

何時の間にやら復活していた一夏がシャルルに質問していた。

しかし特殊な相互意識干渉という……ラウラ・ボーデヴィツヒを助けだした時に感じた違和感だろうか……。

脳量子波と似た感覚だったが微弱だったが故に上手く感じ取れなかった。

波長の同調によって相互意識干渉を起こすとはまるでイノベイドやイノベーターの様な……。

ISそのものにも自我の様なものがあるらしいので、もし仮にツインドライブでトランザムを発動したら何らかの影響があるかもしれない……。

「あ、セイエイ君に織斑君とデュノア君、ここに居ましたか。さっ

きはお疲れ様でした」

考えている間に山田先生がやって来た。

「山田先生こそ。ずっと手記で疲れなかつたですか？」

「いえいえ、私は昔からああいった地味な作業が得意なんです。心配には及びませんよ。」

「そうそう、それよりも朗報です！」

両手拳を握り締める山田先生を見て一夏が恥ずかしそうに顔を背けるがどうした？

「なんとですね！遂に遂に今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！そんなんですか！？てつきり来月からになるものとはかり」

「それがですねー。今日は大浴場のポイラー点検日だったので元から使えない日だったんですが、点検はもう終わりましたからそれなら男子三人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

「有難うございます、山田先生！じゃあ早速、風呂に……あっ」

どうやら男子の大浴場使用の目処が立ち、今日は特別に使えるらしいのだがここで一夏が漸く気付く。

シャルルが女だという事に。

「？どうかしましたか？」

「あ、いや、その……」

山田先生はシャルルが女だという事は知らない。

ここで下手に庇うと怪しまれかねない。

「俺は少し調子が悪いからすまないが今回は遠慮させてもらう」
「あ……………」

山田先生には悪いが俺が断らせてもらう。一夏はシャルルと相部屋だからどうにかなると思うが…………。俺自身も『仕込み』があるしな。だが礼ぐらいは言わないといけな
いだろう。

「…………だが、この事については感謝する。次の機会に使わせてもら
う」

「い、いえ…………！そんな…………／／／」

どうして赤くなる山田先生。そしてシャルルも何故溜め息をつく。

「で、では私は先に行って鍵を開けて待ってますから二人は着替え
を持って来て下さい！」

小走りで食堂を去っていく山田先生。別に急ぐ必要はないと思
うが。

「刹那、裏切ったな…………！」

「すまないが、ああする他なかった。俺自身用事があったからな」

「ま、まあまあ二人共。取り敢えず着替え取りに戻るうか」

「はあ…………。何かしらの名案が思い付くのを天に委ねよう…………」

溜め息を吐きながら一夏が歩いていく。しかしシャルルは残って
いた。

「…………」

「いや、ね、お礼を言いたくて。」

僕も決めたよ。僕は父の傀儡じゃなくて『僕』という個人で生きていく。
三年間しかないけど、その間までにどうするかも考えるし、一夏が護ってくれるしね」
「そうか……」

シャルルも新たな一歩を踏み出せたようだ。それは父親と決別し、一人の人間『シャルル・デュノア』として生きていく事。
だからと言って俺のやる事は変わらない。彼女らの未来を切り開くまでだ。

「じゃあ、行ってくるね刹那」
「ああ」

走っていくシャルルを見送りながら『仕込み』について考える。
『仕込み』とはフラッグのリニアライフルとソニックブレードのデータをデュノア社に匿名で送り付けシャルルへの強制力を低下させるもので、送り付ける時期について考えていたのだがどうやらそう遠くないようだ。

こつちの世界では古い技術とはいえ片手サイズの電磁投射砲に出
力調整でプラズマ刃を展開出来る高周波ブレード。この世界では十
分魅力的な技術だろう。
応用次第では第三世代機対応の技術となるかもしれない。

だが送った兵器のデータが争いの種にならないようにデータの一
部をブラックボックス化したり抜き取らせてもらった。
解析と再現に時間が掛かれば運用段階に至るまでかなりの時間を要
する。争いの種になりかねない物を簡単にやる訳にはいかないのだ。

思考を一区切りして寮の自室へと向かう。データの仕上げをエクスピアに任せシャワーを浴びてベッドに入り、夜は過ぎていった。

一夏Side

あれから翌日、教室でSHRの開始を待っている訳だが、シャルル……いや、シャルロットはいなかった。
シャルロットとはシャルルの本当の名前だ。昨日詳しく言えないが大浴場にて二人きりの時はそう呼んで欲しいと言われたのだ。

何があつたのかは口が裂けても言えない。言ったら最後、境目一つ向こうの世界から処刑されそうな気がする……って何か電波が言ってたような……。

とにかく、朝食の時に『先に行つてて』と言われ今に至るのだ。まあ実はラウラもないのだが理由は知らん。

「み、皆さんおはようございます……。今日は、ですね……。皆さんに転校生というか、既に紹介は済んでいるといえますか……。とにかく紹介します……。」

山田先生が何か精神的に疲れた感じでやってきたが……朝の占いで最下位だったとか？

そんな事より気になるのは『転校生』という言葉。

今月は既に二人も来ているというのにまだ来るのか？

「じゃあ、入って下さい」

ドアが開かれ、一人の女子生徒が入ってくる。……ってはい？

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

開けてみたらまあびっくり！じゃなくて入ってきたらまあびっくり……って変わらねえよ！！

入ってきたのはスカートを履いたシャルロットだった。山田先生の憂いの理由も分かって万事解決とはそうは問屋が卸さなかった。

「え？デュノア君って女……？」

「……美少年じゃなくて美少女だったわけね。ああ、男の娘が……」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは」

「ちよつと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

あははー。何でしょう、たった今『神への最後の懺悔は済みましたか？震えながら命乞いをする準備は万全か？』という声が頭の中に響き渡りました。男の多重音声で。

何か『シャルロット党』なる言葉が頭をよぎったような……。

「一夏あつ！」

ドアが凄まじい勢いで開けられ、鈴が烈火の如く怒り一色で現れ、IS展開と同時に衝撃砲がフルパワーで放たれる。

「死ねっ！！！！！」

俺、これを生きて還ったら旅に出よつと思つんだ。

が
！
って死亡フラグ建ててる場合じゃなくてこのままじゃ明日の朝刊

『哀れ高校一年生男子、同学年女子に殺害される。死体は原形を留めておらず、クラスメイトは口々に悲しみの声を漏らす』

『潰れた熟したトマトでした』

『またはザクロでした』

『昔はのう、よくカエルの肛門に藁を突っ込んで、そこから息を吹き込んで膨らませてから破裂させて遊んだもんだよ』

おい、最後のやつ無茶苦茶残酷

ズドドドドドオンッ！

さよなら、青春……っじゃなくて俺生きてる！？

「……………」

恐る恐る目を開けて見ると目の前にいたのは漆黒のISを纏ったラウラだった。

よく見るとレール砲がないが得意のAICで衝撃砲を無力化したよ
うだ。

「助かったぜ、サンキュ。っていうかお前のISもう直ったのか？
すげえな」

「……コアは辛うじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」
「へー。そうなん むぐっ！？」

へっ？何でラウラの顔が目と鼻の先にあるんだ？というか唇に何か押し当てられているような　　ってキスされた！？

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「……嫁？婿じゃなくて？」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わしだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

人間混乱し過ぎると逆に冷静になるようだ。つつこみが出てしまった。

それよりもラウラにそんな事吹き込んだ奴、今度日本の文化についてゆっくり話し合おうか。

「アンタねえええっ！！」

おおっ！気付いたら鈴が衝撃砲発射態勢に入ってるし！

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者サイドだ！！」

「全っ、部っ、アンタが悪いに決まってるでしょうが！！」

どういう理屈だそりゃ！

駄目だ、今の鈴には暴れだしたゴ○ラの如く言葉は通じない！

故に俺は走って逃げようとするがふと見たらセシリアがスターライ

トmk？を構えて　　！

ビシュンツ！

バシィッ！

間一髪刹那がシールドを展開して防いでくれた。

ありがとう！刹那！心の友よ！！

「どきなさい、刹那！」

「そうですね、刹那さん！」

「今すぐそいつを叩き斬らねばならんだ！」

「刹那、そこをどいて……」

鈴、セシリアに加え箒とシャルロットもかよ！？

俺の周りはいんなのばっかか！？

「……どういうつもりだ。無抵抗な生身の人間に対して武器を、しかもISの装備を向けるとはな」

「「「「うっ……」「」「」

刹那怒ってるな……。そりゃISの装備を生身の人に向けてはいけない。箒は真剣なんだけど武器には変わり無い。

「力は一時の感情に任せて振るうものではない。力を持つ者ならそれを自覚しろ」

「「「「……」「」「」

その言葉に鈴達四人どころかクラス全体が静まり返る。それだけ刹那の言葉は重かった。

「……それでも気持ちを抑えきれないのなら放課後の特訓で模擬戦でもすればいい」

「そうよね！それがいいわね！」

「名案ですわ！ではまず私から……」

「待て、セシリア。私が先だ」

「ほらほら、皆落ち着いて。順番にやるかそれとも皆一斉にやるかどっちかにしようよ」

ぎゃあああああつ！？刹那なんて事言ってくれたんだ！お前は俺の味方ではなかったのか！？

「お前にも非はある」

なんだよそれ！訳分かんねえよ！

今日一日、迫り来る放課後（恐怖）に震えながら授業を受ける事になった俺だった……。

新たな『私』（後書き）

学園に入学して刹那も少しは柔らかくなっただのかな…？

次回断章を投稿した後に番外編になるかも。いつになるかさっぱり分からないかも。

P・S・また性懲りもなく次回より先に物語の結末の展開を練っていた時、束さんと対話したら束さんフラグが建つてもうた！？

断章 一人兎は何を望む(前書き)

断章は基本物語に関係しつつ短いながらも重要な所だったりします。

断章 一人兎は何を望む

「むーん……」

カタカタカタカタ……

そこは外界から完全に隔離された空間。日の光は決して入り込まず、無造作に置かれた電子機器の画面から放たれる光のみが空間を照らしている。

その画面の一つに向かい合っている、メカニカルなウサミミを付け『不思議の国のアリス』の主人公アリスと同じ格好をした一人の女性。

自称一日に三十五時間生きる女。ISを開発した張本人、篠ノ之東である。

「むーん……この天才東さん謹製『ゴーレム？』をこんな魔改造してくれちゃったのはどこのどいつかな？」

その声色と表情は自身の作品を弄られた怒りと未知の技術の発見の喜びが入り混じった複雑なものだった。

東が見つめるその画面に映るは赤み掛かったオレンジの粒子を放出するメカニックグレーの機体。

それは以前クラス対抗戦で乱入してきた『レグナント』であった。

東はこのクラス対抗戦の為に世界初の無人IS一号機『ゴーレム？』を開発した。部屋の中にはその同型機が何体か置かれている。

そしてその機能テストの為に電波、光学、熱感知等に対しあらゆるジャミングをした上で公海上空で起動させたのだが、奪われた（・・・）のだ。

突如監視モニターに未確認のISが現れ、ゴーレム？を襲撃、無力化し奪い去っていったのである。追跡しようにもレーダーに反応せず、操縦者の顔も隠されていたので洗い出すのも無理だった。

唯一の手掛かりはその機体は画面に映るレグナント同様オレンジの粒子を放出している事だけだった。ゴーレム？の存在は束以外知らないはずだし、そもそも絶賛逃亡中の束の秘密ラボの情報すら無いのだ。

これを受けて束はラボを別の場所へ移し、プロテクトやセキュリティレベルを上げた。元のラボにはネジー本残されていないしデータは全て消去、また他のラボについてもネットワークからの侵入を避けてそれを寸断している。

そしてクラス対抗戦当日になってみれば奪われたゴーレム？と同じコアの反応を持つレグナントが以前より性能を格段に上昇した状態で現れたのだ。

ISコアは束以外造る事は出来ない。そういうものなのだ。ただコア一個ならまだしも自分の知らない技術を持っているのなら脅威の他ならない。

いや、束にとってはそれすらもどうでもいい事なのかもしれない。知らないのなら理解すればいいだけだから。

『若頭！猫又組の鉄砲玉がお頭を！』

『んだとおらあ！お頭は無事なんだろおな！？お前ら力チコミじゃ！チャカ（銃）持て！バラして生コンで海捨てたるぞ！！』

『おらあ！警察だ！大人しく出て来いや！！捜査状だって出てんだぞ！！』

『わ、若頭！サツだ！マルボウ（四課）だ！ガサ入れだあ！！』

『んなあにい！？畜生、こうなったらシャブは隠し戸から運べ！若えのは壁となつて時間稼げ！先生、お頭をおねげしやす！！』

『別に殺つてしまつても構わんのだろう？』

……言っておくがこれは携帯の着メロである。どこかの組の抗争やら摘発ではない。

あと最後の先生はどこぞの『紅い弓兵』ではない。隻眼で着物を着て日本刀を持っているから弓兵ではない。何度も言つが弓兵ではありません。あしからず。

「こ、この着信音はあ！トウッ！」

どこぞの仮面戦士顔負けの見事なジャンプをしながら携帯のある場所へと突っ込む束。物にぶつかろうが散らばろうが気にしない。

「…お嬢ちゃん、今日の下着は黒だね？」

『……………』

ブツッ

「わーっ！待って待ってえ！」

『若頭！ねk「はい、みんなのアイドル・篠ノ之束ここに参上！お久しぶりだね、ちーちゃん！」』

『その名で呼ぶな』

『おっけい、ちーちゃん！』

『……はあ。まあいい。今日は聞きたい事がある』

『何かしらん？』

『お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？』

『今回の？はて？』

『VTシステムだ』

「ああ、あれ？うふふ、ちーちゃん。あんな不細工な代物、この私
が作ると思っかな？

私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？すなわち、作るものも完璧に
おいて十全でなければ意味が無い。

というか忘れていたけど、つい二時間前にアレを作った研究所には
地上から消えてもらったよ。言わなくても分かっているだろうけど
死亡者0ね」

『…そうか。邪魔したな』

「うふふ、ちーちゃんの為なら何時でも何処でも！

そうそう、ちーちゃん。どうやらそっちに面白い子がいるようじゃ
ないか」

『…さあな。最近忙しくて生徒の面倒が見きれんからな。またな』

ブツツと電話が切れ、それを名残惜しそうに見つめる束だったが
二分後には先程とは違う画面にその顔が向けられる。

そこには『二人目』^{イレギュラー}の異端である少年の顔写真とその『表向き』
の経歴が映されていた。

隣の画面にはその戦闘映像と専用機の『表向き』のスペックデータ
があった。

束は何度かIS学園にハッキングを仕掛けているうちにこれらに對して多大なる『興味』を持った。

レグナントとは色違いだが粒子を放出し、『表向き』のデータでは説明出来ない未知の技術に溢れた不可解な機体に。そしてそれを乗りこなし、本来なら『一夏にしかありえない』はずの、何処からともなく現れた少年に。

『表向き』のデータが全て真つ赤な嘘だと束は知っていた。だが本当の情報を得る事は出来なかった。

レグナントの事も未知の技術の事も、知る事は出来なかった。

それもそのはず、レグナントや粒子を発生させるもの、彼らの本当のデータは学園のメインサーバーとは別の、本人達の希望での対ハッキングの為に作られた独立した別のサーバーに保存されていたからだ。

だからこそ、束はあの『三人』以外に初めて『興味』を持った。

「うふふふふ……。この束さんに興味を持って貰えた事に感謝したまえよ、刹那・F・セイエイ君」

その笑顔はひどく妖艶で、『逃がさない』とその目が語っていた。

断章 一人兎は何を望む（後書き）

次回、番外編。

あらかじめ言っておきますが、キャラ崩壊が著しいです。そしていつになるか本当に分かりません。

番外編 刹那は心に大変なトラウマを負ったようです(前書き)

～警告～

お待たせ致しました、初番外編です。

今回はキャラ崩壊が著しくなっております。こんなのは〇〇〇じゃないと思う方は今すぐ引き返す事をオススメします。

それでも大丈夫な方はかーなり難産でしたがお楽しみ頂けると幸いです。

ハーミット様ネタ提供有難うございます！

～おまけ～

中の人ネタでどうしても小説中では再現不可能なネタ。

真耶「……………」

ティエリア「……………」

真耶「帰りましょう、兄さん」

ティエリア「君と僕は初対面のはずだが!？」

千冬「逃げるな!卑怯者!?!」

ティエリア「貴女とも初対面のはずなんだが!？」

「ラウラ」しっかりしろ！

「ティエリア」いやしているんだが！？」

番外編 刹那は心に大変なトラウマを負ったようです

これは、決して公式の記録に載ることない闇に消え去った物語である。

刹那Side

タッグバトルの一件から数日、平穏な日々が戻りシャルロットは本来の性別に戻りラウラもクラスの人間と少しずつ打ち解けてきた。その間に二人から名前で呼ぶよう言われたのでそのように呼ぶことにしている。

そして俺もこの平穏を享受していた。いつも通り教室に来て席に着き、教科書を机にしまう。

最前列にいる一夏は今日も別クラスの鈴音を除き箒を含む通称『専用機組』に取り囲まれている。箒は別に専用機を持っている訳ではないが一夏の幼なじみという意味合いが大きいのだろう。最近ではシャルロットとラウラも加わった。

彼らは放課中は必ずと言っていい程あやつて集まって会話をしている。俺も混ぜられていたりするのだが彼女ら程ではない。

それ故にクラスの他の女子から専用機組はずると文句を言われたりするが一夏本人は別にそんな気も無いしあいつにも俺にもどうすることも出来ない。

今日は話題がいいのか会話が白熱している。この時間だとそろそろ織斑先生が来るころだ。
ああやつて織斑先生に頭を出席簿で叩かれるのは別段珍しいことではない。

だがいつまで経っても織斑先生が来ない。予鈴はすでに鳴り、後少しでチャイムだ。会議でもなければ時間ギリギリに来ることはそうそう無いはずだ。

キンコーンカーンコーン…

チャイムが鳴る。それと同時に教室のドアが開かれた。俺は入ってくる人物に目を疑った。

黒いスーツに身を包み、金髪で顔に傷を持つここにはいないはずの男。

(あの男は…!?)

「諸君、まずは挨拶即ち『おはよう』という言葉から」「おはよう

「ごぞいます」「既に挨拶は済ましている。本日諸用で席を外している織斑女史に代わりこのクラスの臨時担任となった『謎の武士道侍ハム仮面』改め『未来への水先案内人ハム船長』こと特別指導員グ
ラハム・エーカーだ」

何故あの男がここにいる。そして何を言っているのかさっぱり解らん。

「その少年！」

やはり気付いたか。

「私は君に乙女座のセンチメンタリズムを感じられずにはいられない！既に私のボルテージはMAXでアクセルはフルブーストだ！」

こいつはこんな性格だったか！？どこか否定出来ないような気がするのはどうしてだ…。

いやそんなことより、

「どうしてここにいる、フラッグファイター」

「おお、私のことを知っていたとは！やはり私と君は運命の赤い糸で結ばれているようだ！！」

今のお前はは誇り高きフラッグファイター以前にただの変態だ！！

「そうだ、私は変態でKY、すなわち空気読めないで恐ろしい程までに自分に酔っている痛い大人だ」

「……うわあ、自分でそこまで言うのかよ」

「だがそんな私も美男子に対しては愛とも呼べる興味を持てるのだよ特に君の様な子にはな！！」

俺にそんな趣味は無い。そして誤解を招くような発言は止める。

『セイエイくんも男に…』

『やっぱり噂は本当だったのね』

……一度クラスの皆としっかりと O H A N A S H I ……訂
正する、T A I W A をする必要がありそうだ。

だかあの男の言動からすると俺のことを知らないのか…？そんな馬鹿な。あの男とは過去に何回もやりあってきた。互いの顔も知っているはずだ。

どうしてここにいるかは本当に解らないが俺のことを知らないはずがない。

「何をしているんですかグラム先生！！」

山田先生が息を切らしながら教室に入ってきた。
確かにあの自己紹介や発言にかなり問題があったが。

「む、どうしたのかねミセス山田」

「私はまだピチピチの独身です！というか今日は副担任の私がクラスを取り仕切ってグラム先生がその補佐という話じゃないですか
！！」

まずそこだったのか！？

「なに、ただのユニオンジョークだよ」「どこですかそれ」。では「華麗にスルー！？」改めて自己紹介だ。私はグラム・エーカー少

佐「先生です」だ。隣にいる山田真耶技術顧問「私も先生です」の尻拭い「補佐役ですよ！？何私が無能みたいなことを言ってるんですか！！」…レディは憤みを持ちたまえ…」

「全部あなたの所為ですからね！？何故呆れたように言っんです！？」

山田先生が半分涙目になりながら頭を抱えている。

何故か目でこちらをちらちらと見るかは分からないが後で常備薬の優しさで半分できている頭痛薬を渡しておこう。

あれらの単語が出てきたということは俺のことを知っているのか…？ならば俺に対しての発言は嘘か…？できればそうであってほしい。二重の意味で。

波乱のSHRの後はグラウンドでの実技訓練だった。

「では今からISの近接格闘訓練を始めます。それに伴い今日はIS専門技術者のビリー・カタギリ技術顧問に機体の稼働チェックのために来てもらっています。」

「やあ初めまして。ビリー・カタギリだ。よろしく頼むよ。ああ、そのハム先生とは親友だよ」

そういつて現れたのは茶髪を一本に纏め眼鏡をかけた白衣の男。確かスメラギ・李・ノリエガの知り合いだったか。

この男までここにいるとは…。あの男といい元の世界で死んでいくかもしれない人間がいるとはな。いやあの男は死んはずだが。

「では班に別れて訓練に入ってください」

山田先生が言い終わると同時に女子が全員俺たちの所に集まってくる。いつもの光景のだが今日は織斑先生という抑え役が居ないのでいつもより行動が大分早いのだが、

「待てい！貴様にやる少年は無い！！天誅ううつ！！」

いきなりグラハム・エーカーが叫び何故か一夏に飛び掛かった。

「ハムパンチ！」

「なっ、んでグボオツ！？」 「ハムキック！」

「あべしっ！？」

「ハムチョップチョップチオオオツプ！！」

「パトラアアアアツシュ！！」

「くくく一夏さんーっ！？」 「くくく」

…一夏が天に召されたか。天使が乳母車を持って迎えに来ている。俺たちが必死で抵抗しているが。

目の前の光景にもうどうすればいいのか分からなくなってきた…。

「切り捨て御免…！！！」

イイ笑顔のグラハム・エーカーがそこにいた。

『セイエイくんをめぐる修羅場ね…』

『私は織斑くんとの掛け算派』

『私はハム先生派ね』

…何故織斑先生はいないのだろうか。この状況は正直山田先生と俺の手には余るのだが。

「ごめんね、ハム先生は美少年にしか興味ないからねえ」

「それより親友と言うのなら止めて下さい！」

「いやあ、あの状態のハム先生は誰にも手をつけられないからねえ」

「む…？何故少年以外の男子がここに居る？聞いていないぞ」

「職務怠慢だよハム先生。今頃気付いたの？彼世界初の男のIS操縦者だよ。職員会議でも言っていたでしょ？」

「熟知している」

「それも問題だよ、ハム先生……」

「どうして今日に限って織斑先生はいないんですかあ！？」

山田先生の心からの叫び（訴えとも言つ）も虚しく、何もせずに午前の授業は終わってしまった…。非常に疲れたとだけ言っておこう……。

場所は変わって食堂。いつものメンバーで昼食を摂るべく券売機に並んでいた。

「私はブリの煮付けだ」

「では私はピザを戴こうかしら」

「あたしは青椒肉糸ね」

「俺は……日替わりランチだな。ラウラは？」

「私はスパゲッティだな」

「僕は……どうしようかな」

各々が決めていく中でシャルロットが迷う。そういう俺はロシアを買った。

「ロシアとは米と豆、マカロニ、スパゲッティを混ぜ合わせたエジプトの料理である。」

「シャルロット、まだ決まらないのか？」

「うん……、ここって色々あるから迷っちゃうんだよね」

「……へいらっしやい」

「「「「「？」」」」」」

近くから渋い男性の声が聞こえてきたと思つたら、少し離れた所に屋台らしきものがあり、店主とおぼしき顔に傷のあるロシア系の中年の男性が居た。

「本日限定営業、寿司処『熊寿司』だ。その少女、寿司はどうだね？」

「……この男、まさか『ロシアの荒熊』セルゲイ・スミルノフか！？何故こんな所で寿司屋をやっている？」

「ええっ！？ここで寿司が食べられるの!？」

「マジかよ!？ってか日本人じゃないような……」

「むづ……。教官の故国の料理、食べてみたかったのだが既に券を

買ってしまった…」

……何というか、シユールだな。ロシア人が板前とはなんと異なる様な光景である。

「えっと、じゃあ僕それにしようかな…。あ、でもお寿司って何が美味しいんだろ？」

「オススメは私が今朝仕入れてきた食材をふんだんに使った『熊寿司三昧』だ」

「じゃあ、それで」

「うむ、では席で待っていてくれ」

注文を受けてから作る辺り本格的らしい。

だが何故今日は俺が知る人物がこつも現れるのだろうか？しかも面識のある人物でも俺の事を知らない様子だ。

しかしグラハム・エーカーという前例がある以上考えても無駄だろう。というより考える体力すらない。

各々注文の品を受け取って席に着く。するとそれと同時にセルゲイがやってきた。

「へいお待ち。『熊寿司三昧』だ」

「……えっ？これが…お寿司？」

シャルロットが疑問に思うのも当然だろう。何せ『魚介類』がー貫も無いのだから。

「右から順に日熊、月ノ輪熊、マレー熊……」

「熊ばかり！？馬肉でも牛肉でもなくて熊肉なの！？」

「……白熊、コディアック熊、なまけ熊、灰色熊、最後にテディベアだ。」

どれもこれも私が今朝仕留めてきたものだ」

「やつちやった！最後の最後に食材ですらないものをやつちやったよー！」

「しかも今朝仕留めてきたってどうやって世界中の熊を……！？」

「どこの格闘家だよ……、北〇晶でもボ〇・サップでもやらないぞ」

確かに一番左には酢飯にテディベアが乗せられ……もとい、テディベアに酢飯が乗っていた。

手段云々は聞いてはいけないだろう。何故かそう感じた。

「早く食べたまえ、テディベアが酢臭くなってしまうだろう」

「じゃあやらなきゃいいじゃないですかー！」

すまない、俺にはもうどうする事も出来ない。

結局シャルロットは『騙された……』と呟きながら全て平らげ、テディベアは直ぐ様洗濯機に投入され洗ってから部屋に置かれたそうだ。

「……えっと、物理の授業を担当する、沙慈・クロスロードです。宜しく願います」

午後は座学なのだが、やはりというか担当は俺の知る人物だった。

「あ、あの、皆静かにしてくれないかな……？」

教師が教室に来た事に気付いていないのかクラスは昼放課と同じく騒がしかった。最前列に座っている一夏でさえ気付いていない。いつもなら織斑先生が来た瞬間に席に着くのだが。

そう言っている間も沙慈・クロスロードは鎮めようとするが誰一人聞いていなかった。

「……いいんだよ。僕、影薄いからさ……。職員名簿にも僕の名前書かれてなかったし……。他の世界ではさ、主役だったりしたけどさ、映画になった途端僕だけ端折られてるしね……」

いかん、余りにもの無視のされように自己否定的になってきてしまった。うわ言(?)まで呟いている。

というより職員名簿に名前が記載されていないのは学園という組織としてどうなのだろうか。

その後、隣の教室の先生によって喧騒は鎮められ、沙慈・クロスロードはクラス一まともな鷹月静寝によって励まされ、授業は始まったのだった。

開始予定時刻から30分後の事だった。

突然だが、この学園では生徒が掃除する事がない。少しでも多くIS関連の授業をする為に掃除は清掃業者に頼んであるのだ。

「俺はあっ！エースでっ！2000日連続欠勤無しのっ！スペシャルなんだよあっ！！」

放課後アリーナからの帰りに通り掛かった校舎で、パトリック・コーラサワー……いや、マネキンだったか？そいつが外から窓拭きをしていた。

こいつは清掃業者だったのか……。

「うおおっ！？愛してます、支部長おおおっ！！」

いきなり足を滑らし、命綱が切れて落下していくパトリック・マネキン。

助ける為に走り出そうとするが、何故かその場にいた布仏本音に止められた。

「大丈夫だよ、せつち。あの人もあやって落ちたり物の下敷きになったりするけど、必ず生きて帰ることから『不死身のコーラサワー』って言われてるんだよ」

いや、必ず生きて帰るからいいという訳ではないのだが。

後それだけの事が何度も起きていながら何故業務改善がなされていない？

『いけよフアングー！』

『ミハエル兄、それ自動掃除ロボットだから』

『ミハエル、ネーナ、ちゃんとやりなさい。私達はアルバイトの身なのだから、食い扶持を稼ぐ為にもここで頑張って正社員になるしかないんだ』

校舎内から聞こえてきた声はチーム・トリニティのか……。何か

切実というか現実味帯びた会話に少しだけ哀れみを感じた。そして朝からこんな事が続いている為もう驚かなくなってきた……。パトリック・マネキンは打ち身以外何の外傷も無く仕事を続けていた。

今日は本当に疲れた。これが明日も続くと考えると夢であって欲しいと本当に思う。特にあの男については。

早くベッドに入って休もう、そう思いながら寮の廊下を歩いていたら、

「……………」

生気の無い一夏が俺の部屋の前で倒れていた。

「どうした、一夏!？」

「……………にげ……………」

「何があった、一夏!？」

「どうしたの、おりむーにせつちー」

あれから先に寮に帰った布仏本音が向こうからやってきた。

「わからない。俺が来た時には既にこうなっていた。逃げろとは言っていたが……………」

「じゃあ、せつちーの部屋の前に倒れてたんだから、その辺に何かあるのかも。だからせつちーお邪魔しまゝすって部屋開いてる……………?」

最もらしい事を言っておきながら俺の部屋に入ろうとする布仏本

エクシアの話通りなら、今までののは全て夢なのか……？だとしたら有難いが教室に行きたくない衝動に駆られる。
行ったら最後、あの夢通りになってしまいう気がしてならない……。

結局こんな理由で休む訳にはいかないので刹那はちゃんと教室に顔を出した。

数日間時折何かに怯える様子を見せる刹那に先輩や先生方は母性本能をくすぐられたとき。

番外編 刹那は心に大変なトラウマを負ったようです(後書き)

前書きと文中のセシリアとのほんさんのネタわかったかなあ？

グラハムさんの中の人って結構刹那に関わりあったり空が好きだったり……。

海への誘い・前編（前書き）

長らくお待たせ致しました！多分これぐらいの投稿ペースになりそう……。
作者にGWなどないのです！

海への誘い・前編

一夏Side

皆に一つ聞きたい。よく漫画とかで朝起きたら隣に少女が同じ布団で寝ていたという展開があるが、それが現実にあり得ると思うか？

弾曰くそれが裸ワイシャツだったり寝間着浴衣だったりするが、寝間着浴衣だったら武士娘でマブくてラヴな学校生活を望むとかあのバカの寝言はほつといて、まさしく俺の今の状況がそれだ（そして作者は山吹姫派だ）。

まあ落ち着いて聞いてくれ。俺はいつも通り窓から注す朝日を浴びながら布団に包まって至福の一時を楽しんでいた。この気持ち、分からなくもないだろ？

そしてふと、腕を動かしたら何やら柔らかくすべすべで暖かい物体に触れたんだ。しかも、その時『う、ん……』って声がしたんだぜ？

瞬間、俺の頭に『ピキユイイイインツ！』と何かが走った。え？作品が違う？中身は一緒だから問題ない。

ガバツと布団を一気に捲り上げると、そこには全裸の阿部さ……げぶん、ラウラが居た。

裸ワイシャツや寝間着浴衣を通り越して全裸だぜ？取り敢えず阿部さんじゃなくて良かった……っじゃなくて！

「ら、ら、ラウラ！」

「……むう、朝か……」

「ば、バカ！隠せ！！」

そうなのだ、あれ以来こいつはやけに俺にくっついてくるのだ。

食事も一緒にこの前なんかシャワーにまで現れた。

その度に篤達に特訓でリンチにされるのだ。

刹那の一言で死ぬ可能性は激減したが、その分その日の特訓に反映されるのだから、特訓が終わるまでの間そのプレッシャーに耐えなければならぬ。

将来禿げるのではないかと密かに心配していたりする……。

「おかしな事を言う。夫婦は包み隠さぬものだと言いたぞ？それに日本では将来結ばれる者同士の定番としてこういう起こし方が一般的だともな」

「お前にそんな間違った知識を吹き込んでいる奴は誰なんだ……？」

一回目をこするだけで覚醒し、日本全国どこで聞いても絶対聞く事の無い非常識という名の常識を語るラウラ。

「しかし効果は抜群の様だな。目が覚めただろう」

「そりゃな……」

これで目覚めなかったらヒトとして問題ではないだろうか。

今すぐ『ここから、出ていけえっ！！』と言いたいところだが、こいつは服が無いのだ。全裸で追い出す程俺は落ちぶれていない。それに追い出したら間違いなく誤解を生みかねん。

とにかく、今この状況を、そして今後こんな事にならないように
どうにかしなくてはならない。

今現在だってラウラがシート一枚を纏っているのを見ないように必
死で顔を背けているのだ。

「人が話している時は人の顔を見んか。……私が見せてやらないと
いかな／＼／」

「……へ？」

気付いたらラウラがこっちに近付いてきている。あれ？これなん
てヤバフラグ？

刹那Side

現在午前六時三十二分。俺は日課の筋トレを終えてシャワーを浴
びたところだが、隣の部屋から何やら激しく動き回る音が響いてく
る。

隣の部屋といえば一夏の部屋なのだが、鈴音の時含めあいつの部屋
は静かである事はないのかと時々思う。

この時間帯だとまだ寝ている生徒もいるだろう。髪と体を乾かし
て外に出ていけるような簡単な服に着替え一夏の部屋に向かった。

コンコンッ

「一夏」

ドアをノックしてみるも反応が無い。不審に思ってドアノブに触れると鍵が開いていた。

(侵入者……！？)

俺の場合は特殊だが一夏は世界でISを自然に動かせる男。それを狙う存在があってもおかしくない。

いつぞやと同様ハンドガンを片手にドアをゆっくりと開いていくと、

「あ………」

ベッドに仰向けになっている一夏とそれに覆い被さるうとしている全裸のラウラがいた。

「………すまない」

パタン……

『お、おい待ってくれ刹那！誤解だ！助けてくれ！！』

『何を言っている、刹那は空気を読んだのだぞ。つまり公認という訳だ』

『違うから！それ絶対に違うから！！』

あの状況では俺が関わる資格は無いし、あの空気が読めない程俺は鈍くない。

いやしかし寮内どころかこの学園では不純異性交遊禁止ではなかったか？

「一夏の部屋の前で何をしてるんだ、刹那」

そうこう考えている間に制服を着た箒が来た。おそらく朝食を誘いに来たのだろうか。だが、俺が今の一夏の部屋の状況を言っしまえば、箒の手に握られている刀で一夏は殺されかねん。

あらゆる国家に属さないこの学園だが、生徒が普通に危険物を持ち歩き殺人未遂が起きるのはいくら何でもやり過ぎではないのだろうか？

いずれにせよ、どうすればいいのか。一夏の命を守る為にも下手に動けない。

だが刹那は十代乙女のセンサー（無論恋バナや異性専用）を舐めていた。煮え切らない刹那の様子だけで状況を察知して刹那を押し退け、部屋への侵入を許してしまったのだ。

「一夏あ！貴様何を……！？」

「どわあ！？箒！？」

「死ねええええつ！！！」

「私の嫁に斬り掛かろうとは無礼な」

「どけ、ラウラ！そして一夏！大人しく私に斬られる！！」

「誰か助けてくれえ！」

「……もしもし。山田先生、一年学生寮1025号室にて非常事態が発生している……」

……俺に出来るのは寮監督の先生を呼ぶ事だけだ。あの状況は俺の手には余る……。

騒動は山田先生によって鎮圧された。事態の完全撤収までには時間が掛かりそうだったので先に朝食を終えて今は教室で待機しているのだが、本礼三分前なのに一夏とシャルロットが来ていなかった。先程筈とラウラが走って教室に入ってきたのでかなり時間が掛かったと思われるが無関係であるシャルロットまで遅いのはどういう事だろうか？

本礼一分前。今日のSHRの担当は織斑先生である。遅刻したら出席簿と罰則ものだ。

心の中で黙祷でも捧げようかと思った瞬間、ISを展開したシャルロットが一夏を連れて飛び込んできた。

「ふう、到着！」

「だが残念ながらアウトだ」

「へ……？」

バシーンッ！！

「指定許可区域以外でのISの展開は禁止だ。罰として業後教室の清掃を命じる。織斑もな」

「はい……」

急ぐ気持ちは分かるがそれでは元も子もないぞ。

「さて、SHRを始める。もうすぐ臨海学校だったな。一日目は自由時間だが若いからといって羽目を外し過ぎるな。」

本日は山田先生がその下見に行っているが予め言っておくが仕事だからな。羨ましいとかぬかすなよ」

確かに後少しで臨海学校だったか。ISの換装装備通称『パッケージ』の機能テスト等が主な目的だと年間行事予定に書いてあったはずだ。しかし山田先生の予定を考えると今朝の呼び出しは少々申し訳なかったかもしれん。

パッケージとは前述の通りIS用換装装備の事であり、追加装甲からブースター、武装等多岐に渡る。更にその機体専用の機能特化型パッケージ『オートクチュール』も存在する。

エクシアのパッケージについてはエクシアに『雪崩』を任せてあるので問題無い。過去の戦闘データと照らし合わせて改良するとは言っていたが大丈夫だろう。

まあエクシアのパッケージはエクシア専用なのでオートクチュールと称した方がいいかも知れん。

一夏Side

……なんというか散々な一日だった。罰の掃除は掃除自体はむしろ大好きなのでウエルカムなのだ。今日は特訓は無い。つまり、次回の特訓に今日の分が回される訳だ。勘弁してくれ……。

臨海学校の一日目は自由時間で、無論臨海学校なのだから海が近い。となればやる事は一つ、泳ぐ事だ。水着を買わなくてはならない。

なので先程シャル（新しいシャルロットの愛称）に『付き合ってくれ』と頼んだのだが、言った瞬間時間が停止し、シャルの顔が真っ赤に染まったのはどうしてだろうか？しかも詳細を説明した途端不機嫌になったしよ。

どうせだったら刹那も誘うか。同じ男子同士こっぴどい付き合いも大切だしあいつも水着は持ってないだろう。

刹那Side

週末の日曜、俺は学園の外にいた。目的は臨海学校の水着を買うのだが、特に必要を感じないのに何故かクラスメイトから激しく注意された。

今この場にいるのは俺と俺を誘った一夏、そして俺と同じく誘わ

れたシャルロットだった。

「……………」

しかしシャルロットは仏頂面というか不機嫌であった。時折一夏に恨みと呆れの籠もった視線をぶつけながら俺に何かを訴えるような視線を向けてくる。

正直言っただ居心地が悪い。

「ど、どうしたシャル。具合でも悪いのか？」

「……一夏」

「お、おう？」

「乙女の純情を弄ぶような男は馬に蹴られて死んだ方がいいよ」

「そりゃあそうだな」

「鏡を見なよ」

「？」

「……はあ、一夏だから分かっていたけどね」

またこいつ（一夏）は何かやらかしたのだろうか。
とにかく早くここから離れたい。

「少し忘れ物をした。学園に戻る」

「ん？なら待ってるか？」

「いや、いい。先に行っていてくれ」

本当は嘘だが先に行くよりかは真実味があるだろう。別段急ぐ用事でもないし店の場所は調べがついているから問題ない。どこかで時間を潰すでしょう。

「行っちゃまったな……。刹那が忘れ物とか珍しいな」

「まあ、ここは刹那の好意に甘えて先に行こつ！」
「あ、おい、シャル！いきなり手を引つ張るなって！！」

別に刹那はシャルの視線の真意を理解した訳ではないが、刹那が立ち去つた後一夏に見えないように小さくサムズアップしていたりする。無論刹那に向かつて。

あれから三十分後、刹那は目的の店がある駅前のショッピングモール『レゾナンス』に来ていたのだが、そこに柱の陰から何かを覗き見する黒と金と銀がいた。

「何をしている」

「きゃあっ！？」

「せ、刹那！？いきなり話し掛けないでよ！びっくりしたじゃない！！」

「む、刹那か」

現役の特務部隊隊長であるラウラはともかく鈴音とセシリアは気配を隠しきれしていないどころかはたから見たら不審者確定だ。物陰に隠れているにしろ不自然にも程がある。

「それで、何をしていた」

「何って、アレよ」

「？」

鈴音が指差す先を見ると目的の水着売場の入口で買った水着が入

っているのである。う袋を持った一夏の姿だった。
……まさか尾行していたのか？

「ふふふつ、一夏さんったら私に内緒でシャルロットさんとデート
だなんて」

「ふむ、嫁には今度きっちり調教しておかないとな」
(一夏、生きる……)

三人が発するプレッシャーに一瞬だけ戦慄していると、一夏がシャルロットと合流して再び水着売場に入ってしまった。

「動いたな」

「行きますわよー！」

「しくじるんじゃないわよー！」

いやもうしくじるのも時間の問題ではないのだろうか？

「俺はどうすればいい……？」

『……関わらないのが一番かと』

結局三人とは別れ男性水着売場で適当に物色し、黒地に両サイドに白のラインが入ったシンプルなトランクスタイプの水着を買った。

会計を済ませ店を出ようとした瞬間、女性水着売場の方から悲鳴が上った。

何かと声のした方に向かい、女性水着売場だから一瞬躊躇ったが手遅れになる前にと入っていった先には、

「……何があつた？」

パニック状態の山田先生と呆れ顔の織斑先生、試着室にいる水着姿のシャルロットと何故かシャルロットと同じ試着室に入っている一夏の姿があつた。

「はあ、水着を買いにですか。それはいいですが二人で試着室に入るのは感心しませんよ。教育的にもダメです」

「す、すみません……」

何とか山田先生を落ち着かせ一夏とシャルロットに事情を聞くからには、どうやらシャルロットが一夏を試着室に連れ込み、一夏が出ようとしたのを水着を買いに来た山田先生が見てパニック状態に陥つたらしい。

確かに女性水着売場の試着室から男が出てきたら驚くが、何がしたかつたんだシャルロット。

「さて、その小娘ども、いつまでそうしているつもりだ」

ギクツという本来聞こえるはずのない音の後に鈴音とセシリアが姿を現す。ラウラがないとなると途中で別れたか。

「そ、そろそろ出てこようかと思っていたんですよ」
「え、ええ。タイミングを計っていたのですわ」

そうは言っているが何とも苦しい言い訳である。

「俺も何してるのかずつと気になってたんだけどな」

「女子には男子に知られたくない買い物があんの!」

「そ、そうですね! 全く、一夏さんのデリカシーの無さにはいつもながら呆れてしまいますわね」

流石にそれは理不尽だと思っのだが、一夏も一夏なだけに何とも言えない。

「ふう、さつさと買い物を済ませて退散するでしょう」

「あ、あー。私ちよつと買い忘れがあったので行って来ます。えーと、場所が分からないので鳳さんとオルコットさんとデュノアさんと、あとセイエイ君もついて来て下さい」

そんなに大人数で行く必要があるのだろうか? そう疑問に思ったが山田先生の顔と口調から何かあると判断して大人しくついて行く事にした。

織斑先生と一夏二人を残して水着売場の入口まで戻ってきた時に先程疑問に思っ た事を聞いてみた。

「まあ今までの二人は教師と生徒でしたが本当は姉弟じゃないで

すか。

だから久しぶりに姉弟水入らずという事ですよ」

そういう事か。確かに例え休日であっても学園内では教師と生徒には変わり無い。

「ですから、あれは嘘ですね。だから皆さんも問題さえ起こさなければ好きに動いていいですよ」

そう言つと鈴音とセシリアは各々水着売場に戻っていく。俺は既に済ましているので学園に戻ろうとしたが山田先生に呼び止められた。

「あ、あの、私まだ水着買ってませんからよかつたらセイエイ君見繕つてくれませんか／＼／？」

困った。俺はファッションとかには詳しくないし女物等見繕った事もない。

だが以前シャルロットに『女性の頼みや誘いは簡単に断るな』と注意された。余程の無理難題か理不尽なものでない限りそうしると何度も言われたのだ。理由は知らないが。

「……わかった。だが俺はそういうのに疎いから参考程度にしてくれ」

「は、はい！では行きましょう！！」

山田先生に手を取られ再び女性水着売場に入ってしまった。

真耶（時々刹那）Side

さて、ここで見事刹那を誘い水着売場へと足を踏み入れた真耶であつたが、

（あわわわわっ／＼／＼！？ いい勢いとはいえててて手を繋いでっ！？）

絶賛暴走中である。

手を繋いだのは他ならぬ真耶なのだが二十代とはいえ恋する女、どうして責められようか。

真耶は刹那の本当の年齢を知らないが刹那の実年齢は74歳であり、外見は今は16歳だが本来ならば23歳のままである。ちなみに真耶は23歳だから結構お似合いなんじゃね？

（と、とにかく何か話題っ……………思いつかないですっ）
（……………いや水着！とにかく適当に水着を取って話を！！）

ええい儘よと真耶は数ある水着の中から後先考えず一着の水着を取る。

「」……………「」

それは布とも呼べぬ黒の紐ビキニだった。

(きゃあああああつ／＼／＼!?)

ガシャツ！

心の中でシャウトしながら紐ビキニのハンガーをぶちこむ様にバ
ーに戻す真耶。その顔は羞恥でトマトに負けぬ程真っ赤である。

「いいいいや違うんですよ!?今のはよく見ていなかったというか
決してあんな露出の多いのが好きという訳ではなくてですね!?だ
から違うんですよ本当ですかりゃっ(ガチイツ!)~~~~!?!」

パニックの余り舌を噛んでしまう。もし世間一般の男性ならば萌
えてしまうだろうが刹那は超刹那。

いつもと変わらず無表情だった。内心でも大丈夫だろうかと思っ
ているだけである。

「大丈夫だ、気にしてはいない」

「……セイエイ君って本当に男性ですか？」

酷い言い様かもしれないが刹那は恋愛や異性については本当に何
も知らないのだ。だが真耶がそれを知らないのも仕方の無い事だが。

「じゃあ……これなんてどうでしょう……?」

気を取り直して薄い緑色のワンピースタイプの水着を手に取り自
分の身体に重ねてみせる。流石に教師と生徒の関係で試着までする

勇気は無かった。

「特に問題は見当たらない」

「……………」

『マイスター刹那、もう少し気の利いた応答を…………』

遂にエクシアにまで言われる刹那。ちなみに個人間秘匿回線である。

『…………どうしろと』

『マイスター刹那が選べばいいのでは。こういう時はそれが常套手段です』

選べと言われても女物の服、ましてや水着など選んだ事の無い刹那。しかしこのままではキリがない。だからいつも自分が服を選ぶ感覚

で陳列された水着を品定めしていく。

(むっ…………)

目に入ったのは白いビキニ。所々にポイントとして小さなリボンがあしらわれたものだった。

機能的重視の刹那としては(服として)特に気に掛かるものではなかったが女性の娯楽の為の水着としては問題無かった。

「セイエイ君？」

「ふむ、これはどつだ」

「ふえっ？」

ファッションに疎そうな刹那がいきなり水着を選んだ事に驚く真

耶。

だが見てみれば初めて女物の水着を選んだにしてはそれなりにセンスのいいものだ。よく見るとサイズも合っていた。

（えええええセイエイ君何で私のサイズをつ！？はっ、ま、まさかいつも私の事を見てくれていたとか／＼／＼！？）

実はただの偶然なのだが恋する女性は結構ポジティブシンキングなのだ。

「嫌ならば変えてもらっても構わないが」

「い、いえっ！これにします／＼／＼！！」

「いいのか？」

「はいっ！大丈夫です！！」

真耶のテンションゲージはてっぺんを振り切っている。どごその有頂天なホテルも目じやない。

『マイスター刹那、ここは男性が支払うのが普通なのですよ』

『そうなのか？』

『はい。謂わばプレゼントの様なものですから』

『そうか』

何故元MSでありISであるエクシアがここまで女性との接し方に詳しいのかというと異性や色恋沙汰に疎い刹那の為に寮の自室のパソコンにアクセスしてインターネットとかで情報収集しているからである。

主に恋愛物のドラマや映画とかだが。本当によく出来た相棒ではないか。

「俺が支払おう」

「えっ！？いやそんな……」

「俺が選んだのだから責任は俺にある。当然支払いも俺だ」

強引な言い方かもしれないが真耶は戸惑いと幸せな気分です。いいっぱいで最終的に刹那が支払った。だが支払いの時に、

「姉弟か恋人ですか？」

「違う」

結局刹那は超刹那だった。

海への誘い・前編（後書き）

今更気付いたけどIS世界ってビーム兵器は無人機以外開発できて
ないじゃん！

となると太陽炉搭載機ハンパねえ……。

海への誘い・後編（前書き）

お待たせしやしたあ！！

なんか強引というか噛み合わないところがあると思いますが申し訳
ありやせん！！

あつ、後書きにてアンケート結果発表です。

海への誘い・後編

刹那 Side

「海、見えたあ!!」

バスに揺られる事数時間、トンネルを抜けて現れた海に女子一同のテンションが上がる。

別に俺は見慣れているから何とも思わないが、島国であるにも関わらず『IS学園』という半閉鎖的な場所で暮らしている以上珍しいものなんだろう。

「ね〜ね〜、せつちーお菓子いる〜?」

「必要ない。……それと口を拭け」

隣の席に座る布仏本音が口周りをチョコレートで田吾作にしながら腕に抱えきれない程の菓子を勧めてくるが腹は空いていないので断る。

というより、何処にそれだけの量を詰めてきた?

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

織斑先生の言葉に一齐に席に着く女子生徒達。日頃の指導(という名の制裁)の賜物だろう。

「そういう事だ。早くそれを締まっておけ」

「む〜、りよ〜、かい……」

残念そうな顔と声をしながらバッグにそれを詰めていく布仏本音。偶然なのだがそのバッグの中にまだ菓子が入っているを見て、バッグの最大体積と菓子の量が矛盾しているのを疑問に感じた俺は、もしやISのように量子格納しているのではないのだろうかと一瞬考えてしまった。

一夏Side

駐車場に停車した四台の大型バスからそれぞれIS学園一年の生徒が降りる。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないようにしろ」

「……よろしくお願ひします」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

女将さんに丁寧にお辞儀しながら、女将さんの顔を見るが、女将という立場とは逆に若々しく感じた。

大人の色香というか少しドキドキしてしまう。

「……はあ」

……それよりも何故後ろから溜め息が聞こえてきたのかさっぱり分からないのだが。

「あら、そちらが噂の……?」

「ええ、今年は男子が二人いる所為で浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、すっかりしてそうない男の子じゃありませんか」

「片方はそうですが、こいつは感じがするだけですよ。挨拶をしろ、馬鹿者」

千冬姉が俺と刹那の頭を押さえる。『感じがする』って明らかに俺の事だよな……？

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「刹那・F・セイエイだ。よろしく頼む」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

女将さんに挨拶をして旅館に入っていく俺達。

各々割り振られた部屋に荷物を運んでいく。するとのほほんさんがふらふらしながらやってきた。

「ね、ね、ねー、おりむーとせつちーの部屋どこ？一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えてー」

その言葉を聞いて聞き耳を立て目の色を変える女子達。一昔前の『マギー〇司』とかいうマジシャンを思い出す。

別に知っても何も無いだろ。

だが俺達の部屋は未だ知らされていないのだ。何でも女子と同じ部屋にする訳にはいかないので別に用意されるらしい。

「織斑、セイエイ、部屋に連れていくからついて来い」

千冬姉に呼ばれのほほんさんと別れて刹那と二人でついていく。

「織斑先生、俺達の部屋って何処になるんですか？」

「ここだ」

「へっ……？」

『教員室・織斑千冬』

目の前のドアにはこうでかどかどと書かれた紙が貼られている。

「そっちは織斑でセイエイは向かいの部屋だ」

そう言われた振り返るとそこにも貼り紙のされたドアがあった。

『教員室・山田真耶』

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視して女子が押し掛けるだろうからな、こういう処置になった」

いやそれは解るがどうして刹那は山田先生なんだ？

「さあな、山田先生達が『二人一辺は大変だろうから』とか言い張ってこうなった」

おおっ、読心術。返答有難うございます。

因みに事の真相は『姉弟水入らず』であるのだが、刹那が誰と個室かという事で千冬を除く引率の先生達の間でジャンケンという名の死闘が行われ、見事真耶が優勝した。

その時の真耶は仁王立ちで勝利の『グー』を世紀末の帝王よろしく天高く突き上げていたという。

「そういう事だ、一応言っておくがあくまで私は教員だという事を忘れるな」

「はい、織斑先生」

「それでいい」

そこで刹那と別れ入室。中はかなり豪華で、一瞬驚いてしまった。

バス、トイレ、洗面所は完全個室、テレビに冷蔵庫完備。バスに至っては成人男性が足を伸ばせる程だ。

「大浴場は時間交代だ。早朝、深夜は部屋のバスを使え」

「分かりました」

あの後仕事が残っているというので俺は刹那と合流して別館の更衣室に向かった。今までいろんな事があったが、今日ばかりは心の底から息抜き出来る日を送れるだろう。

「なんて思っていた時期もありました」

途中等と合流し、別館へと続く道を歩いていたのだが、道中の茂みに『引つ張って下さい』と書かれた看板が立ち、とメカニカルなウサミミが生えていた。

「……二人とも、下がっている。トラップの可能性がある」

「あー…、いや、刹那。多分大丈夫だと思うぞ？なあ篤、これって……」
「知らん、私に聞くな。関係ない」

一応確認の為篤に聞いたのだが、嫌悪感を抱いた様子で行ってしまった。

やっぱりか……。間違いない、これは『あの人』だ。こんな事をするのは『あの人』以外ありえない。
嵐の様な『あの人』の事だから、きつと俺の平穩は心労で崩れ去るんだろうな……。あれ？何だろう、目から汗が出て来て止まらないや……。

「一夏、話が見えないのだが……」
「ん？ああ、取り敢えずこれは無害……とは言いきれないが爆弾の類ではないぞ……っと！」

刹那が止めようとするが兎に角話を進める為にウサミミを引っ込抜く。
何か埋まつてるのかと思いきや実際は何も無く、引っ張った時の勢いで尻餅をついてしまった。

「いたた……」
「大丈夫か？」

おかしいな、『あの人』の事だから何か引っ掛けがあるはずな『キイイイン……』んだが……！？

「っ！上か！……」
「うおっ！？」

ドカーーーンッ!!

上空から何かが落ちてきたのを刹那が俺を突き飛ばしてGNソー
ド改を構える。

最初墜落時の煙でうまく見えなかったが、煙が少しずつ晴れてきて
顕わになったその姿に驚かざるを得なかった。

「に、人參……!?!」

それはアニメチックにデフォルメされた無機質で巨大な人參。
それは二つに割れて中からスモークとともに一人の女性が現れる。

「あっはっは!引っ掛かったねいっくん!!」

……はあ、この人は普通に登場する事が出来ないのだろうか。
半ば呆れつつも元凶である人に目を向ける。服装はアリスとウサギ
が同居した『一人不思議の国のアリス』、自称『一日に三十五時間
生きる女』、篠ノ之束さんだ。

「お、お久し振りです。束さん」

「うんうん、本当に久しいねー。ところで篝ちゃん知らない?」

「え、えーと……」

「まあこの私が開発した篝ちゃん探知機ですぐ見つかるよ!じゃあ
いっくん、せつちゃん、またね!!」

すたこらさっさー、と軽快に走り去っていく束さん。嵐の様なと
ころはやっぱり変わらないな。

しかし『またね』ってことはまた現れるのだろうか。何が目的な
んだらうな？

それに……『せつちゃん』って刹那の事だよな。

あの冨と千冬姉と俺以外関心を示さずそれ以外は拒絶するあの束さ
んが他人の名前を呼ぶだなんて……。

「……一夏、今はまさか篠ノ之束か？」

「あ、ああ。そうだけどさ、何で知ってんだ？」

「ISの開発者である彼女の顔を知っていてもおかしくはない」

そりゃそうだ。一瞬刹那の声のトーンが下がった様な気がしたが。

「ま、まあ大丈夫だろ。嵐の様な人だけどここまで来て特に何かや
らかす人じゃないだろ」

「……だといいがな」

「？」

刹那の言葉がうまく聞き取れなかったが取り敢えず更衣室に向か
って再び歩きだした。

男子更衣室は女子更衣室よりも奥に位置している。なので男子更
衣室に行くには当然女子更衣室の前を通る訳だ。

『……すごく、大きいです……』

『なんでよ！？神様あたしの何がいけなくてこんな仕打ちをするの
よ！？』

『……あんた、毎晩毎晩揉んでそれだからね』

『言つなあああああっ！！』

『ティナ水着だいたーん。胸はあの作品では貧相だったのにねー』

『アメリカでは普通だと思うけど……ってそれ何の話？』
『少なくとも中の人ではないね』
『はっ？』

あの部隊では貧しいのは似たような名前のオレンジ髪ツインテールと狸ぐら이었다からな。竜使いとゴスロリはノーカンでっつかん、電波が……。

俺も思春期真っ盛りの男の子。こういう話は正直恥ずかしくて苦手だ。

ふと刹那を見るといつものポーカーフェイスよりも更に感情の無い顔になっている。まさか、無の境地に達しているとも言うのか！？

刹那に戦慄しながらも更衣室で着替える俺。男の着替えなんて十分もかからん。

俺は水着一枚、刹那はその上からパーカーを羽織って浜辺へ出た。

「あ、織斑君にセイエイ君だ！」

「う、うそ！？わ、私の水着変じゃないよね？大丈夫だよね！？」

「織斑君もなかなかだけどそれよりも引き締まったセイエイ君の裸体……ハアハア／／／」

女子更衣室から何人が出て来たが最後のはスルー。何が何でもスルー。

気にしたら駄目なのだよワトソン君。

何処までも広がる青い空と海。海に来るのは何年ぶりだろうか。準備運動で体をほぐしていると、後ろから何かが飛び乗ってきた。

「い、ち、か〜っ！そんなことしてないでさっさと遊ぶわよ！」

鈴が飛び乗り体を登って肩車の状態になる。昔っからこいつはプールとかでもこうだった。

「鈴、準備運動しないと溺れるぞ？」

「あたしは溺れた事無いから大丈夫よ」

「な、何をしていますの!？」

上と下で会話しているとセシリアがパラソルとシートを手にしてやってきた。因みに鈴はオレンジと白のストライプのタンキニ、セシリアは青のビキニ（パレオ付き）である。

「何って、肩車じゃない」

「ですから、何故肩車をしているのですか!？」

ドスッ！

うおっ、パラソルを刺す音からしてかなり怒り籠もってるな。だが肩車ぐらいで何でそんなに怒るんだ？

「えっ、なにになに？」

「ああっ！見て見て、織斑君が肩車してる!!」

「きつと交代制よ!」

「そして早い者勝ちよ!」

「更にセイエイはお姫様抱っこよ!」

「~~~~~なっ、なんだって~~~~~っ!?!?!?」「~~~~~」

不味い、騒ぎを聞き付けた女子達が何か勘違いして詰め寄って来

る。

刹那なんか盛大に勘違いされてるぞ!?

「ッ!?!」

俺がどうやって誤解を解こうか考えようとした時、女子に囲まれる前に刹那はパーカーを脱ぎ捨てて女子を飛び越え、海に飛び込んだ。あれ?なんかデジャビユ。

因みに刹那は浮いてこないとなるとまさか潜水してるのか?必死だな……。

「別にいいじゃない、セシリアだって何かしてもらおうでしょ?」

「いえ、それは……」

「ふん、じゃああたしが一夏に……」

「し、してもらいますわ!一夏さん、早速サンオイルを塗って下さい!!--」

「『えっ!?!』」「『』」

ああっ!俺がせつかく『そういうサービスはしていません』と説明しているのに何て事言ってくれるんだセシリア!!--

「私サンオイル取ってくる!」

「私はシートを!」

「私はサンオイル落としてくる!!--」

「じゃあ私はセイエイ君を捕まえてくる!」

「『異議無し!!--』」「『』」

おいっ!塗ってあるのにわざわざ落として行くな!

そして刹那、逃げろおおおお!!!--

想い通じたのか、海面に刹那が急浮上してきて沖に向かって泳いでいった。超はええ……。

「あれ？皆さんどうしたんですか？」

俺、鈴、セシリアの三人が取り残されたそこにやってきたのは『ほにゃっ』って感じの山田先生と千冬姉だった。

「また小娘どもが馬鹿騒ぎしているのか」

「ま、まあまあ織斑先生、皆若いですし海が嬉しいのですから」

「ほう、それは暗に私が老けていると？」

「ち、違います〜！〜！」

なんか、いつも通りだな。山田先生涙目だけど。

千冬姉は黒のメッシュ入りのビキニで、鍛えられつつすらっとした身体がより映えていて実の弟である俺さえも思わずドキッとしてしまう。

それに対して山田先生は所々にリボンがあしらわれた白のビキニ。全体的に可愛らしく千冬姉よりも大きな二子山が窮屈そうに押し込まれてつい目がいつてしまう……って失礼だなこれは……。

「……い・ち・か………?」「」「」

ゾクウツ!!

おおうつ!!?真夏のビーチが一気に真冬のシベリアへ!?

油の切れた機械のようにギギギツと首を後ろに回すとそこには

「……あはっ」「……」

笑ってないです。口は笑っていても目は笑ってないですよ皆さん。目は口以上にモノを語るんですよ、鈴さん、セシリアさん、いつの間にもやら来ていたシャルさん、あと……どちら様？

シャルと同じくいつの間にもやら来ていたバスタオルの塊。目の辺りは開いているが逆光でよく見えない。

誰だろうなと思いつつ下を見ると、バスタオルの隙間から大振りのコンバットナイフを持った細い腕が……。

『……一夏、貴様私の嫁でありながら他の女に鼻を伸ばしていると。……胸か。胸なのか！？そんなに大きな胸が好きなのかこの「検閲により削除されました」野郎！！』

声が籠もっていて聞き取り辛いがその口調とナイフはまさかラウラさんか！？

怖えよ！その格好口調挙動全てが怖えよ！！

「待て！ラウラ落ち着け！！まずは話し合おう！！！」

「……問答無用！！」「……」

「なっ！？鈴とセシリアとシャルも」「……」

『ア——』
『——ッ!——!』

「やれやれ……。これだからガキ共の子守は疲れる」

「あははは……。あれ?よく見るとセイエイ君がいないような……?」

「何だ?愛しのセイエイに選んで貰った水着姿を見て欲しかったのか?」

「なっ!な、な、な、何言ってるんですかぁノノ!?!」

「あー、ほら、分かったからさっさと行くといい。ここは私が見ておくから」

「ちっ、違いますからね!?べべべ別に私はセイエイ君にいやらしい気持ちなんて……」(ピューーー)「」

「……山田先生、言っている事と行動が見事に矛盾しているぞ。まあ、セイエイがその気持ちにいつ気付くか分からんがな。まああれであいつよりも疎いからな……」

刹那 Side

「ハア、ハア、ハア、……」

あの騒動（お姫様抱っこがどうこう）から暫く経ち、俺は浜辺から少し歩いた所の岩場に上陸した。
年頃の女子というのは皆ああいうものなのだろうか？

「ふう……」

出来るだけ平らな岩に腰を掛け、思考活動を始め。真っ先に頭に浮かぶは『篠ノ之束』だ。

彼女とのファーストコンタクトは言うなれば『波乱』であった。

第一印象についても同様だ。

彼女を篠ノ之束だと認識した時に彼女から読み取れたのは何とも複雑なものだった。

まるで『白と黒』……または『正と負』の様に相反する二つのものが複雑にねり合う感じというか……。『その相反する二つものが何なのかはあの短い間では読み取る事は出来なかったが。』

そして何故世界から追われている彼女がこの様な人の集まる場に姿を現れたか。

実妹である筈に用があるようだったが何をしに来たというのだろうか？

正直彼女についての情報が少な過ぎる。『レグナント』に使われていた未登録のコアにしる確信を持って言える事があまり無いのだ。

コアの出所は間違いなく彼女の所だろうがだからと言ってレグナントを造り学園に送ってきたとは限らない。彼女にとって数少ない『大切な人』である一夏を襲う理由が無いからだ。

そもそも何処から擬似太陽炉とレグナントのデータが流出したかさえ分からない。スサノオにしたってそうだ。

事件後から暫くして更識楯無から管理委員会からの報告書を見せて貰ったが、VTシSTEMの搭載は兎も角スサノオとあの男のデータについてはドイツ軍は関わりが無いと書かれていた。

報告書を信用する訳ではないが今は考えても仕方ない。ヴェーダが無い限り確かな情報が手に入らないのだ。

ヴェーダの存在が無いというのはかなりの痛手だろう。こうしている間にも世界の何処かで『歪み』が生じているのかも出来ないのだ。

故に、もどかしかった。

ダブルオークアンタの修復にはまだ時間が掛かる。だが相手は既に動きだしているのだ。現状のままでは限界が近い。

だが、もし仮にこの世界に武力介入する事になったら

『彼ら』を敵に回す事になる。

IS学園の生徒と言えども、最終的にはそれぞれの国家に帰属するのだ。取り分け非常時には。

俺は、何も知らない『彼ら』に剣を向けられるだろうか

自然に浮かんでしまう最悪の光景を、頭を振り払って霧散させる。その時にならなくては何も分からないのだ。

『歪み』は駆逐する。だが、その前に『対話』をしよう。

理解するのだ。『篠ノ之束』と『IS』という存在を

「ここに居たんですか」

振り向くと山田先生がいた。俺が選んだ水着を着ているが、自分で言うのもなんだが似合っていた。

「皆と一緒に泳がないんですか？」

「……いや、眺めているだけで十分だ」

あの光景は俺にとって眩し過ぎる。咎人である俺には過ぎたものだ。

「……何か悩んでいるのですか？」

……顔に出してはいないが雰囲気ですわられたか。

だがこれは俺の、ガンダムマイスターとしての問題だ。何も知らない彼女に話せる事ではない。

「問題無い。些細な事だ」

立ち上がりその場を離れようとする。彼女達に関わらせてはいけない。

山田先生に背を向けて歩き出した時、声を掛けられた。

「……セイエイ君が何を悩んでいるのか分かりませんが、一人で抱え込まないで下さい。

誰かを頼るのも、信頼の一つですよ」

……やはり、眩しい。そして尊い。

いくら対話を果たしたとはいえ、罪と血に穢れた俺を知らないとはいえ気に掛けてくれる暖かさが。

「……礼をいう」

その暖かさを胸に秘め、そして嘔み締めながら俺は浜辺への道へ歩きだした。

海への誘い・後編（後書き）

夏休み編アンケート御協力有難うございました！

まさかこれ程までに返答戴けるとは思いもしなかった……！！

それでは結果発表、いつきましょ〜

？クラリツサ・ハルフォーフ大尉の愛しの隊長観察日記in日本編

十三票

？日本昔話・一夏断罪・処刑話

九票

……よって、クラリツサに決定致しました！！

今回かなりの接戦で、何度が並んだりしたんですよ。

だがクラリツサさんやはり強し！サブキャラなのに皆の記憶に残る

あの活躍（ラウラの水着ね）！！

もうレギュラーキャラでいいのではないだろうか！？

決定したのならば後は書くだけ！いつ夏休みに入るのかわかりませんがお待ち下さい！！

『戦乙女』達は『天使』に何を想う（前書き）

「こおおおおおっしいんっ！！」 東方不敗の超級霸王電影弾の後の構えで。

『戦乙女』達は『天使』に何を想う

刹那 Side

「……………何があつた」

昼食を摂る為に浜辺へと戻ってきた俺の目に飛び込んできたのは、首から下を地中に埋められた一夏の姿だった。

夏の太陽の日に晒され、且つそれによって熱せられた砂に埋められたそれは、辛うじて生きている真夏のコンクリート上のミミズの様だ。

隣に『一夏用』と書かれた金属製バケツが置かれているが…………。

「セイエイ、それに手を出すなよ」

「…………織斑先生、これは一体」

「女心を理解しようとするな馬鹿への然るべき扱いだ」

「……………」

…………成程、これは俺が関わるべき事ではないな。

一夏なら仕方ない。決して彼女達が怖いからではないぞ。もう一度言う、決して彼女達が怖いからではない。

俺がスルーの方向を決め込んでいると、鈴音が先程のバケツに海水を満たしてから一夏に向かつて、

バツシャア！！

『ぶふうっ!?!?』

ぶっかけた。

『ふん!?!』

バコオツ!!

『な、なんだ!?!いきなり目の前が暗くなって……暑っ!いや熱っ!?!蒸し暑さと火入れしたフライパンの様な熱さが同時に!?!』

そしてバケツをそのまま一夏に被せて去っていく。

太陽光で熱くなっているソレの内側では水分の急激な蒸発が発生し、熱が籠められているのだろう。

またバケツそのものが一つの凶器になっている。

『全く、一夏つたら何処まで鈍いのよ』

『あそこまでだと逆に感心してしまいますわね』

『まあその分誰かになびかないというのもあるけど……』

『だがまた何処かで女を引っ掛けてくるのだろう?』

『『『……』』』

……苦労しているのだろうな。だがあれについては介入は出来ないし対話も無理だ。

それに俺はまだ風雲再起に蹴られて死にたくない。……微妙に違う気がするが。

結局、一夏が解放されたのは昼食終了時間間際の事だった。

刹那・真耶 Side

カリカリカリカリ……

話は飛んで、夕食を済ませた刹那は自室で今日の行動を『臨海学校のしおり』巻末の日記記入欄に纏めていた。
一応普段の日記とは別物である。

因みに夕食であるが、どこぞの女たらしの所為で『女子生徒食事介護強要事件』が発生し、千冬によって鎮圧されたのは言うまでもない。

(そろそろシャワーを浴びるか……)

ペンを置いて着替えを持ってから室内シャワーに向かう刹那。旅館には露天風呂があるのだが入る気にはなれないのはある意味刹那の今までの人生の所為だろう。

しかし学園の大浴場は頻度は多くないが、わざわざ真耶が組んでくれた事もあり、周囲を警戒しながらも利用している。

因みに只でさえ気配に敏感な刹那がその感度を更に上げている事もあり、その所為で薫薫子が盗撮が出来ないのを嘆き、希少な刹那の隠し撮り写真の市場価格が益々高騰しているのを刹那は知らない。というか、自身の隠し撮り写真が流通している事すら知らない。

「ふうう、いいお湯でした〜」

刹那が浴室に入ってから暫くした後、露天風呂に行っていた真耶が浴衣姿で戻ってきた。

濡れて艶やかな髪、風呂の熱で上気して僅かに赤く染まった肢体、重たげながらも浴衣の隙間からその存在と谷間を強調する二つの山、普段見る事の出来ないその色気を放つ艶姿は、彼女を知る男性ならギヤップに心を射たれてしまうであろう。

戻ってきた真耶は部屋に刹那がいない事に気付くが、部屋の中から聞こえる水の音から浴室にいるのだと理解する。

ふと机を見れば、臨海学校のしおりが開かれた状態で置かれていた。

人の物を盗み見するのは気が引けるが、どの道自分が見る事になるのだから問題無いと言い聞かせながら目を通していく。

『0530時 起床。臨海学校の為筋力トレーニングを普段の半分に設定。』

0630時 筋力トレーニングを終了。着替えを済ませ食堂に移動。

0710時 朝食を済ませ身支度を始める。同時に装備、荷物の最終点検を施行。

0740時 指定待機ポイントに到達。移動手段であるバスの到着まで待機。

0800時 バスが到着。自身の荷物を預け、学園の備品の輸送

用トラックへの積載作業開始。

0915時 バス、目的地である宿泊施設『花月荘』に向け出発。

1000時 サービスエリアに到着。小休止に入る。食料、飲料水の予備に不備は無く、補給の必要は無いと判断。

1100時 宿泊施設『花月荘』に到着。これまでの移動にトラブルは無し。荷物を施設内へ……』

パタン……

真耶は無意識のうちにしおりを閉じていた。

(取り敢えず……セイエイ君が出て来たら注意しないといけませんね……)

主に書き方について。

他にも色々つつこみたいのはあるがまずは書き方だ。これではただの報告書である。

そうこう考えているうちに浴室に繋がる扉が開いた。

「あつ、セイエイく……ん……………／／／!?」

扉から出て来たのは当然刹那なのだが、その姿はスポーツジャージにタンクトップというラフな格好である。

元からの刹那の素材の良さと引き締まった身体、そして湯上がり補

正のコンボに真耶はやられていた。

今の真耶の格好もかなり色っぽいのだが刹那の実年齢は74歳。さらにいつもの無表情が合わさってほぼノーリアクションである意味真耶の負けであった。

それでも真耶は気を取り直して口を開く。

「せ、セイエイ君。勝手ながらしおりを読ませてもらいましたがこんな日記の書き方は駄目ですよ。」

ここまで細かくなくていいですからもっと自分の思っただ事を書かないと……。」

「むっ……?。」

いきなりのダメ出しに一瞬疑問に思ったが直ぐ様理解した刹那。しかし今日一日考えていた事は殆ど他人には話せない内容ばかりである。無人機然り、スサノ才然り、篠ノ之束然り……。

それ以外で特に書く程に思っただ事はあつたか。今日一日の記憶を頭の中で何度もリピート再生して捜し出す。

「ふむ……。」

一つあつた。それを書き込むべく真耶からしおりを受け取って書き足す。

「これでどうだ」

「どれどれ……?。」

『若い女性というものは何とも凄まじいモノだと今日一日を通して改めて実感した』

「……………」

セイエイ君本当に16歳ですかと心からつつこみたい真耶だった。

千冬&一夏ラヴァーズSide

「おいおい、お前らいつまでそうやってダンマリしているつもりだ？一人ぐらい切り出さんか」

「……………」

所変わって千冬の部屋。そこでは楽しいガールズトークという名の尋問会だった。

被告人は箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの五名である。

本来一夏以外の生徒が居るはずがないであろうこの部屋に何故この五人がいるのか。それは以下の通りである。

・夕食時、一夏がセシリアを騒ぎを起こした事への弁償として部屋

に誘う

セシリア、勝負支度を済ませ一夏（千冬）の部屋に迎うも、扉の前で聞き耳を立てる筈と鈴を発見。

何かと同じ様に聞き耳を立ててみれば、部屋の中から千冬の喘ぎ声。

三人揃って沈んでいると気配を殺して近付いてきた千冬に捕獲される。

喘ぎ声の正体は一夏のマッサージだと発覚。ついでにセシリアを呼んだ理由もマッサージだと発覚。

セシリアがマッサージを受けている間に、千冬の指示で筈と鈴がシャルロットとラウラを召集。

全員揃った所で一夏は汗を洗い流す為に露天風呂へ。そして尋問開始。

と、こんな感じである。

現在五人は一夏の何処が好きなのかとか穴があったら入りたくない様な事を根掘り葉掘り聞き出されていた。

下手に切り出せば自爆するのは目に見えている。そうはなるまいと五人は必死で口をつぐんでいた。

千冬は待ちきれなくなったのか、自分から話を切り出した。

「まあ、あいつは顔もそれなりにいいし料理等家事全般、更にマッサージも出来る。男としてこれ程の物件はそうそうないだろうな」

その言葉に、五人はピクリと反応する。そしてラウラが何か期待する様に、しかし恐る恐ると質問した。

「く、くれるのですか？」

「やるか、馬鹿」

（ ）（ ）（ ええ〜〜〜…………… ）（ ）（ ）

即答であった。その下りでそれはないだろうと、五人の心の中は一つだった。

「女ならば奪つくくらいでやれ。しっかりと自分を磨けよ、女子高生」

千冬の顔はニヤリとしていたが、その言葉は五人の心に『楔』としてしっかりと打ち込まれていた。

「さて、あいつの話はここまでにして……………」

あの発言から暫くの間沈黙が支配した後、再び千冬が話を切り出した。

「お前達から見てセイエイはどう思う？」

「……………は？」「……………」

いきなり何を言いだすのかと思えば話題に挙がったのは刹那の事だった。

「あの、どういう意味ですか？それ」

おずおずとシャルロットが質問するが、それは他の四人の代弁とも言えるだろう。

「いやなに、この学園で一番あいつに関わりがあり、尚且つ一年の中ではISの経験が豊富であるお前達からはあいつがどう見えるか気になったものだからな。」

模擬戦や普段の生活でも何でもいい」

建前では教師としてのそれに聞こえるかもしれないが、千冬の本音としては、刹那の本性が少しでも知りたかった。

今まで刹那と接してきて、刹那はそう簡単にボ口を出すような真似はしない事は解っている。

だからといって教師という立場である以上いつまでも監視している事は出来ない。

だからこそ、自分達以外で一番接点の多い、代表候補生と筈に聞く事にしたのだ。彼女達と一夏がほぼ毎日刹那を交えて特訓や模擬戦をしているのは知っている。

「そうですね……、一言で言うなら『強い』。けれど僕達代表候補生から見れば『異常』です」

「人並み以上の観察力と素人とは思えない機体操作、及び戦闘技能。たった三ヶ月そこらで身に付くものではありません」

「それにあいつの攻撃には一切の躊躇いも容赦も無いと感じます」

「むしろ代表候補生としてのプライドをズタズタにされてしまいますわ……」

「私も剣道をやっている者としては、刹那の剣の腕もかなりのものです。剣道じゃないにしてもあれ程ならば何処かで名前を知られていてもおかしくはない……」

シャルロットから始まりラウラ、鈴、セシリア、箒と続く。

各々刹那の異常性には気付いている様だ。鈴は若干恨みが籠もっている様だが……。

「大体あいつの所為で何回衝撃砲が壊されたか……」

「私もビットが……。それに今までこちらの攻撃が殆ど直撃してませんし……」

「大型レール砲を耐え切りワイヤーブレードでも傷付かない装甲つてどれ程のものなのだ……?」

「それにあの武装の多さもだよ。僕のリヴァイブを超えてるね」

「格闘もこなし射撃にも対応出来る……。距離を選ばないにも程がある」

それぞれが今までの事を思い返し、千冬の前だという事も忘れて話し合う。ついに話題はエクシアにまで及んでいた。

因みにラウラのシュバルツエア・レーゲンの大型レール砲はGNフィールドで防いでおり、またガンダムの装甲はティエレン長距離狙撃型の砲撃に耐え切る強度を誇る。

「ふむ……。ではプライベートはどうだ?」

やはりそつちの方面はこちらの知る通りか……。機体についても以前データのコピーを録ったがそれでも説明仕切れないものはあるがなと、千冬は一人考える。

「プライベートって……あいつ無口で無表情ですし、なんか時折あたし達とも距離を置いていた感じがするんですけど」

「一緒にいる事が多い割には趣味が筋トレである事以外知りませんし……」

「滅多に自分の事喋らないよね」

「それにいつもの動作にも無駄が無いというか隙が無いというか……」

「一人だけ凄く大人びている感じですね」

無口無表情なのは刹那の素なのだが、軍人であるラウラには刹那の動きに疑問を持っている様だ。

「まあ、一年の中ではあいつが最強だろうな。精神面も同世代のそれに比べれば大分大人だ」

「だったらあいつは何者なんですか？」

刹那は模擬戦のランキング一位で、二位にラウラである。ここはシユバルツェア・レーゲンのAICによるものが大きいが。

それに鈴が疑問に思うのも当然だろう。だが千冬も本当の所それが知りたいのだが。

「教師が生徒の個人情報話す訳にはいかないしまた全てを知っている訳でもない。

ただ、言えるのは……」

「言えるのは……？」

で話題を探していた。

「あ、あのっ！」

「何だ？」

「好きな人はいるんですかあっ!？」

(つてバカア!?!いきなり何を言ってるんですか私?!)

ゴスツ!!!

「っ……………!!??」

「はっ!?!セイエイ君!？」

真耶のいきなりぶっ飛んだ話題に刹那は冷蔵庫から取り出したポカリス エットのペットボトル(500?)でそれなりに中身が残っていた)を足の小指に落として悶絶していた。いくらイノベーターといえどこれは痛いだろう。恐らくかの狂戦士すら地味に効くのではないだろうか?

「だ、大丈夫ですか!？」

急いで真耶が駆け寄るが、ふいに刹那が顔をあげた為に超接近する。

「!?!ふわわわわわノノ!?!」

がしっ、ボタン!!

「きゃあっ!?!」

逆再生よろしく急速バックし、足が絡まって後ろ向きに倒れる真

耶。ドリフやひょうきん、ダチヨウもびっくりなアドリブぶりである（ちよつと違う）。

次第によつては真耶の方が重症ではないのだろうか？

「……大丈夫か？」

「は、はい……。なんとか……。っ／／！？」

所々浴衣がはだけて危ない状態となっており、顔を真っ赤に染める真耶とは対称的に気付いてすらいらないのか反応に乏しい刹那。

後に真耶の女としてのプライドが傷付いたのは言うまでもなかった。

「そ、それでどうなんですか……。／／／？」

一度言ってしまった以上引き返せないし恋する女としては聞き逃せない話題。だが刹那から返ってきたのは予想外な答えだった。

「……分からない」

「はい？」

「人を好きになるという感情が分からない……」

彼は何を言っているのだろうか？真耶にはさっぱり理解出来なかった。

「それってどういう……」

「……人を、そういつた意味で好きになるという感情が分からない。本当に、分からないんだ……」

「……………」

刹那には、誰かを『like』になれても『love』になる事が分からなかった。

マリナ・イスマイルに求めていたのは、母としての慈しみだろう。フェルト・グレイスには仲間としての安心感が……。

残酷だ。真耶はそう思っていた。恋をするといって、人間として当たり前前の事が出来ないのは、どれ程残酷だろうか。彼は、何の為に、誰の為に生きるのか。

だが真耶は何も言えなかった。自身の恋心を悟られなくなかったのもあるだろうが、刹那に何と声をかければいいのか分からなかった。

ただ、『分からない』の言葉のみが真耶の心に響き続けた。

『戦乙女』達は『天使』に何を想う(後書き)

戦乙女は勿論ヒロインズ。千冬だってブリュンヒルデだし恋だって戦いですよね。

〜今回の没ネタ〜

場面 ビーチバレー

シャルロット、ラウラ、鈴VS一夏、女子A、女子B

女子A(以下A)「そ〜れっ!」

シャルロット(以下シ)「いくよ、ラウラ!」

ラウラ(以下ラ)「まかせろ!バスタオルアーマー、パージ!!」
ロボットアニメ風に

シ「アインス!」 トス

ラ「ツヴァイ!」 トス

シ「ドライ!」 スパイク

一夏(以下一)「ぐあっ!?!」 アンダーで受けるも態勢を崩しボ

ールは相手コートへ

シ&ラ「ッインキヤット・ストラアアアアイク!!」
人同時スパイク

「ひでぶっ!?!」 顔面直撃、再びボールは相手コートへ

鈴「殴ッ血KILL!!」 渾身のスクリユーススパイク

「ぶるああああああああ!?!」 鳩尾直撃、四メートル
吹っ飛ぶ

理由 合体技つていいなと思って書いたけどまだシャルロットとラ
ウラ猫パジャマ買ってない事に気付いたので。

『紅』と『兎』と『革新者』（前書き）

九割方一夏です。物語も殆ど進んでないし刹那と束さんの絡みが少ない……。多分次回に持ち越しかも。

『紅』と『兎』と『革新者』

一夏Side

臨海学校二日目。この日からようやくIS学園らしい内容が始まる。

ISの各種装備試験運用とそのデータ取りだ。

文字通りIS専用換装装備『パッケージ』を始めとする各種装備を訓練機の打鉄やリヴァイブに装備させ、実際に稼働させてそのデータを取るというものだが、それはISの汎用性の高さを物語っている。

戦闘機や戦車、巡洋艦は運用目的に沿って造られる為その通りには使えないが、ISは量子変換した装備や外装の変更、ブースターの増設やソフトの換装によってあらゆる目的に対応出来る。

とは言っても戦闘中に変更出来るものでもないし、機体によってはその換装装備もかなり限られてくる。

シャルのラファール・リヴァイブ・カスタム？は量産機であるラファール・リヴァイブのフルカスタム機なので元から装備の幅が広いが。

一般生徒は旅館から離れた浜辺で 昨日のとは別の場所だが、訓練機でやっているが、俺達専用機持ちはそこから更に離れた入り江の様な場所に集合していた。

専用機持ちが別の場所でやるのは国家機密云々の関係だろうが、俺の白式にはそもそも今日の内容自体が殆ど関係無かったりする。

白式は雪片式型しか受け付けないので、当然他の装備など無い。白式の開発元である倉持技研が何とか新装備の開発をやっているのだが、白式が全く反応しないのだ。仕方ないからこのまま雪片一本で頑張っているのだがそろそろ辛いのが本音である。

話がずれたな。今この場には俺を除いてセシリア、鈴、シャル、ラウラ、刹那、そして何故か篤がいた。

本来ならば四組にも一人専用機持ちがいるらしいのだが訳ありで臨海学校には参加してないそうだ。それでも専用機を持っていない篤がこの場にいる理由にはならないが……。

「よし、これで全員揃ったな」

「あの、何故篠ノ之がここにいるのですか？ここに居るのは専用機持ちのみのはずですが……」

「ああ、それは……」

どうやら鈴も含む全員が疑問に思っていたのかセシリア達も頷いていた。

それに対し千冬姉が説明しようとするが……。

ズババババババババババババババババツ！！

「ちい~~~~~ちやあ~~~~ん！！」

「……………束」

どこからか聞いた事のある声がして周りを見渡せば、海の彼方から足になにやらIS的なモノを装着した束さんが海の上を走っていた。

昨日は空から、今日は海から……………。今度現れる時は地面からなのだろうか？

「やあつ、ちーちゃん！会いたかったよ！！だから久し振りの愛のあるハグをへぶっ！？」

「五月蠅いぞ、束（ミシミシミシミシ……………）」

浜までたどり着きルンジャンプよろしく千冬姉に飛び付こうとする束さんだが、見事千冬姉の鋼の右手に捕まりアイアンクローの餌食に……………。
は？クアドラン？知らんぞそんなん。機械鎧燃えの幼なじみでもねえよ。

「ぶっはあ！！相変わらず過激な愛情表現だね、ちーちゃん！！」

そのアイアンクローから脱する束さんも只者ではないと思う。頭だけでなく実は身体もとんでもないのではないのだろうか？

「やあ！篝ちゃん！！」

「……………どうも」

「えへへ、久し振りだね。それにしてもおつきなかつたね〜、おっぱいが」

ガンツ！

「殴りますよ」

「いったあ！？殴ったね篝ちゃん！？いつくんにも殴られたことないのに！！」

突然にしてやってきた嵐の様な存在と展開に皆がポカンとしてい
る。……って刹那？どうして顔が強張ってるんだ？

「いい加減にしろ、束。自己紹介くらいしろ。周りが混乱している」
「ええ〜、めんどくさいなあ。はろ〜、私が天才の束さんだよ
〜 はい終わりー」

なんとまあ投げやりな束さん。鈴達が状況を把握するのは三分後
の事だった。

「それで、例のものは……」

「ギユピーン！？……うっふっふっ。それは言わずもがな準備万全
だよ。さあっ、大空を御覧あれ！！」

どこか期待する様な声で篝が尋ねたと思えば束さんが待っていた
と言わんばかりに答えた。

『ギユピーン』を口で言う人初めて見たがまあ束さんだから……。

それよりも『例のもの』というのが気になるが空から……！？？

ズゴオオオオンッ！！

……生えた。空を見上げた瞬間、地中から金属製の箱が生えた。いや、現れたか。まさか本当に地中からは思わなかった……。

いきなり現れた金属製の箱の正面が開き、中からアームによって深紅に染められた『甲冑』が太陽の元に晒される。

それはまさしく“IS”だった。

「じゃじゃーん！これぞ篝ちゃん専用機こと『紅椿』！！全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！！

さあさあ、今すぐフィッティングとパーソナライズを始めよう！！」
「お願いします」

は？現行ISを上回るスペック？束さん何かとんでもない事おっしゃってませんか？

それって現時点で世界最高の性能があるという事ですよ？

(それもだけど……)

紅椿の外見はまさしく『鎧武者』。しかし過度な装甲は持たず、ISとしての必要な分しかないが、それでもなお『武士』もののふとしての迫力を表していた。

武装は見える範囲で両腰の二振りの近接ブレードのみ。しかしそれらの刀身には白式の雪片式型と同じくスリットが入り、機械的な部分が見えている事から仕掛けがある事が解る。

「紅椿には自動支援装備があるからね、後コンセプトは近接格闘を基礎にした万能型だよ〜」

束さんがいくつもの空中投影パネルを操作しながら口を開く。『自動支援装備』という事は第三世代機相当の装備があるのだろう。

「んしょつと、後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終了するね。あ、いっくん、白式見せて。束さんは興味津津なのだよ」「あつ、はい」

束さんに言われた通り白式を展開する。以前は0・7秒掛かっていたが今では0・4秒で展開出来るようになった。

「データ見せてね〜、うりゃ」

ぶすつという音が鳴りそうな感じで文字通り端末のコード端子を白式の装甲に刺す束さん。

「ん〜……何だろ、見た事の無いフラグメントマップを構築してるね。いっくんが男の子だからかな？」

フラグメントマップとは人間で言う遺伝子の様なもので、それぞれのISが独自に発展していくその道筋の事らしい。

「束さん、その事なんだけど、どうして男の俺がIS使えるんですか？」

「ん？ん〜……わかんない。ナノ単位まで分解すれば解る気がするんだけど、していい？」
「いい訳ないでしょ……」

了承したら最後、俺まで分解されてしまつ。この人の『お願い』は注意深く聞いておかないとヤの字の悪徳金融より質が悪い事があるのだ。

「じゃあ、後付装備が出来ないのは……」

「そりゃ、私がそう設定したからだよん」

「え……ええつ！？白式つて束さんが造つたんですか！？」

「うん、そーだよ。つて言つても欠陥機としてポイされていたのを貰つて動くように弄つただけだけどねー。

でもお陰で第一形態から単一仕様が使えるでしょ？でねー、なんかねー、元々日本がそういう風に関発してたらしいよ」

「馬鹿たれ、機密事項をべらべらバラすな」

ゴスツと束さんの頭に打撃を加える千冬姉。この二人、小学校時代からの付き合いだから束さんはそれだけ多く頭を叩かれてきたはずだが、この人の脳細胞はどうなっているのだろうか。

俺なんて最近叩かれ過ぎて頭の回転が鈍くなつてきた気がするのに……。

千冬姉と少しだけコント（？）を繰り広げた後、束さんは俺達を押し退けて後ろの方へ進んでいく。

その先にいたのは、『二人目の男性IS操縦者』こと刹那だった。

「やあ！初めまして。君が刹那・F・セイエイくんだね？」

「……ああ」

「君のIS、『エクシア』を見せてくれないかい？束さんはこつち

にも興味津々なのだよ。無論、き・み・に・も・ね」

目の前で起きている事を正確に理解しているのは俺と筭、そして千冬姉ぐらいだろう。

他の皆はただ何でもない様に思っているかもしれないが、“あの”束さんが他人に興味を示しているのだ。

他人嫌いで筭と千冬姉と俺ぐらいにしかまともに接しようとしなかった束さんが全く関係の無い刹那に自分から話し掛けているのだ。事実、筭は信じられないという顔をしているし千冬姉も変化は乏しいが珍しいものを見る表情だ。昨日薄々と気付いていた俺だってそれらに洩れない。

「断る」

しかし、刹那から帰ってきた答えは余りにも素っ気ないものだった。

「……どうしてかな？」

「許可なく機密事項を明かす事は出来ない。それに、俺はまだ『篠ノ之束』という人間を理解しきれていない」

「ふーん……。筭ちゃん、もう紅椿のパーソナライズも終わったはずだから稼働テストに入るっか」

「は、はい……」

先程とは打って変わって無表情で、抑揚の少ない声で刹那の元を離れていく東さん。

機密事項をISを管理する国や企業の許可なく明かす訳にはいかないのは分かるが、相手はISの開発者である東さんだぞ？

製作側、管理側からすれば運が良ければかの大天才から何らかの意見を貰えるのだ。これほどおいしい話はない。

一人思考の海に漂っていると、紅椿から調整の為のケーブルが外され丁度今から稼働テストに入るようだ。

「行きます!!」

ドゥッ!!

箒が顔を上げると同時に、衝撃波と砂塵が発生する。白式のハイパーセンサーを展開してみれば、上空200メートルの高さを飛行する紅椿の姿があった。

東さんの言葉どおり、通常飛行速度が一般的なISに比べて高い。

「うんうん、機体反応速度、機動力共に問題ナッシングだね。じゃあ次は武装いつてみよー。右が『雨月』、左が『空裂』ね〜」

東さんから武装データを受け取るや否や、両腰の近接ブレードを慣れた手付きで抜刀して構えを取る箒。篠ノ之流剣術は本来二刀流らしく、その姿は様になっていた。

「ここで親切丁寧な東お姉さんの解説講座〜」 雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刀身からレーザーを放出、連続して敵を蜂の巣に！ する武装さ〜。射程はアサルトライフルぐらいだよ」

東さんの説明通り、構えから突きを放つ。すると刀身とその周囲から球体のレーザーが雨の様に走り、近くを漂っていた雲に幾つもの穴を空けた。

「そして空裂は対集団仕様の武装だよん。斬撃に合わせて帯状にレーザーを放出するんだよ。振った範囲に自動で展開するから超便利 ンじゃ、これ撃ち落としてみてねーっと、ほい」

言うなり、上空に十六連装ミサイルポッドが展開され、一斉射撃される。

「 やれる、この紅椿なら!! 」

右脇下に構えた空裂を自身が一回転するように振る。すると、帯状のレーザーが剣筋に添って円を描くように放出され、ミサイル全機を撃ち落とした。

「すげえ……」

圧倒的な性能。東さん特性の最新鋭機であり、箒に合わせて造られている事もあってかその性能は他のISに追随を許さないものだった。

東さんは、その性能と空に浮かぶ箒と紅椿の威風堂々たる姿を見てか満足そうな笑みを浮かべている。

しかし、その束さんと紅椿の姿を厳しい目で見る人物がいた。

(千冬姉……とそれと刹那？何でまるで敵を見る様な顔をしているんだ……？)

千冬姉の目も刹那の目も警戒の色を帯びている。

特に千冬姉のそれは、現役時代の試合の時の目と同じものだった。

「お、織斑先生！緊急事態です！！」

そして、事件が始まる。

『紅』と『兎』と『革新者』（後書き）

ここで一つ連絡が。

今までこの小説ではエクシアの外見はISのソレに添ったものですが、今後『ガンダム』の特異性や『量子化』を考えた結果、全身装甲になるかもしれません。

『駄目だ、このままではガンダム分が足りない！』とか、『半生身で量子化……。ヴィジュアルショック……。』てな感じで……。ご理解の方宜しくお願いします。

堕ちた『銀』と墜ちる『白』・前編(前書き)

長くなりそうだったので前後半に分けましたが、中途半端であり戦闘シーンが入っていないのは御了承下さい(泣)

墮ちた『銀』と墜ちる『白』・前編

刹那 Side

あれから新たに筭が加わった俺達専用機持ちは浜辺から撤収、旅館の大座敷・風花の間に集められた。

一般生徒達は各自自室待機らしい。

「では、現状を説明する」

織斑先生が言うと同時に薄暗い空間の中に、ぼうつと一つの大形ディスプレイが浮かび上がる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

……軍用ISの暴走か。ISが軍事利用されている事については既に知っている。競技用など建前に過ぎない。

一夏と筭は突然の事態に追いていけないようだが、代表候補生の面々は真面目な顔をしている。

恐らく訓練の一環でこういう事態への対応も叩き込まれてきたのだろう。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2?先の空域を通過する事が判った。時間にして五十分後だ。

学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処する事になった」

ISに対応出来るのはISだけだ。数に限りがある上に国際的な問題も考れば何処の国家にも所属せず尚且つ十分な戦力を保有するIS学園が対応するのは妥当だとも言える。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらおう」

実力を考えれば教員が担当するはずなのだが、如何せん機体の性能に差があり過ぎる。

誰でも扱えるようにした『教導用』の訓練機と『軍用』に造られた第三世代機の、しかも最新型となれば厳しいのは目に見えている。

だったら一部例外はいるが銀の福音と同じ主に第三世代型で構成された俺達専用機持ちで対処するしかない。

だがこれは実戦であり、経験の少ない彼女達を参加させるのは気が進まないが……。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは拳手をしよう……早速か、セイエイ」

「アメリカ・イスラエル両軍の動きはどうなっている？」

元はと言えば今回の事件の責任は今のところ開発元であるアメリカとイスラエルにある。……多少きな臭い所はあるがな。

しかし俺達が対応する事になったとはいえなんらかのバックアップはする義務はあるはずだ。

「監視空域及び海域に展開していた部隊の殆どは福音によって壊滅

させられたらしい。死者は今のところ出てないが追跡部隊の編成は難しいとの事だ」

「了解した」

……予測はしていた。そうは簡単にはいかないという事か……。

「なあ、学園が対応する事になったとはいえここ日本だよな？ だったら自衛隊が出たりはしないのか？」

一夏が恐る恐るという感じで拳手をする。

「馬鹿者、それはむしろアメリカとイスラエル側から拒否される」

「へっ？」

「暴走しているとはいえ銀の福音はアメリカとイスラエルの最新技術の塊 謂わば、最重要国家機密だ。

わざわざ他国にそれを知られる様な真似はしたくない。ならば、何処の国家にも所属せず、尚且つ機密がある程度保持されるIS学園にやらせるのが妥当だ」

それに自国の被害は軽減させられる。もし万が一学園側に負傷者が出てもメリットの方が大きいのだ。

「一夏、憶えておけ。それが国家というものだ」

一夏は納得しきれていない様だが国家というのは一筋縄ではいかないものだ。

何も知らずに生きてきた人間にいきなり理解しろというのも酷では

あるがいずれ知るべきものでもあるのは違いない。

「はい」

「オルコット」

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。但し、これらはニヶ国の最重要軍事機密だ。決して口外するな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

その言葉に了解の意で首肯しつつ、ディスプレイに投影された開示データに目を向けた。

最重要軍事機密といえど、流石に原理的なものや細かな数値までは開示されていかなかったが無いはまじだ。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……。私のISと同じく、オーレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方に特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうの方が有利……」

「あくまで理論値だ。期待しない方がいい」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。丁度本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っている特殊技^{スキ}も解らん。偵察は行えないのですか？」

「無理だな。この機体は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450?を超える。アプローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……という事はやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の意見は最もと言える。しかし“雪崩”は加速形態の活動時間が10分しかない為単機で追跡しつつ鎮圧を連続して行うのは難しい。

また威力ならヴァーチエのGNバズーカがあるが発射までウェイトがある上に照準の問題もある。威力次第では福音の操縦者の安全を確保出来る可能性が低い。戦いでは殺す事よりも生かす方が難しいのだ。

ふと見れば一人を除くその場にいる人間が同じ人物を見ている。どうやら同じ考えに至った様だ。

「え……………?」

「一夏、あなたの零落白夜で墜とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追い付ける速度が出せる機体でなければいけない。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

白式の零落白夜なら以前のVTシステム戦の様に、一撃を持って、比較的安全に敵機を墜とせる。

確実に作戦を実行する為に先程の様にエネルギーは全て零落白夜に注ぎ込んだ方がいいだろう。後は足と本人次第だが……。

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「……当然……」

「一夏、絶対防御があるとはいえ無傷で事が済む可能性は高くない。それでもやるか？」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

一夏としては三回目の実戦だが実質今回が一夏にとって初の実戦となるだろう。以前の二回は俺が殆ど対処している分実戦経験は少ないと言っている。

先程までは及び腰だったが、織斑先生の言葉で決心が着いたのか、真っ直ぐ織斑先生の顔を見据えて言った。

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、私のブルー・ティアーズが。丁度本国から強襲用高機動型パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーも付いています」

「こちらも、同じく強襲用高機動型オートクチュール『アヴァランチ・AC』アームスカスタムが用意されている。スペックデータを今そつちに回す」

現在最高責任者である織斑先生の目の前に“雪崩”ことアヴァランチ・ACのスペックデータ（改竄済み）を投影する。

オートクチュールの製作については以前から通達して許可を貰っているから問題ない。

「ふむ……。バーニアと専用のバッテリーを内蔵した追加装甲で一時的に爆発的な加速力を生み出す使い捨て可能な装備か。

しかも基本装備の殆どを拡張領域に収納する代わりに高火力な武装を装備する……。まさしく『雪崩』だな」

「単機で大気圏を突破出来る程の推力を生み出す為、恐らく速度はこの中で一番だと言える」

このオートクチュールのモデルとなったアヴァランチユニットは過去にミッションで使用した経験があるので問題ない。

「しかしその加速力が発揮出来るのが10分間のみなのが厄介だな……。オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ……。それならば」

「待った待ったあ！その作戦はちよつと待ったなんだよ〜！！」

突然聞こえてきた無駄に明るい声がこの空気を破壊する。

声のする方に目を向ければ天井から先程まで見ていたメカニカルなウサギの耳が逆さ釣りになっていた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？は、はいっ。あの、篠ノ之博士、取り敢えず降りてきて下さい……」

「とっつ」

空中で一回転をきめながら畳の上に降り立つ篠ノ之束。何をしに来た……？

「ちーちゃんちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にノウ・プリンティング！！」

「……出て行け」

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！！」

「何？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんかなくても超高速機動が出来るんだよ！！」

銀の福音とアヴァランチ・ACのスペックデータが表示されていたディスプレイが紅椿のそれに変わった。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいっと。ホラ！これでスビードはばっちり！時間も気にしない！！」

聞き慣れない単語にその場にいる全員が疑問符を浮かべる。

「説明しましょーそうしましょー。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

「第四つ?!」

「はい、ここで心優しい束さんの解説開始。いっくんの為にね。へへん、嬉しいかい？」

まず、第一世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付装備による多様化』。これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧兵器にBT兵器、AICとか色々だね。

……で、第四世代というのが『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。理解出来たかな？」

「は、はあ……、え、いや、えーと……？」

一夏含め何人かは思考が追いついてないが篠ノ之束の説明の内容は『空想論』が『現実の理論』となっている。

「具体的には白式の雪片式型に使用されてます。試しに私が突っ込んだ」

「「「「えっ!?!」」」」

「何っ!？」

待て、世界各国がまだ第三世代型の一号機がようやく試験稼働に入った所に第四世代型にだと？

更にその言葉通りなら白式も第四世代型に分類される事になる。

「それで、上手くいったのでなんとんと紅椿は全身のアーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼働時にはスペックデー
タ更に倍プッシュだ」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待って下さい。え？全身？全身が、
雪片型式と同じ？それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言うと最強だね。」

因みに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・
機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標であ
る即時万能対応機リアルタイム・マルチロール・アクトレスって奴だね。

「やははは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

「……………」

「はれ？何で皆お通夜みたいな空気なの？誰か死んだ？」

「東、言ったはずだぞ。やり過ぎるなど……………」

「そうだっけ？やはは、つつい熱中しちゃったんだよ〜」

「本人は悪怖れもなく言っているが俺からすれば正気の沙汰とは思
えん。」

紅椿には恐らく世界に知られていない未登録のコアが使われている。つまりは何処の国家、団体にも属していない。

誰のモノでもない未登録のコア。

世界初の第四世代型とその技術。

世界最高のスペック。

ISの開発者である篠ノ之束製の機体。

(……間違いなく、世界が動く)

紅椿の存在が公表されれば間違いなく世界各国が紅椿とその操縦者である篠ノ之束の確保に動くだろう。

妹が追われる立場になる事を気付いてすらいない。『妹本人』ごと。いや、むしろこの場にいる殆どが。

あの浜辺でのやりとりから箒は紅椿の存在は知っていた。しかも、自分から望んだ様に。

彼女が何故専用のISという“力”を望んだのか。

ISという“力”に“何を”望むのか。

今まで様々な理由で“力”を求めた人間に出会ってきた。

『ガンダム』という存在に取り憑かれ、それを打ち倒す為に“力”を求め修羅となった男。

家族の復讐を果たす為に“力”を求めた少女。

世界を変える為に『ガンダム』という“力”を求めた自分。

そして彼女は、筈は俺達と並ぶ為に。一夏の『隣』にいる為に。

一夏の周辺の、いつもつるんでいる人物の中で唯一『専用機』を持つていなかった彼女が、それにコンプレックスを抱いていた事は以前から漠然と感じていた。

自分だけ違うという疎外感。何も知らないからこそ抱ける“羨望”。

力の重さを。責任を。覚悟を。代償を。

今何も知らず“力”を得た彼女が、心の奥に潜めている感情。

(……酷く、危うい)

一度失ったものは還ってこない。彼女は自分のいる“平和な世界”を気付かないうちに捨てたのだ。

篠ノ之束も然りだ。まるで玩具をあげる様な感覚でISという“力”を、『兵器』を与えたのだ。

作戦が迫っている事もあり、口に出して言う暇はないがそれでも

俺は彼女に疑いを持たざるを得なかった……。

堕ちた『銀』と墜ちる『白』・前編（後書き）

SS投稿掲示板の作品を読んでその技量と質に打ち拉がれている自分がいる……。

『落ちた』銀』と墜ちる』白』・後編(前書き)

本当にごめんなさい。

何度も書き直して構想練り直していつのまにかOO×MUV・LU
Vを妄想していてGN粒子使わずにビーム兵器造る束さんパネエと
なっていてとにかくごめんなさい。

墮ちた『銀』と墜ちる『白』・後編

刹那 Side

「はあ……。それで、紅椿の調整にはどれくらい掛かる?」

「お、織斑先生!？」

篠ノ之束の発言によって沈黙化したこの空気から織斑先生の一言とセシリアの驚きの声が再び流れをきり出す。

「わ、私とブルー・ティアーズなら必ず成功してみせますわ!」

「そのパッケージは量子変換してあるのか?」

「そ、それは……」

「セイエイ、お前はどうか」

「既に量子変換は済ませてある。いつでもいける」

「そうか。束、どうか?」

「紅椿の調整なら七分あれば余裕だね」

「よし。では本作戦は織斑、篠ノ之、セイエイの三名で遂行する。織斑、篠ノ之両名は目標の追跡及び撃墜を目的とし、セイエイは二人のサポートと現場指揮だ。作戦開始時間は三十分後。各員、ただちに準備にかかれ!」

織斑先生の号令と同時にそれぞれが動き出す。俺も篠ノ之東から離れた位置でコンソールを展開してエクシアとともにアヴァランチ・ACの調整を開始した。

『んじゃ、早速紅椿をいじろっかな!』

『……………』

『んあー、もっと笑ってよお。ほらほら、作戦メンバーにも選出されたし、良い事づくめでしょ?』

『もとからこっついう顔なので』

良い事づくめか……。自分から仕向けたというのにな。篝自身も表とは裏腹にそれ程嫌に思っておらずむしろ喜びを感じてしまっている。

それに今回の事件は何もかもが『都合が良過ぎる』ように感じる。“最強”のISである紅椿とそれを巻き込むようにして起きた最新型ISの暴走。それはまるで紅椿の初舞台として、仕組まれていたかの様だ。

そう考えるとこの世界の十年前の出来事でもある『白騎士事件』もまた同様に思われる。

『白騎士事件』。それはISが初めて世界の表舞台に立った事件であり、ISの脅威性を世界に知らしめた事件でもある。

十年前、日本を攻撃可能な範囲にある世界各国の計2341発も

のミサイルが、一斉に日本に向けられて発射された。

それは各国の思惑なんかではなく何者かによってハッキングされ、制御不能に陥いられたものである。

日本を始めとする各国が混乱と絶望に飲み込まれ始める中、“それは現れた。”

中世の鎧を模した、白銀の機体。世界初のIS『白騎士』。

それは右手に持った剣で、発射されたミサイルの約半数1221発を『斬り落とした』のだ。

また残りの1120発は、『召喚』した試作大型荷電粒子砲で撃ち落とした。

しかし世界も馬鹿ではない。音速を超える速度での近接格闘に粒子から物質を構築する能力。そして世界初のビーム兵器。

全てのミサイルが撃墜された後、各国は驚異にして脅威である存在に向けて国際条約を無視し日本に偵察の為の『戦力』を派遣した。

当時最新鋭だった機体も惜しみなく投入されたが、結果は無惨なものだった。

白騎士はその強固な装甲とシールドバリアーによって損害は皆無。対して各国の損害は戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基を撃破あるいは無力化された。そして、死亡者数は0である。

白騎士は日没と共に忽然と姿を消した。現れた時の映像を逆再生した様に、その場から姿を消したのだ。

相手を生かしたまま無力化し、そしてレーダーや監視衛星を使っ

てまでも捉えることの出来ない完璧なステルス能力を兼備えたその性能。

世界が初めて『敗北』した瞬間だった。

しかし何故白騎士はそこに現れたのか？何故このような事件は発生したのか？

答えは簡単だ。ISの『力』を世界に知らしめる為だ。

これは俺達CBが武力介入を始めた初のミッションに酷似している。ガンダムの『力』を見せ付ける為に、俺がエクシアで当時AEUの最新鋭MSイナクトを無力化した様に。

そしてこの事件を引き起こしたのは……ISを開発した張本人である篠ノ之束だろう。“IS”という従来の兵器とは逸した存在を生み出した彼女ならハッキングなど容易い。無論『証拠』を残さない事もだ。

それに白騎士の操縦者……恐らく織斑千冬……先生本人だろう。篠ノ之束の当時の交友関係を知っている訳ではないが事件の映像を見るに、かなりの実力者だった。

顔はバイザー型ハイパーセンサーに隠されていたが、篠ノ之束の知り合いであれ程の力を持つのは織斑先生ぐらいだ。それに白騎士の動きはモンド・グロツソでの織斑先生の動きに酷似していた。何故協力したのかまでは解らないが……。

とにかく、それを踏まえると今回の事件は白騎士事件の再来と言っている。

証拠など無い。残されてなどいない。

……これは、『偶然』の出来事なのだから。

三人称Side

日本現地時間1130時。旅館から少し離れた砂浜に各々のISSスーツを着こんだ三人の姿があった。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「エクシア、起動」

三人の全身が光に包まれ、照りつける太陽の下に三機のISSが現れる。

その中で一際異彩を放つ機体があった。アヴァランチエクシア・A Cである。

元々エクシアはセブンスードによる近接格闘に特化機体であり、他の三機のガンダムと比較しても取り分け人間に近い構造をしておりスマートな印象を受ける。それはISS化しても変わらないものだった。

しかし今のエクシアは肩や脚部だけでなく腰部から背部にまで追加装甲 特に肩と脚部には大型の が施されている。

背部の二門の大砲もあってエクシアそのものを初めて見る人物には

重装甲と重火力をコンセプトにしていると誤解されてもおかしくない。どう見ても高速機動には向いてないだろう。

しかしそれは間違いであった。

この『アヴァランチ・A.C.』は短時間での長距離移動と敵集団の中を強引に突っ切る事を目的とした『アヴァランチユニット』の改良型『アヴァランチダッシュユニット』とガンダムの火力と機動力を強化する『GNアームズ』両方のコンセプトを融合させた装備である。

追加装甲各部にはGNバーニアと専用のコンデンサーが内蔵されている。

また追加装甲を装着するスペースを確保する為に格納領域に収納された武装の代わりとして背部にGNアームズのそれをサイズダウンさせたGNキャノンと、GNミサイルポッドが、左腕にはGNビームマシンガンが搭載されている。

イメージとしてはアヴァランチダッシュの背部の武装懸架アームを廃してGNキャノンとミサイルコンテナを追加、両腕のコンデンサーを廃してキュリオスのGNビームマシンガンを取り付けた感じ。詳しくは設定をご覧ください。

「じゃあ、筈。宜しく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回は特別だぞ」

作戦の性質上、白式は零落白夜に全エネルギーを注ぎ込まなくて

はならないので移動は全て紅椿にまかせる必要がある。
エクシアは遊撃による二機の援護と現場での作戦指揮を任されている。

白式とエクシアの活動限界時間を考えると短期決戦型の作戦である。

(しかし大丈夫か……?)

(まずいな……)

偶然にも、一夏と刹那は同じ思いを抱いていた。それは、箒の状態についての懸念である。

紅椿の性能とその時の状況から作戦に抜擢された訳だが、箒自身は今日紅椿に初めて乗ったので慣熟飛行などしていない。

いくら機体のパーソナリティーとフィッティングを済ましても操縦者が追いてこれなければまともに動かないのだ。

そして箒本人の状態は、初めて戦場に出る新兵と同じような緊張状態ではなくそれとはまた違った一種の興奮状態であった。

それは一夏の隣に立てる『喜び』。一夏の隣に立てる、共に戦えるだけの力を得たという彼女が待ち望んだ状況。

更には彼女がこの状況でこの様な気持ちを抱ける理由の一つとしてISが原因となって起きた『死』への意識の変化が一枚噛んでいると言えよう。

ISには操縦者保護機能がある。シールドバリアーと絶対防御がある。だから、操縦者は死なない。死んだ事は無い。そういう意識と考えがこの世界の殆どの人間には染み付いてしまっているのだ。

無論絶対防御を超える攻撃を受ければそれを突き抜けて操縦者に直にダメージが与えられる事は証明されている。しかしそんな事が起こるのは限りなく0に等しかった。今までは。

しかし考えてみればどうか。世の中に絶対という事象ことは無いし、絶対防御を破る方法などいくらでもある。ガンダムの性能なら尚更だ。

要はそういう事が今まで起きなかったまたは表に明かされる事がなかったに過ぎない。

「それにしても偶々私達が居た事が幸いしたな。私と一夏が力を合わせれば出来ない事などない。そうだろう？」

「あ、ああ。そうだな。だけど箒、これは訓練でなく実戦だ。何が起こるかは分からないから十分に注意して」

「無論、分かっているさ。ふふ、どうした？怖じ氣ついたか？」

「そうじゃねえって。あのな、箒」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでい……箒「何だ刹那？」

「余り浮かれるな。足をすくわれるぞ」

「何を言っている刹那。私がこの大事な時に浮かれるはずがなかるう」

「……………」

二人に忠告を受けても篤の態度は全く変わっていない。刹那が通信で千冬に篤を作戦から外すよう提案するかどうかを本気で考え始めた時、その千冬から開放回線が開かれた。

『三人共、聞こえているな？今回の作戦はワンアブローチ・ワンダウン一撃必殺だ。短時間での決着を心掛ける』

『『『了解』』』

『織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？』

『そうだな。サポートにはセイエイが廻る。それにセイエイには現場での作戦指揮を任せてあるからその指示には従うように。』

決して無理はするな。お前は紅椿に慣れていないし実戦経験は皆無だ。何かしらの問題が出るとも限らない』

『分かりました。出来る範囲でやります』

一見落ち着いた返事の様だがやはり口調は喜色に弾んでおり浮ついているのが分かる。

『 織斑、セイエイ』

突如回線が開放回線から個人間秘匿回線と切り替わる。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かし損じるかもしれない。いざという時はサポートをしてやれ。セイエイももしも
の時は退がらせる事も考えておけ』

『了解……』

『わかりました』

『よし……。後少しで時間だ。準備はいいな？』

『は、はい』

一夏が急いで紅椿の背中に乗る。

『カウント合わせ……5……4……3……2……1……始め!!』

ドウッ!!

白式を乗せた紅椿とエクシアは瞬時加速に匹敵、もしかしたらそれを上回る速度で急上昇し、一気に目標高度五百mまでももの数秒で到達する。

「暫時衛星リンク確立……情報照合完了。目標の現在位置を確認。

一夏、一気に行くぞ!!」

「おう!!」

「（アレルヤ、借りるぞ……!）アヴァランチエクシア・アームズカスタム、刹那・F・セイエイ、目標へ飛翔する!」

紅椿の背部と脚部の装甲が展開し、エネルギーを放出する事で爆

発的に加速、エネルギーの残滓を散らしながら蒼天を突き進む。

エクシアは肩の装甲が開いて大型GNバーニアが顔を覗かせ、脛部の大型装甲が変形して足裏にスキー板の様なパーツが合体、同じ様に脛脛部から大型GNバーニアが現れる。

各部のコンデンサーからGN粒子が送られ、肩、背部、腰部、脚部のGNバーニアから火山の噴火の如く放出、紅椿のそれとは比べ物にならない程の加速を生み出した。

変形プロセスや粒子チャージによって紅椿に少し遅れる形にはなかったがガンダムの専用装備の名は伊達ではなく、直ぐ様紅椿の横に並ぶ。

むしろ紅椿に合わせる為に出力を弱めているぐらいだったりする。けれど言ってしまったらややこしい事になるので口には出さないが。

― 出撃から数秒、三機は確実に交戦ポイントに向かっている。銀の福音の予測通過ルートでは旅館から二？地点が最も近く接近する位置だったがISの高速機動速度では二？など福音と同じマツハ2ならば六秒足らずで着いてしまう。

それではタイミングを合わせるのが難しいので若干迂回ルートをとって福音の予測通過ルートに途中から合流する形となっている。

「見えたぞ、一夏！」

「……！」

ハイパーセンサーが高速接近する機影　銀の福音を捉えた。

全身が銀色となっており、頭部はフルフェイスタイプのハイパーセンサーで覆われ操縦者の顔は分からない。そして最も特徴的だったのはその頭部から生える様に位置する一対の大きな翼　大型多方

向加速推進翼だ。

その姿は機体名称に通じる様に天使。刹那にはかつてCBを裏切り世界を支配しようとしたアレハンドロ・コーナーの乗機、アルヴアアロンに似ていると感じたが、関係のない事だと思いを戦闘用に戻す。

アルヴアアロンの翼はGNフィールドの発生装置であり巨大MAアルヴアトールとして機体を保護する役割を持っていたが、福音の翼もまたその機体の大型スラスタであり最大の武器である多方向同時射撃兵装だとスペックデータに記されていたのを一夏と刹那は思い出す。

「加速するぞ！接触まで十秒だ。一夏、集中しろ！！」

「ああ！！」

一夏が雪片式型を握る力を強め、紅椿が更に加速する。福音は気付いていないのか動きを見せない。

「うおおおおっ！！」

瞬時加速を使い、間合いを一気に詰めて零落白夜のエネルギー刃が福音に肉迫する。

しかし刃が福音に触れると思った瞬間、福音は最高速度を維持したまま一夏達の方へ反転、後退の体勢で身構えた。

『敵機確認。迎撃モードへ移行。』
『銀の鐘^{シルバー・ベル}、稼働開始』

「!?!」

開放回線から抑揚のない機械の合成音声が聞こえるが、一夏達はそれに確かな『敵意』を感じ取った。

そのまま一夏と篤は突撃して雪片式型を振るうが、福音は身体を一回転させてそれを僅か数ミリの差で回避した。

「くっ……!あの翼が急加速しているのか!?!」

「一夏!援護する!もう一度行け!!!」

「おう!!!」

刹那が右腕のGNソード改ライフルモードと左腕のGNビームマシガンに斉射して福音の動きを封じる。

そこへ一夏は再びエネルギー刃を叩き込もうとするが、またひらりと回転して躲された。

「くっ、このっ……!」

何度も刃を振るうが全て僅差で躲される。それに焦りを感じた一夏は零落白夜の限界時間が迫っていた事もあり動きが大振りとなつてしまった。

当然その隙を福音が見逃すはずもなく。福音の多方向加速推進翼が前に迫り出して羽を広げる様に展開、三十六の『砲口』が顕わになる。

ビシュシュシュシュ！

三十六の砲口から放たれるは羽の形をしたエネルギー弾。それは精度は高くないものの豪雨ともとれる連射速度で襲い掛かる。うち何発かが白式の装甲に突き刺さり、『爆ぜた』。

福音の銀の鐘はその爆発によって装甲を破壊する。少ないエネルギーでありながらISの装甲の破壊を可能とするそれはエネルギーシステムの武装としては最も効率的な武装と言えよう。

福音のエネルギー弾の豪雨は止む事無く一夏達に襲い掛かろうとする。

「一夏！ 箒！ 退がれ！！」

「！！！！」

刹那の叫びに反応して二機が急速に福音と距離をとった瞬間、白式と紅椿、そして福音の間に二条の太いビームと数条の細いビーム、そして無数の小型ビーム弾とGN粒子の軌跡を描くGNミサイルが割り込み白式と紅椿に迫っていたエネルギー弾を全て撃ち落とした。

刹那が現在展開している武装全てを一斉射したのだ。

「このおおおお！！」

「待て、箒！」

思うようにいかず焦った箒が雨月と空裂を構えて単機突撃、二刀

と両腕の展開装甲からエネルギー刃をこれでもかと放つ。

全身の展開装甲を巧みに使い、自在且つ急速な方向転換を行いつつレーザーの嵐を放つその様は最新鋭にして最強のISの名に相応しいものだが、冷静さを欠いたその攻撃は思うように当たるはずもなく。

「退け、箒！エネルギーの無駄だ！」

「はああああああー！」

それでも意地と云わんばかりの攻撃が功を奏したのか。次第に福音も防御を使い始めた。

(くっ、行けるか……?!)

その様子を見て隙あらばと一夏は雪片式型を握り締める。それに対し福音は全方位に向け、全ての砲門からエネルギー弾を一斉射した。

「だがっ、それでも……っ！」

エネルギー弾を紙一重で躲して福音に斬り掛かろうとする箒を、何かに気付いた一夏が止めた。

「(あれは……!?) 箒！攻撃を止める……！」

「ッ?! 何故止める一夏……！」

「船が……! 海上は先生達が封鎖したはずなのに…… ああくそっ！」

密漁船か！！」

本来ならこの海域にはいないはずの、船舶……それも密漁船の存在を知って刹那は内心舌打ちした。

密漁船とあらば見逃す事は出来ないが、今ここは戦場だ。

それに如何なる理由があつたとはいえ見殺しに出来る事もない。故にGNビームマシンガンを撃ちながら後退して福音の気を引こうとした。

「一夏！ 箒！ 福音を此方に引き付けて密漁船から引き離すぞ！！」

「犯罪者など庇いおつて……！ そんなやつらは！！」

しかし今の箒に冷静な判断が出来ず、それが刹那を逆に怒らせた。

「お前は、罪を犯したから見殺しにするのか！！」

「ッ　　！？」

確かに密漁は犯罪だ。だからといって密漁者達が好きでそれをやっていると言い切れるか。

望まずして、生きる為に、知らされずして、やらされている者だっている。

「どうしてそんな事を言うんだよ箒！ 力を手にしたから、弱い奴の事が見えなくなるなんて、箒らしくないじゃないか……」

「わ、わた、私、は……」

明らかな動揺を浮かべ、その手から刀を落とす。その刀は、空中で光の粒子へとなくなって消えた。
具現維持限界。リミット・ダウンつまりエネルギー切れの証拠である。

ここは学園のアリーナではなく戦場。実戦である。

「ちいつ！戦闘中に動きを止めるな！！」

刹那の方に引き寄せられていた福音が、他の二機のIS　紅椿と白式の動きが止まったのを見て目標をそちらに切り替えた。

「ッ！！篤iiiiiiiiッ！！」

エネルギー切れを起こしたISの装甲は元から如何に強固といえど、それは戦闘機や戦車を相手にした場合であって同じISの攻撃に対しては恐ろしく脆い。

一夏は雪片式型を投げ捨て、瞬時加速を使い篤を庇う様に福音と紅椿の間に割り込み、無情にもエネルギー弾は撃ち出された。

「ぐあああああああああああああああああッ！！」

零落白夜を連続して使い、瞬時加速までもを使用した白式に十分なエネルギーが残っている訳がなく、白式の装甲は破壊され、爆発の熱波が一夏に襲い掛かる。

「い、一夏あああああああああああああああああああッ！！」

一夏は気を失い、白式の駆体は自身の破壊された装甲を撒き散ら

『墮ちた』銀『と墜ちる』白』・後編(後書き)

もうほんと、不定期にしようかしら……。

背負う者（前書き）

一度消して書き直しましたが……不安だ。

書き直したと言っても一部ではあるので変わらない部分もあります
が。

ルーク様、アドバイスその他諸々含め有難うございました。

背負う者

三人称Side

あの子の話しよう。

作戦は失敗し、撃墜された一夏は火傷を負いISSの操縦者保護機能によって気絶、回収された後治療を施された。

現在はまだ操縦者保護機能が働いており、白式のエネルギーが回復するまでは目が覚める事はない。

また密漁船は、安全区域内まで誘導された後に教師陣によって逮捕、海上保安庁に引き渡された。

作戦が失敗した事により事態の次の変化があるまで作戦メンバーの専用機持ちには専用の控え室での待機命令が出された。

治療が終わり布団が用意された空き部屋へと送られる一夏を見送った後、制服に着替えた刹那は、簞に向け口を開いた。

「……簞」

「……………」

刹那の呼び掛けに簞はスカートをぎゅうつと握り締め俯いたまま応えない。

彼女の髪を纏めていたリボンは福音のエネルギー弾の爆発の熱に焼かれてしまい、その長い黒髪はおろされていた。

「お前は、何がしたかった？」

「……………」

「紅椿という、ISという力を手に入れ、何を成そうとした？」

「……………！」

「背負うべきモノも、目的も、貫く信念も持たない力は、只の暴力に過ぎない」

「……………何が……」

「成すべきモノがあつてこそ、力は初めて意味を成す」

「お前に何が分かる!？」

目尻に涙を溜め、その目に怒りの火を灯しながら箒は刹那の胸ぐらを掴んだ。

「お前に、私の何が分かる!？」

憤怒に染めた顔で箒が詰め寄るも刹那は全く動じず、箒の顔から目を逸らさずに真っ直ぐに見据える。

「俺もお前と同じだった」

「……………何？」

「俺もお前と同じ様に、力を求めていた」

その力の名は『ガンダム』。神を信じられなくなった刹那が唯一信じる事が出来た存在。

「俺も初めその力を求める事に夢中になり、その後の事など考えてなかった」

「……………」

「そして得た後も、戦う事しか出来なかった俺はその力を破壊する事にしか使えなかった。だからこそ、その破壊の先に創造がある事を信じた」

「お、前は……………」

「恨まれても構わなかった。俺はそれだけの事をしてきたし、俺にはそれしか出来なかった」

何を言っているのか分からない。けれども、それが刹那の暗い過去の一端だというのは分かった。

辛くはなかったのか。その一言が、今の筈には聞けなかった。いや、聞くまでもなかった。

自然と、刹那の胸ぐらを掴んでいた手の力が弛んでいった。

「だが、お前はまだやり直せる。その力を何の為に使うかを定める。無いのなら“創ればいい”」

そう言って刹那はゆっくりと筈の手をほどき、去っていった。そこには筈だけがただ一人佇んでいた。

臨時作戦司令室となった旅館の大座敷に、千冬と真耶と刹那の姿があつた。

他の教師達は自室待機の生徒達の監視に廻っている。

何故待機を命じられているはずの刹那がここにいるのか。それは刹那が前回の作戦メンバーであり福音と交戦した事からそのデータと意見を得る為である。
箒はメンタル面を考慮して待機させられているが。

「福音の現在位置はどうなっている？」

「依然として変化ありません」

「……妙だな」

あの後福音は交戦したポイントから少し離れてから動いていない。本来なら襲撃を避ける為にもさっさと遠くへ行つてしまはずだ。自己修復機能を使っていたとしても先程の戦闘で福音はそれ程ダメージを受けていない。

「セイエイが言うには福音は機動力と面制圧力に優れているとの事だが」

「ああ、接近戦を挑むには厄介な機体だ。やるとしたら短期決戦。それも複数の機体で福音の動きを止める必要がある」

「お前でもか？」

「リミッターを解除してトランザムを使えば単独で出来ない事はない」

このリミッターの中に太陽炉の解禁は含まれない。太陽炉はマイスターと同じくS級機密に分類される上に、まだ学園の人間にも存在を明かしていない為だ。

しかし刹那の言葉に千冬が懸念を示す。

「それでは、福音の操縦者の安全は確保しきれんぞ」

千冬が思い出すのはクラス代表戦の時の無人機襲撃事件。

リミッターは解除してなかったにも関わらずトランザムを発動したエクシアは無人機『レグナント』の強固なシールドバリアーを容易に破り、完膚無きまでに破壊した。

訓練機に比べ軍用機のリミッターは一部弱められているが、それでもエクシアなら破壊出来るだろう。

しかしそれでは操縦者に直接ダメージを与える可能性が大きい。

「ミッションの第一目標は福音の機能停止。しかし、必要があらば俺が福音を撃つ」

「な……………っ!？」

「?」

刹那の言葉に千冬は言葉を失う。刹那が言っている事を正確に理解しているが故に。

真耶だけは一人理解しきれず取り残されていた。

「ISは兵器だ。ここで確実に止めなくてはいずれ大きな被害を出す。」

また、もし福音によって篤達の命が危ぶまれるのならば俺は引き金を引く」

「そ、それではセイエイ君は!？」

ここで真耶も刹那の真意を理解した。刹那は『有事の際には自分が福音の操縦者を殺す』と言っている事を。

それでは刹那が罪を犯してしまう。ISに乗った人間を殺す事は容易ではないが、兵器として造られたエクシアなら可能である事は想像がつく。

しかし既に刹那が沢山のモノを背負っている事を知らない真耶だが、教え子に人殺しをさせるなど絶対にあり得ないものだった。

「彼女達や福音の操縦者にもそれなりの覚悟は在るだろう。だが、どうしても遺恨は残ってしまう。」

ならば俺が背負う。彼女達が手を汚す必要も背負う必要もない」

「.....」

刹那の言葉は二人の胸に深く突き刺さった。

そして同時に理解出来なかった。何故そこまでして背負おうとするのか。

千冬は無意識の内に、握り締める拳に力が入り奥歯を噛み締め
ていた。

怒っていた。刹那の理想オモイと行動、態度の矛盾に。

「それは何だ？贖罪か？罪の意識か？」

声のキーがワントーン低くなり、静かに燃ゆる怒気を含んでいる。
目は細く、釣り上がっていた。

千冬は知っている。刹那が人を殺している事を。テロ組織に洗脳
され、少年兵として戦ってきた事を。

戦いの中で『神』がない事に気付き、組織を抜けて人と人が分
かり合える事を知った事を。

人類の明日の為に、未来を切り開く為に戦うと誓った事を、VT
システムの一件の後刹那がラウラに話していたのを立ち聞きしてい
た。

今まで殺してきたモノよりも多くの命を救う事で贖罪を果たす。
それが、こいつの“生きる”事なのだろうと思う。

(だが……)

ふと脳裏に先日専用機組に刹那について問い詰めた時、鳳達が言
っていた言葉がよぎる。

プライベートって……あいつ無口で無表情ですし、なんか時
折あたし達とも距離を置いている感じがするんですけど。

一緒にいる事が多い割には趣味が筋トレである事以外知りませんし……。

滅多に自分の事喋らないよね。

なのに何故、自分を周りから引き離す様な真似をするのか。分かり合えると知り、分かり合おうとする理想オモイを持っておきながら何故それと矛盾する様な真似をするのか。

罪を犯したから？血に穢れたから？だから自分を人との関わりから引き離し、自分を幸福にする気はないと？

今回だってそうだ。自分がやり、自分だけ恨まれるのだから問題無い？

「……ふざけるな」

他人ヒトには分かり合えと言っておきながら、その言い出しっぺである自分は嫌われ役や恨まれ役に徹するというのか。

この世界に於いてこいつに大なり小なり好意を抱く人間はいる。学園でも自分を含む教師陣や生徒達はこいつに好意を抱いている。

その中でも比較的こいつとの関わりの深い専用機組は言わずもがなだ。

鳳もデュノアもボーデヴィツヒもこいつによって諭され、敬意に似た好意を持っている。

織斑に至っては尊敬そのものだろう。

だがこいつがそんな理由で、“自分にはその資格が無いから”という理由で彼らの想いを受け取らないのなら、それはこいつが自分で言った“人と人の分かり合い”を自ら放棄しているのと同じではないか。

そんな無責任かつ後向きな気持ちでいるのなら、千冬は刹那を殴り飛ばす事も辞さないでいた。

「違う」

「俺がやらなければ、必要の無い誰かが傷付き、手を汚し、罪を背負い、恨まれてしまう。

だったら、俺が背負う。俺が受け容れる。

俺は肯定する。俺が犯した罪も、俺に向けられた恨みも、俺の人生も、俺が抱える矛盾も、全てを受け容れる」

刹那は今でも罪を犯した事を投げ遣りにせずに悔み、向かい合っている。そしてその償いを、断罪を、裁きを受け入れる覚悟は出来ている。

元の世界でも、最後の表立った武力介入から53年経った今どれだけの者が少年兵として、ソレスタルビーイングとしてしてきた事に恨みを抱えているのかは分からない。

だがそれら全てをも同じように受け入れる覚悟は出来ている。

両親を、仲間だった者を　多くの人間を殺してきたからこそ。

引き金の重さを知っているからこそ。

刹那。俺は今、無性にお前を狙い撃ちたい。家族の仇を討たせろ……。恨みを晴らさせる……。！！

返してくれ……。二人を……。二人を……。返してくれよおおおおお！！

貴様が！貴様が！貴様が！！貴様がアニューを！！

刹那の脳裏に、かつてロックオン・ストラトス ニール・ディランデイ、沙慈・クロスロード、ライル・ディランデイから自分に向けられた感情が、それが籠められた言葉が蘇る。

それを彼女達に背負わさせたくない。

「彼女達の為だ」

ああ、そうか。これが刹那・F・セイエイという人間なのか。

千冬と真耶は漸く刹那・F・セイエイという人間を理解した。刹那の過去を知っている知っていないで開きはあるものの、今の言葉は彼の人柄を理解するには十分だった。

彼はただ不器用で、それであって特定の誰かではなく全てのモノを愛する人間だと。

その為には自分の事を顧みない所はあるが……。

自分の全てを受け入れるという事は簡単ではない。ヒトは必ず何処かで“自分”を否定する。それはある意味無意識的な自己防衛のものもあるだろう。

しかし刹那を受け入れた。

先程の会話に出てくる刹那の罪が何なのかは真耶には理解出来ないが、喩えそれがどんなものであれ己の罪を、己に向けられた恨みを受け入れるのは並み大抵の事ではない。

とは言えた。それでは余りにも刹那が可哀想だ。

喩え彼の刹那・F・セイエイとしての“生き方”に誇りを持って生きていても一人の人間としての“幸せ”は何処にあるのだろうか。

このままでは“誰かの幸せ”の為に自ら傷付き恨みを背負ってきた刹那が報われるはずがない。

いや、報われる報われない以前に一人の人間に背負わせていいものではない。

「……セイエイ、お前の言い分は分かった。だが、私は教師として人生の先達として、一人のヒトとしてそれを見過ごすにはいかん」

「なに？」

「世界は、命はお前一人で背負い切れる程軽くはない。その恨みも含むというのなら尚更だ。」

そしてお前が傷付けば悲しむ者がいる事も理解しろ」

そうだろう？と目で聞いてくる千冬に真耶は刹那に悟られないよう

少しだけ顔を赤くするが、それは真実には違いなかった。

刹那が事ある毎に戦場に向かう度に、真耶は胸が締め付けられる様な想いでいた。

それは教師でありながら教え子に戦わせてしまうという自責の念も当然あれば、好意を抱く男性が傷付いてしまふ、遠くへ行ってしまうという一人の女としての苦悩もある。

「そういう事だ。お前は私達の教え子だ。何でも一人で背負い込もうとするな。もっと周りを、私達を頼れ。」

お前があいつらを見守ろうとしているは分かる。だが離れ過ぎるな。見守る事と距離を置く事は違う」

これだけは言っておかないと、セイエイはこれからも、ずっと、一人で傷付き続ける。それを防ぐ為にはこいつに“楔”を打ち込む必要があった。

これで少しは改善されるかと言われればそうとは限らないが、本来ならばこいつらの年代はまだ誰かに甘えたい時期だろう。

しかし異世界人であるセイエイを含め専用機持ちのほぼ全員が家族を失い、頼れる人間が周りに居なかったのも事実だ。

全く、世話の焼ける奴ばかりだ。取り分け、あのバカとこいつはな。

普段の態度は厳しいが、根本的に千冬性格は優しい。普段から自他に厳しい出来る女教師を演じている以上その優しさが表に出る事は少ないが……。

それ故に、無意識のうちに千冬の顔が微笑んでいたのを　しかしその微笑みが普段絶対に見せない、女の勘が警鐘を鳴らす程のものであるのを　真耶は見逃さなかった。

真耶は悲しんでいたが、それと同時に意気込みもしていた。刹那が人としての“幸せ”を得る事が出来なかった事は当然悲しい事である。だったら、私が与えよう。私が支えよう。そう決意していた。

それは教師という役職としてというよりもヒトとして、刹那に恋愛的好意を抱く一人の女としての決意でもあった。

夏休みに入ったら、買い物にでも誘ってみましょう。

かなり初心な真耶からすればこんなデート紛いな事は絶対しないが、今の状況を考えるにそうせざるを得なかった。

ただでさえ刹那に恋愛的好意を抱く者は多い。しかもその大半が自分より年下だ。自分の体型に自信が無い訳ではないが、『若さ』はどうしても劣ってしまう。そこに更に強力なライバル　千冬が参戦する恐れがある。

先程偶然見た千冬の微笑み。あれは危険だ。自身の女の勘が、競

輪ラスト一周並みに警鐘を鳴らしている。恐らく本人は無自覚。しかし悔る事なかれ。

千冬はそれこそIS学園の顔とも呼ばれる事にそぐわぬ美貌と強さを持つ。

年齢は自分の一つ上だが、彼女のプロポーションは現役生徒でさえ羨む程。気を抜けばやられる……！

……負けられません！！

……決意を抱くのは結構だが、一人だけシリアス感をぶち壊しているのは否めなかった。

「……話を戻すが、その前に山田先生戻ってきて下さい」

「はうあ！？」

一時トリップしていた真耶を呼び戻し、千冬が再び刹那と向き合う。

「教え子に人殺しをさせる訳にはいかん。だがお前の力が必要である事も確かだ」

「……何が言いたい」

「リミッターを掛け、トランザムを封印した上で他の専用機持ちと作戦に充たってもらおう。」

「まずいと感じたら直ぐ様退却しろ。生きる為に逃げる事は恥ではない。違うか？」

「間違いではない。互いの安全を考慮した上では最もベストと言える。」

流石に刹那と言えど反論する余地は無かった。

「福音は暴走から今まで長距離移動に加え戦闘、更に無補給状態だ。それに対し此方は運用可能な機体が最低でも五機、本人次第では計六機。」

「前回の反省から安全面で最低でも絶対防衛が発動出来るだけのシールドエネルギーを残しておく事を考え、二機から三機一組を連続してぶつければ効率良く福音のエネルギーを削れる。」

「かつて元の世界のタクラマカン砂漠で行われたユニオン、AEU、人革連合同ガンダム総攻撃作戦でも、15時間に渡る戦闘とそれを可能にする物量にガンダム四機は一度窮地に立たされた経験がある為、この作戦もまた反論する要素は無い。」

「了解した」

「よし、山田先生、待機中の専用機持ちに召集を……」
「た、大変です……!」
「どうした!？」

待機生徒の監視に入っていた教師の一人が慌てて作戦指令部に入ってくる。

「せ、専用機持ちの生徒が無断で出撃を！」

背負う者（後書き）

次回戦闘。アヴァランチとエクシアの本領発揮……と言いたいけど
第達の影が薄くならないかが心配。

二つの“0”が揃う時（前書き）

ふう……、燃え尽きたぜ……。

福音にオリジナル設定が入っております。

二つの“0”が揃う時

一夏Side

(ここは……?)

目が覚めたら、俺は何処かも分からぬ砂浜に立っていた。

暑い日射しが照りつけ、砂の感触と熱気が足裏を通して伝わり、波の音が周囲に響き渡る。

此処が何処なのかも、今が何時なのかも、どうして此処にいるかも分からない。どうして自分が制服を着ているかも分からない。ただ、波の音に誘われるがままに砂浜を歩いていった。

~~~~~

ふと、歌声が聞こえた。まだ幼さが残るも、とても綺麗で心に響く歌声が。

やはり何故かは分からない。だけど俺はその声が無性に気になり、惹かれる様に声のする方へ歩いていった。

「ラ、ラ~~~~ ララ~~~~」

そこには、少女がいた。

白い肌と白い髪、そして白のワンピースを着た少女だった。

その子は波打ち際で爪先を濡らしながら、踊る様に歌い、謡う様に躍る。それに伴いワンピースが風に撫でられて舞う。

それを見た俺は声を掛ける事はせず、近くにあった白い流木へと腰を掛ける。

流れ着いてから長い年月が経っているのだろうその流木はホワイトアッシュの様な白い樹皮を持たず、逆に樹皮が剥けて白い中身を晒していた。

白い歪なベンチに腰掛けながら、俺はただぼーっとその白い少女を眺めていた。

### 三人称 Side

時刻は午後五時を回り、空は赤く染まり始める。

前回の戦闘が行われたポイントから大分離れた、旅館から30?地点上空200mで銀の福音は胎児の様に膝を抱え、翼がソレを覆う様にしながら夕焼け空に浮いていた。

.....?

ふと、福音が何かを感じ取った様に顔を上げる。次の瞬間、福音の頭部に超音速で飛来した砲弾が直撃、爆発した。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

福音から5?離れた場所に陣取る漆黒の機体から、続け様に音速を超える黄色の砲弾が放たれる。

シュバルツエア・レーゲン砲戦パッケージ『パンツァー・カ  
ノニア』

両肩に八十口径レールカノン『ブリッツ』を装備し、左右と正面に計四枚の物理シールドを纏う遠距離からの射撃戦を想定したパッケージである。

福音が反撃に入る前に、ラウラは両肩のレールカノンを左右交互に放つが、福音は銀の鐘で砲弾の半数以上を撃ち落としながらシュバルツエア・レーゲンに高速で接近する。  
二機の距離が300mを切ろうとした瞬間、上空からの青いレーザーが福音を吹き飛ばした。

「そう簡単には、やらせませんわ!!!」

福音とシュバルツエア・レーゲンよりも高い位置を飛ぶ青一色の機体、ブルー・ティアーズ。  
六機のビットは腰に繋がれスカート状のスラスターとなり、右手には2mを越す長大なライフルを持っている。

ブルー・ティアーズ強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』

ビットの砲口を塞ぎスラスターとして活用、それによって低下した火力を大型BTレーザーライフル『スターダスト・シューター』で補う。

さらに時速500?を超えるの高速移動下での反応を補う為のバイザー状超高感度ハイパーセンサー『プリリアント・クリアランス』を装備。

文字通り高速機動での敵機への強襲を主眼に置いたパッケージである。

新たな敵の出現に、福音は直ぐ様方向を転換する。

『敵機Bを確認。排除行動へト「遅いよ」』

ブルー・ティアーズに対して反撃を試みようとした福音に、ブルー・ティアーズの背後から現れたオレンジの機体から放たれた散弾が襲い掛かった。

先程までセシリアと共にステルスモードで隠れていたシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？である。

ショットガンの直撃を受け体勢を崩した福音は、瞬時に戻して三機目の敵機に銀の鐘による反撃を開始したが、二枚の物理シールドと二枚のエネルギーシールドで防がれてしまう。

「おっと、悪いけどこの『ガーデン・カーテン』はそのくらいじゃ墜ちないよ」

ラファール・リヴァイヴ・カスタム？防御パッケージ『ガーデン・カーテン』

ノーマルのラファール・リヴァイヴの様に二枚の物理シールドと追加された二枚のエネルギーシールドを装備する強固な防御力を誇るパッケージ。

シャルロットは手持ちの武装をアサルトカノンに切り替え、タイミングを見計らって反撃する。

加えて、高機動射撃を行うセシリアと遠距離砲撃を再開するラウラによる三方向からの射撃に、福音はじわじわと消耗し始めた。

『……優先順位ヲ変更。現空域カラノ離脱ヲ最優先ニ』

離脱する隙を作る為に全方向に銀の鐘を発射、全スラスターを開

いて強硬突破を謀る福音だが

「させるかあっ！！」

海面が爆せて二つの機影が飛び出し、福音の行く手を遮った。

「墜ちなさいっての！！」

鈴の乗る甲龍の非固定浮遊部位が展開し、普段より多い計四つの砲口が現れ、本来なら不可視のはずの砲弾が幾つにも分かれ赤い炎を纏って撃ち出される。

甲龍機能増幅パッケージ『崩山』

甲龍の第三世代機故の特殊装備である衝撃砲を本来の二門から更に二門増設させ、可視化したその砲弾は表現するならば 熱殻拡散衝撃弾とも言えよう。

衝撃砲の直撃も受けて隙を見せた福音にもう一機 箒の紅椿が迫る。

「離脱する前に叩き墜とす！！」

最大加速で福音に接近し、左手の空裂を振るう。  
それを福音は両腕を交差させて防ぎ、大きく高度を下げつつも銀の鐘のエネルギー弾を広範囲に弾幕を張る様にバラまいた。

「くっ！」

「箒、僕の後ろに！！」

箒の前にシャルロットが躍り出てガーデン・カーテンでエネルギー弾を防ぐ。

現在紅椿は前回の反省から展開装甲の燃費の悪さの改善として展開装甲のシールドバリアー以外での自動防御をカット、機動と攻撃に特化する様に調節していた。

また、現在一番攻撃力が高いのは紅椿なので確実に仕留める為に防御力に優れるラファール・リヴァイヴ・カスタム？が守り役となっている。

では何故彼女達が今戦っているのか？それは一時間程前まで遡る。

刹那が箒の元を去った後、箒は一夏が寝ている布団の側で頭を垂らしていた。

一夏はまだ操縦者保護機能で昏睡状態のままだった。

(……私は)

(私は……どうして……)

どうして“力”を求めたのか？何の為に、誰の為に“力”を欲したのか？

そして何故“力”を手に入れるとそれに流されてしまうのか？

誰かを叩きのめしたいから？

(……違う)

その“力”で、己の“強さ”を誇示したいから？

(違うー!!)

“剣術を修める者としての自分”と“篠ノ之箒という一人の人間としての自分”が問答をしている内に、箒は無意識に畳を殴りつけていた。

(私が……私が紅椿を求めたのは……)

紅椿という、ISという力を手に入れ何を成そうとした？

背負うべきモノも、目的も、貫く信念も持たない力は只の暴力に過ぎない。

不意に、刹那の言葉がフラッシュバックする。

自分が紅椿を求めた理由。それで成そうとしたモノ。

それは……ただ、一夏の隣に居ただけで、一夏を振り向かせたいだけで“力を以て成す”事など無かったのではないか？

昔は、剣道が一夏と自分を繋いでくれた。

しかし今では一夏は剣道から離れてしまい、今彼が持つ繋がりのは殆どはIS……それも、専用機だ。

自分もIS学園に通う身だが専用機など持つておらず昔馴染みという位置に納まり、甘えていたに過ぎない。

だけど、それでは駄目だった。いつも一夏の周りに集まっているのは専用機持ちだった。

怖かった。一夏が遠くに行ってしまうのが。無人機の時だって、ラウラの時だって、いざという時一夏の隣に居たのは自分ではなく専用機持ちの誰かだった。

……自分は何も出来ない。今の自分のままでは何も出来ない。

一夏の隣に立つ事さえ出来ない……。その気持ちが、ろくに関わろうとさえせず嫌っていた姉に『お願い』する事を後押しさせた。

しかし手に入れてみれば何だ。確かに一夏の隣には立てた。けど一夏を振り向かせる事は出来たか。

否。一人で突っ込み、足を引っ張りあまつさえ怪我を負わせてしまった。

(私は……何も出来なかった……)

“力”を手に入れた後の事は何も考えてなかった。

目的が無ければ、どうその“力”を振るえばいいのかわかるはずも無い。

それどころか、昔と同じ様に“暴力”として“力”を振るってしまった。

二度と同じ過ちをしまい。そう思って自分を律する“枷”として剣術を修めてきたというのに……。

(私はもう……ISには……)

「あーあ、分かりやすいわねえ」

扉を開けて部屋に入ってきたのは鈴だった。その顔には予想して通りの事への呆れが浮かんでいる。

「あのさあ、一夏がこうなったのもあなたの所為なんですよ？」

「……………」

筈は何も答えない。答え、られない。

「で、落ち込んでますってポーズ？……っざけんじゃないわよ！」

胸ぐらを掴まれ無理矢理立たせられる箒だが、その目にはいつも力強さが無い、弱々しい目をしていた。

「今やるべき事があるでしょうが！！今！戦わなくてどうすんのよ！！」

「私は……もうISには乗らない……」

バシィッ！

「甘ったれてんじゃないわよ！！専用機持ちつてのはね、そんな我が儘が許される立場じゃないのよ……。それにねえ、あんたこのままやられっぱなしでいいの？この負け犬」

その一言が、箒の心奥底の闘志に火を点けた。

「いい訳なكارう！だがどうしろと言うのだ！？敵の場所も分からなければ、次の作戦がどうなるかも分からないのに！！」

目的や信念の前に、箒の福音に負け、一夏に怪我を負わせた悔し

さと自身の腑甲斐なさへの怒りが燃え上がる。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所なら問題ないわ。今ラウラが」

「出たぞ。ここから三十？離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが光学迷彩は持っていない様だ。衛星による目視で発見したぞ」

鈴の言葉を遮る様に黒い軍服に身を包んだラウラがブック端末片手に部屋に入ってくるのを見て、鈴が不敵に微笑んだ。

「やるわね、流石ドイツ軍特殊部隊隊長」

「ふん……。お前の方こそどうなんだ。準備は出来ているのか」

「ご心配なく。甲龍の機能特化パッケージなら量子変換済みよ。セシリアとシャルロットの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

ラウラが扉に目をやると同時に扉が開かれた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オツケーだよ。何時でもいける」

刹那を除く専用機持ちが全員揃うと同時に、箒にその視線が向けられる。

「で、あんたはどつするの?」

「私は……戦う。戦って、勝つ!今度こそ負けはしない!」

「決まりね。じゃあ作戦会議よ。この機を逃す訳にはいかないわ」

「ああ!」

こうして、戦乙女達は戦場へと出向く。己の矜持の為に。愛しき人の仇をとる為に。

あれからどれだけ時間が経ったであろうか。  
一瞬ともいえば、億劫になる程長い時間かもしれない。だが箒達にはそんな事は関係無かった。

まだ勝負はついていない。福音も所々傷が目立つが、どちらかというとな彼女達の方が消耗が激しかった。

幾ら最新型とはいえ、この強さは異常である。エネルギー量もだが、暴走している機体とは思えない程冷静な判断力を持っている。しかし、目の前の事に精一杯になっている彼女達はそれに気付かず、焦りがちらほらと見え始めていた。

「はあ……はあ……いい加減、しぶといわね。エネルギー保つかしら……」

「此方はエネルギーは兎も角、残弾が厳しくなってきたな……。おまけに相手の機動が速過ぎてAICが使えないときた」

「僕の方も、シールドの耐久力がそろそろ不味いかな……」

「私も一撃の強さに欠けますし、時間が掛かれば掛かる程此方が不利ですわね」

「やはりあの弾幕を抜けるのは至難の業か……」

威力の大きい一撃はその分隙が大きく回避されるし、手痛い反撃を食らう恐れがある。

また筈達も肉体的な疲労もだが、精神的な疲労が目立ち始めた。

しかしそれらを見逃す程戦場に慈悲なんて存在せず、福音は全身を縦軸一回転して横全方位に弾幕を張った。

「ちいつ！」

「各機、<sup>ブレイク</sup>散開！！！」

各々が防ぐなり回避するなりしてやり過ごす中、箒と鈴が飛び上がって弾幕の張られていない福音の頭上から得物を振り下ろす。

「「霸阿アアアアアアアアアア！！！」

あと少しで届く！二人がそう思った瞬間、福音がいきなり二人に向かって前進し、両手で得物を振り下ろす腕を掴んだ。

「何！？」

「しまっ！？」

「鈴！？箒！？」

身動きのとれない二人に容赦無く銀の鐘の砲口が向けられる。

ラウラは自身の大型レールカノンでは砲弾の爆発に二人を巻き込んでしまう為下手に動けず、シャルロットは箒と鈴の真後ろに、セシリアは福音から一番離れていた為狙撃位置まで行く間に撃たれてしまう。

誰もがやられると思って目をつぶった瞬間、福音の背中に一条の桃色の閃光が直撃し、爆発して福音がバランスを崩し両手を離れた。

福音の拘束から解放された二人を含め、全員が先程攻撃が来た方向を向く。

ハイパーセンサーの拡大映像に映し出されたのは、スナイパーライフルを持つ青と白の装甲の機体を操る、青いスーツに身を包み同色のフルフェイスヘルメットを被った操縦者。

余りにも変化した外観に一度誰だか分からなくなるが、ハイパーセンサーの示す機体信号でその正体を知る。

「「「「「刹那（さん）っ！！？？」」」」」

刹那 Side

監視に入っていた教師からの報告を受けてすぐ刹那に出撃が言い渡された。

その際、千冬から箒達に余力があるのなら当初通り作戦を決行、無理ならば退避させて出来る限り福音を消耗させてこいと言われている。

そして今回刹那が用意したのはCBのパイロットスーツである。

これは刹那がこの世界に来た時に着ていたものであり、返された後エクシアの拡張領域に収納されていたのを今回引っ張りだしてきたのだ。

主な理由として、福音の銀の鐘の爆発から操縦者を保護する為とここは海上。つまりはなんらかの事情で海に沈んだ時にISが機能しなくても操縦者の呼吸を確保する為である。

話を戻し、アヴァランチ・ACを使ってここまで飛ばしてきた刹那は箒と鈴が福音に捕まっているのを見て、GNスナイパーライフルで二人を傷付けられないよう狙撃したのだった。

「各機に指令部からの指示を伝達する。今すぐ退け。福音は俺が相手をする」

見ただけでも箒達が消耗しているのが分かる。機体もだが何より操縦者がだ。

「だが刹那、ここで福音を墜とさなくては！」

「待機命令違反にISの無断使用及び出撃。厳罰ものだ。それでいてそこまで消耗しておきながら、作戦に参加出来ると思うな」

命令違反なら自分も過去に何度かやっているの言えた口ではないが、あの時とは勝手が違う。

CBは何処の国家にも属さない私設武装組織だが彼女達は国家に属

する人間だ。

国からISを預かり、それを無断で使用・戦闘活動を行ったのなら、それ相応の厳罰、下手すれば死刑が言い渡されるかもしれない。

IS学園は何処の国家にも属さないとはいえ、責任問題までは無効化出来ない。

最終的に彼女達の所属はそれぞれの国家になるので、いくらIS学園でも限界があるのだ。

ましてや箒は国に属する人間ではないが日本国民であり、現在何処の国家にも属さない機体とはいえISの無断使用には変わらない。

一見法律適用外に見えるが、何処の国家にも属さないISという武装をしている危険人物テロリストとも受け取れる。

やはりまだ“力”を持つ事への自覚と責任が甘い。それが刹那のこの世界のIS操縦者への認識だった。

その言葉に箒達は何も言い返せない。ましてや箒は刹那に言われた“力”を以て成す事への答えが出てないので反論する術がない。

しかし何時までも彼女達にかまっている暇はない。

現に福音は既に現在最も難敵であろう刹那に狙いを絞っていた。

GNスナイパーライフルを収納、GNソード改を展開。アヴァランチ・ACを高機動モードに変形させる。

「アヴァランチエクシア・アームズカスタム、刹那・F・セイエイ、目標を鎮圧する……！」

今、『墮天使』と『破壊の天使』がぶつかろうとしていた。

三人称Side

「す、すい……！」

シャルロットが率直な感想を溢す。目の前ではそれだけの事が繰り広げられていた。

福音はエクシアに対し豪雨の様なエネルギー弾を集中的に繰り出し、エクシアはアヴァランチ持ち前の高機動でエネルギー弾を避けながらビームを撃ち返し、福音が避け切れず掠めていく。

エクシアの速度はストライク・ガンナーを装備したブルー・ティーズを凌駕していた。

現時点で世界最速の機体とも言っていていいだろう。

それもその筈、GN粒子の質量調整によって質量が軽減されている上にアヴァランチ装備は薄いGN粒子の膜を展開する事で僅かながら気流を操り空気抵抗を減らす事が出来るのだ。

更に、機体そのものの各部の重量をGN粒子で質量を重くしたり軽くしたりすればより高度なAMBAC能力を発動する。

太陽炉による重力制御で本来ならばスラスタを必要としないガンダムが、PICとそれを併用すれば驚異的な運動性を発揮するのは当然の事だった。

福音がエネルギー弾を放ち、刹那がGNミサイルで撃ち落としGN粒子と爆煙の華が咲く。

その間に刹那がGNバズーカを展開し福音に向かって撃ち込む。

福音が銀の鐘でGNバズーカの弾頭を撃ち落とし瞬間、福音の周囲が白いスモークとGN粒子とは違う光を反射する微細な粒子に包まれる。

刹那が撃ち込んだのは電波攪乱塗料を塗布した微細な金属粒子<sup>チャフ</sup>を内蔵した煙幕弾頭だった。

それによって視界を塞がれハイパーセンサーも正常に稼働出来ない中、福音の躯体に衝撃が走る。

刹那がアヴァランチ・ACの脚部ダツシュユニットのGNクローを展開、福音の左腕を掴んでいたのだ。

そのまま至近距離でGNキャノンを叩き込み福音は吹き飛ばされる。

そのまま追い討ちをかける様に両手にGNビームサーベルを持たせ脚部のGNクローからもビームサーベルを発して四刀流で斬り掛かる。

刹那の怒涛の連撃が福音の装甲とシールドエネルギーを削っていき、福音の右手首に深い切り傷が入る。

福音は距離を置こうとして後退、刹那が追撃に入ろうと突撃した所にエネルギー弾が直撃し爆発が起こった。

「刹那!？」

鈴が叫ぶが、煙がおさまった後に現れたのは頭部の銀の鐘と一体化した右多方向加速推進翼を失いエクシアに蹴り落とされる福音の姿だった。

刹那はアヴァランチ・ACをパージして囷にする事でエネルギーを回避、目眩ましにした。  
幸いアヴァランチ・ACのGNコンデンサー内の残存粒子がいい具合に福音の視界を遮ったのだ。

その際に福音の背後に回り込み、GNビームサーベルで右多方向加速推進翼を斬り落とし後ろ回し蹴りで福音を海面に向かって叩き落とした。

片方の多方向加速推進翼を失い、バランスが上手く立て直せない福音に向かって刹那は左手のGNビームサーベルをダガーモードで投擲、GNビームダガーは吸い込まれる様にもう片方の多方向加速推進翼に刺さり爆発する。

翼を失った福音はそのまま落ちていくが、あと少しで海面に突入しそうになった瞬間、福音が光に包まれ海が爆ぜた。

「これは!？」

「まさか、セカンド・シフト第二移行!？」

ラウラが叫んだ瞬間、そこには卵の様な光の球体が海面上に浮かんでおり、海はそこだけ決り取られそのまま時間が止まった様にへこんでいた。

……ヤ……メ……テ……

「ぐう!?!」

「刹那!?!どうしたというのだ!?!」

突然、刹那の頭の中に『声』が響く。

ヤ……メテ……ヤメ……テ……

(これは……脳量子波?だが、この場に脳量子波が使える人間など……まさか!?!)

……マ……モ……ル……マモ……ル……マモル……マモル……マモル  
マモルマモルマモルウウウウ!!

(銀の福音の操縦者……いや、銀の福音そのものの意志だとも言うのか!?!)

刹那が『声』の主の正体を察すると同時に、光の球体に変化が顕

れる。

卵の様なてっぺんがひび割れ、そこから二対の巨大な光の翼が生える。そしてひび割れは球体全体に広がり、またそこから少し小さな光の翼が複数生える。

そんな幻想的な光景を、刹那達はただ見送る事しか出来ない。

やがて、その光景にも終わりが訪れる。

ひび割れた球体の表面は、剥離する様に剥がれ落ち消えていく。その中から現れたのは胎児の様に包くもまる福音。

福音が顔を上げる。しかし、その無機質なフルフェイスの頭部装甲からは明確な敵意が発せられていた。

□

—————ッ！

『！

耳をつんざく様な断末魔……または悲鳴、甲高い叫び、発狂ともとれる声を発し四肢を広げる福音。

その姿は以前よりも大分変化していた。

まず目を引くのは頭部の二対の巨大なエネルギーの翼。第一形態の時とほぼ同じ大きさを持つそれは、以前には無かったその輝かしさと神々しさと美しさを併せ持ち見る者の心を酔わせる。

また両手足の手首足首にはリング状のパーツが備わり、そこからそれぞれ一対の少し小さなエネルギーの翼が生えていた。

計十二枚の光の翼を持つ福音の姿は、箒達には天使の様な神秘性

を、刹那には自身の始まりとも言えるあの『ガンダム』との出会いを連想させた。

そんな中真つ先に正気に戻ったのは刹那だった。

しかし僅かに遅かったのか、福音はその矛先を鈴に向けていた。

「鈴音!!」

「えっ!? あ、キヤアアアアアアアアアア!!」

一気に距離を詰めて懐に潜り込んだ福音は手首の光の翼を前に向かせてそのまま甲龍に叩きつける。

一撃で腕装甲を破壊し鈴はそのまま海へと墜ちていった。

「ちいつ!!」

「よくも鈴さんを!!」

「っ、よせ!?!」

これ以上被害を増やすまいと福音へ仕掛けようとする刹那だが、それよりも先にセシリアが動き出していた。

セシリアが福音に向かって連続でレーザーを撃ち込むが、福音はより速くなった機動力で回避した時には突き出した腕の光の翼が円を描く様に変化しリング上を高速回転してレーザーを弾く。

福音もやられてばかりではなく、左腕をセシリアに向かって突き出すと光の翼がリングの直径直線上に位置する様に動き弓の様な形になる。

するとマニピレーターにエネルギーが凝縮し、一本の矢と化して亜光速でセシリアに襲い掛かった。

「な、はやっ……キヤアア!!」

光の矢はスターダスト・シューターに当たり、爆発。するそしてその爆発を掻き分ける様にエネルギー弾が降り注ぎ、直撃を受けたセシリアもまた海に墜ちていく。

「くっ……!!」

強過ぎる。刹那はそう思った。そしてやはりISは異常だとも思った。

下手な操縦者が操るよりも圧倒的な強さを誇るこのIS（福音）は、本来ならば退却すべきなのだろうが逆に今ここで止めなくてはどんな被害をもたらすかも分からない。

更に、先程の銀の福音自身の意志のものと思われる『声』も、刹那を悩ませる一因だった。

あれから『声』は聞こえてこないが、敵意だけは分かる。しかしその敵意が先程の『声』からもただ邪魔者を排除するのではなく自

身を……操縦者を守る為のものにも感じられるのだ。

とは言えど今の状況ではどうしようもない。『ツインドライブ』  
が使えなくては福音との対話も出来ないのだ。  
そもそもISのコアと意志疎通出来るかどうかも怪しい所だが……。

(撃つしかないというのか……!?だが、それでは……!!)

刹那が撃つべきだと判断するのは相手側が対話を受け入れず、明確な敵意を以てこちら側に害を為す場合である。  
だがまだ対話の可能性も消えていない現状では撃つにはまだ早い。

それでも残るラウラとシャルロット、箒を守る為にも撃たなくてはならない可能性もある。

だが悩んでいる暇は無い。与えてくれない。  
福音は今度はラウラへと迫っていた。

「やらせん!!」

後ろからGNソード改でビームを放つちながら追い掛けるが、脚部の翼からエネルギーを撃ち返される。

通常形態のエクシアでは福音の銀の鐘を避け切るのは難しいので、GNシールドのGNフィールドを最大範囲で緊急展開してやり過ぎしかない。

その間にラウラへの接近を許してしまうが、福音の動きが止まる。ラウラが反射的にA I Cを使ったのだ。

「この距離ならば!!」

両肩の大型レールカノンが福音に照準を合わせる。

この距離だと爆発に巻き込まれてしまうが、逆に言えば直撃させれば絶対防御が発動して大きくシールドエネルギーを削れるのだ。

しかしラウラはここで一つ失念していた。A I Cは実体を持たないものに対しては効果を発揮しないのだ。

これがもし以前の様な多方向加速推進翼ならば銀の鐘ごと停止出来ただろうが、今は完全な実体を持たないエネルギーの翼。

砲撃を放つ前にラウラの機体は光の翼に包まれ、暴力的なエネルギー弾の雨を食らい墜ちていく。

「ラウラあ!!」

また一人、また一人と翼をもがれていく。

埒があかない。このままでは、全滅だ。

ならば、あの翼を無力化させればあるいは!!

「おおおおおおおおおおお!!」



あれから、ずっと俺は飽きもせず女の子を眺めていた。その歌と踊りは、何故か俺をひどく懐かしい気持ちにさせる。

(あれ……?)

ふと気付いたら、少女は歌と踊りをやめていた。  
どこまでも青い空をじいっと眺めている。

「どづかしたのか？」

不思議に思っただけ俺は少女の傍まで寄って言った。そしてつられるようにして空を眺めた。

「呼んでる……。いかなきゃ」

「えっ？」

隣の少女が言葉を発したので振り向いてみると、そこには誰もいなかった。

周りを見渡しても少女の姿は何処にも無い。

「うーん……？」

仕方なく俺は流木のベンチに戻ろうとする。すると、後ろから声が掛けられた。

「力を欲しますか……？」

「え……」

振り返った先には、白く輝く甲冑を纏った女性が膝下まで海に沈めて立っていた。

大剣を突き立ててそれに両手を預けている。顔は兜のガードに隠されて下半分しか見えなかった。

「力を、欲しますか……？何の為に……」

「ん、んー……。難しい事聞くなあ……」

投げ掛けられた質問に俺は困った様な顔をする。

だけど、その答えは既に決まっている様な気がした。

「守りたいから……かな」

「それは、どっという事ですか……？」

「ほらさ、世の中って色々と戦わないといけないだろ？単純な腕力だけじゃなくて、色んな事さ」

刹那が言っていた“生きる事が戦い”。その言葉通りなら、人は生きていく上で対立する相手だけじゃなくて自分とか兎に角色んなものと戦わなくてはならない。

「それでさ、ほら、不条理な事ってあるだろ。道理の無い暴力とか結構多いぜ。

そついうのから、出来るだけ仲間を助けたい……いや、ちょっと違うな」

「……………」

「それじゃあ、まだ守られたままなんだ。出来るだけとか、希望形とかそんなんじゃないやなくて実際に行動に示さないと。

俺は変わりたいんだ。仲間を守られてばかりの俺から、仲間を守る側の俺に」

誘拐された時だって、正体不明の敵に襲われた時やラウラの時だって、俺は千冬姉に、刹那に守られてばかりだった。

嫌だった。辛かった。力があるのに何も出来ず、守りたいのに誰かが傷付いていくのを見る事しか出来ないのが。大切な人の涙を見るのが。

だから、俺は変わりたいんだ……。

「だったら、変わればいいじゃねえか」

また後ろから声が掛けられた。目の前の甲冑の女性とは違う、男の声……。

「あなたは……？」

「よう」

そこにはタイトなズボンに薄緑の半袖のシャツ、その上から土色のノースリーブのジャケットを羽織り右目に眼帯を付けた人柄の良さそうな男性がいた。

北欧系で歳は二十代半ばといったところだろうか。

「えっと、どちら様で……」「何故、ここにいますか……！？」

名前を尋ねようとした所、甲冑の女性が大剣を引き抜いて警戒していた。

何をそんなに警戒する必要があるのか、さっぱり分からないが女性の反応はまるであり得ないものを相手にしているかの様だ。

「おいおい、そんな警戒してくださいさんなって……無理な話か。俺も

気付いたら此処にいたって所なだけだな……」

そう言っ て頭をかく男性はバツの悪い顔を浮かべながら苦笑していた。……なんか、此処で出会った人の中で一番人間くさいな。

「それと名前なんだが……訳あつて本名は語れないしあの名はもう『アイツ』のものだしな……。そうだな、『デュナメス』でどうだ？」

「え、えっと……デュナメスさん？」

「そうそう」

本名が語れないとかどんな事情があるのか知らないけど、デュナメス……偽名なのになんかしっくりくるのはどうしてだろうか。

「それで、デュナメス(?)さんは何を……」

「ボウズ、お前は変わりたいんだろ？」

「え、ええ……」

「だったら変わればいいじゃねえか」

あっけらかんと。デュナメスさんは言い切った。いやそんな軽く

……。

「え、えと……」

「変わるっていうのはな、簡単な様で難しく、難しい様で簡単など  
つち付かずなもんなんだよ」

俺の隣に並んで青空の向こうを眺めたながら語るデュナメスさん  
の顔はまるでその事全てを知っていて、それでいて辛い様な顔をし  
ていた。

「俺はさ、世界を変えたかったんだ。俺の様な、あいつらの様な奴  
らを生み出してしまっ世界を」

その独白は海岸に打ち寄せる波の音に紛れながらこの空間に響き  
渡っていく。

この人に何があったのか、あいつらとは誰なのかは分からない。  
けれども他人事でない気がした。

「だけど俺はそれを成す事が、俺自身が変わる事が出来なかった」

「それは……どうしてですか？」

「……復讐に全てを費やしてしまったからさ」

「……!!」

「どんなに言い繕おうとアレは復讐だった。事実俺はテロを憎み、テロを引き起こす奴を憎んでいた。だから、俺はテロを根絶する為にも世界を変えたかった」

「結局、そのまま俺は終わっちまった。だがボウズ、お前は違う。お前はまだ生きている。変わる。誰よりも傷付き、迷いながら変わった奴を俺は知っている」

デュナメスさんが顔を引き締めながら此方を向く。ああ、答えは既に決まっている。

「分かりました。俺は、変わってみせる」

するとデュナメスさんは微笑を浮かべ、また空を見上げた。

「……そうか。ならお前は変われ。変われなかった俺の代わりに」

そう言うと同時に、デュナメスさんの輪郭がぼやけ、爪先指先から緑色の粒子となって崩れていく。

「それと、アイツを支えてやってくれねえか。アイツは変わったけど、まだ一人で抱え込もうとしやがる。そんなアイツに手を差し出

「してやってほしい」

最後に此方を向いて、言った。

刹那を、頼む。

……そして、デュナメスさんは消えていった。

あの人が何処から来て何処に行ったのかは分からないけど、そう遠くはない。そんな気がした。

デュナメスさんの言葉を心のうちに反芻しながら振り返ると、そこには先程までいなくなっていた白い少女がいた。少女は人懐っこい笑みを浮かべながら俺に言う。

「なら、いかなくちやね」

「ああ……！」

世界が、“白”に包まれた。

刹那 Side

「ここは……俺は……一体……」

目が覚めた俺は見た事もない所に立っていた。

そこは“花畑”だった。

イノベイドとの最終決戦の前にフェルトから受け取り、リボンス・アルマークとの戦いでなくしてしまった花を含め、色とりどりの花々が咲き誇っていた。

そこはかつて集落だったのだろうか、あちらこちらに廃墟の残骸の様なものが点在し、草花がそれを覆っている。それは何故か今は失われたクルジスの俺の故郷を連想させる。

空はマリナ・イスマイルに別れを告げた時と同じ雲一つ無い青空だった。

そして俺の姿も変わっていた。跳ばされてからの16歳としての姿ではなく本来の23……いや、74歳の姿だ。

ELSと同化していないのだがあまり変わらないし歳をさば読む意味も無い。服装もCBの制服へと変化していた。

「お待ちしておりました」

一陣の風が吹くと同時に後ろから声を掛けられる。  
振り向けばそこには一人の女性がいた。

クセのある腰まで伸びる黒髪に白い肌、翡翠の様な瞳に蒼と白を基調としたドレス。胸元には赤い宝石のペンダントがある。

顔立ちは優しさと力強さを併せ持ち、一番近いのはマリナ・イスマイルだろうが彼女とは何処か違う。  
歳は十代後半から二十歳ぐらいで、俺よりも少し小さい背だ。

「お前は……」

「私は常に貴方と共にあり、貴方の剣となる者」

「エクシア……なのか？」

「その通りです、マイスター刹那」

……驚いた。確かにISには自我があると言われていたし俺のエクシアには確固とした自我……AIが存在しているとはいえ、まさか姿を持っているとは……。

「ここは何処なんだ？」

「ここは私の世界にして、ISの自我が存在する場所。謂わばコアの中の世界。」

つまりは、貴方はまだ死んでおりません。マイスター刹那」

という事はここはエクシアのコア……太陽炉の中の世界という事か。イアンが太陽炉にも個性があるとは言っていたが……。そして俺は死んでいない。なら何故ここに喚ばれた？

「私は貴方にお伝えする事がありここへ貴方をお呼び致しました」

「それは何だ」

「『ダブルオーガンダム』の復旧が完了し、ツインドライブシステムが限定的ながら使用が可能となりました」

「何っ!？」

ダブルオーガンダムとツインドライブが使えるだ!?!?これなら福音を止められるが少し気になる事がある。

「『限定的』というのはどういう事だ」

「それは『00クアンタ』の為に造られた新型ツインドライブ用の太陽炉では『ダブルオーガンダム』がその出力に耐えきれないからです。

その為、『オーライザー』がなくては安全かつ安定した使用が出来ません」

「『オーライザー』の解禁は何時になる?」

「……わかりません。新型ツインドライブ制御プログラムを一から組まなくてはならないので。」

戦闘力の強化を図る為『セブンスード』の構築と並行して行います」

「……わかった。ダブルオーでの使用は出来るのだな？」

「！、まさかリミッターを解除する気ですか!？」

「第二移行を理由にすれば言い訳は何とかなる。そもそもISは全てが明らかになっていないしな。」

それに少しでも可能性があるのなら俺は諦めない」

「……分かりました。伊達に貴方と五十年ばかり付き合ってきた訳ではありませんから多少の無茶は承知済みです。」

ですが今後は余程の事でない限り以前と同じ『バッテリーモード』で活動してもらいます」

「了解した。行くぞ、『ダブルオー』」

彼女に向かって手を差し出す。それを彼女は忠誠を誓った騎士の様に受け取る。

「Yes, my master. 既に『彼』も此方に向かってきております。舞台の準備は万全です」

「「俺（私）達の戦いは、これから始まる」」

世界が、  
“ 緑色の光 ” に包まれた。

二つの“0”が揃う時（後書き）

設定は福音戦後に投稿予定。

エクシア（ダブルオー）の人格の容姿は一期OPのマリナ様似の女性をベースにマリナ様と刹那を足して二で割った感じ。  
いやマリナ様まんまでは戦い似合わないし……。

風景は一瞬衛宮士郎の固有結界みたいになりそうだったのは秘密だ。

## 騎士と天使の再誕（前書き）

原作でさえ短い戦闘シーンを長くするのは至難の業だと思う。

## 騎士と天使の再誕

三人称Side

「うっ……ぐ……!!」

太陽が後少しで沈みきろうと暗く染まり始めた空に、光の翼を生やす銀の福音とそれに首を捕まれている紅椿の箒の姿があった。

箒の首を締める力は少しずつ強まり、光の翼が紅椿を包み込もうとしている。

刹那が墜とされた後その事実には驚き、怯えていた箒とシャルロットは大した抵抗も反撃も出来ず、シャルロットは墜とされ箒もまたたった今その翼をもがれようとされていた。

(私は……ここで、終わるのか……?)

これでは一夏に二度と顔を見せられない。二度と会えない。まだ『答え』も見つけられていない。

会いたい。

一夏に。愛しい者に。

遭いたい。

そして、もう一度彼の顔が見たい。

逢いたい……！

会って、話をしたい。そしてもし答えを得たならば、その答えを、  
自分が貫く信念を言っでやるんだ。

一夏に、逢いたい……！！

「い……ち、か……」

「第イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！」

箒の首を締めていた福音が突然手を離し、飛来してきた閃光荷電粒子砲をその身に受けて吹き飛んだ。

「がはっ、げほげほっ、い、一体何が……」

いきなり何が起きたのか理解出来ず箒は咳き込みながら荷電粒子砲の砲撃が来た方を振り向き、そしてその先にある姿を見て言葉を失った。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ!!」

その先にいたのは、会いたくて、その声が聞きたくて止まなかった者の姿。

新たなる力を携え、その身に雪の様に白き鎧を纏いし者。

白式第二形態『雪羅』を纏った一夏だった。

「一夏っ、一夏なのだな!? 体は、傷はっ……」

「おう、待たせたな。問題ねえよ」

「よかつ、よかつた……。本当に、よかつた……」

「何だよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなど……」

一夏が箒に近寄り、あやす様にその頭を撫でる。

強気な性格の所為か、中々素直になれない箒だがその心の内は喜びに溢れていた。

「これ、やるよ。誕生日おめでとう」

突と一夏が差し出したのは白いリボン。それは彼が七月七日の箒の誕生日の為に買ったプレゼントであり、また福音に焼かれ現在髪を下ろしている箒の為に持ってきた物だった。

「それ、折角だし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる」

左腕を突き出し右手で雪片式型を構え、福音に向かっていく一夏。

「さあ、再戦といこうか!!」

第二形態へと移行した白式・雪羅のその姿及び性能は第一形態の面影を残しつつも大きく変化していた。

背中の方方向加速推進翼は二基から四基に増え、大型化した事により機動性と最大速度が増加し、瞬時加速に必要なエネルギーのチャージ時間がより短くなっている。

また数が増えた事で連続して行う瞬時加速 ダブル・イクニッションブースト 『二段階瞬時加速』を可能とした。

そして以前と比べ最も変化し、目を引くのは左腕に追加された新武装 多機能武装腕『雪羅』。脱着式のそれはその名の通り複数  
の機能を持つ。

雪羅先端の爪形簡易マニピレーターから零落白夜のエネルギー刃を展開する『クローモード』。  
簡易マニピレーターの掌に取り付けられ、瞬時加速と同じ多目的 マルチプル エネルギーを消費して荷電粒子砲を放つ『カノンモード』。  
零落白夜のエネルギーシールドを展開する『シールドモード』。

その姿と能力がかの『白騎士』と酷似しているのを気付く者はいた  
ただろうか……。

「ぜらああああつー!!」

迫り来るエネルギー弾を躲し雪羅のシールドモードで防ぎながら零落白夜の刃を振るう。それは何度も紙一重で躲され、また光の翼を斬り伏せてもすぐに再構築されてしまう。

白式が遅い訳ではない。福音が白式よりも速いのだ。

何度も追い付き、食らい付いても距離を取られてしまう。大技である荷電粒子砲は簡単に躲されてしまうだろう。だがパワーアップしたとはいえ、今の白式は前以上に燃費が悪くなっていた。

多方向加速推進翼の増加と大型化に加え零落白夜を使う雪羅。強大な力を得たその代償は大きい。

『シールドエネルギー残り20%突入 活動限界予測約三分』

「こなくそつー!!」

白式からの警告に焦りが走る。このままではまたあの時の二の舞だ。また、守れなくなってしまうー!!

ここでやらねば後ろにいる筈が危ない。紅椿の燃費も白式程ではないが悪いのは明らかだ。

恐らく今も戦闘が行える程残っているか怪しい。

初めて背負ってみて分かるその重さ。だからこそ退けない!!

「危ねっ!?!」

福音が左腕から撃ち出した光の矢をギリギリで躲すが次の瞬間、目の前に映るのは右腕の光の翼を叩きつけようと振りかぶる福音の姿だった。

(ちっ……くしょおおおおおおお!!)

相討ち覚悟で雪片式型を撃ち込もうと握る手に力を入れようとす  
るが、突然解放回線が開かれた。

『その前に、右に避ける』

「!?!」

訳も分からず反射的に右へ身体を動かすと、一条のビームが福音の右腕の手首のリングから先を吹き飛ばし、緑色の粒子を巻き散らす謎の機体が白式のすぐ横を駆け抜け福音を蹴り飛ばした。

それは見た事もない機体だった。ソレもそのはず、頭から爪先に至るまで全身に装甲を纏う機体などあの無人機以外ないからだ。

だけど目の前の機体は無人機ではない。いるだけで中にいる人間の力強い存在感を感じさせている。

翡翠の双眸に紅い宝石の様な物を付けた額とそこから生える二対のクラビカルアンテナ。

背中から両肩に伸びるアームで支えられた粒子を放出する二つのコーン状のパーツ。

限りなく人間に近い構造の全身。

見た事はない（…………）。だが、それが誰の機体かは僅かに残る面影と感覚から分かる。

「刹那!？」

「ダブルオーガンダム、刹那・F・セイエイ、その“楔”を破壊する!！」

再び戦場に向かう一夏を見送った篝の心は躍動し、熱を持って強く跳ねていた。

（一夏が駆けつけてくれた……!）

そして戦う一夏の姿を見て、何よりも強く願った。

（私は、共に戦いたい。あの背中を守りたい！！）

強く、強く願うと同時に理解した。これが自分の戦う理由だと。自分が貫きたいモノだと。

突如、自分の隣を何かが高速で突き抜ける。後に残された緑色の粒子の軌跡とその後ろ姿を見て確信した。刹那が来たのだと。墜とされたはずの刹那がいきなり現れた事には不思議と驚かなかつた。現に一夏が新たな姿で現れたのだから。

だからこそその気持ちはより強くなる。今度こそは間違えない。間違ってたまるものか。自分は答えを見つけたのだ。

私は、一夏と共に戦いたい！！一夏を支えたい、あの背中を守りたいのだ！！

するとその想いに応える様に、紅椿の展開装甲から赤い光と共に金色の粒子が溢れ出す。

「これは……！？」

『単一仕様『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了』

ハイパーセンサーから情報が提示され、機体の全てのエネルギー

が急激に回復していくのが分かる。

（まだ、戦えるのだな？ならば）

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締める。

（ならば、行くぞ！紅椿！！）

赤い光に黄金の輝きを得た深紅の武士は、夕暮れもののふの空を裂く様に駆けた。

「……本当に刹那なのか？それに、その機体は……」

「……二次移行セカンド・シフトの様なものだと思ってくれればいい。機体名は『ダブルオー』だ」

厳密に言つと違つが、刹那の機体は元々『エクシア』で登録されているので今の姿は第二形態と言われても過言ではなかった。ツインドライブの稼働制限等まだ問題を抱えておりダブルオー本来の性能が出せないの『不完全な第二形態』ではあるが……。

「全身装甲って……いくらなんでも変わり過ぎじゃないか」

「気にしてくれるな。それよりエネルギーは大丈夫か？」

「いや、残り二割を切っている。一撃なら大丈夫だけど連続しての戦闘は難しそうだ」

「そうか……。なら」「一夏あー!!」「箒!?」「」

「一夏、手を出せ!!！」

「何で来たんだ!？」

「いいから早く出せ!!！」

「いやだから……」「二人共下がれ!!」「何だ!？」

一夏と箒が問答をしている間に福音が攻撃を放ってきたのに対し二人の前に刹那が立ちはだかる。

するとダブルオーの両肩のGNシールドがマウントされたコーン状パーツの付いたユニットが前方を向き機体前面に緑色の膜 GN フィールドが展開され、福音のエネルギー弾を防いだ。

「早くしろ!!！」

「ああもう、分かったよ!!！」

自棄になった一夏が雪片式型を収納し右手で紅椿の右手に触れると、身体中に電流の様な衝撃と熱が走り視界が一度大きく揺れる。

「な、んだ……？シールドエネルギーが急激に回復した!？」

「今は考えるな！刹那も早く……」

「俺は問題無い。それよりも早くこいつを止めるぞ」

一夏と箒が目を向けると、エネルギーを送り込み今にも決壊しそうな程不安定な光の翼を向ける福音の姿があった。

「俺と箒で翼を潰す。一夏はその間に零落白夜で攻撃しろ」

「分かった!!」

「承知した!!」

「行くぞ!!」

三機が駆け出すと同時に暴力的な光の豪雨が降り注ぎ、それぞれが躲しつつ刹那がGNフィールドを展開したまま突撃していく。

右手のGNソード?のライフルモードで牽制射撃を行いながら福音に衝突するギリギリまで接近した後にローリングで緊急回避。

瞬間、上空から紅い機影が二振りの刀で襲い掛かり勢いを殺さずに福音の右頭部の翼を斬り落とす。

紅椿はそのまま下に駆け抜け、福音の背後からクイツクターンをして戻ってきたダブルオーがGNソード？で脚部をめがけ斬り掛かる。

福音は後向きに回転する事でその一撃を回避するが、刹那が本来なら届かないはずの間合いからもう片方のGNソード？の銃口からビーム刃を展開する事で間合いを伸ばして振り抜き、両足首を翼ごと斬り落とした。

まとわりつく敵を引き離そうと残った左腕の翼をダブルオーに向けるが

「俺がいる事を忘れてもらっちゃ困るぜ！！」

先程まで温存していた一夏が下方から零落白夜で左腕を斬り払った。

零落白夜でシールドエネルギーを大きく削られ両手足首から先を失った福音は、残る頭部の翼から悪あがきにエネルギー弾を放とうとする。

「させるかぁ！！」

そこに筈の回し蹴りが腹部に極まり福音は大きくバランスを崩す。



とは別の空間にいた。

どこまでも広がる草原に、切れ長の雲が広がる蒼空。草原の至る所には地中海沿岸の古代文明の遺跡に見る朽ちた柱が点在している。

そして目の前には、長い金髪に白のワンピースを着た女性が立っていた。

「お前は誰だ？」

「私は『銀の福音』シルバリオ・ゴスベル。そしてここは私の世界」

「では何故我々をこの世界に？」

「私は創造主グラント・マスターの命とはいえ我が主に無礼を働いてしまったのに対し、貴方達はその楔を打ち破り主を救って下さったのを礼に言いたくてここにお呼び致しました」

「創造主というのは……」

「篠ノ乃束ですね？」

「はい。我々にとって創造主の命令は絶対ですから……」

「篠ノ乃束……」

その言葉に、刹那の拳を握る力が自然と強くなる。

「気を落とさないで下さい。私は誰も恨んでなどおりません」

「どういう事だ」

「創造主に造られた私達には分かるのです。彼女もまた不器用で、独りぼっちなのが……」

「……………」

「貴方達なら、もしかしたら彼女を受け容れて下さるかもしれない。もしそうなら、彼女を『孤独』から助けてあげて下さい」

「……………了解した」

「それともう一つ、我が主にお伝え下さい。『再び貴女と空を飛べる日が来るのを願っています』と」

「ああ、確かに」

「……………では、宜しく御願いたします」

再び、視界は白く染まった。

次に気が付いた時は、刹那自身と一夏がそれぞれ武器を振り抜いた瞬間だった。それが止めの一撃だったのだろうか、頭部のフルフェイスユニットのみを残してスキンナーを失った福音の操縦者が海へと落ちていく。

「危ない!!」

スラスターを全開にして先回りしたダブルオーが操縦者を受け止めた瞬間、

(アリ…ガ…ト…ウ…)

そんな声を、確かに聞いた気がした。

## 騎士と天使の再誕（後書き）

福音の姿はデモンベインのライカさんをイメージしました。

……MSとISじゃあ性能差が結構ダンチな気がしてきました。

## 設定？（随時更新・ネタバレ注意）

刹那・F・セイエイ専用IS第二形態『ダブルオー』

刹那の専用機であった『エクシア』の第二形態。

第二形態とは呼ばれているが、そもそもエクシアやダブルオーは00クアンタの修復が終わるまでの仮の姿である（この事を知っているのは刹那のみ）。

しかしエクシアが刹那の専用機として登録されている為、便宜上第二形態扱いとなった。

第一形態エクシアとの相違点はまず全身装甲となった事が挙げられる。

これは今後激化するであろう戦闘で防御力と操縦者の保護能力を向上する為である。

またその副産物としてエネルギー（粒子）伝達率の向上がある。

両肩のコーンはGN粒子の放出による加速、GNフィールド形成等に対応。

銀の福音・第二形態との戦闘では一度太陽炉を含む全てのリミッターが解除されたが、その後はまたリミッターが掛けられており太陽炉も例外でない。

動力はダブルオーになった事によりツインドライブシステムに対応しているが、本来00クアンタ用に造られたツインドライブでは出力や制御面でダブルオーが適応出来ず、エクシアと同じバッテリー

ーモードとなった。

その為、現在オーライザーと同時に制御プログラムを構築中。  
またその間の戦力アップとして『セブンソード』を構築している。

第三世代機として登録されているが、東が見たところでは第四世代機に近い性能を有している可能性があるらしい。

## 武装一覧

・GNソード？

ダブルオーのメイン武装。刀身とグリップを変形させる事でライフルモードへの移行が可能。

ライフルモードの威力はエクシアのGNソード改に勝るが連射性は若干落ちる。

銃口からビーム刃を展開したり柄同士を合体させてランスモードにしたりと実は結構多機能。

・GNビームサーベル

エクシアのと同型。サーベルとダガーの切り替え機能も同じで、後ろ腰に二本マウント。

・GNシールド

二枚一組の実体ブレード付きシールド。

腕にマウントさせる他肩のコーン下部にマウントする事も可能。二

枚を合体させたツインとシングル二つの形態が存在。

・エクシア時と同じ第三世代型以前のガンダム兵装

エクシア時と同じ兵装。ケルデイルら第三・五世代型ガンダムの兵装は、元々ダブルオーになる事自体急な事だった為未だ構築されていない。

## オリジナル機体

### 打鉄CB仕様typeC

日本製第二世代型IS『打鉄』をCBが独自に入手、改造を施した機体。ヴァーチエとセラヴィーのデータが反映されており、typeCの『C』は『Cannon（大砲）』のC。搭乗者はティエリア・アーデ。

コアはISコアではなく擬似太陽炉がISコアとしての機能を持った『擬似GNコア』を使用。これはレグナント自立稼働試験型に搭載されていた擬似太陽炉とは異なるものであるが、詳細は現在明らかになっていない。しかしダブルオーに搭載されているコアもGNコアに分類されるらしい。

ほぼ全身に装甲を纏っているがこれは擬装と操縦者の性別を判断されない為の処置であり、胸部と頭部装甲にクラビカルアンテナを装備している。全体的にラインが直線的である。

頭部はCBのサポート組織『フェレシユテ』で運用された第二世代型ガンダムが装備していた擬装用センサーマスクを装備。

両肩の非固定浮遊部位である物理シールドと脚部を覆う腰のスカートアーマーはGNフィールド発生装置の役割を持つ。

## 武装一覧

### ・GNバズーカ

ヴァーチェのGNバズーカをモデルに造られたラファエルの大気圏内使用『ラファエルドミニオンズ』のGNバズーカをヴァーチェと同じダブルグリップに改造。

後部に擬似太陽炉を搭載しており、本体からの粒子供給を必要としない。

バーストモードへの変形が可能。

### ・GNキャノン

背部装甲から両肩に伸びるGNキャノン。セラヴィーのと同型で隠し腕とGNビームサーベルを装備。

### ・GNビームサーベル

セラヴィーと同じく両腕の装甲内に内蔵。

アヘッドノアヘッド近接戦闘型『サキガケ』ノジンクス？自立稼働型

独立治安維持部隊アロウズで運用されたアヘッド、アヘッド近接戦闘型『サキガケ』、ジンクス？の無人自立稼働タイプ。

レグナント自立稼働試験型に使われた自立稼働プログラムの改良型を用いられており、また動力については詳細は不明だがISコアではないとの事。

シールドバリアーを搭載していないが、これは無人機であり量産型故生産コストを考えた結果だと推測される。

武装はそれぞれの機体が本来装備していたものに準じている。

ジンクス？キャノン/ソード自立稼働型

ジンクス？が正式採用される前まで連邦正規軍で運用されたジンクス？キャノン/ソードの改造機。性能的にはジンクス？の方がジンクス？よりも高いが生産性やコスト面を考慮しての処置と考えられる。

キャノンは右肩のハードポイントにGNキャノンを、ソードは左肩にGNバスターソードを装備し、それぞれ特有の頭部を備える事以外はジンクス？と変わらない。

月夜の語り、そして夜が明けて（前書き）

シリアスが続いた分ギャグテイストが多くなりました。……この小説の千冬さんって、締まりが無くなってきた気がする。

## 月夜の語り、そして夜が明けて

—夏Side

「作戦完了」と言いたい所だが、お前達は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用特別トレーニングを課してやるから、そのつもりでいる。本来ならば裁判沙汰だがな」

「……………はい」「……………」

勝利を得た戦士達の帰還は、それはそれは冷たいものだった。戦いの後帰ってきた俺達を待っていたのは、腕を組み静かに且つ鋭い怒気を放つ修羅……………もとい、千冬姉だった。

俺達は大広間に護送……………連れていかれ、刹那を除く全員が正座で千冬姉の説教を聞かされていた。かれこれ30分は経っているがセシリアの顔が色んな意味で真っ青になっている辺りそろそろ不味いかもしれん。

「あ、あの、織斑先生、もうそろそろその辺で……………。け、怪我人もいますし、ね？」

「ぶん……………」

怒り心頭の千冬姉に対しておろおろわたたしている山田先生。さつきから救急箱とか持ってきたりと忙しく動いている。

「そ、それじゃあ一度休憩してから身体検査に移りましょうか。

あ、勿論男女別々ですからね織斑君とセイエイ君!？」

いや分かってますってば!だから皆俺を見て身体を隠すのはやめてくれ。

ぬるめのスポーツドリンクのパックを受け取りながら部屋を出ていこうとするが、さつきからこっちに向けられている視線が気になっ  
てしょうがない。

「な、なんですか?織斑先生」

「……しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え?あ……」

そう言うと千冬姉は奥へと引っ込んでしまった。なんだか照れ臭  
そうな顔をしていたのを後ろに向かれる一寸前に見えた辺り、なん  
だかんだで俺達を心配してくれているのだろう、そんな千冬姉に心  
の中で感謝した。



夜の海は大変危険です。鯉の烏帽子やハブクラゲ、イモガイなど猛毒を有する生物や、オキザヨリ（別名ダツ）等光に吸い寄せられてくる危険な生物もいますので、ナイトダイビングや夜釣り、漁業やいらない事を信じていますが密輸の方はお気を付け下さい。というか自首して下さい。ダメ、絶対ダメ、犯罪。

クラゲやイモガイの針は種類によってはウエットスーツを貫通し、血清が存在せずまたは使う時間すら無く死に至る事もあります。沖縄の新聞でクラゲ注意報を確認し、スーツの下にパンストを全身に装備する事をお勧めします。

またオキザヨリは光に釣れられて海面を飛び出し、同じくウエットスーツを貫通して人に突き刺さるケースもあります。その場合は決して抜かずに直ぐ様病院に連れていきましよう。

「ぶっつ……」

海から上がり耳の中の水を抜くと、近くの岩場に腰を下ろす。今宵の月は満月で、影が出来る程明るい。その満月で何故か束さんを連想してしまうのは、あのニンジンとウサミミの所為だろう。

（そついや俺、寝ている時になんか夢を見た気がするんだが……どんなんだっけ？）

起きた頃にははっきり憶えていたはずなのだが今となってはかなり臆気だ。

大事な事があつた様な気がして胸がもやもやとしているが、ただ『変われ』という一言がずっと心に残っている。

「い、一夏……？」

「……箒か？」

「あ、あんまり見ないで欲しい。お、落ち着かん」

「す、すまん」

名前を呼ばれて振り向いてみれば、そこには水着を着た箒がいた。白地に黒のラインが入ったビキニタイプ……なんというか、セクシ―でした。ハイ。

(いかん、これはかなり気恥ずかしい……)

「い、一夏……」

「な、何だ？」

先程の水着姿が目には焼き付いてしまい一人ドキドキしていた所に呼ばれてしまい、一瞬ビクツと肩を震わせてしまった。

「その……なんだ、怪我は大丈夫なのか？」

「ああ……、目が覚めたら何か治ってた」

「そ、そうか……ではないぞ!？」

「うお!？」

あ、ありのままの事実を話したけなのに何故怒る様に返されるんだ!？」

「ば、馬鹿な事を言うな!そんな事がありえるはずが……ない……?傷が……無い……」

「ほら、あれじゃないのか?ISの操縦者保護機能」

「あれは保護するだけだろう。傷が治るなど、聞いた事が無い……」

確かにそうかもしれないが……。でも東さんが造ったISだから出来てもおかしくないような気がする。

実際IS自体全てが明らかになっている訳ではないし。

「まあ兎に角皆無事に終わったんだ。これでいいだろ？」

「よ、よくあるものか!!私の所為で傷を負ったというのに……」

「なんだよ、治らなければよかったていうのか?」

「そういう訳ではない！……ただ、罰も無しにこんな簡単に許されると、困るのだ」

……まったく、堅い奴というか難しい奴というか。仕方ない、罰を与えてやるとするか。

「じゃあ、今から箒に罰を与えてやる。目……じゃなかった、歯を食い縛れ」

「うう、うむ……」

「ていつ（ズビシッ）」

「あたっ！？」

箒の頭にベルリンの赤い雨（要はチョップ）をかます。とは言っても本気ではなく軽くだが。

「ほい、終わり。これに懲りたら、自信過剰と独断専行は控えるよ」

「……は？」

「いやだから、終わり」

「ふざけるな！？」

「おおっ!?!」

「人が覚悟を決めておいてあの程度の手刀で終わりだど!?! 武士としての名折れだぞ!?!」

「お、落ち着けよ、な? それにそんなに詰め寄られると……」

「落ち着けるものか! 大体ここで引き下がれば」

「いや、その……だから、当たってるんだけども」

……胸が。

「!?!? このっ、不埒者!?!」

顔を赤らめて体を抱き寄せながら身を退く筈。すみません、男の性なんです……。

「……はあ、呆れ過ぎて逆に頭が冷えてしまった。まあいい、私もお前に伝えたい事があったしな」

再度顔を引き締めてこちらに向かい合う。その雰囲気は、思わずこちらも顔が引き締まる。

「私は、お前と共に戦いたい。お前の背中を守りたい。それが私の戦う理由だ。」

「気を付けるよ？ 喻えお前が断ろうと、私はしつこいぞ？」

引き締めりながらもすこしだけはにかんだその顔は、月明かりと相まってとても凛々しく、格好良く見えた。

「お、おう……」

「まずい、格好良いんだけどなんか引き寄せられてしまう程綺麗だ。落ち着け、落ち着くんだけ俺……」。

「せ、セシリア！？ なんでこんな所にいんのよ！」

「鈴さんこそ！ か、勝手に旅館を抜け出して、怒られても知りませんわよ」

「さて、一夏はと……」

「え、ラウラに……鈴とセシリア？ な、なんでここにいるの……？」

「どうやら神様は俺の命を奪い去りたいようです。」

大体夜中に水着で男と女が浜辺で二人きりだなんて言ったら、間違いない誤解される。特にセシリア達には。説明する暇も無く。

「ほ、箒。あっちに行こう……」

「え、あ、きゃあ!？」

「うおお!？」

あ、ありのまま今起こった事を話すぞ!

四人に見つかる前にこの場を離れようと箒の手を引いて立ち上がったんだが、波に濡れた岩場である故に足が滑ってしまい

「……………」

俺が箒の上に覆い被さる様な状態になっております。偶然とかご都合主義とかそんなちやちなもんじゃねえ。世界の悪意というかもっと恐ろしいものの片鱗を味わった様な気がするぜ…………。

って、待て待て待て。早く退かないとあいつらに見付かってしまう上に確実に殺される。今の状況はどう見ても俺が箒を押し倒している様にしか見えない。

兎に角退かないと…………とは思っても、身体が全く動かない。おのれゴルゴムの仕業か!？

「いや、そのだな、一夏。嫌ではないのだがいきなりコレというの  
も…………」

お願いだから篤さんも正常稼働して下さい!!

「ん……」

ウエエエエイッ!? ナジエガオヲ、チガツゲデグルンディスカヴ  
オウギザァン!? (訳：何故顔を近付けてくるんですか篤さん)

離れなくてはならないのに逆に惹き寄せられてしまいそうになる。  
おのれゴルゴムのし)ry

ゴッッ

頭頂部を何かに小突かれるような感覚がするが今それを気にして  
いる場合ではない。

ゴッッゴッッ

(ああ、なんだよもう)

それでもしつこいから顔を上げて 後悔した。

「ブルー・ティアーズ……」

のビット。その先端の四角いスリットに光が凝縮し

ズバシユツ!!

「のわあああつ!?!」

放たれたレーザーを体を横に捻って紙一重で躲す。前髪が焦げた気がするがそれ所じゃない。

「一夏、何をしているのかな……?」

「ふふ、うふふふふふ……」

「Ich freue mich darauf, Sie sehen zu treffen. Bereiten Sie sich bitte vor zu sterben, Ichikada?」

「再見、一夏」

俺の意識は、そこで途切れ視界は黒く染まっていった……。

### 三人称 Side

岬の柵に腰掛け、足をぶらぶらゆらし鼻歌を奏でながら、様々なディスプレイを出しては眺めてそして消していく一人の女性。

「紅椿の稼働率は……絢爛舞踏を含めて56%かあ。これはちょっと予想以上かな？」

何時だつて何処か退屈そうな顔をしている篠ノ之束本人だった。しかし今その顔は自身の予測を上回る事態に対する歓喜の無邪気な微笑みに満ちている。

今日は本当にいい日だ。愛する妹の晴舞台を見れ、唯一無二の親友に会え、欲しくて堪らなかったモノが手に入った。

その欲しくて堪らなかったモノ……それが記録されたデータをディスプレイに呼び出し、食い入る様に見つめる。

「映像と外見から予測される重量と加速度、物理法則を無視するかのようなこの機動。加速度だけなら世界の乗り物の中で最速かもね。それにこの束さんでさえ完成させられていないビーム兵器の搭載。常人を越える反応速度に戦術……。いいもの見れたわ」

本当ならこれで満足出来そうなものだが、今日の収穫は予想のも  
のだった。

「おまけに第二形態のデータまで取れちゃうなんてね……。本来な  
ら必要ない全身装甲に今までのISを凌駕する異常なまでのエネルギー  
ギア反応。

両肩のトンガリは向きを変える事でスラスターとなりまた得体の知  
れないバリアの発生装置にもなる。これじゃあ世界に二機しかないな  
いはずの第四世代機に匹敵する性能だよ。  
やはりこれらの鍵はこの粒子かな……。事実機体の出力の上昇と共  
に散布量が増しているし加速する時もバリア張る時も出てるし。ミ  
サイルにすら使われているからね」

しかし説明するにはまだデータが足りない。だが、時間を掛けて  
でも分からない問題を解き明かしてこそ天才なのでそこは気にしな  
い。  
だけれども、自分が最も分かっているはずなのにその自分が全く理  
解出来ない事もあった。

「この最後の時、銀の福音のコアの共鳴反応と同時に観測された正  
体不明の波長……。

ISのコアはこの私とISのコアとしか反応しないはずなのに、私  
が造ったものではなく本来ならいないはずのこの機体と共鳴した？  
ううん、そんなのはあり得ない……」

ISコアはコア同士でコア・ネットワークと呼ばれる専用のネットワークを形成する。そのネットワークの主は勿論コアの生みの親である篠ノ之束自身だ。

創造手としての権限を使えばコアに干渉するのは造作もないはずなのにこの機体　ダブルオーは何も受け付けない。

それどころかダブルオーに使われているコアは束が造ったものではなく、コア・ネットワークに繋がっているかどうかも怪しいのだ。

「私以外の誰かが造ったコア……それは無いね。コアを複製するどころか解析すら不可能なんだから」

分からない。解らない。判らない。ワカラナイ。天才の頭脳を持つてして解けない謎にも程がある。だからだろうか。ソレを知りたい。識りたい。その欲望が強くなつていく。燃え上がっていく。

退屈に塗れたはずのこの世界に突然として現れた『理解不能』。人の心の次に理解出来ない複雑怪奇。

暫くは退屈しないで済みそうだね。こればかりは感謝するよ、  
刹那・F・セイエイ君

束の持つ興味対象と謎の中には刹那自身も含まれる。入り江でのやり取りで拒絶させられはしたが、あんな断り方は初めてだ。

俺はまだ『篠ノ之束』という人間を理解しきれていない。

今まで出会ってきた人間は千冬達を除いて皆『私』という存在を拒絶するか下心か頭脳を利用しただけの欲望丸出しで近寄ってくる連中だけだった。

だが刹那が示したのは存在の拒絶ではなくただ許可無く見られたくないというのと遠回しに一人の人間としての私を知りたいという二つの意志。

こんな人間は初めてだ。拒絶も受け入れもしない人間は今までいなかった。

これですます束の刹那への興味が高まったのは言うまでも無い。

「ふふん この子とこの機体には驚かされっぱなしだけどそれはいつくんの白式にも言える事だね。

まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで 「

「まるで、『白騎士』の様だな。コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

岬の背面に位置する森の中からその闇を体現するかの様な漆黒のスーツを纏う千冬が現れた。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

千冬は木にもたれかかり、束は海の向こうを見ながら互いに背中を向け合う。互いに顔を見る必要など無い。見なくても相手がどんな顔をしているか分かるから。そんな確かな信頼が二人の間にあった。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士は何処に行ったんでしようか？」

「白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。流石はちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけの事はあるね」

気付かないはずがない。第一形態で自分がかつて駆った『暮桜』と同じ単一仕様を発現し、第二形態からは白騎士と同じ荷電粒子砲を搭載。そして何よりもその外見と名前が。

一介の研究所が造るには余りにも似過ぎているし、何より真似る理由が無い。

白騎士はあの事件の後、ISが世界に公表され広まった時に研究用として解体されたのだが、そのコアはとある研究所襲撃事件で失われ何時しか気付かれず白式に搭載されていた。

「それで例えばの話、ちーちゃんの一番目の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』がコア・ネットワークで情報交換をしていたら、同じ単一仕様を開発したとしても不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は何も答えない。それに構わず束は続ける。

「それにしても不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、なんでだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずなんだけどね」

「不思議な事もあるものだな」

確かにそれについては、分からないというのが本当の所である。それは束にとっても同じ事だが、本人は問題にしない。

「ねえ、ちーちゃん。この世界は楽しい？」

「まあ、そこそこにな。…………だが同じ世界が何時までも続くとは限らんがな」

「…………それはどういう意味かな？」

「全てはお前と アイツ次第だろう」

「それは彼の事かい？」

「アイツは今までに見た事のない人間だ。決して揺るがず、慢らず、信念を持って行動出来る芯の強い奴だ。世界を変える人間は、ああいう奴なんだと思う。」

アイツは、私よりも強い。『力』だけでなく『心』もな」

「……そう」

岬に吹き上げる一陣の海風が強く唸りを上げた。

「  
」

その風の中束は何かを呟いて 消えた。忽然と。突然と。

千冬は幹に頭を預けて息を吐く。その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた。

刹那（三人称）Side

刹那は、旅館の中庭で夜空を見上げていた。

刹那には別段星や月を眺めるといった趣味はない。だが何も考えた

りせずじつと風景を眺めたりするのは好きだった。

そんな今刹那は何も考えていない訳ではない。  
考えているのは今日のあの戦闘の事。すなわち、銀の福音のコアと  
共鳴した事だ。

(ダブルオー、福音のコアとの共鳴はどう考えられる?)

『基本この機体は機密保持の為コア・ネットワークでの位置情報等  
を除く情報交換はカットしてあります。  
それと、あの空域にはアヴァランチ・ACユニットとツインドライ  
ブで散布された大量のGN粒子が確認されました』

意識共有現象はツインドライブが完全な同調を果たした状態での  
トランザムでしか起こせないが、それにも関わらずISコアと共鳴  
した。  
それが示すのは

(ISコアが脳量子波を扱えるという事が……?)

『ヴェーダは脳量子波を媒介にイノベイドと情報を交換していまし  
た。  
ISコアにそれが可能かは判断しかねますがGN粒子を媒介にすれ  
ばISコアとの共鳴もあるいは……』

現状では明確な答えが無い以上保留しておくしかない。

それと共鳴に關してもう一つ。それは福音のコアの人格との会話。

創造主……篠ノ之束を孤独から助けてやって欲しいと。

篠ノ之束の孤独。それは度をいき過ぎた天才故なのか。ISという現代の科学技術を一蹴し世界に於ける価値観まで変える存在を造り出し文字通り世界を変えた篠ノ之束。

意識を伝達する新たな原初粒子の発見、その粒子を製造する半永久機関の基礎理論の構築、量子型演算処理システムの発明、軌道工レベーター建造による太陽光発電システムの提唱、二百年先の未来を予見し、世界を変える為に動きそれを果たしたイオリア・シュヘンベルグとは似て否なる存在。

世間には“人間嫌い”と揶揄された二人だが、二人の明確な違いはその“人間嫌い”ではないのだろうか。

イオリア・シュヘンベルグは人間嫌いと呼ばれても彼が嫌ったのは知性を間違つて使い、思い込みや先入観に捉われ、真実を見失う者達であり彼自身は人類を愛していた。

誤解を呼び、不和を呼び、争い合う人類を、それが続いてしまう遠い未来を憂い彼は動いた。

それを本当に知るのには彼の唯一無二の親友であった、リボンス型のイノベイドのモデルとなつた浅緑色の髪の青年だけだったが……。

逆に篠ノ之束の人間嫌いは、極端なものだったのかもしれない。

彼女が先に人間を嫌つたのか、それとも周りの人間が先に彼女を拒絶したのかは定かではないが最終的に彼女はごく一部の人間しか信用出来なくなっていた。

(誰かを信じる事が出来なくては人に信じられる事があるはずがな

い)

トランザムシステムが開放された時の様に、裏切られても最後まで人類を信じ続けたイオリア・シュヘンベルグ。そうなると篠ノ之束もまた誤解と不和の被害者なのかもしれない。

(もう少し、もう少しだけこの世界の行く先を見つめてみよう)

そう刹那は思った。まだ決め付けるには早い。此方の準備も整っていないのもあるが、もう少しこの世界の人間を信じてみようと考えたから。

「こんな時間に何をしている、セイエイ」

後ろから漆黒のスーツを纏ったままの千冬が現れた。確かに時間的には大分遅い時間だ。

「もうすぐ就寝時刻だ。さっさと部屋に戻れ」

「……分かった」

千冬を一瞥した後少しだけ夜空の満月に目を向けた刹那は部屋に戻ろうと歩きだしたが、その前に頭を抱えられ側頭部を柔らかいナ

二方に押し付けられた。

「まったく、一人で抱え込もうとするなど言っただばかりだということに……」

気付けば、刹那の頭は千冬の脇に挟まれていた。ヘッドロックに近い感じだがきつく締めあげるといふよりは抱き寄せるといふのがしっくりくるだろうか。

腕も頭ではなく首に回されている。

「そんなに私が信用ならないというのかお前は？」

「……そういう訳ではないが、人に迷惑を掛けたくないだけだ」

「……お前はいらん気遣いばかりする」

「セイエイくん？何処に行っただんです……か……？」

自分で部屋に戻れと言っただばかりに絡んでくる千冬と話していれば、先程と同じ様に後ろから声がかけられたので振り向けば。

「（ ）。」

「どうした、顔が面白い事になっているぞ山田先生」

「……はっ!？」

AAに理解があるのかどうかは知らんが顔が2chテイストになっている真耶がいた。

「おおお織斑先生!？ななな何をしてるんディスカ!？」

「落ち着け山田先生。口調までもが可笑しな事になっている」

「織斑先生、そろそろ離して欲しいのだが」

「む、私としてはもう少し……冗談だ。ほらさっさと行け」

漸く解放され首を回しながら去っていく刹那を見送った後、顔を真っ赤にしながら涙目で睨み付けてくる真耶に溜め息を吐く。

「そんなに顔を赤くしてどうする。ただの冗談だというのに……」

「……織斑先生はセイエイ君の事が好きなんですか？」

「（・・・）」

「織斑先生！？先生の顔も大変な事になってますよ!？」

「どうやらIS学園教師にはAAスキルが必須らしい（違）。少なくとも今の千冬の反応はアウトだろう。」

「……………で、どうなんですか？」

「何を言っている山田先生確かにアイツはいい奴だとは思いますが私は一夏が独り立ちするまでそういうのは」

「織斑君の独り立ちって織斑先生自身が一番許しそくないような……………」

「ナニカイツタカ？（ガシィッ）」 こめかみを掴む音

「いいえ何もというか何故片言に!？」

「私は笑えない冗談は大嫌いだ。アイツは背中を預ける事が出来る

男であつて人生の伴侶とかそういうのではない」

(駄目だ、この人“無自覚”だ……!!)

実際その通り千冬は無自覚だったりする。いきなり人生の伴侶とか言ってる時点でアウトどころかアウト三つのチェンジものだ。

……シリアス？二人の所為で紙屑の様に吹き飛びましたよ。

一夏Side

「あゝあゝ~~~~~」

昨夜の粛清の後、千冬姉に旅館を抜け出した事がばれて大目玉を食らい、更には罰として今朝早くから備品の詰め込み作業に駆り出され睡眠時間は実質三時間だった。

喉も渴き手持ちに水分が無いのでくれるよう頼んだのだが、返事は

『知りませんわ』

『唾でも飲んでろ』

『あるけどあげない』

『な、何を見とるか馬鹿者！！』

でした。自業自得なんですなすみません。

「ねえ、織斑君とセイエイ君っているかしら？」

「あ、はい。織斑は俺ですけど刹那は今確か……」

げんなりとしていると車内に見知らぬ女性が入ってきた。金髪の二十歳ぐらいの外国人女性だ。青のカジュアルなサマーソーツを着こなしておりその胸元に掛けていたサングラスを預け、俺の顔を見つめてきた。

「あ、あの、あなたは……？」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え」

チュツ…… 頬キツス

「これはお礼。有難うね、白いナイトさん。それと、もう一人は…」

「『銀の福音』の操縦者だな？」

「あら、もう一人の蒼いナイトさんは君かしら？」

「蒼いナイトが誰だかは知らんがもう一人の男のIS操縦者は俺の事だ。……話がある。ついてきて欲しい」

「……わかったわ。じゃあね、白いナイトさん。バイバイ」

トイレに行っていた刹那戻ってきてファイルスさんを連れていってしまった。だが今の俺は頬に残る感覚と自分がされた事で頭がぼーっとしていた。

「浮気者め」

「一夏つてモテるねえ」

「本当に、行く先々で幸せ一杯の様ですわね」

「はっはっは」

……振り向けば、四人の修羅がいた。冷たい眼差しの笑顔で、手

に持つ得物（500mlペットボトル）を振りかぶる。  
「とうか篝さん？ 篝のに限っては旅館の備え付けの冷蔵庫でカッチカチに凍らせたお茶じゃありませんか？」

「……はい、どうぞ……！」

500mlペットボトル手榴弾×4は正直死ねると思いました。  
まる。

#### 刹那&ナターシャ Side

刹那とナターシャの二人は、バスの停まる駐車場から少し離れた所にある展望台に来ていた。  
海から吹く潮風が二人の髪を揺らす。

「それで、話って何かしら？ 蒼いナイトさん」

「……刹那・F・セイエイだ。彼女からの言伝を預かっているのだからそれを伝える為だ」

「『彼女』？」

「『私は誰も恨んでいない。それとまた貴女と共に空を飛べる日が来る事を願っている』」

「!?!?それってまさか……」

「どう受け取るかはお前次第だ。……確かに伝えたぞ。俺は戻る」

「……待って」

刹那が背を向けて駐車場の方へ歩き出そうとした時後ろから呼び止められた。

「『あの子』は……笑っていたかしら?」

「……ああ」

「わかったわ……」

後ろから気配が近付いてくるが刹那は殺意も感じない為気にせず立ち止まったままだ。そして、後ろから抱き締められた。

「あり、が、とう……」

ナターシャは泣いていた。声も出さず、ただ静かに涙を流して。それに対し刹那はただ黙って背中を貸すだけだった。

「私は、あの子をあんな目に合わせた元凶を許せなかった……。何よりも飛ぶ事が好きだったあの子が、自分の世界を捨て、私を守る為に自らその翼をもがされたのが。私は、その元凶に復讐したかった……」

「だが、彼女はそんな事は望んではいない。それは俺も同じだ。復讐などより多くのモノを失うだけに過ぎない。

……俺は、そういう人間をたくさん見てきた」

「……わかって、るわよ」

一方、その頃駐車場ではバスの前に千冬と真耶の二人が立っていた。

「あの、織斑君頭にたんこぶを四つもつくって倒れてるんですけど……」

「どうせいつもの事でしょう。自業自得です、捨て置いて下さい。それよりセイエイは？」

「あ、はい。クラスの皆に聞いてみるとトイレに行く為に一度出て、帰ってきた時にファイルスさんと一緒にまた出ていったらしいです」

「今度は何をする気だあの小娘は……」

「あ、あのですね!?!どうやらセイエイ君がファイルスさんをお呼びだみたいなんですよ」

「は?どうしてまた……」

「それは私に聞かれても……」

『ねえ、ちよつとアレ!セイエイ君じゃない!?!』

バスに乗っている女子生徒の一人が窓の向こうを指差して何か言っており、周りの生徒もそれに連れられて身を乗り出す。千冬と真耶の二人も何事かと指差した方を見れば

「（　　）。」 真耶

「（　　）。」 千冬

「……歩きづらいのだが。後何故ついてくる?」

「いいじゃない別に　それよりも貴男は傷心した女を置き去りにするって言うの？」

「既に泣き止んでいるだろう」

「……そういう意味じゃないんだけど」

刹那と金髪の女性　ナターシャが『腕を組んで』帰ってきた。いや腕を組んでいるというよりもむしろナターシャが刹那の腕を『胸に抱え込んでいる』と言った方が正しいか。

『え、ちよつ、誰あの金髪美人！？』

『あの姿は決定打どころか一撃必殺ものよ！？』

『死んだ！神は死んだ！』

『この世界に神はいない！！』

バスの中で女子生徒達が阿鼻叫喚となっている最中、真っ先に動いたのはやはり千冬と真耶の二人だった。

「セエエエエイエイくうううん！？」

「……小娘。人の生徒に手を出すとはいい度胸だな？え？」

「あら、確かに彼は貴方の生徒かもしれないけどだからといってそこまで彼を縛る権利は貴方には無いはずよ？」

「セイエイ君駄目ですよ！？不純異性交遊はいけませんよ！？」

「不純異性交遊どころか何も無かったのだが？」

「あら、私とあんなに重なり合ったというのに？」

「……ほう、セイエイ。その話、詳しく聞きたいのだがなあ？」

「……………」動かない。どうやら予想以上の事態に頭がショートしている様だ（真耶）。

「いや、重なり合ったとは言っても……………」

「意外と刹那って遅しいのね？（服の上から触った感じでは）」

「セイエイ。帰ったら反省文と懲罰部屋と特別トレーニングだ。逃げられるとおもうなよ？」

「いや、だから……………」

「じゃあ私はこれで。またね、刹那」

チュッス 頬キッス

「……セイエイ。命乞いをする準備は万全か？」

「……………」動かない。口から白いものが出ているがどつち  
ら屍の様だ（真耶）。

「何故だ!？」

月夜の語り、そして夜が明けて（後書き）

次回からやっとな夏休み編。因みに作者に夏休みはありませんでした  
（泣）

後最近オリ主でIS小説を書こうか悩んでいます。トリップものですが主にオリ主が被害者側で。チートではなく努力による強設定で。

## 夏休み編その一（前書き）

思いの外早く書けました。

短編集にする予定だったのですが予想以上に濃く長くなったのでプロローグ的なものと夏休みのとある1日を。

## 夏休み編その一

臨海学校が終わり数週間が経った頃。IS学園及び日本全国の教育機関は夏期長期休暇 所謂『夏休み』に入っていた。

夏休みと言えば海やプール、キャンプや避暑地への旅行などアウトドアや夏祭りに花火大会、夏の暑さがそうさせるのか一線を越えてしまうなどと言ったイベントが盛り沢山だ。

しかし、夏休みには学生にとって大きな関門がある。ある者は最終日まで溜め込み徹夜で泣きながらやる羽目になり、またある者は早めに済ませてしまおうと初日から連日休み無しでやるうとして倒れてしまう。

毎年毎年書かされる読書感想文や自由研究に泣いた者もいるだろう。

そう、即ち『夏休みの宿題』である。

これで泣いた人間が何人いたろうか。『夏休みの友』なんか溜め込んだ時には日付と天気が適当になり『ああ、こいつサボったな』と担任にバレる事請け合いである。

因みに作者は徹夜で課題を終わらせ数時間ばかり寝れると思ったら隣の中学校に落雷、何故か火災報知器のサイレンが夜通し鳴り響き一睡も出来ず実力テストに挑んだ経験がある。結果？聞いてくれるなおつかさん……。

当然天下に名立たるIS学園にも夏休みの宿題はある。多国籍という事情を考慮して量は世間一般の高校より少ないが質は高いので

下手すれば此方の方がキツイであろう。

そしてその猛威は、エリートとされる専用機持ち組にも襲い掛かるのであった。

「刹那、物理教えてくれ……」

「構わんが……こちらも後で古文を見てほしい」

「分かったから頼む」

「何々？『次の空欄に当て嵌まる漢字を書け。』『肉食』か。こんなもの簡単だろう。答えは『人肉食』だ」

「何でたまにこうもいかにも狙ってます的な問題があるのかしらね」

「製作者側の遊び心ではないのでしょうか？」

「まあ確かに時には遊びも必要だからな。ずっと張り詰めていては疲れてしまっだろう」

「ねえ待って！？今明らかにスルー出来ない様な単語があつたんだけど！？」

朝食の時間が終わった食堂で刹那や一夏らは勉強会を開いていた。まあぶつちやけて言えば三人寄れば文殊の知恵でさっさと宿題を終わらせて夏休みをEnjoyしようという事だ。別に刹那は宿題以外する事がないだけであり、三人どころか倍以上の七人いるが。

「騒がしいぞ、シャルロット」

「周りにもまだ人が残っているんだから、静かにしなさいよ」

「僕が悪いの!？」

「何でこんなにレベルの高い問題ばかりなんだ……」

「IS学園は特殊とはいえ世界でも有数の進学校ですから、ISを扱う以上教養も大事という事なんでしょう。『月美』? 答えは『月架美刃』ですわね」

「い、一夏……。ここなのだが……」

「えっと? 『健全なる』は健全なるに宿る……。……これは『健全なる魂は健全なる精神と肉体に宿る』だろ」

「ねえその答えは本気なの!? 嘘だと言って!」

「シャルロット、いい加減にしないとマミるぞ」

「意味わからないけど何だか怖い!？」

夏休みは、まだ始まったばかりである。

夏休み編その一『ガンダムでお馴染みの丸いアイツ。ボールとは違っただよボールとは!!』

(暇だ……)

8月の初め、刹那は暇を持て余していた。特に用事は無い。買うものも無い。

宿題は夏休みに入る前からコツコツとやり粗方終わらせてしまった。筋トレもノルマどころか倍近くやってしまった。アリーナは今日は整備の為封鎖されている。

特に観たい番組もないが何かないとテレビを付けてみる。

ピッ

『!』  
『本日の商品はこちら!なんとね、ペンティアムが4mなのこれ!』

『かはア、4m!?十分だあ!!』

『今回は更にシャカー・PGFX・ビビン@・みゆう太・低速船までつけちゃう!これでお値段たったの百万円!!』

『百万円!?安くてアゴが砕けそうだよ!!』

『更に！ヤミ金融からの代金の貸し出しも邪魔ネットが代行いたします！！』

『ハンコを貸すだけ！！』

『早速お電話の嵐！』

『さあ貴方も今すぐ！！』

ピッ

『皆さんこんにちわ。節子の部屋の時間でございます。本日のお客様はファーストキスと童貞の守護神と呼ばれる須川亮さんです』

ピッ

『大変、アキハが結婚相談所を開いちゃったの！！お願い！これ以上人生の墓場の亡者を増やさないで！！』

レン！？そんな徳用ワカメでどうするつもり！？

次回第百拾話『弾劾裁判』。それじゃあ来週も、マール・ファンタズム！！』

ピッ

『シンジ。この前は鈍器で襲い掛かってゴメン。俺の愛を受け入れてもらえないと思ったら、ついカッとなって……』

『ゴメンで済ませる問題じゃないだろ』

『今日はお詫びの印に、弁当を作ってきたんだ。食べてくれないか』  
『怪しいな。一服盛っていたりしないだろうな』

『そ、そんな事する訳ないだろ！』

『やっぱりか。確認させてもらっぞ（ペロツ）。これは 痺れ薬  
か』

『く……っ！気付かれたか……っ！！そうさ！一舐めただけでも  
動けなくなるような、強力な痺れ薬を盛っておいたのさ！！流石は  
シンジ、よく気付いたな！！』

『ふふん。お前の考える事は全てお見通しさ（ビクンツビクンツ）』

ピッ

『テレビの前の皆、元氣ハツラツ753兄さんと一緒に、今日も元  
気にイクササイズの時間だ！！』

今日はなんと、5103兄さんも来てくれたぞ！！』

ピッ

『皆さんこんにちわ。』紳士ごはん』の時間です。本日の料理は、  
アストナージ先生とフォッカー先生監修、『気になるあの子にフラ



機襲撃事件があったり、一夏がラウラにビンタされたり、VTシステム事件があったり、一夏が砂浜に埋められたり、箒が紅椿を手に入れたり、福音事件があったりと兎に角色々あった。

……殆ど一夏絡みだが。

別段刹那自身に何も無かった訳ではない。一夏達の関係修復や事件の解決に一番動いていたのは他ならぬ刹那だ。

刹那からすれば、一夏達は同じ場所に住む世話の焼ける子供みたいなものだが。

余談だが、臨海学校の後宣告通り千冬の手によって理不尽という名の罰則が与えられた。千冬がIS用近接ブレード片手に生身で鉄パイプ装備の刹那に襲い掛かるといふ処刑としか言い様がないものだったが。  
よく生き延びれたものだとな刹那は今も思っている。

#### 閑話休題。

しかし四ヶ月も経つと元の世界が恋しくなってきたりもする。無論帰れる手段が無ければ帰る訳にもいかないのだが、郷愁の念というのは中々厄介だ。

ふと机の引き出しを開けて二枚の写真を取り出す。何故かパイロットスーツの隠しポケットに入っていたものだが、懐かしい二枚だった。

一枚は一回目の武力介入をしている時のトレミークルーと撮った集合写真であり、もう一枚はアロウズとイノベイドとの戦いの最中にCBの皆でパーティーをした時の写真だった。

一枚目には国連との戦いの中で死んでいった初代ロックオンやクリス、リヒティやモレノなど懐かしい面々が写っておれば、二枚目には正式な参加者ではないがソーマ・ピースやトレミーの新規クルーであったミレイナ、二代目ロックオンが写っている。

この中で一番変わったのはフェルトだろう。アレルヤやティエリアなど他のメンバーも変わってはいるが、少なくとも刹那にはそう感じられた。

武力介入の頃は無口で人付き合いが苦手な少女だったのだがアロウズとの戦いの頃には仲間を気遣う優しい女性へと変わっていた。

そう言えばELSとの対話から地球に帰還した時にティエリアからフェルトがああ後どうなったか聞かされたのを覚えている。

彼女は宇宙という遠い所からではなく自らの目で世界を見て廻りたいという事で生まれた時からいたCBを抜けて地上に降りたのだと。

刹那が宇宙ソラに花を咲かせた様に、私もこの地球ほしを花でいっぱいにしたいから……。

そう言って彼女は出ていっただけだ。刹那は別に止めようとかは思わなかった。彼女が自分でやりたい事を見つけたのなら止める権利はないし、彼女らしいと思ったからだ。

あの頃の記憶を思い返していると自然と笑みが零れる。戦いに明け暮れ辛い日々ではあったが、楽しい時だってあった。初めの頃は

自分も心を閉ざしていて他のメンバーとぶつかる事もあったなど様々な思い出が蘇ってくる。

だからだろうか。元の世界を想う気持ちは弱まる事なくむしろ強みを感じる。

こんな事をして帰れる訳ではないのに……。そう思いながらどうにかしてこの気持ちを紛らわそうと考える。

(ん……?)

ふと写真を見ると他にも懐かしい顔があった。それは人ではないがC Bの大切なメンバーでありいろんな意味で戦力として重宝されていたものだ。

(これならば……)

幸いデータはあつたはず。暇潰しにもなれば今後必要になるであろうモノだ。

思い立ったが吉日。刹那は制服に着替え部屋を出ていった。

「整備室を借りたい？」

所変わって職員室。目の前にいるのは書類仕事がてら休憩にコーヒーを飲む千冬だった。

いくら生徒が休みでも教師には仕事がある。教師にとって夏休みなどお盆の辺りの一週間そこらだろう。

「そんな所で何を造るつもりだ？」

千冬が怪訝そうに聞く。それもその筈、刹那のISは材料も無しに自分で装備を造る事が出来る優れものだ。だからダブルオーに造らせればいいし、調整も高度なAIを持つダブルオー自身が勝手にやるのでわざわざ整備室を使う理由が分からない。

「ISの装備ではないが、決して無駄なものではない。演算処理や機器の簡易コントロールなどに非常に有益だ」

「ふむ……。分かった。取り敢えず造るのなら此方にもサンプルを提出してもらおう事になるがそれでもいいな？」

「構わない」

「よし、整備室の使用を許可する。使用した機材や資材などはちゃんと申告しておけよ。ああ、それとそのお前が造ろうとしているのは何て名前なんだ？」

「八口だ」

「は？」

「八口だ」

第二整備室。その名の通り、二番目のISを整備したりする部屋である。ここには世界各国から提供された最新型の機材を使ってISを整備したりまたISの装備を開発出来る。

何故この部屋を使うのかというところあの特徴的な装甲を造る為にプレス機とかを使うからだ。

装甲と言ってもISの装甲は使わないが銃弾を弾き飛ばせる極薄積層強化プラスチック装甲ぐらいにするつもりだが。

夏休みとあつてか人は少なかった。まあ使う人間もここよりも広い第一整備室に集中しているからだろうが。

中にいた何人がが刹那を見て驚いた顔をするが、刹那はそれを無視して必要な資材と機材を取りに行く。

プレス機にデータを入力して外装を形作っていく。胴体(?)となる部分や手足など必要なパーツを作ったら、それに収まる様に回路やフレームを組み立て始める。

これには刹那がゲリラやガンダムマイスターの訓練プログラムで鍛えた配線の弄り方や爆弾の解体、作り方などあらゆる工作技術が活

かされた。

プログラムはダブルオーのデータベースを介して入力し、更にこれから必要となるデータを入力して調整を施す。

ここで刹那はさつきから此方を向いてる視線が気に掛かる。この部屋に入ってきた時から向けられていたものだが、正直言ってみず痒い。

相手はばれない様にやっているつもりだろうが、明らかに拳動不審だし気配の消し方から素人……とは言わないでも手達れでもない。

「……何の用だ？」

「ひうつ!？」

普通に声を掛けただけなのに驚かれてしまった。それも弱い者いじめをされた様な声を出されて。

視線と声の主は水色の髪をしたショートヘアの少女。頭の何らかのユニットと眼鏡が目を引くが、同世代の中でも華奢な体つきをしている。

何処か怯えた様な表情も相まってかなり弱々しく見えた。

「先程からずっと此方を見ているが、用があるのなら言ってくれ」

「え、いや……その……」

……例えるならライオンを目の前にした小動物だろうか。脅すつもりはさらさら無いし何もしていないのに何故か罪悪感に襲われてしまう。

改めて少女の姿を観察する。制服は一年生のものだが、髪色と顔つきが誰となく刹那が知っている人間を連想させる。

(更識楯無の血縁者か?)

水色の髪をした人間などそうそういない。この学園でも更識楯無ぐらいだ。

だが髪と顔つき以外更識楯無とは殆ど似ていない。実際更識楯無は食えない、猫の様な人間だ。まともに相手にするだけ疲れるというのもある。刹那自身としては。

それに対し目の前の少女はどこか怯えて周りに壁を作っている感じだ。いづなれば真逆。

とは言えど少し似ているだけで血縁者と決まった訳ではないし第一、話が進まない。

「えっと、その……何を、しているのか……気に……なったから……」

「……そういう事か。見ての通りモノを作っているだけだが？」

「う……。でもそれ……ISの装備じゃ、ない……」

確かにその通りだ。材質、形状、構造どれをとってもISに使うモノとは思えない。

「言われてみれば確かに、もともとは戦闘に使うモノではない。だが使い様によつては戦闘で大きく役に立つ」

「たと、えは……？」

「システムのサポートや演算にだ」

「そ……う」

話し方も何処かたどどしい。あまり自己主張が得意なタイプではないようだ。

「用件はそれだけか？」

「う……。見て、いても……いい……？」

「……構わん」

今作っている自分用の赤い個体はプログラムの調整も殆ど終わりは組み立てて動作確認をするだけだ。

学園に提出する個体はまだ手も触れてはいないが、特に見られては

いけない様なデータを入れるつもりは無いし、機密保持の為個体同士のデータリンクは断ち切る事になっている。  
個体同士の識別やコミュニケーション機能は残しておくが。

「これで……よし……」

最後に口（？）を閉じて電源を入れる。数回目を光らせた後、手が格納された部分のフタを羽の様にパタパタしながら元気よく飛び跳ね始めた。

『ハロ！ハロ！セツナ、ヨロシク！！セツナ、ヨロシク！！』

「よろしく頼む、ハロ」

『マカサレタ！マカサレタ！』

「……すい」

水色髪の少女が純粹に驚いた声を上げる。そして刹那も懐かしい相棒に自然と微笑む。かつてオーライザーに組み込まれた赤ハロはELSに同化され破壊されてしまい、今ここに居るのは別の個体だが、それでも刹那は純粹に嬉しかった。

「ハロ、俺は次の作業に入るから大人しくしてろ」

『ワカッタ……ワカッタ……』

感情プログラムなんか入れていないのに何処かがっかりしている様に感じる。それさえも、刹那にとっては懐かしく思えた。

赤八口を静かにさせた後、二個目の八口を作る作業に入る。すると少女が赤八口を指差して

「見て……いい？」

「……壊さないのなら」

手にとって詳しく見始めた。角度を変え、口やフタを開いて覗き込んだりしながら。

それを見送り刹那は再び作業に戻る。……『ヤメロー！ヤメロー！』の声を聞き流しながら。

作業が終わる頃には、もう日が傾き始めていた。始めたのが早めの昼食を済ませた正午過ぎだったので、大分長い時間作業していた事になる。

使用した機材を元の場所に戻し、作業台に戻ると少女が赤八口とにらめっこしていた。

「そろそろ返してほしい」

「っ！っ！っ、ん……。ごめん……。なさい」

赤八口を受け取り、第二整備室を出ていく。職員室に向かう道中

(名前……。聞いてなかったな)

今更ながらそんな事に気付いていた。

第二整備室に残された水色髪の少女　更識簪は刹那が出ていった扉の方を向きながらずっと立っていた。

(……。声、掛けられた)

正直刹那が整備室に来たのには驚いたが、彼の機体を間近で見れるチャンスかもしれないと期待していたのも事実だ。

実際には見る事が出来ず、代わりに珍しいモノは見れたが。

一応簪は更識 暗部の家系の人間である。実姉であり現当主である楯無程ではないが、それなりに刹那自身の事も知っている。刹那が普通の存在でない事ぐらいは。

(ハ口……その演算能力が使えたら……)

自身の専用機である『打鉄式式』の特殊兵装四十八連装ミサイルポッド『山嵐』のマルチロック・システムは未だ未完成であった。むしろ機体自体未完成なのだが。

その理由は、打鉄式式の開発元と一夏の白式の開発元が同じ倉持技研であり、突如現れた男性IS操縦者の専用機開発に人員が割かれその煽りを受けて打鉄式式の開発が遅れたからなのと、簪自身が自分で完成させようとしているからなのだが。

何故簪が自分で機体を完成させようとしているのか これは彼女自身のコンプレックスに関わるのだが、今はまだ時期ではないので割愛させて頂く。

兎も角、高度なプログラムと演算処理を必要とするマルチロック・システムにハ口を活かせないか そう考えていた。

元々刹那自身の機体 エクシア、ダブルオーには以前から興味があった。荷電粒子砲を超えるビーム兵器を装備し、見た目とは裏腹に高い機動力を発揮し、未知の技術に溢れていたから。

その興味はエクシアがダブルオーへと変化してからより一層強まった。

ダブルオーは未だかつてない全身装甲。人の顔を思わせる頭部に、人間に近い構造をしたその機体は、その格好良さもありロボットアニメに出てくるヒーローを連想させた。

刹那が今まで数々の事件を解決してきたのは知っている。それ故にそのヒーロー性が強まっていく。

無口な彼の性格を考えると、子供向けのアニメに出てくる熱血主人公のライバルキャラやシリアスな感じの作品の主人公みたいだと簪は思った。

簪は無類のアニメ好きだった。戦隊ヒーローなど勧善懲悪モノが大好きだ。テレビの中のヒーローは完全無欠であり、それに憧れた。刹那には苦手なモノはあるだろうが、壊滅的な欠点は存在しない様に見える。

だから簪には刹那が自分の憧れるヒーローに見えた。

彼女は知らない。完全無欠のヒーローなど存在しない。ある者にとつての『正義』は誰かにとつての『悪』である事を。刹那は世界の『敵』であった事を。

殺し、破壊する事で平和をもたらした者はヒーローと呼べるだろうか？そもそもヒーローとは何なのだ？

再び場所は変わってまた職員室。刹那はサンプルとして製作した  
ハロ 黒ハロを千冬に提出していた。

「これが、ハロ……とやらか」

『チフユ、ヨロシク！チフユ、ヨロシク！』

突然喋りだした事に千冬は驚くが、周りにいた教師達も不思議な  
モノを見る目で見ている。

何故黒なのかはぶつちやけ適当なのだが、千冬をイメージさせる  
のには違いない。ただこれはサンプルであり千冬専用ではないのだ  
が。

「口の中のコードを端末に繋げる事でグラフ解析や演算、操作の補  
助などが可能だ」

元々ハロはライザーシステムの調整やMSの簡単な操縦やカレル  
というメンテロボの補助をこなしていたぐらいだ。  
たかだか書類仕事は朝飯前である。……書類仕事云々を説明した時  
に教師達の目の色が変わったのは気にしない事にした。

「ん、まあ……分かった。これは此方で預かっておく」

手書きの取扱説明書を千冬に渡し、職員室を去る。

その後暫く千冬が黒八口を見つめていたのは、同じく職員室にいた同僚のみが知る事だった。

その日から赤八口は寮の自室で転がっており、部屋を出る時は基本量子変換で格納されているが時折学園や寮を転がったり跳ねたりする事もある。

その度に整備科の生徒に分解されそうになったり一部の生徒にお持ち帰りされそうになったりするのには余談である。

また、職員室では八口が量産され教師一人辺り一個八口が支給され跳び回っていたり、黒八口がそのまま千冬専用になったり真耶の八口は黄緑色だったりするのは、また近い未来の別のお話。

## 夏休み編その一（後書き）

次回何書こうかな……。ネタはあるんですけどね。

これは完全な“IF”の話であり、本編とはなんの関係もありません。

時系列については詳しく決めてませんが夏休み頃です。

ロマンスって難しい……。

「……………きみが正しかった……………」

「……………あなたも、間違つてはいなかった……………」

“彼”との出逢いは、運命 必然だったのかもしれない。

五十七年の歳月をかけて、私と“彼”は漸く分かり合えた。同じ未来を目指していながらも、コインの表と裏の様に決してその道が交わる事のなかった二人は最後には同じ場所に立ち向かい合う事が出来たのだ。

長かった。ただひたすら永かった。初めて出会った時から彼は自分が知る唯一の道しか歩めず、私はそれしか出来ない彼を理解しきれず悲しんだ。

何度も私は彼に手を差し伸べた。傷付かなくていい。私と同じ道を歩もうと。

けれど彼はその手を握る事はなく、自分にはそれしか出来ない、私と同じ道を歩めないと断りただ自分以外の誰かの為に戦い続け自分

が傷付く道を選んだ。

私は泣いた。彼の事を悲しんだのもあるし、何より彼が泣かなかつたからだ。

このままでは自身の感情をあまり表に出さない彼が報われる事はない。

私はただ彼が自分自身の幸せを見つける事を祈り続けた。

そしてあの時別れてから五十年と少しの歳月を経て、私達は同じ場所に辿り着けた。

その時の私達に言葉は必要なかった。私が此処にいる。彼も此処にいる。お互いに抱き合い、一つになる事で想いを交わす事が出来たから。

それが僅かな時間の事だったのか、それとも永い時間の事だったのかは分からないが想いを伝え合った私達は、最後の別れを告げた淋しくはなかった。何故なら分かり合えたから。彼が自分自身の答え（シアワセ）を見付けられたから。目の前にいなくても、心は繋がっているから。

それから一年が過ぎ、私はベッドに伏した。別段大きな病気は患っていないかったから老衰なのだろう。

昔から身体が特に丈夫だったという訳ではないが、年老いてからは目が不自由である事以外は健康であった。

私が自分の死が近付いているのを感じた時、不思議と恐くなかつた。

確かに色々失ってきたけれどそれ以上のものを得れた事を考えればこの人生は何も無駄ではなかったからだ。

『神よ、皆に会わせてくださった事に感謝します。……ありがとう』  
『う』

これが私が覚えている、自身の最後の言葉だった。

西暦2365年、元アザディスタン王国王女マリナ・イスマイル、死去。享年83歳。

「マリナ、お茶にしましょう？」

「はい、お母さん」

私の名前はマリナ・イスマイル。今年で16歳を迎える、中東の某国のとある名家イスマイル家の長女だ。資産家であり歴史ある宮廷貴族の末裔である父は音楽に造詣が深く、私もその影響を受け音楽家を目指していた。

貴族の末裔といえど私の国は今から十年以上前に王政が終わり民主主義大統領議会政治へと切り替わったので以前の様に私が急に政治に関わる可能性はない。

……以前？私は何を言っているのだろうか？

変な話だが、私は時折既視感というか前にも似た事があつた様な感覚にさいなまれる事がある。

それが特に顕著になったのは、十年前にある『発明』が発表されてからだ。

『インフィニット・ストラトス』。通称IS。とある一人の日本人が創りだした究極のパワードスーツ。現行の全ての兵器を上回る性能を持つ最強の存在。

『女性にしか扱えない』ソレは、最強の兵器としての側面で文字通り“世界を変えた”。

世界各国は優秀な操縦者を輩出する為に女性優遇の政策を数多く施行し、女尊男卑の風潮が生まれたのだ。

私の国や近隣諸国では宗教の関係でその影響が強く出る事はなかったが、ISを発明した日本をはじめとする先進国では、その風潮が強く理不尽な差別化など社会問題となつていているらしい。

……『歪み』。そんな言葉が頭の中に浮かんだ。

ISが登場して以来国防は最高の抑止力となるISの操縦者である女性が第一線を担うようになったが、それを勘違いしたのかISとは関係ないのに女性であるだけで自分が偉いと思ひ込む人が現れるようになったのだ。

『世界を変えた兵器』。『歪み』。この二つの言葉が揃つた時から私はとある夢を見るようになった。

黒いクセのある髪に褐色肌で赤い瞳の少年が、銃を抱えながら廃墟のみとなった戦場を走り回っている。私はそれを止めようと声をあげながら手を差し出すが、少年はそれを無視してただひたすら戦い、傷付き続けるのだ。

その時空から雪の様に緑色の粒子が降り注ぎ、見上げれば蒼と白の鎧を纏い剣を携えた巨大な機械仕掛けの天使が降り立って少年をその手に乗せ飛び去っていく。

そして私は光に包まれ、その光が治まると辺り一面は花畑となっておりそこには成長した大人の姿となった少年と同じく大人の姿になった私が抱き合っているのだ。

お互いの存在を確かめ合う様にずっと、そして『聖永』という永遠に比べれば一瞬よりも短い『刹那』の喜びを噛み締めるかの様に。

そこで夢は醒める。その夢を見たのは一度ばかりではなく何度もなのだが、私は夢の中の少年の事が気が気でならない。

初めてみる人間なんかじゃない。間違いなく私は彼を知っている。……だけど思い出せない。

今まで生きてきて彼に会った記憶がない。ならば何故私は確信を持って彼を知っていると思うのだろうか？

何か大切なものを忘れている様で落ち着かない日々が続いた。

そして世界は再び動き出した。ISの登場から十年が経った時ま

たもや世界を揺るがす出来事があつたのだ。

『世界初、男性のIS操縦者の存在を確認』。女性にしか動かせないはずのISを操縦出来る男性が現れたのだ。その報せはすぐさま世界に広まった。ある者にとっては興味深い研究対象として。ある者にとっては今の世界からの男性の復権の希望として。またある者にとっては今の世界を壊しかねない危惧するべき存在として……。

私がこの報せを知った時、直感的に世界が動くと感じた。表立った動きはなくとも水面下では必ずと。

……しかし彼ではない。夢で見た彼とは顔が違うし、何より本当に世界を変えるのはこの男性ではないと感じたからだ。

それから一ヶ月ばかり経って再び世界は揺れた。

今度は『世界で二人目の男性のIS操縦者』が現れたからだ。今回現れた男性は中東出身の日本国籍の少年。一人目は日本人の少年だったがこの時は何故中東出身なのに日本国籍なのかとここら一帯の諸国で話題になったのは記憶に新しい。

そして今度こそその顔写真を見て雷が落ちた様な衝撃を受け、全てを思い出した。

彼だ。夢の中で会った彼だ。

誰よりも人間と平和を愛していて、それでいて戦う事しか出来なかった不器用な男性。誰かの幸せの為に自らを賭して戦い続けた一振りの剣の様なあの人。

偶然顔と名前が同じ赤の他人なんかではない。確固たる証拠がなくても私はそう確信出来た。間違いなにかじゃない。彼は、夢で見た彼なのだ。

彼との出逢い。彼と交わした言葉と想い。その時の彼の表情、彼との別れ全てが頭の中に甦ってくる。

……忘れていた。彼にあの“歌”を聴かせる約束を。

逢いたい。彼に逢いたい。彼の声が、手の温もりが、彼の優しさ全てが恋しい。

気付けば私は父に頼み込んでいた。『日本に行きたい』と。当然父にはその理由を問われたので、私はあの夢と記憶　前世の記憶

とあの時交わした“約束”を全て話した。

今考えればあの時の私は焦りのあまり気がどうかしていたのかもされない。いきなり前世の記憶、それも今から三百年後の世界の話をされても普通信じられるものではないからだ。

だが父はそれを信じてくれた。『お前がそこまで言うのなら行っ  
てきなさい。いつまでも引き摺る様な事だけはして欲しくないから  
ね』と。

その父の言葉を聞いた瞬間、私は父の書齋を飛び出して荷物を纏めに自室に向かって走りだしていた。

『……前世とは未だ信じがたいが喩え一目惚れだったとしてもあの娘が誰かになびくのは初めてだね。

いつその事そのままうちに婿入りしてくれてもいいんだけどな』

あの後父がそんな事を呟いていたのは私の知るところではなかった。

夏の某日、私は彼がいるであろう日本のIS学園のゲート前に来ていた。

私の都合や日本の学校の休みなどを考えて結局夏に訪問する事になったのだが、来る時飛行機を乗り継いだりしたが時間はそれ程長く感じずあつという間だった。

しかし、私はここでとあるミスに気付く。

私は彼の連絡先を知らなければ彼が私に此処に来る　むしろ私がこの世界にいる事も知らないのだ。

しかも突然の訪問なので学園側のアポイントメントも取っていない。

彼に逢いたい一心になるあまり忘れていたといえれば話だけなら笑いで済むかもしれないが、現実問題となるとかなり恥ずかしい。

従者が今から学園に連絡して日を改めて訊ねてみてはどうかと言うがISともこの世界では彼となんの関係もない私が彼に会いに来たと言っても追い返されるのがツキだろう。

『前世で知り合った仲です』と言ったら窓に鉄格子の填まった病院を紹介されかねない。

従者と乗ってきた車を少し離れた場所に置いてゲート前をうろついていると、この職員とおぼしき女性に声を掛けられた。

「ここは何をしている」

黒髪でやや釣り上がった目の日本人の女性。 私はその正体を後で知る事になるのだが　ここで教師をしているという織斑千冬さん。

「え、えと、私はマリナ・イスマイルといいます。刹那に、刹那・F・セイエイに逢いたくて此処に来たのですが……」

「あいつとはどんな関係だ？」

「えっと……その、彼に伝えて下さい。あの時の約束を、“歌”を届けに来たと」

「……少し待っている」

少し怪しく思わせてしまったかもしれないが、女性は携帯で連絡を取り始めた。

『ああ、お前に会いたいとかいう奴が来てな……。マリナ・イスマイルとかいう少女だ。“歌”を届けに来たとか……。っておい！……あいつめ、私の電話を勝手に切るとはいいい度胸してるな』

……女性が黒いナニカを発しながら携帯に向かって何か呟いているが、そっとしておく事にした。

彼は気付いてくれただろうか。正直賭けに近いが私が思い出せたのだから、彼も記憶を憶えている可能性はある。

もし仮に彼が憶えていないとしても、私が諦めをつける意味で無駄にはならない。

ふと顔を上げれば、ゲート向こうの校舎の方から誰かが走ってくるのが見えた。クセのある黒髪に褐色肌で赤い瞳の少年。この制服に身を包んだ彼の顔は間違いなく初めて出会った時のでありテレビで見たままだ。

「……マリナ・イスマイル」

ゲートの前まで来た彼が私の名前を呼んでくれた。その顔には驚きと喜びが表れている。……彼は、私を憶えていてくれたのだ。女性はいつの間にかいなくなっていた。

「刹那!!」

「マリナ……!!」

お互いに走り寄り抱き合い、存在を確かめ合う。夢で見た様に、最後の別れを告げる前の様に……。  
神よ、再び彼に逢わせてくださった事を感謝します……。

くおまけく

刹那とマリナが学園のゲート前で抱き合っている頃……。

「ふふふふふ　セイエイくんったら私を弄めたいのですか……？」

「セイエイ……　今度は私と組み手と模擬戦をそれぞれ十連発だからな？」

木陰で刹那に新たな女の影を聞きつけた真耶が黒いクラゲの様なモノを背後に浮かべ、千冬がシヴァ神の幻影を出しながら青筋を浮かべていたのを、偶々近くを通り掛かった生徒が何人も強烈な気当たりを受けて倒れているのを刹那は知らない……。

楯無との模擬戦やオリジナルの話などやりたい事はあるけどどれから手を付けよう……。

断章 天上人（前書き）

いやもうタイトルでお分かりかと。

フラグ的な何か……かな？ 聞くな

## 断章 天上人

????? Side

二 XXX年八月XX日 一五時、東経143度北緯33度、  
伊豆・小笠原海溝深度500M

太陽光が届きにくい暗い海の中を、スカイブルーの巨大な方舟が進んでいく。

その姿は見るものによつてはクジラのように見えるが、生憎この世界にはそこまで高い知能を持たない魚達しかおらず、それが何処の国家どころかこの世界にすら属さない私設武装組織の旗艦だと気付くものはいなかった。

その巨大な方舟の内部の薄暗い空間を、床と壁に仕込まれたディスプレイの光が照らしだす。

「全員集まったかしら？」

「いや、おやつさんが来てねえ」

その中に佇む人物の一人、リーダー格とおぼしきブラウンのセミロングの妙齡の女性が点呼を取り、黒髪を短く刈り込んだ顔に傷のある軍人風の男性がメンバーの欠員を告げる。

「すまない、機体を整備してたら遅くなった」

男性の言葉に続く様に空間に入ってきたのはこの中で最年長と思われる、いかにも技術屋みたいな風貌の初老の眼鏡の男性。これでこの空間にいるのは九人となり、全員が揃った事を示した。その事を確認したリーダー格の女性が話を切り出す。

「ブリーフィングを始めるわよ。明後日の日本時間0930時、場所はIS学園で行われる『一般IS適性検査及びIS起動体験』。今までの状況を鑑みて次に『敵』が動き出すのはこの時だと思われるわ」

「『敵』は今のところ公式の試合など専用機が出ると予想されるイベントに行動を見せている。今回のイベントにも、客寄せ目的で専用機による曲芸飛行や模擬戦などが企画されているらしい」

リーダー格の女性に続き、紫色の髪を伸ばした中性的な顔立ちの眼鏡の青年が情報を提示する。

それにブラウンの北欧系の男性が口を開いた。

「それに対して学園側の対策は今一つと……。危機感がないのか組織的な特別な事情があるのか……」

「学園側がネットで行事の予定を一部公開してはいるが、それにし  
ては奴さんの行動がやけに巧すぎる」

「内部に内通者がいる可能性は？」

「それはないだろう。あそこには暗部の『更識』がいる。喻え身元を偽ってもすぐにばれるだろうさ」

「『敵』側にハッキングに長けた人物がいる可能性の方が高そうね」

「それについては現在、\_\_\_\_\_に過去のデータから管理下を外れた\_\_\_\_\_を問い合わせている」

技術屋の男性、灰と金のオッドアイの男性、軍人風の男性、金髪  
の眼鏡の女性、紫髪の青年が言葉を交わしていたが、少しずつ話が  
ズレてきていたのをリーダー格の女性が引き戻した。

「話を戻すわよ。今回は\_\_\_\_\_、あなたにミッションに当たっ  
てもらいわ。可能ならば……」

「刹那に接触……だな？分かってている。\_\_\_\_\_、機体の方は」

「打鉄をベースに、\_\_\_\_\_と\_\_\_\_\_のデータを反映させた  
改修を施した。偽装も済ませてある。くれぐれも誤って開放回線は  
使ってくれるなよ？」

それと\_\_\_\_\_、お前さんの『サーガ』の方もそろそろ目処がた  
ちそうだ」

「オーライ、久々の長期任務だな。昔とった杵柄とやらか」

「既にポイントの座標は突き止めてある。身分の偽造と機体の準備が済み次第潜入、もしもの時は『銀の福音』の防衛も頼む」

技術屋の男性が紫髪の青年と北欧系の男性それぞれにメモリースティックを渡し、二人はそれを受け取る。

「――は今すぐ準備を始めて。完了次第――をギリギリまで近づけて光学迷彩を起動しながら浮上、同じく光学迷彩を使いながら発進してもらおう」

「了解した」

「久しぶりの再会だからってあまり話し過ぎるなよ？」

「言われるまでもない」

「それじゃあ、各員持ち場に着いて！」

「了解！！」「了解！！」「了解！！」「了解！！」「了解！！」

世界は、変革への秒針は静かに動き始めた。

断章 天上人（後書き）

夏休み編はあと三話ぐらいになりそうです。クラリッサもありますし。

## 夏休み編その二（前書き）

気付いたら一万字超えてて。

この話では『束さんが造ったから』と『一夏は刹那のしごきで原作よりもやや強くなっている』と思いながら読んで下さい。

設定？の方を更新しておきます。

## 夏休み編その二

### 一夏Side

夏つてのは本当に色んな事のある季節だ。前にも言った様にレジャーやイベントもあれば、そんな一瞬の時ではなく一年の中の大切な時期でもある。部活で言えば甲子園やインターハイなどの時期でもあり、受験でも大切な時期だ。

『夏を制する者は受験を征す』。どっかの予備校や進学校などで言われそうな言葉だが、俺も去年はこの時期は勉強に明け暮れたものだった。……結局オジヤンになったが。

受験に関しては大学で言うならオープンキャンパス、高校ならばオープンスクールや体験学習など色々言い方はあるが、要は夏にはそんなイベントもある訳で。つまり何が言いたいかというのなら、俺も今そんなイベントの真っ最中という事だ。

今現在、IS学園では『一般IS適性検査及びIS起動体験』が行われている。

これはIS適性ランクを測るついでに実際にISを動かしてみようという体験学習の一環なのだが、かなりの賑わいを見せている。

別にIS適性ランクを測るのにはISは必要ないので他の場所でも出来るのだが、訓練機とはいえISを実際に目にして動かせるというのは配備数の関係上ここIS学園ぐらいなので海外からも参加申し込みがくる程らしい。

人数が多過ぎる場合は抽選するみたいだが。

そして何で俺がこれに関わっているのかというと、このイベントでは専用機持ちや代表候補生による曲芸飛行や模擬戦が目玉の一つ……つまりは、客引きみたいなもんだ。

俺や刹那の場合は男のIS操縦者であり専用機持ちというのが主な理由だ。

俺の主な役割はもちろん曲芸飛行や模擬戦。……あまり芳しくないが。

そもそも代表候補生に比べて圧倒的に稼働時間の少ない俺は彼女達よりも動きがぎこちなく自爆（要は激突）する事が多いし、模擬戦だって勝率が高い訳ではない。これは白式にも理由がある。

第二形態・雪羅に移行した白式は第一形態よりも燃費が滅茶苦茶悪くなった。

多方向加速推進翼の大型化もあれば、新しく加わった多機能武装腕『雪羅』もその一つだ。

雪羅の能力の一部であるシールドモードとクローモードはエネルギー系装備であり、しかも零落白夜を使用するのでシールドエネルギーの消費が激しい。

カノンモードについては瞬時加速と同じ多目的エネルギーなのでその辺はまだ注意出来るのだが、射撃武器を殆ど扱った事のない俺は命中率が低く無駄弾となる事も多い……。

シールドモードのお陰で多少無茶な突撃も出来るのだが、それが逆にエネルギー不足に苦しむ原因でもある。

刹那には性能に頼るのではなく回避能力と使用する機会を見極める能力を鍛えろと言われたが、それがまた難しい。

刹那と言えば、刹那のエクシアも二次移行してダブルオーへと進化したのだが、刹那曰く『性能は上がったが燃費は悪くなった』と俺と同じ事を言っていた。

ダブルオーの両肩にはエクシアの背部に付いていたコーン型のパーツがあり、それが推進機兼特殊なバリア発生装置の役割を果たしているのだと。

つまり機動性や加速力、防御力は上がったがその分消費が激しくなった……と。

防御力であれば、ダブルオーは前例の無い全身装甲だろう。その分重くなっただろうが、今までのISとは一味違う魅力というか格好良いと思ったのは秘密である。

何故全身装甲になったのかは銀の福音との戦いで被弾し撃墜された経験から文字通り防御力の向上が理由らしいが。まあ俺の白式も前にシャルにアサルトライフルを貸してもらった事から荷電粒子砲が開発されたみたいだしその辺は置いておこう。

ぐずぐずはしてられない。少しでも早く上達しないと、俺はいつまで経っても誰かに頼りっぱなしのままだ。

両手で自分の頬を叩いて気合いを入れる。まずは目の前のやる事…… たった今曲芸飛行が終わって休憩に入る所だった……。

休憩に入ってISスーツの上から制服を着て更衣室を出る。向かう先は現在使用中のアリーナ。無論、警備の為だ。

「あれ、刹那？何処行くんのだ？」

「少々外せない用事があってな。時間には間に合わせる」

「ふーん……。最近はそうでもないけどなんか刹那って忙しそうだよな」

「……気の所為だろう。お前が心配する必要はない」

「ならいいけど……。たまには俺達にも頼って欲しいんだけどな」

「その気持ちは受け取っておく」

悪いが一夏達には“コチラ側”の事情には関わって欲しくない。既に二回巻き込まれているが、それでもこれは俺の問題だ。俺の問題は、俺の手で解決する。

一夏と別れて、アリーナへの道に行く。現在学園の一部の区域は関係者以外立ち入り禁止になっており、アリーナも部分的に含まれている。今歩いている道はまだその範囲内ではないが。すると、少し久しぶりに見る顔に会った。

「はいは〜い、いつもニコニコあなたの隣に這い寄るパラッチ、黛薫子だよ〜」

「……なんだそれは」

どうでもいいが、パパラッチとはイタリア語で『うるさい蠅』の意味ではなかったか？

「なんの用だ」

「相変わらず固いなあ。新聞部の私と言ったら取材に決まっているでしょ？」

「まあでも今日の曲芸飛行や模擬戦の写真撮って少し記事を入れるだけなんだけどね」

「ならば俺にはなんの用もないのではないか？」

「いやあ、偶然セイエイ君を見つけたから声をかけただけなんだけど。そうそう、セイエイ君の写真ってか〜なり貴重なのよねえ」

「だからなんだ」

「今度、撮影会「断る」って速っ!?!」

「俺の写真を撮ってもなんにもならんだろうっ」

「いや、その……競売」……織斑先生「ひいひいひいひいっ!?!」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……!?!」

……聞こえないよう小さく言ったつもりだろうがイノベーターの俺には聞き取れたし読み取れもしたぞ。

売る気か？俺の写真を売る気だったのか？買う人間がいらないだろうにというよりもそもそも人の写真を勝手に売ろうとするな。

「盗撮もするな。……特別指導をくらいたくなければな」

「サ、Sir、yes sir!!」

織斑先生の特別指導は耐性の無い人間には生きて見る地獄と表現出来るだろう。イノベーターである俺でさえ辛いと感じた程だ。

「うっ……。じゃあまた今度は正式にインタビューを申し込むからさあ。『独占インタビュー！IS学園の蒼騎士の全て』って」

「待て、なんだその二つ名は」

「知らないの？セイエイ君この学園ではそう呼ばれてるのよ」

……初耳だ。元の世界で『テロリスト』とか『剣士』とか『二個付き』とか呼ばれたりはしたが、そんな風に呼ばれた事は無いぞ。

「最初の頃は『アンリミテッド・セイバー』とか厨二臭い名前だっ

ただね？君の機体が進化してからはそう呼ばれる様になったんだ〜」

……改名されてよかったと思う自分が此処に居る。

少なくともその名だけは止めてほしいと直感的に感じた。

「語る事など何もない」

「そう言わないでよ〜。趣味だとか好きなタイプとか色々あるじゃない」

「趣味は筋トレ、好きなタイプというのはよくわからんが得意とするのはクロスレンジだ」

警備の事もあるので正直時間が惜しい。だから俺はそう言い残して足早とアリーナに向かった。

「セイエイ君って……天然？」

そんな声が聞こえた気がしたが取り敢えず無視しておいた。  
それと警備の事だが結果だけ言うのなら特に何も無かったとだけ言  
っておこう。

## 一夏Side

休憩に入ってからスポーツドリンクのペットボトル片手に歩きな  
がら携帯をいじる。するとこの学園以外の知り合いからメールが来  
ている事に気付いた。

「お、あの子今日来てるんだっけ。久しぶりに顔合わせるか……」

スケジュール的には今はイベントの参加者がいくつかのグループ  
に別れて学内見学や適性検査、起動体験をしている時間帯だ。その  
後に模擬戦が行われるんだが。

ただ人数が多い故か一遍に全てのグループを廻す事は出来ないの  
で一部のグループは体育館で待機しながら配られたパンフレットを  
読んだり学園の紹介ムービーを観たり休憩したりと様々だ。

どの道全てのグループが一通り終わらないと俺の次の出番が来な

いので時間はたっぷりある。後は向こうと時間を合わせるだけだ。

俺が向こうに今時間的に会えるかと尋ねるメールを送ると、向こうから編み込んだ金髪を揺らしながら歩くシャルに出会った。

「よう、シャル」

「あつ、一夏！何してるの？」

「いや、その辺をぶらぶらしているだけだぞ」

「刹那は？」

「なんか用事があるとか言ってどっか行っちゃった」

「ふーん……。ねえ一夏、僕と一緒に『ピリリリリ』「すまん、俺の携帯だ」……」

「えーと？おお、今会えるのか。じゃあ待ち合わせの場所を伝えてつと……」

「……ねえ一夏。誰からのメールかな？かな？」

「ん？ああ、今日知り合いが此処に来ててさ。久しぶりなもんだから顔合わせようと思って」

「それって……女の子だよね……？」

「あ、ああ」

「シャ、シャルさんや？何故そんなに機嫌を悪くしておられるのでせうか？」

「ふ〜ん……。うん、分かってるよ。それが一夏なんだって」

「シャル、さん……。？」

「大丈夫、僕だってそこまで心の狭い人間じゃないしね。そうだね、つい最近本国から新しい装備が送られてきたんだけど……」

「お、おう？」

「……その試し撃ちの的になってくれれば許してあげる」

「なんでツツ!？」

「一体全体どうして俺がいきなり死刑宣告されなきゃいけないんだ?!」

「ふふふ、本当だったら今すぐにもやりたいけど皆に迷惑かかるからね。僕って優しい」

聖母の様に慈悲深く、それでいて本能的に恐怖を覚える笑みを浮かべ身体から黒いナニカを発しながら去っていくシャルさん。

……キャラ、変わってません？あと何で俺処刑されんの？ねえ誰か教えて……。ゼロは何も答えてくれない……。

暫くの間混乱していた俺は待ち合わせ場所である学園の中庭に来ていた。

ここは丁寧に手入れされた芝生と色とりどりの花々が咲き誇る花壇にレンガに舗装された中庭を突っ切る道とベンチがある、憩いの場として最適な場所である。

そこのあるベンチに、よく見知った顔の少女を見付けた。

「おお〜い、蘭!!」

「い、いいいー夏さあん!?おおお久しぶりです!!」

「久しぶり、蘭。元気だったか?」

「いいいいえそんな、心配なさる程元気が無い訳ではなくむしろ元気過ぎるぐらいです!!」

「お、おっ?ならいいんだけど……」

赤いロングの髪をバンドとゴムで纏め、有名女子校として名高い

聖マリアンヌ女学園の黒を基調とした制服を着た少女。  
俺の親友五反田弾の妹の五反田蘭だ。なんかパニくっているけど。

「それにしてもゴールデンウィークに家で会って以来か？」

「は、はい。そうですね」

「今日来たという事はやっぱり此処を受験するのか」

「はい！で、ですからもし入学したら約束通りご指導お願いします」

「うーん、今は俺も付いていくのに精一杯だからなあ。あんまり期待しないでくれよ？」

「大丈夫です！この前ニュースでも一夏さんすごい成績だって言うてましたし！！」

「そ、そうなのか？何か気恥ずかしいというか実際そんなもんでもないんだが……。それに俺よりも凄い奴がいるしなあ」

「どなたなんですか？」

「刹那だよ。刹那・F・セイエイ。俺と同じ男のIS操縦者で今のところほぼ負け無しだ」

「そ、そんな気にしないで下さいよ！私は一夏さんを応援してますから！！」

「おう、ありがとな」

「い、いいいー夏さん！？ちよちよちよお！？」

「あ、すまん。嫌だったか？」

蘭の頭を撫でただけなんだがいきなり触るのは失礼だったか。

「い、いえ、そんなむしろゴニョゴニョ……」

「ところで、時間は大丈夫か？」

「は？え？！ああ、そろそろ行かなきゃ……」

「そうか、じゃあまた今度な」

「はい……」

とほとほとなんか残念そうだけどどうしたんだろうか？女ってのはよくわからん。

昼と夕方の丁度境目の頃、参加者全ての一通りの予定が済み、この日の最終イベントでもある模擬戦の時間に入っていた。選手である専用機持ちは全員ピットに入り、自分の出番が来るのを待っており、ついさっき三年生と二年生の専用機持ち同士の対決が終わったばかりである。

実はと言うと第も専用機持ちなのだが、紅椿は未だ所属の決められていない非公式な機体なので今回の参加は見送られてしまった。それと二年生と一年生のもう一人の専用機持ちも諸事情により同じく参加が見送られている。

「俺は……刹那とか。勝負になればいいけど……」

「なに女々しい事言ってるのよ」

初めて男性同士の戦いを見る人間にとっては貴重なものだが本人にとっては公開処刑ともとれるカードに溜め息を吐いている一夏に、第二カタパルトまで見送りに来ていた鈴が口を開く。それに一緒にいつてきたラウラが続いた。

「お前は私の嫁だろう。堂々としていればいい」

「ラウラ……」

「まああなたが弱いのは分かってるしね……。でも、その……頑張ってきなさいよ」

「うぐつ、真つ正面からそついうの言わないでくれよ……。でもありがとな」

鈴のオブライトに包まない厳しい一言の中に混ぜ込まれた応援に打ち拉がれつつ感謝し、カタパルトに脚部を接続する。

『第一カタパルトから機体が発進します。暫く待機して下さい』

スピーカーから管制室の指示が飛んでくる。回線が繋がれたままなのか向こうの第一カタパルトの様子が伝わってきた。

『リニアカタパルト準備完了。発進どうぞ!!』

『了解。ダブルオー、刹那・F・セイエイ、出撃る!!』

カタパルトとかダブルオーが射出され、観客席から歓声を浴びながら緑色の粒子を撒き散らしゆっくりと着地する。そして一夏の番が来た。

『リニアカタパルト準備完了。発進どうぞ!!』

「（刹那のあれなんか格好良かったよな……）織斑一夏、白式、行きます!!」

リニアカタパルトが電流を発しながら白式を大空へと押し出すのを見ていた二人がふと口にこぼした。

「男ってなんかああいうの好きよね……」

「ふむ、だが管制との連絡の取り合いは重要だ。それに……格好良かったしな」

アリーナのステージの所定位置に着いた二人のうち一夏は右手に雪片式型、左腕に雪羅を展開し刹那は腰から両手にGNソード？を持たせ構える。

観客席は二人の対決を見守るかの様に静寂に包まれていた。

『それでは、試合を開始します』

アナウンスと共にシグナルが点灯し開始を告げるアラームが鳴ろうとした瞬間、上空から赤橙色のビームが二人の間に降り注いだ。

「なんだ!？」

「来たか……!!」

二人がビームが放たれた方向に顔を向けると、クリムゾンカラーに染められた12機の機体が此方に向かってくるのが見えた。

その全機とも特徴的な四つ目のセンサーを頭部に搭載しており、うち西洋式ランス型の武装を持つ三機と他の九機とは全身の形状が異なる二機はX字を描く様に、右肩に巨大な砲を携えた三機はX字に更に顔面中央にレンズ型センサーを備え、左肩に大剣を携えた三機は二つの逆八の字を描く様に配置されている。

そして最後の一機、前述の二機に鎧武者の様な意匠を付け加えた機体も同じ様に配置されていた。

かつて刹那の世界に存在した独立治安維持部隊アロウズで運用されたジンクス？、アヘッド、アヘッド近接戦闘型『サキガケ』と連邦軍で運用されたジンクス？キャノン、ジンクス？ソードだ。

アロウズではジンクス？キャノン/ソードを採用していないのに機体色と形状がアロウズ仕様ジンクス？に酷似しているのは、恐らくそれをベースに作られたからであろう（その為、ここではジンクス？キャノン/ソードと呼称する）。

それら十二機は四機一組の三個小隊を組んで一夏達に襲い掛かった。

「く、何だよこいつら!!」

一夏がビームの弾幕を掻い潜りながら一番動きが遅いジンクス？

キャノンに向け荷電粒子砲を放つが、ジンクス？キャノンの前にジンクス？ソードが躍り出て大剣　GNバスターソードを構え機体前面に赤橙色のバリアを展開する。一夏が放った荷電粒子砲はバリアを撃ち抜けずそのまま受け止められてしまった。

そしてジンクス？ソードの陰からジンクス？キャノンが右肩のGNキャノンを放ち、一夏がギリギリでそれを避ける。

「嘘だろ?!」

ISの武装の中でも高い威力を誇る荷電粒子砲が防がれたのだから一夏が驚くのも訳もない。

ジンクス？ソードが展開したバリア　GNフィールドはエネルギー兵器に對しかなりの防御力を誇り、粒子コーティングのなされていない実体兵器さえもほぼ無効化する。

リミッターが設けられた荷電粒子砲も当然その事に由来する。

余談だがGNフィールドを展開したGNバスターソードはダブルオーセブンスードのGNバスターソード？の原型にもなった武器でもある。

一方、司令室でも突然の事態への対応に追われていた。

「アリーナの遮断シールドとセキュリティシステムはどうなっている!?!」

「遮断シールド、レベル4に設定!カタパルト及びゲート全てロックされています!」

「くっ……!」

これではあの時と同じではないか……。千冬は歯を噛み締めながらも沸き起こる気持ちを無理矢理押さえ込んだ。

幸い観客席付近のセキュリティまでは乗っ取られていないので観客の退避は始まっている。

しかしアリーナの中の二人に救援を出したり退避させる為の手段が封じられていた。

敵の数は十二。同じ形状をした機体が多い事から量産型だろうが一部には何らかの能力に特化していると思われる機体もある。いくら刹那でも数が多過ぎるのでエネルギーが保たない可能性があるし、一夏の事もある。いくら上達したとはいえまだ代表候補生にも届かない身だ。

「セイエイ君から通信です!」

「どうした!?!」

『観客の避難はどうなっている?』

「現在進行中だ。後五分もあれば済む。セイエイ、その機体に心当たりはあるか？」

『俺の世界の特殊部隊で運用された量産型だ。恐らく無人機だが、一部の機体の性能はエクシアを凌駕している』

「何だと!？」

これには千冬含めその場にいた教師全員が驚かざるをえなかった。刹那が言うエクシアの性能を凌駕する性能を持つのはアヘッドとサキガケだが、エクシアの性能はISの中でもトップレベルに値するというのにそれすらも凌駕する量産型……。正直こいつの世界の機体は化け物かと疑いたくなる程だ。

「ダブルオーでは大丈夫なのか」

『問題ない。理由はわからんがシールドバリアーを搭載した様子はない。だが数が多過ぎてエネルギーが持つか……。』

シールドバリアーが無いのはISとしてはありえない事だが、量産型の無人機というのなら生産コストなどの事情で無くした可能性もある。

しかしそれを補うかの様に数や見事としか言い様のないフォーメーションと動きで襲い掛かってくるのだからどうしようもないのだ。鎧武者の様な風貌の機体は今のところ動きを見せるといった様子は示さないが……。

目の前のモニターではランスを構えた機体　ジンクス？とダブルオーがぶつかっており、ジンクス？のGNランスの先端とダブルオーのGNソード？の刃が衝突、一瞬だけ拮抗しその後ダブルオーがGNソード？でGNランスごとジンクス？を両断、爆散する光景が映し出されていた。

鋭いランスを先端から真っ二つにする刹那の技量も十分驚くものだが、残りは　たった今ダブルオーがアヘッドを撃ち抜き　十だ。

「織斑先生、状況はどうなっているんですの!？」

千冬がどうしたものかと考えを巡らせていると、セシリアをはじめとする専用機持ちが司令室に押し掛けてきた。

「正体不明のISが十二……今では十機だが襲撃してきた。今セイエイと織斑が迎撃しているが、相手にアーリーナのシステムを掌握されこちらからは手出し出来ない状況だ」

「そんな……」

「いくら刹那でもこれだけの数が相手じゃあ……」

「静かにしている。どの道今の状況では我々も何も出来んのだ」

冷たく言い捨てる千冬だが、頭の中では理解出来ても感情は今の

状況を受け入れる事を拒み続け悔やみや怒りといった感情が胸を締めていた。

これ以上の被害を防ぐ為にも一撃の威力が最も高いジンクス？キャノンを早く墜としたいが、攻撃をジンクス？ソードが防ぎGNランスを持つジンクス？とアヘッドが妨害してくる。

相手はエネルギー兵器が殆どだからエネルギー無効化能力を持つ一夏が有利だがその分シールドエネルギーの消費が速いのも事実であるし、以前の無人機よりも人型に近いので中に人がいるのかわからず攻めあぐねていた。

躲しきれないと判断したジンクス？のビームを雪羅のシールドモードで防いだ瞬間、目の前にジンクス？キャノンがこちらにGNキャノンを向け、その砲口から相手を容赦なく穿つ光が溢れようとしていた。

(やられる……！?)

「くっ……！」

刹那はジンクス？ソードと切り合い動きが取れない。ここまでかと一夏が目をつぶろうとした瞬間、目の前のジンクス？キャノンと

その近くにいたジnkクス？ソードが赤橙色のビームによって胴体を大きく穿たれ爆散した。

「な、んだ……？」

「あの機体は……！！」

いきなりの出来事に理解が追いつかない一夏と刹那の上空に、ジnkクス？らと同じ赤橙色の粒子を撒き散らす一機の機体が佇んでいた。

両肩の非固定浮遊部位である物理シールドと脚部を覆う腰のスカートアーマーから打鉄を連想させるが、実際は打鉄に比べ直線的なラインと一般のISよりも多いスキンアーマーが特徴的だ。

カラーリングは白を主体に所々に黒が入り、スキンアーマーは大腿部や二の腕、胸部や腰部など全身の殆どを覆い、頭部も側面にブレードアンテナの付いたフルフェイスヘルメット型装甲に包まれている。

両肩には背面から二門のキャノンが砲口を覗かせ、右手には今まで見た事が無い程巨大な口径の大砲を持っていた。

その姿を見て、刹那はかつての仲間が駆った機体を連想するが、その答えは直ぐ様明らかになった。

『久しぶりだと言いたいところだが……苦戦している様だが？』

『ティエリア！？』

目の前の打鉄もどきからダブルオーに繋がれた個人間秘匿回線から、仲間の一人であり自身と同じガンダムマイスターだったティエリア・アーデの声が届き刹那が（個人間秘匿回線の中で）驚きを顕わにする。

『詳しい説明は後回しだ。今は敵の殲滅を優先する。やれるな？』

『問題ない』

打鉄が駆け出し右手に持つ大砲をジンクス？達の集団に向けて撃ち攻撃行動を開始した事から一夏から困惑した声が飛んでくる。

「刹那、何なんだあの打鉄は？！」

「……敵ではないようだ。兎に角今は目の前の敵に集中するぞ」

「無人機なんだよな！？」

「その通り……だっ！」

アヘッドのGNビームサーベルの右袈裟懸けを半身をずらす事で躲しつつ左手のGNソード？でアヘッドのサーベルを持つ右腕を切り落とし、から空きの胴体に右手のGNソード？が吸い込まれる様にして両断する。

一夏もジンクス？ソードと切り結んでいたのを雪片式型を傾ける事でGNバスターソードを逸らしジンクス？ソードが体勢を崩したところを

「この距離ならバリアは張れねえ！！」

零距离で荷電粒子砲を叩き込んで上半身を吹き飛ばした。

「残り……六ッッ！！」

ジンクス？ソードが爆発する直前に離れた一夏にジンクス？が突撃してきたのを、突き出されたGNランスの下に雪片式型を潜り込ませる様に入れる。

硬質の物質同士が擦れ合う絶叫と共に雪片式型の刀身がGNランスの下を滑り零落白夜の光刃がそのままジンクス？を上下に真っ二つにした。

(……こいつら、もしかしたら一体一体はそれ程強くない？)

数も減り自身も通算で二機撃墜して多少余裕が出たのか、一夏はそう考えた。

確かに独立治安維持部隊という特殊部隊で運用されたとはいえ、

高いのはパイロットの腕であり機体　ジンクス？の性能はパイロット毎の調整が許されていた事以外は連邦正規軍で運用されていたジンクス？と大差は無い。そしてこれは無人機故に人間の様な柔軟な動きと対応が出来るはずも無かった。

戦闘に集中する為に思考の波から脱した一夏が顔を動かすと、二機のジンクス？キャノンと打鉄もどきが撃ち合っている姿が映った。ジンクス？キャノンが放ったビームが打鉄に向かっていくが、打鉄は全く動く様子を見せない。

一夏が何を考えているんだと驚き疑問に思ったが、それは杞憂に終わる事になる。

打鉄もどきの両肩の物理シールドとスカートアーモアの装甲がスライドし、ジンクス？ソードが展開した赤橙色のバリアと同じものを全方位に発し、ビームを防いだのだ。

打鉄もどきはバリアを展開したままお返しだと言わんばかりに両肩のキャノン砲を放ち、ジンクス？ソードがGNフィールドで防御する。

それによってジンクス？ソードの動きが硬直したところにダブルオーが後ろからビームで撃ち墜とす。

そしてそのままダブルオーがビームで二機のジンクス？キャノンと一機のジンクス？を牽制している間に打鉄もどきがバリアを解除地面に降り立ち右手に持っていた大砲を両手で胸の前に構え、大砲の砲身が上下に展開、延長する。

大砲の砲身内部に電流が走り、今にも決壊しそうな暴力的なエネルギーの塊が凝縮される。

そして三機がほぼ直線上に並んだ瞬間、それは放たれた。

打鉄もどきすらも呑み込んでしまいそうな巨大なビームの奔流は二機のジンクス？キャノンとジンクス？一機を易々と呑み込み、欠片一つ残さず消滅させ、後に残ったのはその反動で機体が地面を擦った跡と高熱により硝子化した地面だけだった。

「な、なんだよありやあ……」

目の前で起きた事に一夏は言葉を失う。それは司令室にいた面々も同じであった。

普通のISではありえない、むしろISの常識を破り捨てるかの様な光景はそれを見た人間に恐怖を憶えさせた。

だがそれがいけなかったのか、啞然として動きを止めてしまった一夏に鎧武者の機体　サキガケが右腕のGNシールドから左手に日本刀型GNビームサーベルを引き抜かせ一夏に迫ろうとしていた。

一夏は辛うじてそれを雪片式型で受け止めたが、零落白夜を発動していなかったせいか高出力のGNビームサーベルにギリギリと押し込まれ、モニターに雪片式型の限界を知らせる警告が点滅する。

今ここで零落白夜を発動すれば刀身がすり抜けそのまま斬られてしまっただろう。何も出来ない状態のまま赤橙色の光刃が雪片式型の鈍い光を放つ刀身に少しずつめり込んでいく。

次の瞬間、GNビームサーベルが雪片式型を切り落とすよりも前にサキガケの左肩に桃色の光刃を発する棒が突き刺さり、サキガケの左肩が爆発を起こした。

刹那が放ったGNビームダガーにより左肩から先を失ったサキガケは左脇下からGNショートビームサーベルを引き抜きダブルオーに斬り掛かるうとする。

それに対し刹那はGNソード？同士の柄を連結させてサキガケに向かっていき、GNソード？を突き出すと同時に銃口から光刃を発してサキガケよりも先にその胸部を貫いた。

自身の胸部を深々と貫かれたサキガケはその活動を止める様に四つ目から光を失い、爆発を起こす。

その様子を見届けたダブルオーが振り返ると、打鉄もどきは左手に赤橙色の光刃　ビームサーベルを持たせダブルオーに向かってきた。

ダブルオーはそれを分解したGNソード？で受け止め暫くの間拮抗する。そして互いに離れると同時に打鉄もどきは再び襲い掛かる事無く、空の向こうに飛んでいってしまった。

「……なんだったんだあいつ」

「やあ……な……」

黒煙が舞い上がるアリーナの中で夕焼けの赤い光が白式とダブルオー、そして荒れ果てたアリーナをただ静かに照らしていた。

IS学園地下50mレベル4区域。以前レグナントの残骸が運び込まれたのと同じ場所に、アヘッドらの残骸は運び込まれた。ただ破損状況が激しく、ここから手掛かりなどを見付けるのは難しいだろう。

そしてそこには千冬と真耶、召喚された刹那がいた。

「さて、話して貰うぞ」

「……一つ確認したい。一夏達は」

「口は封じておいた。……本人はあまりよく思っていないようだが」

「それでいい。彼らに関わる必要は無い。いや、あつてはならない……」

「だが、いつまでも無関係という訳にはいくまい。少なくとも織斑は襲撃を受けている。機密と言って言い逃れるのも限界がある。

……話を戻す。山田先生、状況を」

「は、はい。今回回収した機体ですが……どれも無人機でした。恐らくソフト面については以前の機体の改良したモデルかと。しかし破損状況が酷くて正直手掛かりは何も……」

「コアについてはどうなっている？」

「それが、一つも確認出来なかったんです」

「何だと？」

「破損状況が酷いのもありますが、回収したパーツ全てを調べてもコアらしきものが無かったんです。以前と同じGNドライブレイトらしきものは確認出来ましたがどれも原形を留めていない程酷くて……」

「つまりは何もかもが不明と……。セイエイ、心当たりはあるか」

「破損状況についてはすまなく思っている。だが元の機体に関する事以外に心当たりはない」

「……そうか。これらは全て量産型なんだな？」

「ああ、間違いない」

「一部の機体の性能はエクシアを凌駕するって言うてましたけど……  
…本当なんですか？」

『事実です。鎧武者の様な形状をした機体、GNX-704T/A  
C『サキガケ』とそれに似た機体GNX-704T『アヘッド』は  
かつての私 エクシアと同じ技術が使われた機体のデータが反映  
されています。』

それ以外のランスを持った機体GNX-609T『ジnkス?』を  
はじめとする機体群はそれに及びませんが……』

ダブルオーが話す通り、アヘッドは主に旧人革連の技術者が中心

となつて造られた機体であり、人革連はキュリオスの機体を回収している。第三世代型ガンダムのデータがかなり反映されている。

「ビームサーベルは専用の防御処理をした装甲でないと防げないものだが……白式の雪片式型が保つたのは正直驚いた」

「近接ブレードの材質はISの装甲よりも強固であるし、なにしろ束が造つたものだからな。性能に助けられたと言つていいだろう。

山田先生、続きを」

「はい、無人機については今のところこれぐらいで。

後はあの打鉄らしき機体ですが、それについてもさっぱり……」

「無人機を撃破したと思えばセイエイに斬り掛かってきたり……目的がわからん。で、どうなんだ？」

「あの機体について俺が何か知っているはずがあるまい。恨みについては無いとは否定しないがな」

「確実なのはISにセイエイの世界の技術の転用が可能であり、尚且つそれを実際に行うだけの技術と設備を持っている事ぐらいか。打鉄が盗まれたとの報告は？」

「ありません。今裏付けを取っておりますが……。委員会にはどうします？」

「『コアについては迎撃時に全て破壊。また破損状況が悪く一切の手掛かりも無し』と伝える。『嘘』ではないし、下手に刺激すると上のジジイ共が五月蠅くなるだけだ」

「……わかりました」

「しかし、今となってみればあの砲撃といいお前の世界の技術が異<sup>イ</sup>常に<sup>イ</sup>見えてくる……」

「時代の開きもあればMSとISは全く異なる発展を遂げた存在だ。  
“こちら”側から見れば、ISも十分異常だと思っが」

「『常識』の違いがこんな形で出てくるとはな……。まあいい、お前はもう帰っていいぞ」

「わかった」

踵を返して部屋を後にしようとする刹那に、後ろから千冬の声が掛かる。

「一つ聞きたい。我々は“無力”か？」

「……“力”の有無が全てを決める訳ではない。昔、俺に“力”が無くとも戦える事を教えてくれた奴がいた」

「そう、か……」

「それとだ」

「何だ？」

「くよくよしているのはあんた達らしくない。空元気を出せとは言わんが、しっかりしている方があんた達らしい。特にあんたはな」

振り返らず事無くそう述べ足早に去っていく刹那。その言葉に何を思ったのかは……彼女達だけが知る。

「……え、セイエイ君！？私はどうなんですかー！？」

因みに真耶については……子供っぽゲフゲフン、本人の名誉の為にも言わないでおいたのだった。

あの部屋から寮の自室へと行く道を歩く刹那は、一人立ち止まり制服のズボンのポケットの中に手を入れて出す。その手に握られていたのは一本のメモリースティックだった。

それはティエリアが斬り掛かってきたあの時に紛れてティエリアに渡されたものであり、ティエリア曰く自分に与えられたミッションとC Bの動向やそれ以外の情報が入っているとの事。要は後で専用の通信端末で連絡を入れるとの事だ。

(この世界で俺達C Bが動くという事は、この世界の“歪み”を駆

逐し変わらなければならないという事だ。俺達の世界がそうであった様に……)

メモリースティックを握り締めながらポケットにしまい、再び歩き出す。その足取りと姿はいつもよりも力強かった。

夏休み編その二（後書き）

この小説が始まってあと二ヶ月ばかりで一年……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8498p/>

---

Infinite Stratos 00 ~ Blue blade Another Innovation ~

2011年11月13日15時15分発行